

COSMOS The Rainbow

カズオ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

虹ヶ咲学園に通う高校二年生の高田菜生、彼女はかつて光の巨人『ウルトラマンコスモス』と運命的な出会いを果たしていた。

そんな彼女がスクールアイドルと出会い、そして光と再会することで物語の歯車が回り始める…

現在1章虹色の出会い連載中

目次

0章 FIRST CONTACT

序幕 光との邂逅 | 1

Ⅱ 嘘じゃないのに | 14

Ⅲ 真の勇者 | 28

Ⅳ 子供たちの願い | 40

1章 虹色の出会い

0話 トキメキとの出会い | 52

1話 光との再会 | 60

2話 スクールアイドル同好会

76

3話 カオスヘッダーの陰 | 90

4話 燃える太陽のように | 106

5話 3年生を勧誘せよ! | 120

6話 落ちてきたロボット | 134

7話 結成!スクールアイドル同好会

!! | 147

8話 菜生という少女 | 161

9話 空からのプレゼント | 175

10話 太陽の輝き | 191

11話 無いものを探して | 204

12話 サマーフェスティバル

218

13話 蛭強襲! | 232

14話 熱い夏、来る! | 246

15話 乙女の眠り | 263

28話	Touch The Fir		
27話	利用される苦悩	426	
26話	飛ぶクジラ	413	
25話	灼熱の太陽	400	
24話	異次元の罠	389	
23話	新しい出会い	376	
22話	サヨナラ	356	
21話	忍び寄る陰謀	341	
20話	初恋	326	
19話	時の娘	314	
18話	逢いたい	302	
17話	動け! 怪獣	290	
16話	消せない傷跡	276	

n		539	
35話	Another of su		
34話	不穏な宇宙	527	
513			
33話	狙われたスクールアイドル		
32話	私の知らないあなた	499	
31話	哀しき復讐者	485	
30話	ぬくもりの記憶	467	
457			
29話	アタシにだけ見えるあの子		
e		443	

0章 FIRST CONTACT

序幕 光との邂逅

これは私達がまだ小学5年生だった時のお話、勿論虹学のみんなとはまだ出会ってす
らなかつた頃の光との出会いの物語。

「菜生く？歩夢ちゃん迎えに来てるわよ」

「はい、今行くよ」

母親に菜生と呼ばれた少女は部屋を飛び出した。真っ黒な髪をボブヘアにした少
女はそのままりユツクを背負って玄関の外で待っていた歩夢と呼ばれたピンクの髪を
お団子にした少女へ駆け寄る。

「えへへ、お待たせ」

「待ってないよ？じゃあいこ？」

そう言つて差し出された歩夢の手を「うん！」と頷いて取る菜生に、母親が。

「じゃあ歩夢ちゃんの家族に迷惑にならないようにね」

「解つてるよ」

そう注意するのを、菜生はそう「元氣よく返事をした。今夜は歩夢の家族と一緒にキャンプに行く約束をしていたのだ。母親に手を振ると車で準備していた歩夢の両親と合流しキャンプに向かうのだった。

「菜生ちゃん、それ何？」

「これ？天体望遠鏡だよ」

その日の夜、夕食を取ったあとランタンの明かりの下で菜生が自身のリュックから天体望遠鏡をとり出していた。

「菜生ちゃん星好きだよね」

「うん、お父さんみたいに宇宙にいつてみたいんだ」

歩夢に聞かれた菜生がそう目を輝かせて答えるが、歩夢は表情を曇らせたが菜生は気が付いていない。

「菜生ちゃんはお父さんみたいになりたいのかい？」

後ろからそんな声が聞こえて、菜生は天体望遠鏡を準備していた手を止めて振り返ると、その声の主は歩夢の父親だった。

「はい！そうすればまたお父さんに会える気がするんだ」

そう菜生は笑顔で答える。

「そっか…菜生ちゃんのお父さんは凄い人だった。菜生ちゃんも頑張ればきっとお父さんみたいになれるよ」

「がんばります！」

菜生の父親は、菜生が小学校に上がる前に事故で亡くなっているのだ。死因はロケットのテスト中の事故だったらしい、優秀な宇宙飛行士だった父を幼くして失った菜生は、宇宙に行けば父親に会える。そう思っている節があるようだった。

「お父さんみたいになんたくて、空手も頑張ってるもんね」

「うん！お父さんみたいに強くなったら歩夢ちゃんも守ってあげる」

「ふふっありがとう」

父親の話をしている間もニコニコしていた菜生だったが、セツトした天体望遠鏡を覗いていると空中を何か人影のようなものが横切った。

「ウルトラマン？」

ウルトラマン、都市伝説として語り継がれている宇宙の平和を守る光の巨人だ。

「え？本当？見せて！」

すると歩夢もウルトラマンを一目見ようと菜生が顔を離した天体望遠鏡を覗きこむ

が、もうそこには何も見えない。

「何も見えないよ?」

「おかしいなく確かに何か横切っていったんだよね」

そう首をかしげる菜生だったが、それは見間違えでは無かった。

その時、地球を目指す存在は二ついた。一つは両手が巨大なハサミになったセミのよ
うな顔を持つ人型の宇宙人。そしてもう一つは青と銀の体を持つ巨人。

巨人の方は宇宙人が地球に行くのを阻むかの様に立ちふさがるが、宇宙人はそんな事
はお構いなしに地球へと進攻する。

お互い宇宙空間を自在に飛び回り、時に組み付いて殴打の応酬を、時に光線を放ち牽
制しあっていた。

だが宇宙人は巨人の攻撃を躲しながらどんどん地球へと近づいていく。そして巨人
はずつと宇宙人に対して何かを訴えかけていたが、それが相手に届くことは無かった。

そのまま宇宙人は巨人を振り切ると大気圏へ突入してしまう。

「雨？」

夕飯を食べた後、一緒に片づけをしていたところ、急に曇り空になり星が見えなくなると。ぽつりぽつりと雨が降り始める。

「菜生ちゃん、早く片付けないと！」

水滴が肌に落ちてくるのを感じた菜生が、暫く空を見ていると歩夢がそう声をかける。

「そうだ、望遠鏡！」

そこで菜生は慌てて外に出していた望遠鏡やらを片付け始める。そして何とか道具類は歩夢の親とも協力し、なんとか嵐になる前に片付けてしまうのだった。

「まさかこんな急に天気が悪くなるなんてな……」

「折角来たのに……」

歩夢の父親も今日の為に天気は気にかけてくれていたのだが、まさか天気予報が外れてこんな雷雨になってしまうとは思わなかった。

「星見たかったなあ……」

幸いロッジでのキャンプだったので、天気が荒れても寝泊まりする分には全く困らな

いのだが天体観測も楽しみにしていた菜生が残念そうにつぶやく。

『東京から神奈川にかけて局地的な雷雨となっておりませんが、もうすぐ山場は超える見込みです』

「お願い…晴れて…」

ラジオの天気予報を聞きながらそう願う菜生に歩夢も「晴れて…」と願うのだった。

一方空中では、嵐の中巨人と宇宙人の戦闘が続いていた。

巨人は何としても宇宙人を地球の外に追い返したい様子だったが、宇宙人は止まらないう。背後から組み付くも、腕のハサミから光線を放ち巨人を引き剥がす。

そして巨人へ向き直ると、追撃しようと更に光線を放つのだが、巨人も右腕を突き出し光線を放つ。

激突し、拮抗する二つの光線をなんとか押し切ろうと両者は接近するがお互いにダメージを負い墜落してしまう。

そして巨人と宇宙人はそれぞれ別の場所へ落ちていくが、巨人の身体は雷に撃たれ光を放出しながら菜生たちがいるキャンプ場近くの森の中へ墜落したのだった。

「ん…朝か…」

早朝目が覚めた菜生は外に出ると、まだ早い時間だったのもあつてまだ薄暗かったが嵐は過ぎ去っていた。

『』
「誰かが、呼んでる…?」

少し霧がかかっていたキャンプ場で、菜生は誰かが自分を呼んでいる声が聞こえた気がした。そしてその声がある方に向かって駆け出した。

「ハア…ハア…もしかして、あなたは…?」

そこで菜生が見たものは今にも消えてしまいそうなほど体が透けている巨人が、森の中で力なく倒れこんでいた。

「わたし…見えるよ、ウルトラマン!」

『』

ウルトラマン、菜生がそう呼んだ巨人は力なく頷くと何かを訴えかけているようだったが地球の言葉ではないので、人間である菜生には聞き取れない。

「光? 光が欲しいんだね?」

だが、菜生には光を欲しがっているように聞こえた。何故だったかはわからない。でもきつとそうだと直感で感じ取ったのだ。すると巨人はそれにゆっくりと頷いた。

「ちよつと待つてて、何とかするから！」

そう言つて菜生は来た道を駆け戻る。

「おはよう菜生ちゃん、早いんだね？」

「おはよう歩夢ちゃん、ちよつと手伝つて」

戻つてくると歩夢や、歩夢の両親が起きていたが菜生は懐中電灯や使い終わったアルミホイールなど、兎に角光を反射しそうなものをかき集め始める。

「よし、これ持つて」

「え？ちよつと…」

何の説明もなくいきなり色々漁つては持たせて来る菜生に不満げな声を上げるが、菜生はそれに気づかないといった様子だった。

ウルトラマンがいる場所まで戻つてくると、朝日が昇り始めており少しづつ辺りも明るくなる。

「これで…よしっ」と

「ねえ菜生ちゃんなんでこんな事してるの?」

「え? 歩夢ちゃんには見えないの?」

「何かあるようには思えないけど…」

少しでも多く光をウルトラマンに与えようと、ウルトラマンの位置に光が反射するようにかき集めたものを配置していると、歩夢にそう不思議そうに聞かれる。

「嘘…見えないの? ウルトラマンが…?」

「ウルトラマン…? 本当にいるの?」

ウルトラマンというワードを聞いて、少し歩夢の表情が明るくなると、菜生も嬉しうに頷く。

「まだ足りない…ならこれで」

もつとウルトラマンに光を、そう思った菜生は天体望遠鏡をとり出すとのぞき穴をウルトラマンへ向け懐中電灯の光を当て増幅させる。

「これなら…」

「いいの? それ使っちゃって…」

本来の用途からかけ離れた使い方を始める菜生に、歩夢はそう不安げに聞く。これは彼女が最近誕生日に買って貰ったと喜んでいたものなので心配になったのだ。

「いいのいいの、これでウルトラマンが元気になるなら…」

そうやって菜生はウルトラマンに光を当て続ける。そしてその光がウルトラマンの額のある一点に当たった時、辺りが光に包まれる。

「わあ……」

「これが……」

ウルトラマンの身体が色づくのと、その巨体がゆっくりと立ち上がる。そしてその光が晴れた時、菜生と歩夢を見下ろすようにウルトラマンが現れる。

青い身体に銀のラインを持つ、優し気な顔をした巨人。それがウルトラマンだった。

『ありがとう』

そうウルトラマンの声が脳内に響く、恐らくテレパシーなのだろう。

「大したこととしてないよ、ウルトラマン」

「私も菜生ちゃんについてきただけだし」

そう菜生と歩夢が照れ臭そうに答えると、ウルトラマンは続ける。

『私はウルトラマンコスモス。君たちのお陰で、私は力を取り戻せた。』

「コスモス：それがあなたの名前」

「ウルトラマンコスモスって言うんだね」

そう歩夢と菜生に言われると、ゆっくりと頷き2人の前に膝を降ろして座り込む。

『君たちにお礼がしたい、君たちの願いを言ってほしい』

「菜生ちゃんがコスモスを見つけたんだし、菜生ちゃんをお願いしたら？」

「でもわたし…」

「だって、私には見えなかったんだもん。私何もしてないけど、菜生ちゃんはお願ひ言うべきだよ」

そう歩夢に言われ、菜生は暫く考え込むと照れ臭そうに口を開く。

「わたしね、宇宙に行くのが夢なんだ。ウルトラマンと空を飛びたい…でも、無理だよね？」

いくらなんでもそんな願いを叶えてもらえるなんて思っていない菜生が、そう言うところコスモスは無言でこちらへ手を差し出す。乗れと言う意味だろう。

「え？…いいの!?!本当に?」

思わずそう聞くと、コスモスは頷く。

「やったあ!歩夢ちゃんも」

そう言うって菜生は歩夢の手を取ると、一緒にコスモスの手に乗る。

「私もいいの?」

そう歩夢が聞くと、コスモスは当然という風に頷くとゆつくり立ち上がる。そして反対の腕を天に掲げると…。

「シューワッ!」

2人を乗せ大空へと飛び立つのだった。

「すごいー！」

「街があんなに小さい！」

はしゃぐ菜生と歩夢を乗せ、暫く大空を飛び回ると再び出会った場所へ戻ってくる。2人を降ろす。

「ありがとう、ウルトラマンコスモス」

「また、また会えるよね？」

礼を言う歩夢の隣で、菜生がそう聞くとコスモスは頷く。そして菜生のズボンのポケットを指さす。

菜生はそれを受けてポケットを漁ると、青く輝く綺麗な石が入っていた。

「これは……？」

「すごいキレイ……」

『君が真の勇者、本当に勇気のある者となった時。その輝石が再び私たちを出会わせてくれるだろう』

「どういふこと？」

コスモスの言葉の意図が解らず、菜生はそう聞き返すが、ピコンピコンとコスモスの胸に付いている青い結晶のようなものが、赤く明滅を始める。

「そっか、もう時間が無いんだ…」

その様子を見て、菜生はそう直感した。さっきの光だけでは、完全にエネルギーが回復しなかったのだろう。

「菜生ちゃん、きつとまたすぐ会えるよ」

そう歩夢が菜生を肩をそつと触れてそう告げる。

「そうだよね…約束する、わたし本当の勇者になる！だから、また会おうね…」

そうコスモスに対し目に涙を浮かべながら菜生は告げた。そしてコスモスは、菜生と歩夢をその場に残して再び大空へと飛び立った。

「元気でね…」

コスモスの姿が見えなくなった後、菜生はそう呟くのだった。

II 嘘じゃないのに

コスモスと別れた後、キャンプ場に戻ると「何してたの？」と歩夢の親に聞かれ、「ウルトラマンに会った！」そう言った。

しかし、「ウルトラマンはおとぎ話よ？」と一蹴され信じてもらえなかった。

「なんでなんだろ…ウルトラマンは他の人には見えなかったの…？」

そう座り込んで呟く菜生に、歩夢は隣に座ると語りかける。

「でも、ウルトラマンはちゃんとしたよ？わたしたちを乗せて、空を飛んでくれたよ」

「そう…そうだよね、だってこんなキレイな物まで貰っちゃったし」

そうほほ笑みかける歩夢に、菜生もそう答えると先程コスモスから貰った石。輝石を手の上で転がす。

「真の勇者かあ…」

そうコスモスから言われた言葉を反芻してみるが、それがどう言う意味なのかまだ菜生にはよくわからない。

「また会えるよ、きつと」

「そうだよね…うん、絶対会える」

歩夢にまた会えると言われて、絶対また会える。なんとなくそういう気がしてきた。

そしてウルトラマンコスモスが何者かと交戦していた日の夜、防衛軍はE・T・
(地球外生命体)のものと思われる怪電波を補足していた。

更には誰にも知られることなく、巨大な未確認飛行物体が地球へと迫っていた……
そして菜生は、ウルトラマンコスモスが今どこにいるのか？ 一体なんの目的で地球へ
やってきたのか？ それを考えていた。

「だから、本当にウルトラマンに会ったんだって！」

「嘘だー」

「菜生ったらまだそんな夢見てたの？」

翌日学校で「ウルトラマン」に出会ったと告げると、待っていたのは「嘘だ」という
クラスメートからのバッシングだった。

「嘘じゃないよ！ わたし、本当に会ったんだから」

そう言つて輝石をとり出そうとするが、ポケットの中の輝石に指が触れた時。なぜか
「これは見せびらかしていいものではない」という感情が渦巻き、その手を外に出すこと

はできなかつた。

「何かあるなら見せてよ」

そう言われても、菜生はその手に持ったものを人に見せることをしなかつた。

「やつぱり、この事は秘密にしてようよ?」

「でも、嘘じゃないもん…」

その日の放課後、一緒に下校していた歩夢にそう言われるが、菜生は頬を膨らませて
そう文句を言う。

「凄かつたんだから、わたしの教室まで聞こえてたよ?」

「それは…ごめん…」

クラスの違う歩夢やそのクラスメイトにも聞こえるほどの騒ぎになっていたらしい。

「そう言えば、今日は博士のところに行くんでしょう?」

「うん、また拾っちゃったし。歩夢ちゃんも来る?」

「私は今日はやめとく」

「そっか」

そう残念そうに笑うと、菜生は歩夢と共に一度家まで戻るとあるものをもつて再び外
へと出る。

「こんにちはー！博士いますか？」

抱えてきた、壊れたおもちゃを受付に置いてそう大声を出すと中から一人の初老の男性が出てくる。

「いらつしやい菜生ちゃん、また拾ったのかい？」

「うん、でもわたしじゃ治せそうになかったから」

そう告げると、博士と呼ばれた老人はそのおもちゃを持ち上げると状態を確認していた。

「うん、これなら治せる。」

「本当？」

「本当さ、それと菜生ちゃんに見せたいものがあるんだ」

目を輝かせる菜生に、博士はそう告げると奥へと菜生を招き入れる。

「わあくこれ？この前ゴミ捨て場に落ちてたロボット？」

そこで菜生が見たものは、右腕が大きいアームになっている50cmほどの大きさのロボットだった。

「そうだよ、菜生ちゃんがゴミ捨て場から拾ってきた可哀想なロボットさ。でも今は色んなことが出来る」

そう告げる博士の目の前でロボットは足を延ばして菜生より目線が高くなり、さらに

そのまま足を縮めて今度は宙に浮く。

『ハロー、ハロー。ハワユー?』

「わあっ…」

更に言葉を発するロボットに驚く菜生を見て、満足げに笑みを浮かべる博士は、そつとそのロボットの背を押し。菜生の方へと押しやる。

「クレバーゴンを、君に」

「いいんですか? すごくいい」

抱えてみると、流石にロボットというだけあつてかなりずしりとした重さを感じるが、菜生は新しい友達が出来たようでとても嬉しかった。

『『クレバーゴン』じゃ呼びにくいし…『ゴンちゃん』でいいよね?』

その日の帰り、クレバーゴンを大事に抱えながら歩く菜生はそう提案するとロボットは首を嬉しそうに振る。

「歩夢ちゃんもゴンちゃん見たら驚くだろうなあ?」

などと言いながら歩いていると、急にゴンが菜生の腕から飛び出すと頭が開いて中からアンテナが飛び出す。

『警戒セヨ! 警戒セヨ!』

「どうしたの?」

突然目を点滅させながらそう告げるゴンに、菜生は首を傾げる。するとゴンの腹が開き、中からモニターが出てくると画面には何か電波をキャッチしたのかせわしく波長を刻む。

「何?これ…?」

『警戒セヨ!警戒セヨ!菜生、カムウイズミー!』

そのまま飛び出していくゴンを、菜生は慌てて追いかける。

「待ってよゴン!」

そのまま追いかけていくと、気が付けば家からそれなりに離れた場所にある大きな公園に辿り着く。

「ここがどうしたの…?」

「菜生ちゃん?どうしたの?」

ゴンにそう尋ねるが、答えが返ってくる前に聞き馴染んだ声が隣から聞こえてくる。

「歩夢ちゃんこそ、何でここに?」

「ちよつとおつかい。それよりその子は?」

そう答えると、歩夢は物珍しいものを見る目でゴンを指さす。

「ああこの子はゴンちゃん、さつき博士に貰ったんだ」

「へえ〜」

そこまで言いかけると、突然地響きが起きる。

「地震!？」

『警戒セヨ!警戒セヨ!』

突然の自地震に驚き、思わずその場に屈むが宙に浮くゴンは再びそう危険を呼びかける。

すると公園の奥の山が崩れ、中から二本足で腕のない獅子舞のような見た目の巨大な生物が飛び出した。

「何…あれ…?」

「わかんない…でも逃げよ?」

巨大な生物はこちらを睨むと、街の方へと歩み始める。それによって周囲はパニックになるが、菜生は歩夢の手を引いて生物の進行方向とは別方向へ駆けだす。

「ちよつと菜生ちゃん?」

「とにかく離れなきゃ!あんなのに踏んづけられたら死んじゃうよ!!」

いきなり駆け出した菜生に抗議の声を上げるが、菜生はそう言ってペースを上げる。すると今度は防衛軍の戦闘機が現れ、巨大生物を攻撃し始める。

ここなら大丈夫と立ち止まって、肩で息をする2人だったが防衛軍による攻撃の様を

見て思わず息を呑む。

巨大生物も、身長の倍ほどの高さまでジャンプしビルを踏みつぶしたり口から火を噴いて戦闘機を威嚇するが10機を優に超える戦闘機の攻撃に圧倒され、やがて倒れると目を瞑り動かなくなる。

「…かわいそう……」

「うん……」

思わずそう呟く歩夢に、菜生はそう同意した。あの生き物は積極的に街を攻撃しようとはしていないようだった。でも防衛軍は、そんなあの生物を完膚なきまでに叩き潰したのだ。

『警戒セヨ！警戒セヨ！』

「今度はどうしたの？」

再びそう喚くゴンに、菜生はそう問いかける。だが腹のモニターには、再び先程と同じ波長が刻まれていた。

「1420MHz…これって確か宇宙信号だよ」

「何それ…？」

「宇宙人が交信するのに使ってる周波数だって、聞いたことあるの」

菜生には意味の解らない数字だったが、歩夢がそれを見てそう告げる。

「じゃあもしかして…ウルトラマンかも！」

そう菜生が嬉しそうに顔を輝かせるが、現実はそう甘くは無かった。巨大生命体の背中が爆発すると、中から人間と変わらない大きさのセミのような生き物が飛び出してきた。

両手がハサミになっているその生物は、街の人々を驚かすようにいったん目の前に飛び出してきたかと思えば、再び離れると不気味な笑い声を上げながら一瞬のうちに巨大化する。

「まさか…宇宙人？」

そう呟く菜生達の視線の先で、宇宙人は防衛軍の攻撃を受けるが微動だにせず。ハサミから冷凍光線を放って次々と戦闘機を撃墜していく。

さつきとは打って変わって、宇宙人に手も足も出さず撃墜されていく戦闘機たちを見て、歩夢はある事を思いつく。

「ねえ？ウルトラマンをあの手で呼べないかな？」

「そうか、ウルトラマンコスモスならもしかして…」

そう告げられて、いけると思った菜生は駆け出すと、宇宙人が良く見える高台へ移動すると輝石を掲げる。

「ウルトラマン、来て！」

『フォッフフォッフオ……』

そう叫ぶが、視線の先の宇宙人は最後の一機の戦闘機を撃墜して嘲笑うように体を震わせていた。

「何で……？ どうして……」

「君たち、何してるんだ？ 早く逃げなさい！」

そんな菜生と歩夢を見かけた防衛軍の人間が、そう叫びながら駆け寄ってくる。だが菜生は、諦めることが出来なかった。

「ウルトラマン！ お願いだから来て！ 助けてよ……」

だが現実が変わらない、ウルトラマンコスモスが現れることは無く。宇宙人も無数に残像を残しながらビル群の陰に消えるようにして姿をくらませてしまう。

「なんで……？ どうして助けてくれないの……？」

「菜生ちゃん……」

そう頂垂れる菜生に、歩夢はなんと声をかければいいのか解らないといった様子だった。だが軍人は、全く逃げる素振りを見せなかった2人に厳しく注意をする。

「何で逃げなかったんだい？ 危ないじゃないか」

「ウルトラマンを呼べれば……きつと助けてくれるとおもって……」

そう告げる菜生に、少々面食らったような顔をするがそれで納得する大人は居ない。

「あのね？ウルトラマンなんておとぎ話なんだよ？第一、居たとしても呼べるとは思えない」

「居ますよ！だって私、ウルトラマンに会ったんだもん！」

だが菜生はそう言って譲らなかつた。

「そこまで言うなら何か証拠はあるか？こつちも、何もなしにそれを信じて『次から気を付けてね』で終わらせることはできない」

「これ、ウルトラマンから貰つたものです！」

その言葉と、菜生はさつきまでの事や学校でのことが重なつて熱くなつてしまひ。ついで輝石を差し出してしまふ。

「綺麗なだけの石にしか見えないけど……そこまでいうなら調べさせてもらう」

「わかりました、好きなものだけ調べてください！」

そう言つて菜生は輝石を渡してしまふ。結局その後は嚴重注意と言う事で終わったが、歩夢はそれは渡していいものとは思えなかつた。

「良かったの？」

「これで本当にウルトラマンがいるって理解してくれるならいいよ……」

帰り道歩夢にそう聞かれた菜生はそう答えるが、その顔には後悔の色が浮かんでおり。抱いていたゴンをより強く抱きしめる。

「そうだ、わたしおつかい頼まれてたんだ」

「一緒に行こうか？」

「いやいいよ、菜生ちゃん空手あるでしょ？」

そう歩夢に告げられて時計を見ると、もう急いでも間に合うか否かという時間帯だった。

「じゃあまた明日ね」

「うん、また明日」

『マタネ』

そう告げると歩夢と別れて帰路に就く菜生だったが――

「キヤアアアアアア！」

突然歩夢の悲鳴が耳に飛び込んでくる。

「歩夢ちゃん!？」

それに驚くと、ゴンをその場に置いて歩夢が歩いて行った方へ駆け出す。

「どうしたの？歩夢ちゃん！」

そう叫んで彼女の姿を探すが、中々見つからない。

「ううん、何でもないの。またねーアハハハハ」

そんな歩夢の笑い声だけが聞こえてくる。珍しくイタズラされたと菜生は肩をすかすとかやれやれといった様子で笑う。

「おどかさないでよー、また明日ね!」

姿は確認できなかつたが、そう叫んで菜生は来た道に戻る。結局その日は空手は巨大生物の件もあつて、休みになっていたことが自宅に戻ってから知ることになるのだが……。

「はい、ETに出会つたという少女の持つていた石。あれには地球上に存在しない物質が含まれていました」

先程菜生に出会つた防衛軍の隊員は、そう電話で話している。その相手が誰かは解らないが、『他にも地球外生命が地球へ来ている』。その事実は防衛軍としては許しがたい出来事だった。

「一匹増えたところで我々の任務は変わりません、必ずETを退治します」

そう言い切ると電話を切り、軍人はその部屋を出ていく。

しかし、開け放したドアが勝手に閉まる直前何者かが目にもとまらぬ勢いで室内に忍び込んだ。そして、葉生がウルトラマンから貰った輝石を探し出す。

「フッフフ……アハハハ……」

その『少女』の不気味な笑い声が響いていた。

そして人類はその日、突然の皆既月食を見ることになった。

それも、実に恐ろしい月食を――

III 真の勇者

満月の夜、突然起こった月食。

そしてそれは、月によく似た三日月上の飛行物体によって月が遮られた事によってできたものだった。更に、テレビ回線をジャックして、昼間の宇宙人が声明をテレビに流していた。

『我々ハ、バルタン星カラヤツテ来タ宇宙生命体デアル。』

そう宇宙人は、セミのような口を震わせながらそう告げる。日本語に翻訳して流しているのだから、昼間の防衛軍の戦闘機を殲滅した宇宙人の顔がテレビに映り、人々はそれだけで不安を感じた。

『我々ハ、地球ト君達ガ呼ブ惑星カラノ招待デ、コノ星ヘヤツテ来タ。』

現在、世界各国で宇宙の未知なる生命体とコンタクトを取るべく様々な活動をしている。きつとそれをバルタン星人は招待されたと解釈したのだろう。

『君達ガ始メタ、テレビ放送ハ我々ノ星ヘト届イテイル。コレニヨレバ、地球ハ我々が迪ツタ破滅ヘノ道ヲ全ク同ジヨウニ進ンデイル』

『破滅』つまりバルタン星人は故郷の星を失い、宇宙を彷徨っていたという事になる。そ

して本物の月を遮った物体は、バルタン星人が自分たちの星の一部を切り取って作った。ノアの箱舟だと言う事が語られた。

あの飛行船の中には、沢山のバルタン星人が暮らしていると言う事だ。

『僅カコノ30年ノ間ニ、コノ自然ノ粗方ヲ地球人達ノ手デ破壊シテシマウ。地球人ヨリ遙ニ進ンダ科学力ヲ持ツ、我々バルタン星人ハ、地球ニ移住シタイト思ツテイル。コノ美シイ緑ト水ノ地球ヲ我々ノ侵シタ失敗ト破滅カラ救ウ為ニ…』

そう宣言すると、元々放送していたテレビ番組に切り替わった。菜生は自分が好きなバラエティー番組を観ていた最中だったが、その続きを見る気にはなれずそのままテレビの電源を切った。

「あの宇宙人が、この街に来るのかしら…」

テレビを切った菜生に、母親がそう不安げに呟く。

「大丈夫だよ、お母さん。きつとお互いが理解し合えれば…」

菜生はそう返すが、その顔はやはり不安げだった。公園で怪獣を呼び覚まし、戦闘機を蹂躪したバルタン星人が本当に、共生できるか自信は無かったから。

そしてきつとウルトラマンは、バルタン星人と戦っていたと想像していたから。

そして次の日の学校は、その話題で持ち切りだった。共存は無理だと、他の星の生物とも一緒に暮らしていけるとは誰も思っていないのだ。

「菜生ちゃんはどう思う?」

「できるんじゃない? 人間だって火星に住もうとしてるし、火星に生き物が居れば人間のやつてる事もバルタン星人と変わらないでしょ?」

クラスメイトにそう聞かれて菜生は、こう答えた。

「それとこれとは違うだろ」

「無理だよ絶対」

クラスメイトにそう口々に反発された菜生は、顔を伏せてしまおうが決してこの意見を曲げることはしなかった。

「無理だって決めつけてたら、何にもできないじゃん…」

そのつぶやきは、他の人間の耳には入らなかった。

「菜生ちゃんは、バルタン星人と一緒に住めると思う?」

その日の帰り、不意に歩夢にそう問いかけられる。

「お互いを尊重できれば、できるんじゃないかな?」

どうしてウルトラマンと戦っていたのかは見当もつかないが、ウルトラマンと心を通わせることが出来たのだから、バルタン星人ともきつと分かり合えるのではないか？ 菜生はそう考えた。

「じゃあ菜生ちゃん、菜生ちゃんはウルトラマンを呼んで、人間の代わりにバルタン星人と戦ってもらおうと思つた？」

「え？」

「だつてきつと、ウルトラマンはバルタン星人と戦つてあの場所に落ちてきたと思つたから……」

そう告げる歩夢に、菜生は少し考える仕草を見せるがすぐに首を横に振る。

「そんなんじゃない、確かに街を守つてほしいとは思つたけど、倒してほしい訳じゃない。なんでそうなつたかを、わたしは知りたいかな？」

「じゃあ……じゃあもしもだよ？もし私が……」

歩夢のその言葉は、爆音によって遮られた。

「なに……？」

「ダメ……ダメエ!!」

防衛軍の戦闘機が、バルタン星人の箱舟に攻撃を開始した。そしてその結果、バルタン星人が街へ飛来し戦闘機を撃ち落とし始めた。

『警報！警報！Warning！Warning！』

「ゴンちゃん!？」

そうしていると、頭上をバルタン星人が通過した時、ゴンが目の前に飛んできた。そしてその胸のパネルが開くと、モニターにはバルタン星人が映っていた。

『我々ハ、最早地球人ト交渉スルツモリハ無イ。我々ハ直チニ、地球ヲ占領スル』

バルタン星人はそう告げた、人類からの先制攻撃によつて完全に彼らは力で地球を手に入れることを決意したのだ。

「そんな…」

「ダメ！それじゃ何にもならない、どうして大人たちは…」

そう言うのと歩夢は周囲を見渡すと突然走り出す。

『マテー！』

「ちよ、ちよつと…」

ゴンはそんな歩夢を追いかけ始めると、状況の呑み込めない菜生もひとまず後を追いかける。だが歩夢のその走る速度は異常で、引き離される一方で菜生は追いつくことが出来ない。

だがロボットでかつ浮遊能力をもつクレバーゴンはその限りではなく、やがて人気のない公園へとたどり着いたところで、歩夢を追い越すと足を延ばして彼女の前に立ち

だかると、右腕のアームで歩夢の肩を掴む。

「ゴンちゃん、何するの!？」

歩夢は腕を振って拘束から抜けようとするが、ゴンの力は強くアームを引き剥がすことが出来ない。

「私をあの舟に連れて行って! でないと大変な事に……」

「何言ってるの? 意味が解らないよ……」

そう言つて箱舟を指さす歩夢に、菜生は困つたような顔を浮かべる。

『警戒! 警戒! 警戒! ——』

そう連呼するゴンは、アームを離すと赤い目を激しく明滅させて歩夢を警戒する。

「わたしは……ワタシハ……」

そんなゴンの様子に、歩夢はそう繰り返しながら後ずさるが、途中から別の声が重なっているように聞こえ始める。

「え?」

菜生は自身が置いて行かれていた状況に困惑したままだったが、そこでゴンの目から黄色い光が放たれ。歩夢の身体に直撃する。

「うう……」

歩夢は苦し気な声を上げると、歩夢の身体から二等身のバルタン星人のような生き物

が浮かび上がる。だがゴンはエネルギーが尽き、後ろに倒れ込む。

そして、歩夢の身体が倒れ込むと菜生は咄嗟にその身体を支える。

「歩夢ちゃん大丈夫!?!…この子、バルタン星人!」

「やめて菜生ちゃん!」

目の前の子供のバルタン星人に、敵意を剥き出しにして立ち上がろうとする菜生を、そう言つて歩夢が腕を引いて引き留める。

「どうして?歩夢ちゃんはだつて…」

そう反論しようとする菜生の手に、歩夢はあるものを手渡す。

「これを奪うために、バルタン星人は私に…」

菜生は今手渡されたものに視線を落とす。それは、ウルトラマンから貰った輝石だつた。

「石を奪つて、傷ついたウルトラマンが回復しないうちに呼べつて言われて…でも、この子にはそれができなかつた」

そう言つて、歩夢はバルタンの子供を見つめる。バルタン星人の子供は、まるで鈴の鳴るような声で鳴くが、菜生には何と言っているかは解らない。でも、疑問に思う事はあつた。

「どうして…わたしにこれを…?」

ウルトラマンを倒すために奪ったのなら、これを菜生に渡す理由は無い筈。そう思っ
て菜生はバルタンにそう問いかける。そして異星の友人の言葉を、歩夢は翻訳する。一
体化していたからか、彼女にはこの子の言葉を理解できていた。

「菜生ちゃんは、バルタン星人と住んでもいいって…ウルトラマンを人間の代わりに戦
わせるわけじゃないって言った。バルタン星の子供達も、地球占領なんて望んでないっ
て」

このバルタン星人の子供は、地球を侵略しようとする大人と違い、地球を占領する事
など全く望んでいないのだ。そしてこの子の言葉を、歩夢は菜生に翻訳し続ける。

「ウルトラマンはもう回復してる、ウルトラマンを呼んで大人たちを止めてってそう
言ってるの」

「でもわたしはそんな…」

『君には素晴らしい力がある』って。わたしもそう思うな、菜生ちゃんは優しいから」
そう不安げに俯く菜生に、バルタンの子はそう告げると歩夢はそう伝えるところの子の
言葉に同意する。菜生の優しい心で、バルタンと人間の両方を救ってほしいと。

そしてその子は、また何かを歩夢に伝えると箱舟へと飛び立っていく。きつと自身の
気持ちを大人たちに伝えるために。

『警戒！警戒！ケイカ……』

そうゴンは立ち上がって喚くが、すぐにまた倒れこんでしまった。すると、2人の頭上をバルタン星人が不気味な笑い声を上げながら通過していく。

「キヤアツ！」

その風圧に2人は思わず転倒してしまうが、歩夢を庇うように菜生はすぐ起き上がる。

そして飛び去ったバルタン星人は、戦闘機たちと空中戦の最中でもう残り少なかった戦闘機はすぐに全滅してしまった。

「…歩夢ちゃん、わたしやってみるよ！」

そう言つて菜生は駆け出すと、視界の開けた広場に出ると先程受け取った輝石を見つめる。

『真の勇者』それは、本当に勇気のある人…！』

今度こそウルトラマンコスモスと呼んで、みんなを救う。そう決意した菜生は、輝石を両手ですり合わせながら、ウルトラマンコスモスの名前を何度も心の中で呼びかける。

すると輝石は輝き始め、菜生が手を広げると彼女の左右の手のひらの間に浮遊する。そして回転しながら金色の眩い光を放ち始める。

(お願いウルトラマンコスモス、みんなを助けて！)

そう念じながら、菜生はその光を空に解き放つ。その時周囲に衝撃が走り菜生の体は後方へ押し飛ばされる。

そして菜生の手から飛び出した光は、やがてまるで金色のコスモスのつぼみが開花するようにして中から青い光が産まれる。

金色の優しい光に包まれて、胸に青いランプ。そして銀色のラインの走る青い身体を持つ巨人が、青空の下に現れる。

菜生の願いを受けて、ウルトラマンコスモスが再びこの地球に現れたのだ。

「シューワッ！」

コスモスは空へと飛び立つと、バルタン星人へ向かって飛んでいく。

「菜生ちゃん！」

歩夢は先の光を見て菜生の方へ駆け寄る。

「歩夢ちゃん…私、やったの？」

「うん！ウルトラマンが…ウルトラマンコスモスが来てくれたんだよ！」

「良かった…」

菜生はそう呟いて安堵する。そしてその視線は、空を舞うウルトラマンコスモスとバルタン星人へと注がれる。

「お願い、バルタンを助けてあげて…」

そう呟く歩夢の視線の先で、コスモスはバルタンの前に立ちふさがると。何やら会話を始める。

『宇宙船で帰れ、自分の星へ帰れ!!』

『いや帰れぬ…地球を、奪う!!』

コスモスのその言葉に、バルタンはそう強く拒否すると両腕のハサミから冷凍光線をコスモスへ放つ。

だがコスモスも左右に高速で移動してそれを回避すると、バルタン星人はすぐに箱舟へと飛び去って行く。そしてコスモスもその後を追う。

「ダメ…コスモス、罨だ！」

それを見て菜生は咄嗟に叫ぶ。バルタンは元々、ウルトラマンコスモスを倒すつもりでいた。ならそのために何か仕掛けをしてもおかしくない。そう思ったのだ。

箱舟に着地したバルタンは、コスモスが後をついてきたことを確認すると。両腕のハサミを地面へと突き立てる。

するとコスモスを取り囲むように無数の刃が地面から生えてくる。そしてその刃は、一斉にコスモスの周囲360度全てから殺到する。

「ハアッ！」

だがコスモスは全身に光を纏うと両腕を広げて回転し、迫りくる刃全てを粉碎する。

「ヌウウウ……」

するとバルタンは悔し気な声を上げると、両腕から冷凍光線を放つ。

「ヌオアアアア!!」

だがコスモスは、突き出した右腕に金色の光を纏い、その腕で冷凍光線を完全に自身の体から逸らしたままバルタン星人へと肉迫していく。

すると今度は、更に出力を上げて冷凍光線をコスモスへと放つ。だが今度はコスモスはそれをジャンプして躲すと飛び蹴りをバルタン星人へと放つ。

「タアアアアア!!」

「フッー」

だがバルタン星人はそれを飛翔して躲すと、今度は再び箱舟を飛び出すと街中へと飛び込んでいき、ビルを破壊して減速して着陸する。

それを追ってコスモスも地上へ両腕を広げ、右足の踵で地面を削りながら減速して着地する。

菜生と歩夢、そして街中の人々が見守る中、ウルトラマンコスモスとバルタン星人の戦いが幕を開けるのだった。

IV 子供たちの願い

バルタン星人とウルトラマンコスモスは地上に降り立つと同時に駆け出し、両腕のハサミを振り回すバルタンの攻撃を捌いていく。

左右のハサミをランダムに突き出すバルタン星人の攻撃を捌きつつ、コスモスはその腹部に蹴りを入れる。

それによって思わず仰け反ったバルタン星人は、両腕のハサミを突き出してコスモスへと突撃する。

だがコスモスは飛び上がると、そのままバルタン星人の頭上を飛び越えその背後に着地する。

そしてそのままバク転をすると一瞬でバルタン星人と背中合わせになるとそのまま相手の脇の下に腕を通して勢いよく前方に投げ飛ばす。

すると飛んでいったバルタン星人の身体は、そのままビルを踏みつぶしつつ着地する。

人類の介入することのできない次元での戦闘が、今人類の目の前で展開されていた。バルタン星人は、コスモスに攻撃をずっといなさされている事に苛立ちを覚え忌々しそ

うに腕を振る。

「フオツフオツフオツ…」

すると腕のハサミが裂け、その中から右腕は大剣、左腕は鋼槍のようになって腕が顔を覗かせ、裂けたハサミの半分が肩へと移動しバルタン星人の全身はまるで全身に黒い甲冑を着ているような、全体的に刺々しい印象を与える姿となる。

「なに…？あれ…」

バルタン星人の変化に、菜生や歩夢。見ている人々は驚いた。

「テエヤツ！」

戦闘形態、『ネオバルタン』へと変化したバルタン星人は今度こそコスモスを倒すべく畳み掛ける。

「ヤアツ！」

それに対してコスモスも駆け出し、先程までと同じように攻撃を素早い身のこなしで躲し、避けられないものは腕や脚を使って捌き、受け流していく。

するとバルタンは右腕の刃を振りかぶって、離れた距離にいるコスモス目掛けて振り下ろす。すると無数の剣状の光線―バッドナイフ―がそこから放たれてコスモスへと殺到する。

するとコスモスは一瞬で後退すると、全身を使ってそれを全て叩き落しながら高速移

動で少しずつ距離を詰め直していく。

すると粗方叩き落として一瞬緊張の緩んだコスモス目掛けてもう一度同じ攻撃を放つが、今度は高速移動で後方に下がり体勢を立て直したコスモスに再び叩き落される。ならばと今度は軌道に変化をつけ、正面から無数に迫りくる刃を叩き落しているコスモスの背後へと回り込ませコスモスに背中を向けさせる。

すると今度は鋼槍のようになっていた左腕から光の鞭―バンドルコード―を放つ。するとバッドナイフの迎撃でバルタンに背を向けていたコスモスは反応が遅れ、コスモスの身体に巻き付き両腕の動きも封じられてしまう。

「デイヤツ！」

「グワアアアアアア…」

さらにバルタンが力を込めると鞭に電撃が走り、コスモスへとダメージを与えていく。

そしてバッドナイフを打ち切った事で鉤爪状に変化した右手で鞭を引っ張り、そのままコスモスを締め付けていく。

「ウルトラマン…！」

「コスモス、頑張つて！」

苦戦するコスモスに、菜生はそう声を張り上げる。そうしていると、バルタンはコス

モス目掛けて毒ガスを放出する。

毒ガス攻撃まで受けてしまつてはひとたまりもない。そこでコスモスは力を振り絞つて力づくで鞭を振りほどくと、高速移動で滑るように後方へと移動して距離を取る。

「イヤアツ!!」

するとコスモスは右腕を突き上げる。すると周囲に赤いエネルギーが尽き上げた拳を中心にアーチ状に幾重にも展開される。そしてコスモスは左手も掲げ、ゆつくりとその光を身に纏うように腕を下す。

「ハアアアア…」

赤い光を身に纏つたコスモスの姿は、これまでとは全く違うものに変化していた。頭部のトサカのような箇所は額側の方が大型化し、額の前は赤く染まり横から見ると三日月のように削れたデザインとなり。全身は赤く染まりシルバーと青のラインが左右非対称に走る。

「ダアツ!!」

先程までと違い、低く勇ましい声で拳を握りしめてコスモスはファイティングポーズを取る。

ネオバルタン同様に、コスモスも戦闘に特化した形態へと変化する。

「凄……」

その変化に、菜生も歩夢も圧倒される。

バルタンとコスモスは同時に駆け出すが、コスモスは高速移動を織り交せており。実際の動きに対して倍近い距離を移動しつつ間合いを詰めていく。

バルタンは左腕の鋼槍で裏拳を繰り出すが、真つ直ぐ高速移動で突っ込んできたコスモスの右拳にあっけなく粉碎されてしまう。すると左手を素早く鉤爪へと変化させると、そのまま過ぎ去っていったコスモスに対して構える。

対してコスモスもバルタンへと向き直ると、お互い格闘戦へと突入する。鉤爪でコスモスの身体を引き裂こうとするバルタン星人を、コスモスは両腕でその攻撃を次々と防いでいき逆に胸元を殴りつける。

さらにバルタン星人の放つ回し蹴りもしやがんで回避し、その隙をついて的確に拳を叩き込んでいくコスモスはそのまま一方的に押し切りバルタン星人を後退させる。

だが大振りに振りぬいた拳をしやがんで回避したバルタン星人は、コスモスへとそのまま抱き着くと。持ち上げてそのまま自身の背後に落とそうとした。

だがそんな投げの攻撃は、なんと地面に背中が付く前にコスモスは空中に制止し、そのまま高速移動によって一瞬で距離をとるとそのまま体勢を整えてから着地した。

そのままコスモスは高速移動でバルタン星人の背後に回り込む。バルタンもすかさ

ず反応し、一瞬で移動するコスモスの方を向くが。そのたびにコスモスは再び高速で移動し、目にも止まらぬ速さでバルタンの背後を取り続ける。

そしてバルタンの反応が遅れた隙に駆け寄り、その胸元を殴りつける。バルタンも負けじと腕を振るって反撃するがコスモスはそれを振りほどく。

お互い高速移動を用いるも睨み合いが続く。するとバルタンは両腕を組むと、左右に残像を創り上げながら高速でコスモスの周囲を移動する。

「フオッフオッフオッフ……」

気がつけばコスモスの周囲に6体のバルタン星人が現れる。だがコスモスも同様に分身を作り出し、6対6の戦闘に発展していく。

だがお互いに分身同士の戦闘はほぼ互角で、バルタン星人は分身を消しコスモスから離れた位置に再出現する。それに応じて背中合わせだったコスモスの分身たちも同時にバックステップを踏むと一体のウルトラマンに戻る。

そして両者同時に駆け出すと、コスモスはバルタンの胸元を殴りつけ突き飛ばすと反撃を許さずにさらに蹴りを放つ。

重い蹴りを腹に受けて思わずよろけるバルタンだったが、すぐに体勢を立て直すと駆け出す。しかしコスモスにその攻撃は届かず、合気道の様にあっさりとバルタンの身体は宙を舞う。

「フンッ！」

再び拳を握りしめ構えるコスモスに、バルタンも起き上がると駆け出すが繰り出す拳は撃ち落とされ逆に肩に裏拳を食らい体勢が崩れると今度はコスモスに持ち上げられ放り投げられる。

そのまま空を舞うバルタンの巨体はビルへと落下し、ビルを粉々に押しつぶす。

そしてコスモスは再びバルタンへと駆け寄ろうとするが、バルタンは上体を伏せると肩のアーマーをコスモスへと向ける。そしてアーマーが逆立ち無数の針をそこから発射する。

バンブスプレーと呼ばれるその攻撃がコスモスへと殺到すると、コスモスは両腕を広げ浮き上がると高速で配転し全て叩き落していく。

全て撃ちきると、バルタンの肩のアーマーは消失してしまふ。撃ちきった事を確認するとコスモスはゆっくりと着地する。無傷のコスモスにバルタンは悔し気にするが、コスモスは今度はこちらの番だと言わんばかりに両腕を広げると胸元に気を集中させる。そして両腕を前に突き出し、手の間に光球を創り上げるとその光球はかなりの熱量なのか。周囲にできた光の輪の付近の景色が歪む。

「アリアアアアア!!」

そしてその光球を両手で押し出すと、炎の圧殺波動―ブレイジングウェーブ―として

放出する。

その一撃をまともに受けたバルタンは押し飛ばされ、背後にあつたビルを次々倒壊させてしまう。

5棟ほどなぎ倒してようやく止まったバルタンは、ヨロヨロと立ち上がる。そんなバルタンにコスモスは再び構えを取るが、バルタンは右手を上げて降参の意志を伝える。するとコスモスは構えを解く。するとバルタンは腕を降ろし、その目には涙が伝つていた。

「なんだか、かわいいそう……」

そんなバルタン星人の様子を見て、歩夢も涙を流す。そんな歩夢たちが見つめる中、バルタンの胸がはれ上がり、苦し気な声を上げる。

そしてそれが収まると、バルタン星人は糸が切れたように倒れ込み二度と動くことは無かった。

滅びゆく母星を出て、新天地を目指してこの地球へやってきたバルタン星人は自害する道を選んでしまったのだ。せめて子供達だけでも、この星で幸せにしたかっただろうに。

そんなバルタン星人の亡骸にコスモスは歩み寄ると、両腕から虹色の光の粒子を放出する。その光に包まれたバルタン星人は、禍々しいネオバルタンから元の姿へと戻され

る。

そしてコスモスもまた、全身から赤い光を放出すると元の青い姿へと戻る。

すると箱舟から無数のバルタン星人の子供たちが、親の亡骸へと向かってくる。コスモスはそんなバルタン星人を抱え上げると、子供達へと引き渡すのだった。

バルタン星人の力による地球侵略は防がれたが、この光景を見てそれを喜ぶ人間は存在しなかった。地球から発された、宇宙の未知の生命とのコンタクトを求めた電波を招待と解釈したバルタン星人と。そんなバルタン星人を侵略者と断定して攻撃してしまつた人類。

どちらが良い、どちらが悪いという話ではないのだから。

「バルタン星人の子供たちが望んだのは、きつと地球の人たちと仲良く暮らす事だったのにな……」

「歩夢ちゃん……」

短い間だったが、バルタンの子供と一体化していた歩夢にはきつと。彼らの気持ちを理解していたのだろう。だからこそ、この結末に涙を流した。

そして箱舟から、バルタン星人の子供達からのメッセージが送信された。

『私達自身が穢してしまつた、私達の星と運命を共にします。さようなら』

他の星で暮らす事ではなく、あくまで滅びゆくバルタン星と最期まで運命を共にする

ことを子供たちは選んだのだった。

『そして最後に、地球の子供達へ。決して、夢を失わないでください。大人達が夢を捨てて、現実を追い求めた結果が私達の星の破滅だったからです。』

そうメッセージを残したバルタンの箱舟は、一瞬で地球の重力を離脱するとそのまま空の彼方に消え去って行った。そしてその後には、虹が架かっていた。

その後菜生は、コスモスの前に一人立っていた。コスモスは菜生に気がつくど、菜生をまっすぐ見つめる。

「ありがとう。ウルトラマンコスモス」

そんなコスモスの目を見て、菜生はそう告げる。コスモスが居たから、地球は侵略を受けずに済んだ。悲しい結末だったが、バルタンの子供たちと心を通わせることは出来たのだから。

『菜生、君には夢を失わないでほしい』

コスモスはその菜生に優しく語り掛ける。

「夢？捨てないよ。わたしは絶対、大人になっても！」

そう菜生が伝えると、コスモスはゆっくり頷くとしやがみこみ菜生を指さす。

『君がこの星を守る、真の勇者になるのだ。決して夢を諦めず、その勇気で皆を救える。そんな勇者に』

「うん、やってみるよ」

『ありがとう。菜生、この星で最初に出会えたのがキミで本当に良かった』

そう告げるとコスモスは立ち上がると空を見上げる。

「シューウワッ！」

そしてコスモスは両腕を掲げ、青空へと飛び去って行った。

「さようなら、ウルトラマンコスモス！」

菜生は笑顔で大空に手を振るのだった。飛び立ったウルトラマンコスモスが見えなくなる、その瞬間まで。

そして気がつけば自身のもう片方の手の中に何かを握っていたと気がつく。そしてその手を開くとそこには、かつてコスモスから貰ったものと全く同じ輝石が入っていた。

コスモスと呼んだ時に無くなったと思っていたが、コスモスはまた菜生にそれを授けたのだ。友情の証として。

「菜生ちゃん」

気がつくとも後ろに歩夢が立っていた。菜生は彼女を見てニツと笑うと。

「また会えるよ。きつと」

そう告げるのだった。そして――

「だってこれは、『ウルトラの星への扉』だから」

夢を追い続ける人には、本当に夢のような出来事が訪れるのかもしれない。夢を失わなければ。きつと、あなたのところにも――

1章 虹色の出会い

0話 トキメキとの出会い

初めてウルトラマンコスモスと出会ってから、6年近い月日が流れた。

人類で初めてウルトラマンを見た少女、高田菜生は虹ヶ咲学園の二年生となっていた。

「今日は付き合ってくれてありがとう」

「いいのいいの、私も欲しいものあったし」

ある休日の昼下がり、隣を歩く幼馴染の上原歩夢にそう返事をする。秋葉原のUTX前を歩いていた2人は、一緒に出掛けていた帰りだった。

「おそろいのパステースも買えたし、明日から使おうね」

「そうだね、かわいいのあってよかった」

この6年で社会は大きな変化があった。呑龍は無事に元の公園へと戻されたが、この地球には怪獣という名で区分された巨大生物たちが多く生息していることが明らかに。その生物たちが皆、人類に敵意を持っている訳ではない事も解り。

ただ人間の都合で駆除するのではなく、保護や共存といった道が模索されるようになっていった。

菜生自身も背はあまり伸びず、小学校の時は歩夢より少し高かった身長も逆転し。髪も伸ばしツインテールに纏めており、年相応にかわいらしい容姿へと成長を遂げていた。

『謎の巨大生物現る？新種の怪獣か？S R Cが調査中』

などというニュースが、街角の巨大スクリーンに映し出されているのが見えた。S R Cというのは、元々民間の怪獣や宇宙人の調査、研究及び救援や保護を目的とした組織だ。

だが6年前のバルタン星人の一件を経て、国連によって承認された国際的な組織の事を指している。もっぱら、怪獣の保護や捜索はS R Cで行われているが防衛軍はそれが不可能と断定した場合、防衛軍によって攻撃・討伐されてしまう事も多かった。

そんなニュースを観て、菜生の表情から先程まで歩夢に向けていた笑みが消える。

「菜生ちゃん？」

そんな菜生の様子に気がついた歩夢が、菜生の顔を覗き込んで首を傾げると菜生はすぐに笑顔で取り繕おうとする。

「え？ああ何でもない、何でも。それよりさ、この後どうする？」

「ちよつと疲れたから、ジュース買って休んでもいいかな？」

「わかった、何が良い？買ってくるよ」

そう言つて菜生は近くのベンチに荷物を置くと歩夢に問いかける。

「うーん…」

そう言つて歩夢が考えていると、少し離れた場所の大型モニターの近くに人だかりができているのに気がつく。

「どうしたんだろ？」

「行つてみる？」

そう言つて2人は駆け出すと、人だかりの方へと向かつて行く。そしてその中で、大型モニターに映し出されていたものを目の当たりにする。

それが高田菜生の、スクールアイドルとの出会いだった。

『μ's』と『Aqours』。それが、スクリーンに映し出された18人の少女たちの名前だった。

そしてその頃、宇宙の果てから地球へと脅威が迫つてきていることなど、この時の私は夢にも思っていないかったんだ。

その果てに待つていた沢山の出会いと別れ、それが私の運命を大きく変えてしまうだ

なんて。

「すごい……これがスクールアイドル……」

モニターに映し出されたムスとAquoursの合同ライブに、菜生は圧倒された。元々、音楽が好きだったこともあり。小学校卒業時、とある理由で空手をやめてからピアノをやっつけていて、音楽ならどんな国や星の人とも解りあえると信じていた。

だがそんな菜生は今日、スクールアイドルを初めて観て感じたのだ。これだけ多くの人を歌と踊りで惹きつける事の出来るスクールアイドルの凄さを。そしてそれは同時

に、彼女にスクールアイドルへの興味を抱かせたのだった。

「菜生ちゃん、すっかりスクールアイドルに夢中だね」

帰りの電車の中、ずっとスマホを眺めていた菜生に歩夢がそう声をかける。

「うん、だつて凄かったんだもん。虹ヶ咲にもスクールアイドル部があったら、私絶対応援するんだけどなあ」

「もしかしたらあるかもよ？ウチの学校、色んな部活があるし」

「そうだっけ？」

歩夢の言う通り、虹ヶ咲学園は都内でも有数の巨大な学校で生徒数もかなり多く、自由な校風もあつてかなりの数の部活動が存在するのだ。

「菜生ちゃん、あんまり部活とか興味なさそうだったもんね」

そう歩夢に指摘されて、菜生は苦笑いを浮かべる。

「そ、そうだったかも？」

「でも菜生ちゃん、ウルトラマンとの約束大事にしてたもんね。宇宙飛行士の夢、叶えるんだって」

「うん、『夢を失わない』。それが私とコスモスの約束だから」

そう言つて菜生は歩夢に笑いかける。かつてウルトラマンコスモスと交わした約束、それが菜生の往く道を照らしてくれていた。

「でも、今はスクールアイドルをもっと近くで見たい、応援してみたいんだ」

そう言つて菜生は胸元に拳を当てる。その中には、かつてウルトラマンコスモスから貰つた輝石を紐でくくつて作つたネックレスが上着で周囲からは見えないが存在していた。

「スクールアイドル部があるか、来週一緒に探しに行く？」

そう歩夢に問いかけられるが菜生は首を横に振る。

「いや、一人で行つてみるよ。あつたら歩夢にも教えるね」

「うん、楽しみにしてる」

歩夢は普通科、菜生は情報処理学科なのでクラスが違うのだ。それもあつて菜生は、翌週の放課後一人でスクールアイドル部が存在しないか部室棟に行つてみることにした。

一方時を同じくして。地球から遙か遠く離れた惑星で、一人の巨人が佇んでいた。

元々地球の様に緑豊かだったこの惑星にはその頃の面影は残っておらず、荒れ果てた大地には草一本生えていない。まさに死の惑星となっていた。

そしてこの星をこのような死の惑星へと変貌させた元凶となった存在は、その惑星を離れると別の惑星を求めて移動を開始した。

巨人はこの惑星を守れなかつた悔しさから拳を握りしめると、元凶を追うべく飛び立つ。

銀色の身体に紫のラインの奔るその巨人は、果敢にもその元凶たる虹色の光へと肉迫するが、逆に反撃を受け弾き飛ばされてしまう。

宇宙を漂う小惑星にその身体を叩き付けられた巨人は、先の惑星での戦いでエネルギーを消耗していた事もあり失速。そのまま敵を取り逃がしてしまう。

『クツ……このままでは、地球が危ない』

巨人はその身体を輝かせると、光速を遙かに超えたスピードで地球を目指すのだった。

そしてその二つの光が、地球へと向かっていた。

その夜、人々は美しい不思議な光を見た。

虹色に輝く光の粒子の集合体は無数の円を夜空に描いていた。そしてその光から、未知のエネルギー反応が検出されていた。

だがその光を現地で直接見ている人々は、そんなことを知るはずもなくその光に見とれていた。だが未知のエネルギーを秘めた光は、その粒子一つ一つが生きており、驚異的な勢いで増幅したそのエネルギーによって――

出現した街を消し飛ばしてしまうのだった――

1話 光との再会

「スクールアイドルっていうんだって、私ときめいちやった」

菜生がそう語り掛ける相手は人間では無かった。50メートル近い体長を持つ、翼竜のような翼を持つ怪獣。『友好巨鳥リドリアス』

菜生が中学生の時に出会った怪獣で、大人しい性格で菜生によく懐いていた。

ここは鎗矢諸島、太平洋上にあるSRCの管理する島で保護された怪獣たちの暮らす島だ。リドリアスもここで保護されており、菜生のような民間人も島から許可をとれば誰でも入ることが出来る。

鎗矢諸島は上空をバリアで覆われており、リドリアスのような飛行能力のある怪獣がどこかへ行かないような措置が取られているがそれでも空を飛べるように、バリアの傘もかなり高い位置に存在している。

崖の上から、崖下の浜辺にある巣で横になるリドリアスにそう嬉しそうに告げる菜生にリドリアスも首を上げて鳴く。すると突然飛び立ち、菜生の頭上を旋回するのだった。

そんなリドリアスを見て、菜生は首のペンダントを外すと振り回す。リドリアスは、

菜生の持つ輝石の奏でる風切り音が大好きなのだ。

「あははっいいぞ〜」

そんなリドリアスの様子を見て楽しそうに笑う菜生は、普段歩夢の前でも見せない程の無邪気なものだった。

「菜生ちゃんよく来たね」

「あつ池山さん。お邪魔してます」

そう言つて背後から声をかけてきた男性に菜生は頭を下げる。この無精ひげを生やした初老の男性はここ、鎚矢諸島の管理官だ。

「菜生ちゃんは本当に怪獣が好きだなあ」

「そうですか？だってかわいいじゃないですか。：なんとかならないんですか？バリアの中に閉じ込めてかわいそうです」

「怪獣は怪獣だからなあ：みんながみんな、菜生ちゃんみたいに怪獣を受け入れられないだよ」

そう返す池山管理官の表情は寂しげだった。仕方がないと言えば仕方がないのかもしれない。人間よりはるかに大きな生物だ、向こうにその気がなくとも万が一踏まれればひとたまりもないし、そもそもクマなどの怪獣と比べればまだ人間と差ほど変わらない生き物でさえ時に人は追い払い殺してしまう。

怪獣との共存は、現在こうして保護という形をとるしかないのが人類の現実なのだ。

「そう……ですね……」

そう菜生も顔を伏せてそう答えると、場が暗くなってしまったのを気にしたのか管理官は話題を変える。

「ところで菜生ちゃん、高校を出たらここで働かないか？宇宙パイロットより、怪獣保護センターの方が向いてるように思えるがね」

そう言われて、菜生は誤魔化すように視線を泳がせる。

「あはは……でもやっぱり、私は宇宙に行きたいんです。子供のころからの夢で、大事な友達との約束でもあるから」

そう語るも、菜生の心の中には迷いがあった。コスモスとの約束。それは、必ずしも宇宙飛行士になることが全てでは無い。それに菜生自身、このまま宇宙飛行士になってもいいものかと心の中では悩んでいたのだ。

「そうか、でもまあ気が変わったらいつでも言うてくれ。オレはいつでも歓迎するぞ」

だがその感情を表に出さない菜生に、池山は納得したように笑う。

「ありがとうございます。素敵なお誘いですし、考えてみます」

「いつまでもいい返事を待ってるよ」

「じゃあ今日は帰ります。明日は学校なんで」

そう言つて菜生は立ち上がる。そんな菜生に、リドリアスは名残惜しそうに鳴く。「じゃあまたね、リドリアス。また休みの日に来るから、ちゃんといいい子にしててね」そう言つて菜生は暫くペンダントを振りまわすと、首にかけて東京まで戻るのであった。

その移動の飛行機内でも、ずっとスクールアイドルの事を調べているのだった。昨日のスクールアイドルとの出会いは、それほどまでに菜生の心を掴んで離さなかった。

そして翌日、放課後までスクールアイドル部の部室が存在するのか気になって仕方なかった菜生はようやく部室棟へと迎えることに心を躍らせるのだった。

「ホントにあればいいけどなあ……」

そんなことを呟きながら菜生は部室棟の中をうろつく、部活に所属していない菜生がいても目立つことはないのだがそれでもなんとなく廊下で色んな部の人間とすれ違ふとどことなく居心地の悪さを感じる。

暫く部室棟の中を散策し続ける事数十分、菜生は部室棟の奥に『スクールアイドル同好会』と書かれたプレートのかかった部室を発見した。

「部じゃなくて同好会……?でも、ここで間違いないよね……?よし……」

菜生は意を決すると部室の扉に手をかけ、そしてゆっくりと開くのだった。

「こんにちは〜…」

「なんでしょーか？関係者以外立ち入り禁止ですよ？」

部室の中にいたのは、髪をボブカットにし月の形をした髪飾りを付けたかわいらしい少女だった。おそらくスクールアイドル同好会のメンバーなのだろう。リボンの色からして一年生だろうか？

「えっと、私部室探してて…」

「ワンダーフォーゲル部をですかあ？」

「ワンダー…フォーゲル…？？」

上手く伝わらなかったのか、そう聞いてくる少女の質問に首を傾げる。

「部室を明け渡せって話ならしつこいですよお。スクールアイドル部が取り潰されるのは月末です、それまでここはスクールアイドルの部室なんですよ」

ちゃんと説明し直そうかと菜生は悩んでいると、目の間の少女はそんな事に気づくこともなく話を進めていく。

「それなのに奪いに来るなんて、かすみん悲しくて涙が出ちゃいます。うえ〜ん」

「ちよ…な、泣かないで。私はスクールアイドル部を探してて…」

目の前で泣き出す少女に、菜生はそう咄嗟に声をかけるとスクールアイドル部を探し

ての部分聞いて目の前の少女は「あれ？」と呟いて泣き真似をやめる。

「もしかして…ワンダーフォーゲル部の人じゃなかったり…しますか？」

その問いかけに菜生は無言で頷く。そうすると少女はほっとすると。

「なんだあ、かすみん早とちりしちゃいましたあ〜」

そう言うのと「てへっ」とみために右拳をあててちよろつと舌をだす少女に、スクールアイドルって大変なんだなと少し違う気もする感想を抱く。

「えつとスクールアイドル同好会にご用です？ 入部希望ですか？ 大歓迎ですよ〜」

「いや…入部希望じゃなくて、スクールアイドルってこの学校にもいるのかなあって」

「え〜入部希望じゃないんですかあ？」

入部希望でないことを告げると、一気に目の前の少女はつまらなさそうな顔をする。

「じゃあなんで探してたんですか？」

「うーん…もしうちの学校にもスクールアイドルがいるなら。私応援したいなあって」

そう言うって菜生は笑いかけるが、すぐにさっきの会話で気になるワードがあつた事を思い出し表情をすぐ真剣なものに変える。

「そういうえば、さつき取り潰されるのは今月末って…本当…なの？」

そう問いかけると少女も真剣な表情になり頷く。

「本当です…鬼の生徒会長から直々に言われたんです。部員もいなくなつてスクールア

アイドルとしての活動実績がないなら解散だ……って……」

そう告げられ、菜生も悲し気な表情を浮かべる。折角夢中になれるものを見つけたのに……と。

「そんな……なんとかか……なんとかならないの?」

「私だってなんとかしたいです!人数少なくてもソロでだってスクールアイドルは出来るし、かすみん……スクールアイドルにずっとずっとなりたかったんです!」

その彼女の訴えに、菜生はハツとした。似ていると、宇宙飛行士を志した時の自分に。「こんな形で同好会が無くなっちゃうなんて……イヤですよ……」

「な、泣かないで……」

彼女にとってスクールアイドルは、幼い時からの憧れであり。自分のなりたい自分だったのだ。その夢が潰えようとしていることは、彼女にとって耐えきれないものだった。

「そうだ。ソロでもできるなら、活動実績作るから同好会を残してほしいって申告してみるのはどう?一人が不安なら、私も一緒に行くからさ」

そう言って笑いかけると、少女も泣き止むが同時に疑問も抱いていた。

「かすみんのマネージャーになるってことですか……?」

「マネージャー……とは違うかもだけど、私もスクールアイドルに元気を貰ったから今度

は応援したいなって」

そう告げると、「マネージャーができちゃいました」とはしゃぐ少女に「いやそうじゃなくて…」と菜生も少し困惑気味だったが、元気が戻ったようで安心した。

「でも、あなたも同好会が無くなるのは嫌なんですねよ?」

「うん」

「じゃあ、スクールアイドル同好会解散阻止作戦を手伝ってください! かすみん、どうしてもスクールアイドルでいたいんです!」

その訴えに、菜生は首を縦に振った。断る理由など、どこにもなかった。

「私で良ければ、喜んで!」

「えへへ…じゃあ一緒に頑張りましょう! あっ私、一年の中須かすみです」

「私は二年の高田菜生。よろしくね、かすみちゃん」

そう言つて菜生が手を差し出すと、かすみも同様に手を出して握手をした。ここから、同好会を存続させるために生徒会室へ行こう。

そう話していた時だった。街中に警報がけたたましく鳴り響いたのは――

「な、何ですか!?!」

「とにかく外へ行こう!」

突然の警報に驚くかずみを、菜生は学園の外へと連れ出す。怪獣がこちらへ向かつて

いるから避難しろと、避難誘導に従って避難する生徒や近隣住民の姿が目に入る。

「怪獣……」

「なんで……なんで？ どうして……」

怪獣というワードに恐怖を覚えるかすみと対照的に、空から飛来した怪獣の姿を見た菜生は言葉を失う。

リドリアスが、東京の街中に着地したのだ。鏑矢島で大人しく暮らしている筈のリドリアスの出現に、菜生は呆然とする。

「先輩どうしたんですか？ 早く逃げましょうよ」

そう言っただかすみは菜生の袖を引っ張ると、菜生はようやく現状を呑み込むことが出来た。とにかく、リドリアスを止めなくては。

「かすみちゃんには先に行って？ 私はリドリアスを止めなきゃ」

「止めるってたって……」

「大丈夫、リドリアスは私の友達だから！」

この場合、かすみの言っていることの方が正しい。怪獣保護チームの戦闘機も現れるが、街中で行動を開始すれば住民を巻き込む可能性がある。避難が終わらなければ下手に手出しできないのだ。

「菜生ちゃん！」

「歩夢、この子お願い！」

クラスの使用で残っていた歩夢が、菜生に気がついて駆け寄ってくると菜生はかすみを任せてリドリアスの方へと駆け出した。

（私が絶対、リドリアスも街も救うんだ！コスモスと約束した、真の勇者になる為に！）
そう決意を胸に走る菜生の胸元で、輝石が光り輝いていた。

そして着地した後、その場に立ち尽くし暫くもがくような仕草を取っていたリドリアスの首元に虹色の光の粒子が見え隠れする。

そしてその粒子は、リドリアスの身体を変貌させる。両腕の爪は鋭く伸び、赤いトサカは大型化しより刺々しい姿へとリドリアスは変貌する。

そしてリドリアスは口から光線を吐くと街を薙ぎ払う。

「リドリアス、やめて！どうしたの？」

菜生はリドリアスに近いビルへと駆け上るとネットワークスを振り回し、輝石の風切り音を聞かせる。

「リドリアス…酷い姿になっちゃったね……」

その音に気がついたリドリアスは、菜生を睨みつけるがそのまま動こうとはしなかった。まだ残っている理性が、菜生を攻撃してはいけない対象として理解しているのだ。

そして暫くリドリアスは苦しむと、元の大人しい姿へと戻る。

「帰ろう？ここは、お前がいていい場所じゃないんだ…」

菜生がそう告げると、リドリアスは飛び立ち鎗矢諸島へと向かっていく。

「凄…」

菜生によつて元の姿に戻り、帰って行くリドリアスを見てかすみは思わずそう呟く。だが現実には、それですべての事態を解決してはくれなかった。

防衛軍の戦闘機がリドリアスを攻撃したのだ。

街を破壊する脅威と判断されたリドリアスは砲火に晒されると、反撃すべく街に戻ってくる。

「ダメだリドリアス！攻撃しちゃダメー！」

菜生はネットワークスを振り回しそう叫ぶが、リドリアスにその声は届くことはなく。逆に菜生へと光線を吐いた。

「キャッ!?!」

「菜生ちゃん!」

「先輩!」

菜生のいたビルは崩壊し、菜生の身体は宙を舞った。だがその時、宇宙から謎の光が襲来し菜生の身体を攫った。

その時周囲には鈴の音のような音が鳴り響いていた。

「何ですか？この音……」

「この音……聞いたことある気がする……？」

その音にかすみは周囲を見渡すが、歩夢は逆にそう告げる。

一方で菜生はその光の中で、どこか懐かしさを感じる暖かさに触れていた。最初死んでしまったのかと思っただが、すぐにそうではないことに気がつく。そしてその光の正体にも。

（ずっと……ずっと会いたかった……）

その光の中で横たわる菜生は、光へとそう告げる。その菜生の上で輝石は光り輝いていた。

『菜生、諦めるな』

落ちていた男性の声頭の中に響く。だがその言葉に菜生ははつきりと答える。

（私は何も諦めてない！私は本当に……）

「本当にみんなを守りたいの！ウルトラマンコスモス！」

菜生はそう叫ぶと目の前の輝きに手を伸ばす。すると一層輝きを増した光が、菜生の身体を包み込んでいく。

その頃街に着地したりドリリアスを防衛軍の戦闘機は集中砲火を浴びせる。攻撃にさらされその場に釘付けになっていた。

だがそんなドリリアスを庇うように空から白銀の光が降り注ぎ、ドリリアスの盾となる。

そしてその光の中から、青い身体に銀色のラインを持った巨人が現れた。

「あれは…?」

「うそ…来てくれたの…?」

巨人の登場に、歩夢はそう漏らす。6年前に出会った巨人が、今再び目の前に現れたのだ。その事に歩夢は安心を覚える。

「帰ってきた…ウルトラマンコスモスが……」

ドリリアスを防衛軍から守るようにして現れたコスモスを見て、防衛軍は攻撃を中止した。

「ハアッ!」

ドリリアスに背中を向けて現れたコスモスに、ドリリアスは長い爪で襲い掛かるがすぐさま身を掲げて躲したコスモスはすぐにドリリアスへ向き直ると構える。

そしてドリリアスの攻撃を軽快な動きで躲し続けていく。そして回避が無理と判断すれば腕で相手の腕を止め、くちばしでの突きは顔を逸らして回避する。

決してコスモスは自分からリドリアスへ攻撃することはしなかった。

くちばしを掴んで突き攻撃を防ぐと、そのままリドリアスの身体を押し返す。先に攻撃することも拳で殴ることもせず、ただコスモスは攻撃を捌く事でリドリアスの体力を奪っていく。

「ハアツッ・フツッ・イヤアツッ！」

リドリアスが鋭利な爪でコスモスの身体を引き裂こうと腕を振り回すが、コスモスは腕で防ぐとそのままリドリアスの腹部を手のひらで連続で突く。

その攻撃に仰け反ったリドリアスは、口から光線を吐きコスモスへと攻撃するがコスモスは両腕でそれを弾き飛ばす。

だが連続でもう一度放たれた光線は、腕で弾くことは不可能と判断したのか光のバリアを展開してそれを防ぐ。

「ハアアアア……トリヤア!!」

そしてそのバリアは、押し飛ばしてそのまま攻撃に転用できるリバースパイクという技で自身の攻撃をモロに食らったリドリアスはもがき始める。

するとコスモスは目から光を放ち、リドリアスの体内を透視すると腹部に虹色の光の粒子があるのを確認する。

「ハアアアア……フウン!!」

コスモスは両手を胸の前に救い上げるようにして光を集めると、それを右手から放った。

——ルナエキストラクト——怪獣に憑りついた虹色の光の粒子を切り離す技だ。それによつて、リドリアスの体内から虹色の光の粒子が放出され霧散する。

するとリドリアスの身体は元に戻る。嬉しそうにリドリアスは鳴くと、今度こそ鎗矢島を目指して飛び去って行く。

「シュウワツ！」

それを見たコスモスは、両腕を天に掲げると飛び去って行く。そして空高く舞い上がると、その身体は光に包まれ誰も目で追うことは出来なかつた。

そして人知れず、再び空から光が降り立つとその中から菜生が現れる。汗で髪が顔に張り付いた菜生は息を上げながらその場で膝を付く。

菜生はあの光の中でコスモスの声を聞き、輝石の放った光に手を伸ばした結果。コスモスとともにリドリアスと戦い、リドリアスをあのように変貌させたいわば光のウィルスを切り離したのだ。

「はあ……はあ……私がウルトラマンに……なった……？」

まだ実感は沸かないが、それは間違いなく現実だった。

スクールアイドルとの出会い、ウルトラマンコスモスとの再会。

私、高田菜生の物語はここから始まったんだ。

2話 スクールアイドル同好会

「それにしてもラツキーだったよね、あそこから無傷で助かったんだから」

「あはは…：そうだね、きつとコスモスが助けてくれたんだよ」

翌日の登校中、そう菜生に語り掛ける歩夢に本当の事を話すわけにもいかずそう当たり障りのない返事をする菜生。

「でもコスモスは、どうしてまた地球に来たのかな？」

「うーん…：？私を助けにきたー」

「え？」

「なんてね、多分リドリアスを変化させた謎の光が関係してるんだと思う」

歩夢に聞かれたことに、菜生はすこしふざけながらも推測を述べる。あの後、コスモスは菜生には何も教えてくれなかった。きつと菜生の中に今もコスモスはいるはずなのに、何も言っってはくれない。

だから菜生は、なぜ6年越しにウルトラマンコスモスが地球に現れたのか考えていた。

「菜生ちゃん、リドリアスが大好きだもんね」

「リドリアスは大事な友達だから……だから、歩夢やみんな私の大好きな人を傷つけて欲しくなかったんだ」

そう告げる菜生を頬を歩夢は引つ張る。

「ひよつひよつとひやにふるの？（ちよ……ちよつと何するの？）」

「あの時とつても心配したんだから、菜生ちゃんに傷ついたら私も嫌なんだからね」

そう打って変わって真剣な眼差しで告げる歩夢に、菜生は頷くと歩夢もふつと笑みをこぼすと菜生の顔から手を離す。

「約束だからね？」

「うん、わかった」

そう言つて歩夢と約束する菜生だが、正直その約束は守れないのかもしれない。再び菜生もコスモスと一緒に戦わねばならなくなるかもしれないからだ。

（コスモス……あなたは どうしてまた地球へ？）

再びそう語り掛けるが、やはりコスモスは何も答ええないし輝石が輝く事もなかった。きつとコスモスは力を使い果たして眠っているのかもしれない。そう思つて菜生は詮索をやめ、放課後生徒会室に行つて何と言つて同好会を存続させるかを考えることにした。

そして放課後、菜生は一度同好会の部室へと向かった後、かすみと合流すると、ふたりに生徒会室に向かうのだった。

「もう、凄い勢いで反対方向に向かつて行くからびっくりしましたよ」

「あはは…ごめんごめんから回ったかも？」

合流してよし生徒会室へ。そう言って部室から出た菜生は、色々考えていたのもあつて逆方向へと向かつてしまった。そんな菜生に若干呆れ気味で案内してくれたかすみに、そう言って菜生は頭をかく。

「あー…から回っちゃやう事ってありますよね。そういうの、わかります…」

そんな菜生を見て、かすみはそう言って顔を伏せる。

「かすみちゃん？」

「あつ…なんでもないです」

そんな彼女の異変に気がついたのか、菜生はそう言って顔を覗き込むとかすみはすぐに顔を上げると知り合った時から頻繁に見せるかわいらしい笑みを浮かべる。

「さつ、着きましたよ先輩。ノックですよ、ノック。直談判するんですよね？生徒会長

と」

「さすがに緊張してきたなあ……」

そう言つて菜生は首にかけた輝石に手を伸ばし握りしめる。

「わっ綺麗な石ですね」

「へっ？　そう？　ありがと、大事な友達に貰つたんだ。じゃあ、行こうか」

無意識にやっていた行為によつて、かすみに普段制服の中に隠している輝石を見られるが菜生はあまり輝石の事には触れずにそう言つて生徒会室の扉をノックする。

「どうぞ」

中からそう声が聞こえたので、意を決して菜生はかすみと共に生徒会室へと入つていく。

「失礼します、今日は生徒会長にお願いがあつて……」

名乗るのも忘れてそう菜生は告げる。中にいたのは長い黒髪を三つ編みにて左右に垂らし、眼鏡をかけた真面目そうな少女だった。

「あなたは確か……情報工学科二年、高田菜生さん」

「え？　私の事知ってるんですか？」

「この生徒会長、学校にいる全員の顔と名前を記憶してるんですよ」

「す……」

菜生は生徒会長とは面識は無いつもりだったが、科と名前を言い当てられて驚く。するとかすみも菜生にそう耳打ちすると、菜生は驚くとそう小さく呟く。

「そういうところが、かすみは苦手なんですけどお…ロボットっぽいっていうか……」
「はじめまして、私は生徒会長の中川菜々です。…それで？ロボットみたいな私に何か御用ですか？」

そう言つて生徒会長―奈々はそんなかすみの耳打ちが聞こえていたのか、そう笑みを崩さないまま問いかけると。かすみはすぐに菜生の背後に隠れる。

「私、スクールアイドル同好会の件できました。同好会の解体、取りやめて頂けませんか？」

「スクールアイドル同好会に、あなたのような部員はいませんでしたか？」

「部員じゃないけど。それでも私は、同好会に無くなつてほしくないんです」

部外者のはずの菜生がどうして、そんな事を頼みに来たのか不思議そうにする菜々だったが、すぐにそんな表情を消して冷たく答えた。

「それはできかねます」

「どうして？部員は少ないのかもしれないけど…それでも、真剣にスクールアイドルを目指している生徒が居るといふのに！」

そんな奈々に、菜生はそう食つて掛かるように声を大きくする。だがそんな菜生の様

子に眉一つ動かさず目の前の少女は続ける。

「我が校の生徒はあなた達だけではありません。虹ヶ咲学園は生徒の自主性を重んじ、あらゆる部活動を推奨しています」

「だったら……!」

「ですから、本校においてもスクールアイドル活動を盛り上げるべく同好会を立ち上げ、スクールアイドル活動を希望する生徒は他校からの編入も受け入れました」

菜々からその事実を告げられ、菜生は余計に解らなくなつた。そこまで力を入れていたのに、どうして解散するのが。

「本校としては、スクールアイドル活動を推奨したつもりです。そういう背景もあり、同好会の活動は最初の内は順調に進んでいたようですね」

「そうですよ! 実際、せつ菜先輩はスクールアイドルとして活躍だつてしてたじゃないですか!」

そこでそれまで菜生の後ろで話を聞いていたかすみが口を開く。そのせつ菜という部員が、一番活躍していた生徒なのだろう。だがその名を聞くと奈々は顔を伏せると、後ろを向いて窓の外へと視線を移してしまう。

「ええ……実績を作つた生徒も……いましたね……」

そう告げる菜々の声は、どこか悲しげだつた。

「それなら、何の問題もないんじゃないや…？どうして今解散だなんてことになったんですか？」

「それは…そのお…：今はちよつとみんなお休みしてるだけで、また戻ってくるはずなんです」

菜生がそう問いかけると、かすみがそう答える。

「じゃあそのせつ菜つて人が戻ってくれば、みんな戻ってくるんだよね？だったらそのせつ菜つて人にお願いしに行こうよ」

「ええつと先輩…その話は…」

だったら一番実績を残していたであろう人物に戻ってきてもらい。同好会をまとめてもらうのはどうかと提案するのだが、それを聞いてかすみは目に涙を浮かべながら何かをいいかける。

「あなたの言う、そのせつ菜という部員が同好会に亀裂を入れたんですよ」

かすみがい言い激んでいるのをよそに、菜々がそう冷たく言い放つ。それを聞いて菜生は言葉を失ってしまう。

「違います！亀裂なんて入ってないです！誰も怒ったりなんかしてなかったですもん！わかったような事言わないでください！」

そこにかすみはそう泣きながらも強く訴える。

「さつきも言った通り、今はちよつとみんなお休みしているだけなんです。きつと戻ってきます！」

「それはいつですか？中須さん。虹ヶ咲学園には沢山の部活、同好会があります。部室の空き待ちをしているところもあるんです」

だが菜々は、そんなかすみは淡々と事実を告げる。

「人もいない、活動もしていない同好会ではなく。きちんと活動しているところに部室をあてがうのは、間違っていますか？」

そう告げる菜々の言い分はもつともだった。いつ活動を再開するか解らない同好会に部室を割くわけにはいかない。だがだからといってここで、かすみの夢が潰えてしまふのを菜生は許せなかった。

「…でも、まだ退部したわけではないんですよ？」

「そうです！」

そう問いかける菜生に、かすみはそう答える。

「退部していないなら…」

「それは詭弁では？」

だつたらと口を開く菜生を、そう言つて菜々は遮る。

「じゃあ、ちゃんと人数が居て活動すれば同好会の存続を認めてくれるんですか？」

「それはもちろんです」

「ここから先は賭けになる、勝算も解らない。それでも菜生はここで引き下がりがりたくなかった。」

「なら、今月中に同好会が活動するのに必要な人数を集めます。それならいいでしょ？」

「そう告げる菜生に、菜々は一瞬驚いたような顔をするが。すぐに笑みを浮かべる。」

「わかりました。ただし、一つ条件を出させてください」

「…なんですか？」

「10人、10人の部員を集めることが出来たら、同好会の存続を認めましょう」

「現在菜生と面識のある部員はかすみのみ、元々何人いたかは把握しきれていないがせつ菜という生徒が戻ることを拒んだ場合。菜生が入部してもあと8人必要になる。そう考えているとかすみが口を挟む。」

「なんで10人なんですか!?!同好会は5人いれば成立じゃないんですか?」

「今現実には5人が1人になっているのです、また同じ人数では二の舞になるのではないですか?」

「またかすみ以外が来なくなる。そんな事態を繰り返さないための措置で10人いれば5人抜けてもまだ5人残る。そういう判断なのだ。」

「無茶言わないでくださいよお…」

そうかすみは泣きそうな声を上げる。

「わかりました、10人集めればいいんですね？」

「先輩!？」

その条件を呑んだ菜生に、かすみは振り返って驚きの声を上げる。

「かすみちゃん、やってみようよ。夢は諦めなきや、絶対叶う。奇跡だってなんだって起きる！」

だがそんなかすみの不安などいざ知らず、菜生はそう言って笑いかける。絶対になんとかすると、彼女の表情が物語っていた。

「せ、先輩……わかりました、10人集めましょう！」

生徒会長の出した条件を呑むことでその場は収まり、部室へと戻ったのだが――

「はあく……」

「どうしたのかすみちゃん？」

部室に戻るや否や大きなため息を漏らすかすみに、菜生はそう首を傾げる。

「だって今まで5人で活動していた同好会に10人集めろって言われても……勢いでやるって言っちゃったけど、どうしましょう……」

「とにかく、まずはこの同好会の事を教えてくれない？とりあえず元々いたメンバーがみんな戻ってきてくれれば、新しく勧誘するのはとりあえず5人で済むし。期限もあるし、なるべく最短で行こう」

「わかりました、何でもかすみんに聞いてください！」

彼女の口から語られたのは、元々5人で活動していた同好会のメンバーは。先程話題に上がった優木せつ菜、それに他校からスクールアイドル活動の為に転校してきた。

近江彼方、桜坂しずく、エマ・ヴェルデに目の前にいる少女、中須かすみの5人で今まで活動していたのだという。

菜生自身、このメンバーの誰とも面識がないのでどのような人物かは知らないが、亀裂云々と生徒会長は語っていたがかすみ自身そうは思っていないらしく。

単純に、メンバーそれぞれの個性がバラバラだった結果、目指したい方向性の違いで上手くいかなかったと言う事らしい。

「部活動発表会ってあったじゃないですか？」

「ああ、あれね。でもスクールアイドル同好会って…」

「出れなかったんですよ」

そうだろうとは思った。菜生も部活動発表会は見ていた、だがスクールアイドル同好会の発表は無かった。

「私達ももちろん、グループでライブを開こうとしたんです。初めてのステージだったから、みんなすごく楽しみにしてて…」

そう告げるかすみは、目を伏せると「でも…」と言葉を続ける。

「やりたいことがバラバラ過ぎて、うまくまとまらなかったんです」

「そう…なんだ……」

纏らなかつた結果、ライブを行うことが出来なかつた。みんなやりたかつただろうに、菜生はその事に何と言つて良いか解らなかつた。

「それで気がついちゃったんですね。かすみたちつて一緒の方向には行けないんだなって、だからお互い遠慮するようになっちゃつたつていうか……」

「せつ菜さんは、その時はまとめてくれなかつたの？」

ずっと中心で動いていたのなら、その時彼女はどうしたのだろう。そう思い、菜生は問いかける。

「せつ菜先輩が一番遠慮してたような気がするなあ…元気なかつたですし……」

「それで、自然消滅みたいな形に？」

「みんな段々来なくなっちゃいました。情熱があればなんでもできる訳じゃないつてわかつたのはいい勉強になりましたよ、ほんと…」

そう自嘲気味に笑うかすみは、菜生はなんと声をかけるべきか迷っていた。こんな

時、自分に勇気をくれた人たちならなんと声をかけてくれるだろうか。

「…でも、情熱って大切だと思うな。情熱がなかったら、頑張ろうって思えないもん」

「先輩…」

「やっぱり、元々いた人たちに最初は声をかけるべきだよ。大丈夫、きっと戻ってくる！」

「どうしてそう思うんですか？」

そう言い切った菜生に、かすみはそう問いかける。菜生も絶対的な自信があつた訳では無い。ただそれで彼女を勇気づけることが出来ればと思つていったことだった。

「直感…かな？まあとにかく！明日から声かけてみよう？夢を諦めちゃいけないんだよ」

そう誤魔化すように告げる菜生は、どこか自分に言い聞かせているようだった。

「先輩…？」

「とにかく明日から、今日はもう遅いし帰ろう」

そんな菜生の様子に気がついたのか、かすみは菜生の顔を覗き込むと菜生はそう誤魔化すと自分のカバンを持つ。

「じゃあまた明日ね」

そう言つて菜生はそのまま帰つてしまった。

(私の…夢…)

アストロノーツになる事、亡き父のように宇宙に行く事。でも今は、違う夢を追いたいと思っている自分がいる。

スクールアイドルを応援したい。あのステージの上で輝く少女たちを、もつと近くで。

そして宇宙へ行く事が、本当に自分の夢なのか？空手を辞めたあの日から、菜生の心の中でしこりのように残っていた。

一方その頃、虹色の光の集合体が地底へと光線を撃ち込んだ。そしてその結果、地底深くで眠っていた存在が目覚め地上へと上がってこようとしていた。

3話 カオスヘッダーの陰

翌日の放課後、菜生はさつそく同好会の部室に向かった後、かすみを引き連れて教室棟へと向かった。

「先輩！どこ行くんですか？前同好会にいた人たちを説得しに行くんじゃないんですか？」

「うん、まあでもその前にちよつと実績を積んでおこうかと思つてさ？」

「実績？」

そう告げる菜生の言葉を反芻するかすみを余所に、菜生は2年の普通科の教室へと向かつて行く。

「戻つてきてほしいつて説得するだけより、今度は以前とは違う。みんなで頑張つていけるんだつてわかつてもらわなきゃ」

「一体どんな実績を積むんですか？」

「頑張つていける人に入つてもらおうの」

「…頑張つて……いける人……？」

そう告げる菜生に、かすみは余計に謎が深まったと言いたげな顔をしているが。そん

なこと菜生はお構いなしにある教室の前で立ち止まる。

「あれ？先輩って普通科でしたっけ？」

「ううん、違うよ」

普通化2年の教室の前で立ち止まった菜生に、かすみはそう聞くと菜生は首を横に振る。

「あれ？菜生ちゃんだ」

「やつほー、歩夢居る？」

「いるよ、呼んでこよっか？」

普通科の生徒が菜生に気がつくと思いきや駆け寄ってくる。普段からよくその歩夢という生徒に用があつて来ているらしい。

その生徒をこれから勧誘するつもりなのだろうか？などとかすみがそんな菜生の様子を見ているとその生徒がやってくる。

「ええっ?!私がスクールアイドル同好会に!?!」

かすみの予想通り、菜生は歩夢をいきなり同好会に入らないかと勧誘し始めた。だがやはり、歩夢はその突然の誘いにあまりいい顔をしなかった。

「お願い！他に頼めるの歩夢だけなんだ！」

そう言つて菜生は手を合わせて頼み込むが、歩夢は困つた顔を浮かべるだけだった。

「あ、あんな風に歌つたり踊つたりするの、私には無理だよ！私なんかとは世界が違う感じだったし……」

「先輩、先輩」

そんなやりとりをいっていると、かすみは菜生の袖を引っ張る。

「どしたの？かすみちゃん」

「頑張つて行ける人つて、この人ですか？」

「そうだけど？そっか、この前会つてたけどお互いの事知らなかったね。紹介するよ、上

原歩夢。私の幼馴染なんだ」

「幼馴染ーッ!?!」

急に大声で驚く彼女に、「そんな驚く事……？」と菜生も困惑するような表情を浮かべる。

「だって先輩、その人とそんながーいお付き合いなんです……」

「まあそう言う事になるのかな？そうだ歩夢、この子はスクールアイドル同好会の中須かすみちゃん、一年生なんだって」

そう言つて菜生は歩夢にもかすみを紹介する。先日会つてはいるが、お互いの名前を

知る暇もなかっただろうしと。

「歩夢はどんな時も頑張れる子で、私凄いなって。だから、歩夢がいいてくれればもつと頑張ろうって思えるし…かすみちゃん？」

「かすみんだって頑張れますけど」

「それは解ってるよ、それに私一人が助っ人じゃちよつと心もとないしさ？」

歩夢を勧誘しようとした理由を告げると、なぜか拗ねるような態度をとるかすみに菜生はそう付け足す。すると「先輩がそう言うなら…」と納得してくれた。

「やっぱり菜生ちゃん、凄い行動力だよね」

そんなやり取りを見ていた歩夢がふふつと笑うとそう告げる。「そうかな？」と首を傾げる。

「だって菜生ちゃん、スクールアイドル部を探しに行つたと思つたら。同好会を存続させるために頑張つてて、出会ったばかりの後輩ちゃんにこんなに頼りにされてるなんてすごいよ」

「後輩ちゃんっていうの、かすみんのことですよね？先輩とはちよー仲良しなんですよお」

「ふふつそうなんだ」

そう言われてなぜかかすみの方が嬉しそうにそう答える。

「ねえ？幼稚園の時の事覚えてる？」

「幼稚園？…なんかあったっけ？」

不意にそう聞かれるも菜生は咄嗟に思い出せず、そう言っただけ。嫌な思い出だけ。

「私にとつては大事な思い出なんだけどなあ…菜生ちゃん、お遊戯会のステージに立つのを恥ずかしかつてた私に『ステージの上で頑張れば、お客さんみんな笑顔になつてくれる』って」

「そういえば…言つた気がするなあ…」

「頑張る私の事応援するからって、私の両手をぎゅって掴んで凄く笑顔で言ってくれたよね」

なんとなく恥ずかしくなつて菜生はそっぽを向いてしまう。

「菜生ちゃんがいたから、色んなこと頑張つてこられたんだ。…だからね、菜生ちゃんとスクールアイドル頑張りたい！」

「ホントに!？」

「いいんですかあ!？」

正直最初の反応を見た時断られることも覚悟していた。思わぬ返事に菜生もかすみも誘つておいてなんだが思わず驚いてしまう。

「うん、これからよろしくね。後輩ちゃん…ええつかすみさん?」

「歩夢先輩は先輩なんだから、かすみんって呼んでくれていいですよ?」

「でも、部活はかすみさんの方が先輩だし…」

「もつとフレンドリーにしてくださいよ!これから同好会の仲間になるんですし〜!」

「フレンドリー?…あだ名とか?えつと、中須かすみちゃんだから…かすかす?」

そう聞いてみると、かすみはさきほどまで浮かべてきた無邪気な笑顔が消えた。

「ぎゃー!…なんで昔のあだ名知ってるんですか!?!かすかすはダメです!禁止禁止!!」

「か、かすみちゃんでもいいよね?ね?」

咄嗟にそう言つて菜生が割つて入ると「そつそれでお願ひします!」とかすみも言つてくれたので歩夢もかすみちゃん呼びで合わせてくれるだろう。

「私まだ、スクールアイドルの事とか全然わからないからこれから教えてね?精一杯頑張るから」

こうしてまずはメンバーを2人に増やすことが出来た。この調子で10人目指して頑張つて行こう。幸先のいいスタートが切れたと菜生は思っていた。

「ふわあ〜」

数日後の朝、まだ眠気が抜けきっていないまま寝起きのラフな格好でリビングへと入っていくと。彼女に似た黒髪を腰まで真っ直ぐ伸ばした女性と目が合う。

「おはよう、菜生」

「お母さん、おはよう。そっか今日はお休みだっけ？」

母が休みの日は、母親と挨拶を交わして、対面に座って朝食を摂る。もう10年以上続いている、いつもと変わらぬ朝の光景。

SRC関連の医療施設で働く母親とは、その仕事の関係であまり家で顔を合わせる時間は多くないが、母も菜生との時間をずっと大事にしてくれている。

「菜生聞いたわよ、この前ドリラスが街に来た時、近くまで行ったんですって？」

「へ？あーええつと…」

やっぱり無茶やったよなあと少し反省しつつ視線を泳がせる菜生に、母は続ける。

「菜生は昔っから無茶したがるんだから、気を付けなさいよ？まだお父さんの所に行くのは早いんだから…」

「いめん…」

そう母親に告げられ、菜生はそう短く答えると顔を伏せる。父親を亡くしてからずっとと女手一つで菜生を育ててくれた母親に、心配はかけられない。そんな事、菜生は解っていた筈なのにと。

「ほんと、そんなところはお父さんに似ちゃったんだから」

「あはは……」

「そうだ、歩夢ちゃんと新しい事始めるんでしょ？ スクールアイドルだっけ？」

しんみりした空気になったところで、母がそう話題を変える。

「うん、私と変わらない普通の高校生が、歌と踊りで人を感動させられるのってすごいなって……そんな人たちを応援したい。支えたいって思ってたんだ」

そう答える菜生にうんうんと母は頷く。

「歩夢ちゃんも一緒なら安心ね。最近色々物騒だから、気を付けるのよ？」

「それって……あの光のウイルスの事？」

光のウイルス——大人しいリドリアスの身体を恐ろしい姿へと変え、街を破壊させた存在。コスモスのお陰で事なきを得たが、その存在は未だ謎に包まれている。

「科学技術部じゃ『カオスヘッダー』って呼ばれてるんだけど、取り付かなくても街を壊滅状態にするだけにエネルギーは持つてるし……用心はするべきよ？」

「わかった」

「そうだ、こんどそのコスモスに貰った石を結ぶ紐。新しいの買わないとね」

そう言って菜生の首にかかった輝石を結ぶ紐を指さす。母は知らないがリドリアスの前で振り回したりしていたので、最近少し痛んできていた。

「また結んでくれるの？ありがとう！」

「どういたしまして。ほら、早くしないと遅れるわよ」

「やばっ…」

時間を見ると既にいつもより時間に余裕がない。慌てて残りの朝食を口に押し込むと立ち上がり、自室に戻って制服に着替えて歯を磨く。なんとか間に合いそうだなと思いつつカバンをもって玄関へと向かう。

「それじゃあ行ってきますー！」

「いってらっしゃい」

右手の人差し指と中指だけをくつつけてピンと伸ばして額の前に持ってきて敬礼のようなポーズをとる菜生に、母はそう手を振って送り出す。

「おはよう菜生ちゃん」

「おっはよー」

菜生と歩夢の家は、同じマンションの隣同士だからこうして同時に玄関から出てくるという事もよくあった。待ち合わせしている訳では無いけど、こうして一緒に通学する

のが恒例となっている。

「今日も演劇部に？」

「うん、やっぱり演劇部として活動している時の桜坂さんに声をかけるべきかなって」

菜生はここ数日、演劇部を見に講堂に放課後は通っていた。まずかすみの同級生である、桜坂しずくに同好会に戻ってくる気はないかと誘う事にしたのだが、なかなか話しかけるきっかけがつかめなかった。

演劇部として活動していて、それでもまだスクールアイドルへの熱意があるのなら、きつと戻ってきてくれるだろうという発想だったのだが、演劇を見ながら菜生は少し迷っていたのかもしてない。

そして放課後、かすみも交えた3人で演劇部の講演を講堂で観させてもらった後菜生は意を決して演劇部の部室へと向かった。

「桜坂しずくさんいますか？」

「私に何か用ですか？」

そう言つて菜生の前に立ったのは、ダークブラウンの髪をお嬢様結びにし大きなリボンで結んだ少女だった。

「ちよつと今一緒に来てもらえない？ スクールアイドル同好会の事なんだけど…」

その言葉を聞いて、目の前の少女は目を見開くが「大丈夫ですよ」と了承してくれた。かすみから聞いた話によれば、元々女優志望でスクールアイドルとしての活動も演劇に活かしたいという意図があったらしい。そんな彼女が戻ってきてくれるか賭けな部分もあつたが、今のところ好感触だ。

「おまたせ、桜坂さんに来てもらつたよ」

そう言つて菜生は歩夢とかすみの方へとしずくと共に歩み寄る。

「あ、あの…初めまして、桜坂しずくです」

そう落ち着いた声であいさつする彼女に「はじめまして」と頭を下げる。

「かすみさんは久しぶりっていうか…ごめんなさい、ですね…」

「しずくさんのお芝居、すごくよかったです！ 何回観ても泣いちゃいます」

何も答えないかすみに、気まずさを感じたのか歩夢がそう語り掛ける。

「ありがとうございます。何度も見てくださったみたいで、うれしいです」

「しず子、どうして同好会に来なくなっちゃったの？」

そうやり取りをしていると、かすみが口を開く。

「かすみちゃん!? そんないきなり…」

「いえ、大丈夫です。本当は、ちゃんとお話ししておかないけなかつた事ですから」
そう氣遣つてくれた歩夢にそう告げると、しずくは語り始めた。

「私は昔からお芝居が好きでした。でもそれと同じくらい、スクールアイドルという存在にも憧れがあつて…だからスクールアイドル活動が出来る間はそれに集中したくて、この学校に入りました」

「じゃあ…どうして?」

「私自身、スクールアイドルとしての経験をゆくゆくは演技に活かしたいなつて思つてました。みなさんの目指すもの、表現の仕方を見るのは楽しくて刺激的でした」

そう告げる彼女は本当に嬉しそうだった。だから余計に菜生は解らなくなつていた。

「中でもやっぱり、せつ菜さんは凄かったです。彼女について行けばみんなが望むスクールアイドル像に近づけるつて思いました。」

「でも、違和感があつた?」

おずおずと聞いてみると、彼女はゆっくりと頷いた。

「せつ菜さんが導いてくれる方向は確かに正しいんですけど、私はこつちの方向を目指したいつていう表現が、上手くできなかつたんです。それが悔しくて、未熟だなつて思つて…せつ菜さんに感じ取つてもらえるだけの表現力を磨きたくて、ここで修行させ

てもらってました」

「…え？」

もしかして自分達は、とんでもない勘違いをしていたのではないだろうか？

「それならそうと言つてよ！ かすみん凄いい心配したんだよ？」

「余裕がなくて…ごめんさい」

「よかつた〜じゃあ戻つてきてくれるよね？ 今解散の危機でさ」

「戻らせていただけのならば…！ えっ今そんな事になつてるんですか？」

やはり知らなかつたらしい彼女に、事の顛末を説明した。何はともあれ、これで3人だ。

そう安心していたが、そんな時だった地響きが周囲に鳴り響いたのは。

「じつ地震!？」

「外に出よう!？」

咄嗟に外へと出ると、街中には地中から怪獣が飛び出していた。二本足で立つトカゲのような姿に頭部から背中にかけて堅い殻、さらに頭部の先端で角のように尖っておりかなり獰猛そうな印象を受ける。

「また怪獣…」

「あれはたしか…」

今まで滅多になかった街中での怪獣の出現に思わずそう呟く声はがした。そんな中、菜生は怪獣に見覚えがあるのか記憶を漁っていた。

「ゴルメデ…SRCが前捕獲に失敗してる怪獣だ…」

「乱暴なの？」

「力はかなり強いって聞いた…でも、自分から人間を襲う事は無いって…」

またあのカオスヘッダーとかいう存在の仕業だろうか？

「そんな事より逃げましょうよ」

そんなかすみの言葉で4人は怪獣とは反対方向へ逃げる。

すると防衛軍が現れ、攻撃を開始するがまるで歯が立たず口から吐く火球で戦闘機は撃ち落とされ不時着する。

「おかあさんどこ？」

声のする方を見ると、幼い少女が母を探して彷徨っていた。だがそんな少女の方にゴルメデは向かっていた。そして最悪な事に、防衛軍機が墜落した時ビルの破片が少女へと降り注ぐ。

（まに…あええっ！）

咄嗟に飛び出した菜生は少女に駆け寄ると、少女を抱きかかえて降り注ぐ瓦礫から逃

げるがこのままでは避けきれないと直感してそのまま横に飛んで自身を少女の下敷きにする。

「ふうっ…大丈夫？」

そう聞いても返事がないのでドキッとしたが、気を失っているだけで目立った怪我もなく呼吸もしていたのでひとまず安心する菜生だったが、いきなり駆け出した菜生の方向へと駆け寄ろうとする歩夢たちの顔が青ざめる。

「危ない！」

その歩夢の声に、背後を振り返るとゴルメデが菜生と少女を踏みつぶそうと足を上げたところだった。

「くっ…！」

咄嗟に菜生は少女に覆いかぶさる。だがそんなことに意味がない事は解っていた。もう自分も少女も助からない、そう思った。

しかし、その時は来なかった。恐る恐る目を開けると、ゴルメデの足が落ちてくることなく止まっていた。まるで時が止まっているかのよう。

いや、実際止まっていたのだ。そして菜生の制服の中で輝石が輝いていた。

それに気がついて輝石を手に取ると、輝石は一層輝きを増しスティック状のアイテムへとその姿を変えた。

「これは……？」

『菜生、諦めるな……！』

コスモスの声がした。そして菜生は、この状況を脱するために。目の前の少女を、歩夢もかすみもしずくも、みんなを守るためにそのアイテムーコスモプラックを天に掲げる。

「ウルトラマン……コスモース!!」

すると先端についでいたつぼみが開き、中から輝石が飛び出す。そして菜生の身体は青と金の光に包まれていった。

「シューワ！」

ゴルメデに立ち上がるように、再び青い巨人ーウルトラマンコスモスが現れた。

4話 燃える太陽ように

空から舞い降りたコスモスは、土煙を上げながら着地するとそつと先程の少女を地上に降ろす。

そしてゴルメデへと振り替えると、こちらを威嚇するように腕を振って咆哮を上げる。

「ハアッ！」

コスモスは飛び上がるとゴルメデの頭上で身体を捻り、ゴルメデの背後に着地すると構えを取る。

「青い…巨人…」

「コスモスが、また来てくれた」

現れたコスモスを見て、しずくと歩夢はそう呟く。奇跡の巨人が再び、この星を護る為に現れたことがまだ信じられなかったのだ。

「イヤッ！」

コスモスはゴルメデがこちらに駆け出してくるのを見ると動き出し、突き出されたゴルメデの腕を払うと背後に回り振り向いたゴルメデの腹部に手の平で突く。

こうすることでゴルメデを、段々人のいない方へと誘導していくコスモスに対してゴルメデは腕を振り回して攻撃するがコスモスはこれを軽快な身のこなしで捌いていく。

ゴルメデの腕での薙ぎ払いには屈みつつ相手の隣を通り過ぎるようにして回避する。回避が無理と判断すれば両腕で弾き相手の態勢を崩す。

「ウルトラマンさんは、戦いを避けているんでしょうか……?」

コスモスがリドリアスの時同様、自分から攻める姿勢を見せない事にしずくは気がついた。

ゴルメデを人の少ない場所に誘導しつつ、攻撃を捌き切るという芸当をこなすコスモスにゴルメデは火球を吐いて攻撃する。

しかし、コスモスはバリアを展開して火球を斜め上空に逸らすと両腕を斜めに上げて光を集め始めた。

「ハアアアア……」

そしてそれを右手に収束させてゆっくりと前に押し出し、―フルムーンレクト―をゴルメデへと放つ。

するとゴルメデは興奮状態が収まったのか、大人しくなった。相手の興奮状態を抑制する効果のある光を照射するフルムーンレクトは、決して相手を傷つけずに戦いを終わらせる目的で使用される光線なのだ。

「凄い、怪獣が大人しく…」

これで一件落着。誰もがそう思った時だった、ゴルメデの頭上にカオスヘッダーが現れると。ゴルメデへと光を照射、生命エネルギーを吸い取っていく。

そして吸い取ったエネルギーを利用し、カオスヘッダーは自身をゴルメデのコピー体をして実体化する。だがただコピーしたのではなく、その頭部は赤く刺々しいものに変化し、その目も深紅に染まる。

さしずめ、カオスゴルメデと言った所だろうか。新しく現れた怪獣は、ゴルメデへと破壊光線を放ちその命を奪ってしまった。

「そんな…」

「せっかくウルトラマンが大人しくさせたのに…」

コスモスとの戦闘で大人しくなったゴルメデを、たつた今現れたカオスゴルメデが倒してしまった。そしてカオスゴルメデはコスモスへと向き直る。

カオスヘッダーは、わざとゴルメデを呼び覚まして暴れさせ、コスモスと戦闘を行わせて大人しくなった隙に生命エネルギーを奪ったのだ。自分が実態を得るために。

（そんな…ゴルメデを…許せない！）

コスモスと一体化していることで、コスモスが目にした光景を一緒に見ていた菜生は怒りを覚えた。そしてその怒りの感情は、同様にコスモスも感じていた事でコスモスは

カオスゴルメデを倒す決意をした。

「テリヤア！」

コスモスは右腕を天に突きあげると、その周囲に幾重にも重なった赤い光が現れる。そしてコスモスはその光を纏うと、太陽の燃える炎の如き赤き巨人へと姿を変えた。

それは、先程までの姿である月の優しき光の如き巨人とは打って変わり、銀と青のラインが左右非対称に奔る全身赤を基調とした姿への変化だった。

「コスモスが、変わった…」

歩夢達の視線の先で、コスモスとカオスゴルメデは同時に駆け出す。そして両者は激突すると、コスモスは相手を後方へと押しやりその腹に渾身の力で拳を放つ。

「デヤツ！ハアアツ！」

ルナモードの時よりも低く勇ましい掛け声でコスモスは攻撃を繰り出していく。拳の殴打、そして鋭い蹴り。先程までとは違う攻撃的なコスモスはカオスゴルメデを圧倒していく。

怪力を誇るゴルメデと戦っていたルナモードの時は、真っ向から力で勝負せず。受け流し攻撃を捌いていたのに対して、ゴルメデ以上の力を持つカオスゴルメデをコロナモードは真っ向から力で圧倒していた。

喉元に鋭く拳を撃ち込み、飛び上がって相手の顔面を蹴り上げる。この時のコスモス

の攻撃は殺気を纏っていた。

カオスゴルメデの振り上げた腕を弾き飛ばし、その腹部に両の拳を同時に叩き込む。後退した相手が尻尾で薙ぎ払おうとして来ればバク転で回避し、突進は飛び上がった空中で一回転して静かに着地してやり過ごす。

そしてただ力でごり押しするのではなく、合気道のように少ない力で相手を放り投げる等コスモスが一方的にダメージを与え、相手に攻撃を当てる事すら許さないとといった状況が続いていた。

「め…メチャクチャ強いじゃないですか……」

初めて見るコロナモードでの戦闘を見て、若干引き気味にかすみとしくは呟いた。

青いルナモードのコスモスが、相手を傷つけない『優しさ』を象徴した姿であるならば、コロナモードは邪悪を打ち倒す『強さ』を象徴した姿なのだ。

だが一方的にやられてくれるわけもなく。カオスゴルメデはオリジナルのゴルメデのように、コスモス目掛けて口から破壊光線を吐いてカオスゴルメデは反撃に出た。

しかしコスモスもただ食らう事は無く、円形状の光の盾―サンライト・バリアでこれを受け止める。

―ピコン―ピコン

だがここで、コスモスの胸のランプ。カラータイマーが音をたてて点滅を始める。コ

スモスは地球上では限られた時間しか活動できない。その活動限界が近付いていることを知らせていた。

ならばと、ここで勝負を決めるべく。コスモスはバリアを押し飛ばすとそのままカオスゴルメデにぶつける。その攻撃に相手の体系が崩れた隙にコスモスは必殺の一撃を放つべく両腕を広げる。

「ハアッ……アアアアアアアッ」

そして両腕を前に突き出し回転させて、超高熱の球体を創り上げそれを両腕で押し帯状の圧殺波動を放つ。

「デヤアアアア!!」

ーブレージングウェーブー超高熱の圧殺波動を受けたカオスゴルメデの身体は大きく吹き飛ばされた後、木端微塵に弾け飛んだ。

圧倒的な力を見せつけたコロナモードの前に、カオスゴルメデの身体を構成していたカオスヘッダーも消滅した。

「シューワッ!」

それを確認したコスモスは、大空へと両腕を掲げると飛び去って行った。

「カオスヘッダーは……一体どうして、こんなことをするんだろう……」

変身を解いた菜生は、1人そう呟いた。

『菜生』

「コスモス？」

不意に脳内にコスモスの声が響く。菜生はコスモプラックを取り出して、そこに居るのであろうコスモスに語りかける。

「コスモスは、カオスヘッダーを追ってきたの？」

『そうだ。カオスヘッダーの目的は私にも判らない。だが野放しにすればこの星の生態系は破壊され、死の星になってしまう。私は見た、カオスヘッダーによって死の星となった惑星を』

「そんな…」

菜生はコスモスから告げられた言葉が信じられなかった。

『だから私は、カオスヘッダーを追って地球へとやって来た』

「そして私を救うために、私と一体化した…？」

『あの時はそうしなければ、君の命が危なかった』

「じゃあ、ずっと私と一体化して力を貸してくれるのはどうして…？」

ならもう菜生と一体化している意味は無いのではないか？それなのになぜ、菜生に自身の力を貸し与えてくれているのか。それを菜生は問いかけた。

『だが私は地球上に長く留まることが出来ない。だから菜生、君の力を貸してほしい』

コスモスは自身の姿を地球上では長く維持出来ない。だから菜生と一体化し地球に留まる選択をしたのだ。

「わかった。私も地球を…大切なみんなを守りたい！私も一緒に戦うよ、コスモス」

『ありがとう、菜生』

その言葉は本心だった。菜生は状況に流されたからでなく、自分がそうしたいと本気で願ったからコスモスと共に戦う事を選択したのだ。

だがその決意が、どれだけ大変な事なのか。菜生はまだ、理解しきれていなかったのかもしれない。

「実は私、心当たりがあるんだ」

「心当たり？」

翌朝登校中に、不意にそう歩夢に切り出され。菜生はそうぼんやりとした表情で問いかける。

「うん、同好会に入ってくれそうな人の」

「本当!？」

その一言で菜生の表情が一気に明るくなる。現時点で順調に集まっているとはいえまだ3人。あと7人集めることが出来ねば同好会は解散となってしまうのだ。

「それで、誰なの？その人」

「名前を言ったらわかるかもだけど。宮下愛ちゃん」

「なるほどあの子かあ」

歩夢から告げられた名前に菜生は納得する。生徒数も学科の数も多い虹ヶ咲学園は大きい学校だ、それでも科の違う菜生と歩夢が共通して名前を知っているほどその生徒は学年内でも有名なのだ。

「じゃあ放課後、早速勧誘しに行こう」

「そうだね」

そう提案する菜生に、歩夢も笑って応じる。かすみとしずくの2人にも話すと、今日は元いたメンバーでなく、その宮下愛という生徒を勧誘しに行くと言う事で納得してくれた。

「そういうえば、菜生ちゃんは同じ科だよね？」

「クラスは違うし、特に面識があるわけではないんだけどね」

部室から再び情報処理科の教室を目指す途中。歩夢に聞かれると菜生はそう答える。

「さてと、じゃあ…行こうか」

そう言つて菜生は教室へと入つていく。そして菜生はセミショートヘアの金髪を後頭部で結び、胸元のリボンを緩めた。所謂ギャルっぽい生徒へと歩み寄つて行く。

「アタシに用？」

「うん、宮下愛ちゃん。スクールアイドルやつてみない？」

そう単刀直入に切り出した菜生に、愛は驚いたように目を見開く。

「アタシがスクールアイドルう？無理無理、ガラじゃないでしょー」

そう言つて彼女は笑つてやんわりと断る。無理もない、唐突に特に面識のない菜生にそう切り出されたのだから。

「やつぱりダメ…かな？」

「ゴメンね、アタシ決まった部活には入らない事にしてるんだ」

「なんでですか？」

菜生とのやり取りを聞いていたかすみがそう口を開く。

「うーん…色んな事を経験したいから？とにかく楽しい事いっぱいやりたいの。次はなにをしようかなつて考えたら、時間なんていくらあつても足りないくらい」

元々、色んな部活に助つ人として入つたりしていて。その面倒見の良さが学校で有名な人になっている所以なのだ。その彼女の考えが、彼女の性格を物語つていた。

「だから…」

スクールアイドルはできない。そう告げようとすする愛を、菜生は遮った。

「だったら、なおさらやってみて欲しいかな？」

「え？」

「スクールアイドルは、愛ちゃんの知らない世界を見せてくれると思う。私が初めてスクールアイドルのライブを見た時そうだった。『こんな素敵な世界があったんだ』って」
そう言つて菜生はほほ笑む。

「楽しくなかったらそれまででいいからさ。とにかく一回スクールアイドル、やってみない？」

「そこまで言われたら興味出ちゃうな、やってみるよ」

「本当？ありがと〜」

そう言つて菜生は目を輝かせて愛の手を取る。

「うん、ところで同好会っていつから活動するの？」

「それは…」

その一言で、話しの行方を見守っていた歩夢としくが申し訳なさそうに告げる。

「実は同好会は今…存続の危機でして……」

「今月中に10人部員が集まらなかつたら、解散なの…」

「ええッ!?」

「だましたみたいでごめんなさい。でも、絶対10人集めて同窓会は続けるので…」

驚く愛にかすみもそう告げるが、逆に愛はやる気が出てきたといった様子だった。

「やったろーじゃん!」

「へ?」

「愛さん、そういう挑戦からは逃げられないんだよね。逃走じゃなく闘争心が沸いてくるっての?」

今のは恐らく、『逃走』と『闘争』をかけたダジャレなのだろう。だが正直あまり面白くない、そんな微妙な反応を周囲が示す中一人だけ笑い声をあげる。

「プハハッ…!愛ちゃんおもしろすぎだよ」

「えっ…?かすみんちよつと引きましたけど…」

「しっ…かすみちゃん。菜生ちゃん、笑いのレベルが赤ちゃんレベルなの、そういうところがかわいいの……」

爆笑する菜生に対して、かすみは困惑したような反応を示すと、歩夢がそう耳打ちする。

「愛さんのダジャレをわかってくれてうれしーよ。じゃあ愛さんからひとり、同好会に誘ったら面白い子を紹介するよ!一年の天王寺璃奈って子なんだけど」

愛のダジャレが大うけしている菜生に、愛はそう告げると「それじゃあ今から呼んでくるよ」と言つて教室を出る。

すると暫くしてひとりの少女を連れて戻つてきた。

「私がスクールアイドル?」

背の低く、水色のパーカーを制服の上から羽織つた少女は、スケッチブックに描いた顔を自分の顔に持つてきてそう首を傾げる。

「そうそう!りなりーの個性的なこと、すごいいいと思つたんだよ。愛さんもやるから、一緒にスクールアイドル挑戦しよ」

「あう…愛さんと一緒ならやりたいけれど、私自信無い……」

そう言つて顔を隠したまま、すぐさまスケッチブックのページを変えて悲し気な表情を出す。

「この仮面?みたいななの取つたら、イケるんじゃないかなあ?」

「ダメ。これがないと、コミュニティセッションをとるの難しいから」

そのままだと両手が塞がるし前も良く見えないだろうからとかすみ提案すると、璃奈はそれをすぐさま否定した。

「アタシとりなりーで作つたんだもんねこの『璃奈ちゃんボード』りなりーシャイだからさ、これがあれば一発でどんな気持ちかわかるじゃん?」

どうやら璃奈は自分の気持ちを表に出すのが苦手らしく、それを解決するために愛と2人で作ったのがそのスケッチブックらしく。彼女のアイデンティティとなっているようだった。

「仮面をかぶったスクールアイドル：前代未聞かもしれないですね？」

「このボード、表情の入れ替えを素早くするにはどうすればいいかな？」

そんな会話を聞いて、しずくと歩夢がそう告げる。

「そうだね、このボードは璃奈ちゃんの個性だし。活かす方法を考えようよ」

そう言って菜生も璃奈ちゃんボードという個性を最大限活かす方法を模索するべきだと考えた。

「つてことでりなりー、これから一緒にがんばろーね！」

「う、うん！璃奈ちゃんボード『わくわく』」

こうして5人、目標である10人の半分の人数を集めることが出来た。このままいけば、同好会は存続できる。菜生はそう確信していた。

5話 3年生を勧誘せよ!

「うーんやつぱ難しいなあ……」

昼休み菜生は音楽室でひとりピアノの前で頭を悩ませる。

元々バルタン星人やコスモスが交信に使っていた周波数が音楽のようだから、そんな理由で音楽なら言葉の通じない人とでもコミュニケーションが取れる。そう思ったから趣味としてはじめたピアノだったが、スクールアイドルが歌うような曲を演奏するのは難しい。

「使用許可はとつたんですか?」

そうしていると不意に音楽室の入口の方からそんな声が聞こえた。気がつけばドアが開いており、一人の生徒が入ってきていた。

「えつと……生徒会長の中川菜々さんだっけ、なんでこんなところに?」

「たまたま通りかかったら、ピアノの音が聞こえましたので……それより、許可は……」
「つ、次からちゃんとするから見逃して?」

そう舌をペロツと出してバツの悪そうに笑う菜生に、「今回だけですよ……」と菜々は呆れ気味に告げる。

「ありがとう。やっぱ難しいね、スクールアイドルの曲」

「そうですか？とても上手だったと思いますよ？」

「そお？でもまだまだだなんて、耳コピだったんだけど本物には遠く及ばない」

そう言つて菜生は鍵盤の蓋を閉じると立ち上がる。

「じゃあ私、教室戻るから。：絶対十人揃えて見せよ。絶対」

そう菜々の目をまっすぐ見て、笑いながら告げると、返事を待たずに音楽室を後にした。

放課後部室に来た菜生と歩夢、そしてかすみとしずくは以前同好会メンバーだった3年生を勧誘しに行く事にした。

愛と璃奈は用事があつて来れないそうなので、今回はこのメンバーで動くことになった。

「私が居るところを知っているの、案内しますね」

「かすみんだって、彼方先輩のいそうなどころ心当たりあるんですけどもっ」

まずは近江彼方という生徒を勧誘しに行く。そう決まると、居場所に心当たりのある

というしずくになぜか突っかかるかすみという奇妙な構図が生まれる。

「ふふっ、多分正解ですよかすみさん。保健室か中庭……ですよ。さつき見てきたんですけど、今日は保健室みたいです」

「彼方先輩ってどこが悪いの?」

「いいえ?会ってみればわかりますよ」

そう告げるしずくに菜生は首を傾げるが、行ってみない事には話も進まないしそのまま全員で保健室を目指すことにした。

「うう〜ん…だれえ?」

保健室に入るとそんな気だるげな声が聞こえてきた。

「しずくです。彼方さん」

しずくはそう答えると、声のしたベットの方へと近づいていく。するとそこには制服の上からカーディガンを羽織った。ウェーブのかかったオレンジブラウンの髪を伸ばした、眠そうな目をした少女がいた。

「しずくちゃん?久しぶり〜元気してる?」

「はい、おかげさまで元気です。…じゃなくて、今日は彼方さんをスクールアイドル同好会に連れ戻しに来たんです!」

ゆつくりとしたペースで話す彼女に乗せられてしまいそうになったが、しずくは本題へと入っていく。

「彼方せんばあい。同好会、潰されちゃいそうなんです！お願いです！戻ってきてくださいー！」

かすみもそうつげると、彼方は驚いたような表情を浮かべる。やはり、同好会解散の話は彼方も知らなかったらしい。

「潰される!?それは……彼方ちゃん切ないな、阻止しないと。でも彼方ちゃん今戻るの厳しいなあ……戻りたい気持ちはあるんだけども」

「はじめまして、二年の高田菜生って言います。同好会解散を阻止したくて、今日はここに来ました」

そう告げる彼方をなんとか説得しようと菜生は口を開く。

「こっちは同じ二年の上原歩夢。あと、一年生の天王寺璃奈ちゃんと二年の宮下愛ちゃんが新しく同好会に入ってくれました」

そう言つて隣にいる歩夢や、今ここにはいないふたりの事も説明する。

「かすみちゃんが言つてたように。今解散の危機なんです。阻止するためには10人部員を集めないと行けなくて……だから、彼方先輩にも戻ってきてほしいんです」

「彼方ちゃんの居ない間になんて……」

菜生にそう告げられて、彼方は悲し気な表情を浮かべる。

「でも彼方ちゃん今ホント余裕ないんだよ……スクールアイドルは好きだよ? でも今は無理。とつてもピンチで忙しい……」

「ピンチって、何があつたんですか? 私達で力になれることなら何でも言つてください……!」

そうつぶやく彼方に、しずくはそう言い切る。彼女もまた、なんとしても彼方に戻ってきてほしいのだ。

「成績が下がってしまったんだな、これが……」

「え?」

成績が下がったから戻れない。確かに当然といえば当然なのだが、その返答に思わずしずくは言葉を失う。

「彼方ちゃん中間やばくってさく期末ふんばらないとヤバイ。だからお勉強に打ち込んでいるんだけど、それでも数学はピンチすぎる、わけわかんない」

そう語る彼方をみて菜生は少し頭を悩ませる。そういえばライフデザイン科という話をしずくから聞いた気がする、ならばと思ひ立ち菜生はある提案をした。

「私やさつき話した宮下愛ちゃん、天王寺璃奈ちゃんは理系学科なんです。なんで多少なら教えられるかもしれません」

学年は下とはいえ、文系学科よりは数学に関して進んでいるであろうと想定して菜生はそう提案すると、彼方は意外にも食いついてきた。

「えっ？そんなにおいしい話が？」

「まあ一応……三人いるし何とかなるかと思うですよ」

正直彼方に戻ってきてもらう為に咄嗟に出た言葉だったが、思いのほか食いついてくれたのでとりあえずこのまま押し切る事にする。正直ここにはいない2人には悪いが……

「おお、ないすあいていあ。それなら戻ろっかなあ。さっそくですけど、今その二人は部室にいるのかなあ？」

「多分いると思いますよ」

かすみがそう告げると、菜生は少し嫌なものを感じた。

（今日あの2人いないんじやなかったっけ？怒られない？）

「じゃあ早速いこ！彼方ちゃん久々におめめがぱっちりしてきたよ」

そう告げる彼方を引き連れ、同好会の部室へと戻っていくが菜生は正直この時は内心ヒヤヒヤしていた。

「……っつていいないじゃーん！かすみちゃんめ、嘘ついたな〜！」

部室に誰も居ないのを確認すると彼方はそう言っただけでかすみをジト目で見つめる。

「あーん! だって彼方先輩が心変わりしないうちに拉致つて…じゃなくて困つて…でもなくて、とにかく部室に来てほしかったんですもん」

そうかすみに訴えられ、彼方も困った表情を浮かべる。

「こんにちは、にぎやかだね」

そうしていると部室の扉が開き、菜生にとつては見覚えのない生徒が入ってきた。

「あれ? いつの間にか人が増えてるね!」

「エマ先輩!」

「もしかして私達が動いているのを見て、戻ってきてくださったんですか!」

部室の中に居る人間を見渡し、そう嬉しそうに告げる少女に対してかすみとしづくが、
そう驚いた声を上げる。

エマと呼ばれた今は言ってきた少女は、背がここにいるメンバーの中で頭一つ高く、
赤毛を二本のおさげにした、鼻のあたりのそばかすが印象的な彼女が、元々同好会メン
バーのもう一人の三年生なのだろう。

彼女はしづくの言葉に「え? 戻る?」と首を傾げながらも答えてくれた。

「うん、さつきスイスから戻ってきたんだよ。はい、これお土産。たくさんあるから人
数増えても大丈夫だよ、なかよく食べてね」

「は……はあ……」

そう言つてかすみは手渡されたお菓子の入った箱を受け取る。

「はじめまして、わたしはエマ・ヴェルデ。これからよろしくね」

「はじめまして、高田菜生です」

「上原歩夢です」

ふと目が合つてそう自己紹介してくれた彼女に菜生と歩夢も同様に返す。

「あの……エマ先輩は自発的に同好会に戻つてきたんですか？」

「え？だってここスクールアイドル同好会の部室でしょ？普通にくるけど……」

菜生の質問にエマは不思議そうに答える。さつきスイスからと言つていたし、もしかするとエマも解散の事は知らないのかもしれない。

「あのあのつ、エマ先輩ここしばらく来なかつたですよ？同好会と距離置いてましたよね？」

「ん？わたし、スイスに一時帰国してただけなんだけど……手紙置いて行つたよ？」

かすみがそう聞くと、エマはそう不思議そうに答える。すると「もしかして……」とロツカーを漁り始める。

「……これ、エマ先輩の手紙だったんだ……ライバルからの怪文書かと……」

そう一人こちらに背を向けたまま眩くと、こちらを振り向くと泣きそうな表情を浮か

べる。

「あくん!ごめんなさい!かすみんの早とちりでした〜!」

「エマさんは戻ってきてくれたし、全然いいよ。結果オーライだよ」

そんなかすみに、しずくはそう笑ってフォローを入れる。

「これで7人だね、このまま10人までがんばろ〜!」

「そうだね、次は優木せつ菜さんの説得に行こうよ!居場所はわかんないらしいけど、手分けして探せば…」

そう菜生が提案した時、なにかがドアに激突したような大きな音が部室に響いた。

「なんだろ?今何かがドアにぶつかったよね?」

「私見てくるよ!」

ドアの方を振り向いて呟く歩夢にそう告げると菜生はそう告げると「入部希望者かも!」と言って飛び出した。

「あり?」

廊下に出たはいいが、周囲にそれらしき人影は無かった。だが廊下の奥の方で、見覚えのある人影が走り去って行くのが見えた。

「あれは…確か……」

「菜生ちゃん?」

「へ？多分誰かが走っててドアにぶつかっちゃったみたい」

そんな菜生の様子を不思議に思った歩夢が近付いてくると、菜生は振り返ってそう告げた。なぜ彼女が逃げるようにして走っているのか疑問ではあるが、まずは同好会だ。

「それより彼方先輩とエマ先輩が戻ってきてくれて良かったです」

「私はやめたわけじゃないけどね」

「まったく人騒がせですよ、ぶんぶん！」

そう言つて話題を逸らした菜生に、エマはそう告げると隣でかすみがそんな事を口走ると彼女に彼方が近寄るとその頬を引っ張った。

「そんなこと言うのはその口か」

「あーん」

「あはは……ともかく元々いた部員で勧誘してないのはあと一人。彼女をどう勧誘するか考えないと」

そんなやり取りを苦笑いしながら見ていた菜生はそう切り出す。

「優木せつ菜さんですね」

「どんな人だったんですか？」

「ん～どんな人かあ…一言で言うには難しく、語るには……」

「語るには……？」

「彼方ちゃんが眠りに誘われる」

まだ出会ってそんなに経っていないがこの眠そうな先輩は、本当に少し長い話をしたらずぐ寝てしまいそんな感じがする。思わずずっとこけそうになる菜生に、エマが代わりに口を開く。

「彼方ちゃんが眠くならない程度にお話するね」

「以前少しお話しする事と被りますが、せつ菜さんは、この同好会を引っ張っていく存在でした」

そうエマに続いてしずくも口を開く。『優木せつ菜』解散寸前に陥る前の同好会の中心人物で、生徒会長曰く『同好会に亀裂を入れた存在』

「かわいい顔してダンプカーみたいなの…」

「かわいいダンプカー?」

かすみの言葉に菜生は首を傾げるが、恐らくダンプカーみたいに力強くみんなを引っ張っていく存在だったのだらうと自分の中で納得させると話の続きに集中する。

「一番やる気があったし、もともと個人でスクールアイドル活動もしていたから、結構有名だったの」

「私も聞いたことはありません。そんな有名人が!?!って同好会に入った時は驚きましたよ」

「かすみちゃん、スクールアイドルの事いっぱい勉強してるんだね！」

「将来のライバルになりそうな芽は、早めに摘んでおかないと……じゃなくって、いっぱい吸収させてほしいなと思って」

歩夢がそう感心しているとなにやら物騒な事を口走るかすみだったが、慌ててそう言つて舌をペロツと出して誤魔化した。

「みんなの話聞いてるとめっちゃ目立ちそうだけど、学園内じゃ全然噂とか聞かないよね？」

「そうなんですよね」

「虹ヶ咲にいるのは確かなんだけど、同好会以外では一度も見たことがないの」

それだけの存在感のある生徒なら、学園内で有名になっていてもおかしくないはずなのに全くそんな話を聞かない。それを疑問に思った菜生にしくとエマがそう告げる。

「前はスクールアイドルのイベントに行けば、必ず会えたんですけど。最近はそれにも出ていないみたいなんですよねえ……」

「もしかして、スクールアイドルやめちゃったのかな……」

かすみの言葉を聞いて、そう呟く歩夢だったが、それには彼方が首を横に振る。

「それはない。せつ菜ちゃんは心の底からスクールアイドルが好きだったから、やめるってことは考えられないよ」

彼方はそう断言してみせると、そのまま言葉を続ける。

「大好きって気持ちの世界中に広めたいっていう熱意に燃えてた。だから離れてるとしか思えないんだよね〜」

「せつ菜さんは本当にすごかったですからね。歌もダンスも……スタイルだって良かったし」

「ぬぬっ!?!スタイルといえば!同好会に入りたい子が一人いたのを思い出した!せつ菜ちゃんを探す前に勧誘しよう!」

そう彼方に続くようにして告げたしずくの言葉を聞いて、彼方がそう声を上げる。

「どんな方ですか?」

「なんでも、毒藻……?らしい……」

なんだそれは……?と頭を悩ませていると、再びエマが口を開く。

「読者モデルのことだね」

「連絡してみる〜」

そう言って彼方はスマホをとり出すと、件の読者モデルの生徒に連絡を取る、その時だった。

「みんな大変!」

「愛ちゃんどうしたの？」

唐突に部屋に駆け込んできてそう叫ぶ愛にそう問いかける。

「空から、降ってきた…！」

「降ってきた？」

そう璃奈が告げるも話が見えない。「凄いから見えてよ！」そう言つて手を引く愛に引つ張られるようにして学園の外に出る。

「う、うそ……」

そして目の前にそびえる物体に思わず言葉を失うのだった。

『僕はイゴマス。おもちゃのイゴマス』

6話 落ちてきたロボット

『僕はイゴマス。おもちゃの、イゴマス』

そう告げる目の前にそびえ立つ物体に、菜生たちは啞然とする。

水色と金色の物体は、恐らく目だと思われる丸い頭頂部でしゃべると連動して点滅する十字のランプ。

「こんなおっきいの、朝は無かったよね…?」

そう菜生の横で自信をイゴマスと称した物体を見上げていた歩夢がそう呟くと、菜生はこくこくと頷く。

「ていうかおもちゃって…」

「一体誰が遊ぶの…?」

「空から降ってきたし、宇宙人なんじゃない?」

そんな会話をしても、目の前の巨大なロボットは何もしない。学園のすぐ近くの広場に降ってきたそれに、すぐに学園の生徒だけでなく、近隣にいた人々も集まってきて気がつけば周囲は人だかりになっていた。

『イゴマスの電池、もうすぐ切れる。もっとイゴマスと遊びたかったら、新しい電池と交

換して』

「単三電池で動くかな…?」

「菜生ちゃん…」

すると誰かが通報したのかSRCも駆けつけ、すぐに近くには寄れないようになってしまった。

「ところで愛ちゃん、本当に空から落ちてきたの?学園の中にいたけど全然気づかなかったけど…」

「うん、なんか急にふわーって減速して着地してたよ。宇宙ってすごいね」

「愛さんとこの近くを通りかかったら、目の前に降ってきたの」

現場から離れるように言われ、学園の方に戻りながら菜生がそう問いかけると愛も璃奈も口をそろえてそう答える。

「すい…」

そう呟くしかなかった。まさか宇宙人のおもちやが降ってくるなんて、今まで想像した事も無かった。しかも50mくらいはあるように見える。

これを地球人の子供のおもちやと同様の企画と仮定すれば、このおもちや?の持ち主は200m近い巨体を誇る事になる。

そうしていると青いジャケットに身を包んだ隊員が駆け寄ってきて、愛と璃奈が第一

発見者だと聞いて話を聞きに来た。

そして菜生たちに話したように、落ちてきた時の状況を説明する。

「イゴマス、どうなっちゃうんですか？」

「うーん……今のところ有害物質も攻撃装備も無いみたいだし、攻撃したりすることは無いよ」

巨大ロボット、イゴマスの処置について聞いてみるとそう告げられほつとする一同だったが、詳しい事は分析の結果待ちと言った所だった。

「おーい！アタシは宮下愛。この子は天王寺璃奈」

『愛と璃奈。了解』

駆け寄っていくとそう自己紹介する愛に対してイゴマスはそう短く答える。

「イゴマスはどこから来たの？」

『ビビン星。イゴマス、ゲバンの友達。イゴマス、ゲバンたちと旅行中、宇宙船から落ちた。イゴマス、ゲバンの元へ帰りたい』

「イゴマス、さみしそう。ゲバンって子も、きっとイゴマスを心配してると思う」

『それにイゴマス、もうすぐ電池が切れる。電池が切れたら、イゴマス動けない』

「それって大変じゃん！」

胴体についていたプレートを分析した結果、ビビン星の工場で作られた。『ともだ

ちロボットイゴマス』と記されていることが解った。ひとまずイゴマスの言っていた事は本当らしいが、問題はその後だった。イゴマスを動かす電池は、現在地球には存在しないということだ。

「何とかならないんですか？」

「怪獣ともまた違ったケースだからなあ……まだその辺はなんとも……」

イゴマスが自身の電池について語っているのが聞こえた菜生はそう聞いてみるが、申し訳なさそうにそう返される。

「でもあのロボット、生きてるみたい」

「きつと、心があるんだよ。だからゲバンって子のところが恋しいんだと思う」

「そうだよね、いきなり一人ぼっちで知らない場所に来たらさみしいよ」

「彼方ちゃんも、いきなり遙ちゃんと会えなくなったら寂しいな……」

みんなイゴマスの気持ちを考えると、そう表情を曇らせる。

「ねえイゴマス。愛さんとりなりーもイゴマスの友達にしてよ」

「私も、もつとイゴマスの事知りたい」

『愛と璃奈、イゴマスの友達』

「ねえ、ビビン星ってどんな星なの？」

『ビビン星、とってもきれいな星。でも、この星もとってもきれい』

「そっかそっか！この星はね、地球って言うんだよ」

『地球…地球もきれいな、とつてもきれいな』

愛と璃奈もイゴマスの友達だと認識したイゴマスは、ふたりに自分がいた星の事を教える。曰く、地球によく似た惑星らしい。イゴマスの製造番号等の文字も、地球で言うポルトガル語に似た言語が使われているらしく、地球と似た文明を築いているのかもしれない。

「イゴマスに手があつたら、ハイタッチできたんだけどなあ…」

そう愛が残念そうに呟くと、唐突にイゴマスの装甲の隙間が光った。

それを見て菜生は咄嗟に立ち上がると陰に隠れてコスモプラックに手をかける。

『菜生』

「コスモス？」

『このロボットに敵意は無い。信じることも、重要な事だ』

愛と璃奈が危ないと思つての行動だったが、テレパシーでコスモスにそう諭されて菜生はコスモプラックから手を離すとみんなも元に戻る。

腕と足が出現し巨大な人型ロボットへと変形したイゴマスは跪くと愛にそつと手を向けると、愛もそれを察して手を翳す。

「ハイタッチしたら、ハイタッチくん友達できたね！なんつって！」

『うん、友達』

そうしていると、イゴマスの背にあつた排気口から空気が噴出しその上に貼つてあつたテープが剥がれ落ちた。

『こつこれが…これが僕の背中に…!』

「何? どうしたのイゴマス?」

そのテープをみて動揺するイゴマスが、自身を心配する愛の言葉はもう届いていなかった。

『ゲバン! ゲバン!』

立ち上がったイゴマスは、踵を返すと街の方へと進攻していく。柵を蹴り飛ばし、どんどん進んでいくその様は、子供の癩癩のように見えなくなかった。

「イゴマス、どうして…」

「ふたりとも危ない! とにかく離れよう!!」

そう呟く璃奈の元へ菜生は駆け出すと、そうふたりに告げるとそのままふたりを引き連れてみんなの元に戻る。

「あのテープ、何が書かれてたんですか?」

戻つてくるとしずくがそう隊員に問いかけているのが聞こえた。

「えつと…このロボットは製造年も古く、稼働に必要な電池の生産も終了したためスク

ラップとして処分することを認めます」

「それじゃあイゴマスは…」

「ゴミってことですかあ!？」

イゴマスは、自身がスクラップとして捨てられてしまった事を知って暴れ出してしまったのだ。だがこのままだと街に被害が出る、そうなる前に攻撃という手段を取る必要性が出てきてしまう。

「このままだと、保護から排除に切り替えられてしまう」

「そんなこと…!」

「菜生ちゃんどこ行くの!？」

それを聞いて菜生は駆け出した、呼び止める歩夢の声も無視して。

「イゴマス、落ちて着いて!この星の人は、君をスクラップになんかしらないから!」

今のイゴマスには、菜生のそんな叫びは聞こえない。このままイゴマスに街を破壊させる訳にも、逆に防衛軍にイゴマスを排除させる訳にもいかない。菜生は周囲に誰も居ないのを確認すると立ち止まり、コスモプラックをとり出す。

そして右手にコスモプラックを持ち、両手を胸の前で円を描くように回す。すると菜生へと周囲から光が集まってくる。その光をコスモプラックにつぼみに収束させ、それを天に掲げる。

「コスモース!!」

天に掲げたつぼみが開き、周囲は眩い光に覆われる。そしてその光の中から、ウルトラマンコスモスが飛び出した。

「ウルトラマン、イゴマスを手助けてあげて……!」

「愛さんからもお願い、大事な友達なの!」

現れたコスモスに、璃奈と愛はそう訴えかけるとコスモスはゆつくりと頷く。

「ハアッ!」

そしてコスモスは飛び上がるとイゴマスの頭上で身体を捻って反転すると、街を背にしてイゴマスに立ちはだかる。

だがイゴマスは、そんなコスモスを敵と認識したのか殴り掛かる。だがコスモスはそんなイゴマスの攻撃を捌き、隙について腹部に手の平を突き立て後退させる。

「ウオオオオッ!」

振り下ろされた右腕は左手で弾き、横薙ぎに振るわれた左腕は屈んで回避すると起き上がりざまに手の平で突き飛ばす。

だがイゴマスはコスモスよりも大きく、力づくでコスモスを跳ね除けようとする。コスモスの腕を掴むと、軽々とコスモスの巨体を投げ飛ばしたイゴマスは、起き上がったコスモスに胸から光線を放ち再び吹き飛ばす。

「ウアアッ!?!」

「もうやめて!」

コスモスへと攻撃を続けるイゴマスにそう叫ぶが、それでもイゴマスはコスモスへと追撃するべく進める足を止めようとはしない。

すると防衛軍の戦闘機が現れ、コスモスを援護すべく攻撃を開始する。

「テリヤア!」

だがコスモスは立ち上がると駆け出し、イゴマスに抱きつくようにして戦闘機の攻撃からイゴマスを庇う。

「コスモスは本当に、イゴマスを守るつもりなんだよ」

それを見て呟く歩夢の視線の先で、コスモスは起き上がるとその身をコロナモードへと変化させた。

ルナモードのままでは力負けし、イゴマスを食い止めることができない。イゴマスの戦意を削ぐために、コスモスはコロナモードへチェンジすることを選んだのだ。

コスモスとイゴマスは互いに接近すると、イゴマスの攻撃を先程までと同様に回避し捌くがコスモスは拳を撃ち出し、イゴマスにダメージを与える。

「フウン…ウラアッ!」

両腕を威嚇するように広げた後、右拳を前に突き出して構えるコスモスに、イゴマス

は再び光線で応戦するがコスモスは軽快な動きでこれを回避する。

そして再び駆け寄ると、イゴマスの胴体を両腕の拳を同時に撃ち出す。更によろけたところに回し蹴りを放ち、反撃に放たれたラリアットを屈んで回避し背後に回ると脇を蹴り上げ先程とは逆に投げ飛ばす。

「もう戦わないで！」

コスモスとイゴマスが戦っている付近に駆け寄った愛がそう叫ぶ。その隣で璃奈も「イゴマス…」と悲し気な声を上げていた。

だがコスモスもイゴマスとの戦闘に必死で、うかつにもイゴマスを商業施設の近くに投げ飛ばしてしまっていた。ふたりの声も届かぬまま立ち上がったイゴマスは、観覧車を掴むと支柱部分から回転部分を引き抜きコスモスへと投げつける。

「ッ!？」

咄嗟に腕で弾いたコスモスだったが、運悪くその観覧車は璃奈と愛の元へと転がっていきそのまま倒れ込む。

『あつ……い』

「ハアツ……テリヤツ！」

コスモスは咄嗟にサンライト・バリアを射出し、ふたりの上にドーム状に展開して守る。

「愛さん達は大丈夫！」

「私たち、イゴマスの友達だよ。だからもうやめて？」

『友達……』

「そうだよ、ハイタッチしたじゃん！」

そう反芻するイゴマスに、愛はそう言つて笑いかける。

『愛と璃奈、イゴマスの友達……』

そう呟くイゴマスの声に、一瞬ノイズが走り、目のランプが弱々しく点滅する。

「もう、電池が……」

『ウルトラマン、僕を壊して』

イゴマスはコスモスへと向き直るとそう訴えかける。コスモスはその申し出に肩を震わすも、頷くことは出来なかつた。するとイゴマスは続ける。

『愛と璃奈、僕の友達。でも僕はこんなに大きい、きつと迷惑をかけてしまう。それにイゴマスの電池、もうすぐ切れてしまう……代替りの電池、この星にはない』

このまま放つておいてもイゴマスは動けなくなり、巨大な鉄の塊となつてしまう。みんなの邪魔になるくらいならいっそと訴えかけるイゴマスに、コスモスは思わず視線を逸らす。

『ウルトラマン、僕を壊して。スクラップに……シ……テ……』

そう告げるとイゴマスは腕をだらんと下げ、そのまま動かなくなってしまった。

「電池が、切れちゃった…」

「そんな…」

するとコスモスの身体は赤く輝くと、青いルナモードへと再びチェンジした。

「ハアアアア……ヌウウウウツ!!」

コスモスはゆっくりと両腕を天に掲げるとそのまま腕をピンと伸ばす。すると宇宙からコスモスへ向けて光が降り注いでいき、コスモスの身体を黄金に染め上げる。

「……トリヤア!!」

そしてその光をコスモスは両腕を前へ突き出し、イゴマスへと照射する。エネルギーの消耗の激しいのか、カラータイマーはすぐさま点滅を始めコスモス自身も肩で息をきるが、それでもコスモスは光の照射を辞めない。

黄金の光に包まれたコスモスから放たれる光が全てイゴマスへと注がれると、その巨体は縮小されて愛たちの視線から消滅する。

身に纏った光全てをイゴマスへと注ぎ込んだコスモスは、限界まで力を振り絞ったのか膝を付きそのまま景色に溶けるようにして消えてしまう。

愛と璃奈はイゴマスが先程まで居た場所まで走って行くと、草花に埋もれて横たわる。両手で持てる大きさにまで小さくなったイゴマスを見つけた。

「イゴマス！」

『…愛と璃奈、僕の…友達。ありがとう…アリガ…ト…』

自分の名前を呼ぶ二人にそう告げると、イゴマスの電池は今度こそ完全に切れてしまった。持ち主に捨てられた悲しきおもちゃのロボットだったイゴマスは、最後は地球で出会った少女の優しさに包まれて眠りについた。

またいつか、新しい電池に交換されるその日まで――

「ウルトラマンは、イゴマスを手間のおもちやのサイズに小さくしたんだね」

「でも、イゴマスを動かす電池は地球にはないんだ…」

「できるよ、今はまだ無理でも。イゴマスとまたお話してできる日が」

しんみりした空気になった時、変身を解いて合流してきた菜生がそう告げる。

「その時は、私もイゴマスと友達になりたいな」

「菜生さんも、なれるよ」

「そうだね、みんなもイゴマスの友達になれるって！」

「その日まで、部屋に置いてかない？」

「いいねそれ！」

こうして、部員…とは言えないが、新しい仲間が増えた。

7話 結成！スクールアイドル同好会！！

昨日のイゴマスの一件により、その日は見送りになってしまった彼方の言う読者モデルの生徒『朝香果林』を勧誘すべく放課後集まっていた。

その女子生徒との待ち合わせは学園の敷地外で、指定された場所へ行くとそこにいたのは私服姿の女性がいた。

青みがかかった黒髪をウルフカットにし、肩から胸元まで大胆に露出し左鎖骨下にみつつ並んだホクロが目につく彼女は確かに高校生離れたルックスをしていた。

「ふくん…スクールアイドルねえ」

「どうですか？やってみませんか？絶対楽しいですよ！」

「そうね…今までいろんなお誘いを貰ったけど、スクールアイドルは初めてよ。でも…私にできるかしら？」

「もちろんですよ！果林先輩とつてもスタイル良いし、衣装映えしそう！」

そう菜生は熱心に目の前の三年生を勧誘していた。その後ろでかすみは胸を撫で下ろすような仕草をしていた。

「…かすみちゃん、安心して胸を撫で下ろしてるの？」

「……時々考えるだけです。神様って不公平だなとか」

それに気がついた歩夢にそう聞かれると、かすみはただそれだけ答える。だが果林と菜生はそんな様子に気づいてはいないようだった。

「そうね……スクールアイドルに興味はあるけど……」

「じゃあ入ってくれますか?」

「でも、私でいいの?私、フリフリの衣装とか似合わないわよ?体のラインの出るような衣装とか、露出の高い衣装なら自信あるけどね」

「ろ、ろしゆつ……ですか……」

そんなやり取りを聞いて歩夢は顔を赤らめると視線を下に落とす。読者モデルをやっている彼女と違い、普段人前でもあまり肌を晒すような経験はないのだ。

「そう。例えば……隣の子がチラチラ見てる胸元のほくらが目立つような……ね?」

そう言つて果林が歩夢からその隣のかすみに視線を移すと「み、見てないです!」といつてかすみは慌てた様子で告げる。

「かすみさん……自白です……」

「だって、すごくきれいだなって思つて……うう……」

そうしづくに指摘されると、かすみは正直にそう白状するのだった。

「ふふっ褒めてくれてありがとう」

そんな羨望の目を向けるかすみにそう返すと、果林は菜生の方へと視線を戻した。

「スクールアイドルになつてもいいけれど。ひとつ、条件があるの?」

「条件…ですか?」

「私は、私の目指すスクールアイドルになりたい、それでもいい? 同好会には入るけど、グループ活動はあんまり得意じゃないっていうか……」

「なるほど……いや、それだ!」

果林の言う条件を聞いて、菜生は手を叩いて何かを思いついたようだったが、周囲は訳が分からないといった様子だった。

「今後の同好会の方針は、ソロアイドルで行こう! ソロでも活動できるんだったよね、かすみちゃん?」

「は…はい」

そう勢いよく菜生に詰め寄られて、かすみは若干引き気味に頷くと菜生は満足したように笑うと続ける。

「前は、無理にグループで活動しようとしたのが上手くいかなかった原因だと思つたんだよね。みんな個性がバラバラで、やりたいこともはつきりしてるみたいだし」

そう腕を組んで、以前かすみやしずくから得た情報から色々自分なりに考えた結果を述べていく。

「だからさ、みんな同じ同好会に所属してるけど、スクールアイドルとしてはそれぞれ違う自分の理想を目指す…目指すものが違ってるんだよ!自分の好きなものを…夢を追いかけていいはずだよ!!」

「めっちゃいいこと言うく彼方ちゃんもそれに賛成く」

「グループとしてまとまってなくてもいいってこと?」

菜生の提案に対して、エマはそう問うと菜生は頷く。

「絶対にまとまってるってないといけない訳じゃないと思うんだ。それぞれが好きな部分を伸ばす方法を探してみよう」

そう言っつて菜生は再び果林へと向き直る。

「今までにない刺激をあげられるスクールアイドルを目指して、私たちと一緒にやりましょう、果林先輩!」

「今までにない刺激…ふふっ面白そうね、そういうことなら入部させてもらおうかしら」
「やったあ!よろしくお願ひします!!」

果林が入部してくれることになり飛び跳ねて喜ぶ菜生、これであと2人。ふたり入部すれば、スクールアイドル同好会は存続できる。

「せつ菜さん……本当に誰に聞いても、居場所が分からない……」

部室に戻ると、せつ菜を勧誘すべく彼女の居場所に心当たりのある生徒はいないか情報収集をしてくれていた愛と璃奈と合流し、作戦会議を始める。

「あーアタシも声かけられるとこ全部当たったけどぜんぜん情報なし……まいったね」

「スクールアイドル同好会優木せつ菜捜査本部を作るしかないな」

「彼方さん、捜査本部って……何？」

いくら学園が広いとはいえ、ここまで情報が得られないことを不思議に思いつつもなにか手は無いかと考えているとそう切り出した彼方に歩夢は首を傾げる。

「捜査本部を作って、学園中の目撃情報を募る！」

「……大げさでは？」

そうしずくも苦笑いを浮かべつつ告げると、「でも、なんだかおもしろそう」と璃奈は乗り気だった。

「それくらいしなければ、せつ菜ちゃんは見つからないと彼方ちゃん思うんだよ」

「優木せつ菜さん探し……これは時間かかりそうだね」

名の知れたスクールアイドルであり、この虹ヶ咲学園の生徒でありながら学年も科もクラスも一切不明な彼女は今、いったいどこにいるのだろうか？ 菜生には想像もできな

かった。

「うちの学年でも知ってる人いなかったよ。何年生なんだろう?」

「もともとソロ活動で有名だったってことは、一年じゃないよね?」

エマたち3年生に知っている人は居なかったらしく、愛の推測通り元々名が知れているのなら一年生という可能性は極めて低い。なら二年生だろうか?

「この学園も広いしね。ある程度あたりをつけていかないと見つけるのは難しそうね」
「でも、あたりをつけようにも、目撃情報は皆無…」

「そうなのよね……」

「ひよっとしたらひよっとして、何ですけど……これって生徒会長の罠だったりしませんか?」

どうしたものかと頭を悩ませていると、かすみがそう口を開いた。

「…罠?」

「会長がせつ菜先輩のこと誘拐して、かすみんたちが探してる間に時間切れを狙うとか!そもそもですよ?5人いれば同好会活動はできるはずなんです」

首を傾げる菜生に、かすみはそう続ける。

「そうね。そもそもこれだけ人数がいるなら本来は問題ないはず。規則にもそうあるんだからね」

「ここはひとつ、交渉してみない?」

それを聞いて頷く果林と、交渉を提案するも「ないない、それに…」と菜生は笑って首を振ると話し始める。

「会長との約束は、守りたいかな?大丈夫、きつとうまくいく!みんなの大好きな事をやるわけだし、みんなの夢はきつと叶うよ!」

「菜生ちゃん、本当にスクールアイドルが好きなんだね」

「それはみんなでもでしょ?」

歩夢にそう言われた菜生は笑ってそう答える。ここにいるみんな、スクールアイドルが好きだからここに集まっている訳だから。

そうこう話をしてしていると、部室の扉が開く。

「私の見込んだ通りだったわ!きつと10人の部員を集めてもう一度同好会を復活させてくれると信じていました!」

「か…:会長!」

入ってくるなりそう告げる人間を見て、かすみは驚きの声を上げる。何故ならその人物は生徒会長である、中川菜々だったからだ。

「え?…:え?なに?…:どういうこと…」

彼方も、きつとこうして同好会のメンバーを集まるのを期待していたかのような菜々

の物言いに混乱していると。目の前の少女はハツとして口元に手を当ててオロオロし始めた。

「あ…またやつちやった…今私、生徒会長モードだった…」

「生徒会長モード…?まさか、生徒会長が優木せつ菜さん…?」

菜々の様子を見て、菜生はおずおずとそう問いかける。すると菜々は観念したかのようになんげに頷く。

「はい…私がせつ菜です」

そう言つて奈々は眼鏡を外して三つ編みを解く。「これで信じてもらえるでしょうか?」そう告げる彼女を見て、「ええ〜!」と全員驚きの声を上げる。

「ほ、ほんとにせつ菜ちゃんだ…」

「そ、そんな…せつ菜さんが生徒会長だったなんて…」

そう、優木せつ菜という生徒が学園内で見かけた事のある生徒がいなかったのは、生徒会長である中川菜々のスクールアイドルとしての顔だったからだ。

普段学園内ではせつ菜としてでなく、菜々として生活しているのだから見つからなくて当然なのだ。だとしても…

「全校集会とかでも見ていたはずなのに、もともとメンバーだったみんな気づかなかったの?」

「彼方ちゃん、その時間はすやびしてるんで」

「全然気づかなかった自分の事がシヨックです…」

そうしずくが肩を落として落ち込む。生徒会長という全校生徒の前に顔を見せる機会の多い彼女がせつ菜であることに、同好会のメンバーすら気がつかなかったのだ。

「生徒会長とスクールアイドルの二重生活なんて反則です。かすみんたら、せつ菜先輩に向かってロボットとかいっちゃいましたよお…」

「あははっ、私も意地悪に接してましたからね、気にしないでください。それに私の方こそごめんなさい」

そう言って頭を下げるせつ菜に「せつ菜せんぱい」とかすみは泣きそうな声を上げる。

「でもでもっなんで先輩は私たちに部員を10人も集めろって無茶言ったんですか？せつ菜先輩だって、同好会潰したくなかったですよね？」

「続けたかったけど…でも、怖かったんです。こうなってしまった原因を作ったのは私だったから」

「せつ菜さんのせいって思ってるメンバーなんていませんよ！」

自分が同好会が自然消滅する原因を作ってしまったから、だから存続の為に動くことが怖かった。でもしずくはそんなことを思っているメンバーなんて居ないと告げるが

せつ菜は首を横に振る。

「私、スクールアイドルが大好き過ぎて、それを抑えられなくて……好きって気持ちをもなさんと共有したくて、色んなこと押し付けちゃいました」

自分の好きなスクールアイドル像を目指して、みんなを引つ張っていく存在だった彼女は、その結果自分の好きを押し付けてしまったと感じていたのだ。

「そういうのはダメだつてわかってるのに、我慢できなくて、それでみなさんとの仲がどんどんぎこちなつちやつたのが怖くて」

「でも、私たちが同好会存続の為に動いているのをこつそり見守つてたよね? やつぱりせつ菜ちゃんも、やり直したいって思つてたからだよね?」

菜生は薄々察していたのだ。菜々がせつ菜だということではなく、菜々もスクールアイドルが好きなのだろうと言う事に。そしてその菜生の問いかけに、せつ菜は頷く。

「10人集めてしまうくらい情熱を持った人がいてくれれば……今度こそ、うまくいくんじゃないかって……。ふふ……調子のいい考えですよね?」

「そんなことないよ。聞いて、私たち同好会の新しいやり方を考えたんだ」

自嘲的に笑う彼女に、菜生は首を振つてそう告げる。

「そうだよせつ菜ちゃん、菜生ちゃんがナイスアイデア出してくれたんだよ」

「うん、私たちにはきつとあつてるやり方だと思ふよ?」

「そうですよ！だから先輩も戻ってきますよね!!」

「こんなにくさんの仲間が集まってくれたんです！新しいスクールアイドル同好会として活動しましょう、せつ菜さん！」

すると元々同好会メンバーだった面々が、そう言ってせつ菜に戻ってきてほしいと告げる。

「みなさん…でも、まだちよつと自信無いです。活動を再開させたら、またスクールアイドルが大好きって気持ち暴走しちゃうかも……」

「大丈夫！その『大好き』は全部私が受け止める！私は、みんなのことを応援したいんだ!!」

そう宣言する菜生に、せつ菜は驚くがすぐに笑顔を浮かべる。

「ありがとうございます…！改めて、私もスクールアイドル同好会に入部させてくださいー！」

「これで9人！あと一人もすぐに見つかるよ!!」

「ううん、もう見つかっていると思います」

せつ菜が戻ってきてくれたことであと一人だと無邪気に喜ぶ菜生に、せつ菜はそう告げる。

「みんなわかってるわよね？」

「気づいてないのはなおっただけだよ」

「菜生さん、にぶにぶです」

意味が解らないといった様子の菜生に、果林や愛、璃奈はそう告げる。

「ほんとにわかってない?」

「何がです?」

「寝起きでポケポケのときの彼方ちゃんだつてわかるのにな」

エマや彼方に言われてもまだ菜生は理解できていなかった。今自分の周りに立っている少女は全部で9人、やはり一人足りないではないか。

「誰が私たちを集めてくれたんでしょうか?」

「初日に生徒会室に行った時、緊張のあまり反対方向に走っちゃった人で」

「え?え?」

「私は生徒会長として、部員を10人集めることを条件としましたが、『スクールアイドルを10人集めろ』とは言っていないです」

しずくやかすみ、そしてせつ菜もそうほぼ答えて言っていて良いレベルでヒントを出して「まさか…」とやっと菜生も理解できて来たようだった。

「10人目は、私の目の前にいる人です」

「わっ…私!」

「そうだよ、菜生ちゃん！」

自身を指さす菜生に、歩夢はそう笑って告げる。

「スクールアイドル同好会、再始動です〜」

「二つだけ…再始動にあたってお願いがあります。菜生さんに、部長になってほしいんです！」

「えっ!? そ、そんな無茶だよ〜」

「ここにいるメンバーを集めて、もう一度同好会を作ってくれたあなたが中心にいれば、今度こそきつと大丈夫だと思うんです」

「賛成！ 私たちをその気にさせたのは、菜生ちゃんだもん!!」

部長になってほしい。その申し出を受けて狼狽える菜生だったが、歩夢もせつ菜を同じ気持ちらしい。いや、彼女だけじゃない。気がつけば菜生を囲むように全員が立っていた。

菜生がいたから、元々同好会にいたメンバーは戻ってきてくれたし、新しいメンバーも増えた。それは紛れもない事実なのだ。

「わかった…私やるよ、絶対にみんなの味方でいる！絶対にみんなのこと全力で応援する。約束する！」

菜生にはもう、迷いは無かった。みんなを応援するため、みんなの中心に自分も身を

置くことを。みんなを応援する。それが今の菜生の夢だから――
「虹ヶ咲学園スクールアイドル同好会、再始動だよ!!」
そう宣言する菜生の表情は、とても晴れやかだった。

8話 菜生という少女

「菜生が部長にね。どう？ やっていいけそう？」

「うくん……まだ自信は無いけど、やれるだけやってみるよ」

それから数日、スクールアイドル同好会は練習を開始し、近々開催されるという。ソ口部門でエントリーできるイベントに全員が出場すべく活動を開始していた。

菜生が部長だという事を知って、母は不思議そうは表情を浮かべるが菜生はそう自信ありげに答える。

「でも菜生は歌って踊ったりはしないんですよ？」

「まあ……ね。私は応援したいとは思うけど、自分がやりたいっていう気持ちは無いし」

「まあ好きになさい。そのかわり、ちゃんとやり遂げるのよ？」

「うん！」

菜生の宇宙への夢——その道のりに、スクールアイドルは回り道かもしれない。だが菜生はやってみたいから、だからこの道を選んだ。

追う夢は、必ず一つだけである必要はないし。スクールアイドルを間近で応援できるのも、高校生でいられる今のうちだけなのだから。

「そういえば菜生」

「ん〜？」

暫しの沈黙の後、不意に母に話を切り出された菜生はトーストを啜えたまま返事をする。

「だから物啜えたまましゃべらないの…あの首に下げてた石はどうしたの？」

「…ツ!?ゲホツ…ゲホツ…」

普段なら寝起きでも必ず首から下げていた輝石が無くなっていることに気がついた母にそう問われて、驚いた拍子に食べていたトーストが気管に入ったのか、思いつきり咳き込む。

「だ、大丈夫……？」

心配する母を横目に、慌てて目の前の野菜ジュースを飲み息を整えてから菜生は答える。

「…ふう……いやさ、最近怪獣がよく街に出て危ないじゃん？この前落としかけちゃったから、暫くしまつとくことにしたの」

まさかウルトラマンコスモスと一体化して、変身アイテムに変化したとは口が裂けても言えず。菜生はそう言つて誤魔化す。

「そう…まあそれがいいかもね。失くしたら大変だし」

「でしょでしょ？ 同じものは地球上どこを探してもない訳だし」

コスモスから貰った輝石は、地球上には存在しない物質が含まれている。文字通り世界で菜生しか持っていない石だったのだ。

だがそんな代物を今まで意地でも肌身離さず持っていた菜生がそう告げるのだから、多少無理はあったのかもしれない。

「ま、菜生がそう言うなら良いわ。ちゃんと自分が解るようにしまつとくのよ？」

「はい。私だつてもうすぐ17だよ？もう子供じゃないんだからそのくらい解ってるって」

「ならいいけど？」

「大丈夫大丈夫！」

そんなやりとりを交わしつつ菜生は内心ほっとしていた。不自然に思われたかもしれないが自分がコスモスだと言う事は誤魔化せたはずだと。

「ほら、早くしないとまた歩夢ちゃん待たせちゃうわよ」

そう言われて時計を見ると、そろそろ準備しないといつも通りの時間に登校できなくなるどころだった。

「…………ちそうさまー！」

急いで最後の一口を呑み込むと菜生は立ち上がる。急いで髪をセットしながら「あー

やっぱめんどくさいなあ……」なんとぼやくのを母親は聞き流しながら笑みを浮かべた。

「さてと、同好会の目標ですが……」

放課後、部室でミーティングの際一応部長だからという事で菜生が進行を務めていた。練習を開始し、スクールアイドル活動を開始した彼女達だが、まだソロで活動すると決まっただけで立つステージも曲もまだない。

「スクールアイドルフェスティバルへの出場……これを目指したいと思います！」

——スクールアイドルフェスティバル——菜生が初めてスクールアイドルと出会ったあの日、’sとA q o u r sのステージの映像で発表されたイベントの名称だ。

簡単に言ってしまうえば、スクールアイドルによるお祭り。特別な参加資格が必要になるイベントというわけではないが、メインステージに立つことが出来るのは実績のあるスクールアイドルとなっているのだ。

「出るからには一番おつきいステージ目指さなくちゃ……とゆうーわけで、今度ソロ部門のあるイベントがあるからそれに出てみるのはどうかな？」

そう菜生は提案する。スクールアイドルと一括りにしても、一般的には一つの学校に

一つのスクールアイドルグループ。というのが一般的で、まだまだ虹ヶ咲のようなソロで活動するスクールアイドルが複数人存在する学校は少数派なのだ。

「ソロ部門があるならアタシたちにぴったしじゃん！」

「そうね、まずは一人でどこまでいけるか試してみたいし」

そう告げる菜生の言葉を聞いて、愛と果林は望むところだといった様子だった。

「ごめんね、菜生ちゃんにリサーチ任せっぱなしにして」

「私も、もっと詳しくなるね」

「いいって、私が好きでやってるんだし。それになんてつつたつて部長ですからー」

菜生が一人でみんなの為にと、ソロで参加しやすいイベント等についての情報をどんどん調べていることに対して歩夢と璃奈がそう申し訳なさに告げると菜生はそう笑って見せる。

「それにみんなを一番近くで応援することが、私の夢だからー」

だから安心して練習に励んでほしい。そう菜生は笑うのだった。そんな様子に、ただ一人だけ浮かない表情を浮かべるのだったー。

「じゃあまずは、今度のイベントに向けて頑張ろうー！」

「おー！！」

こうして、虹ヶ咲学園スクールアイドル同好会は最初の活動目標ができたのだった。

「…ねえ菜生ちゃん?」

「ん〜?」

練習後の帰り道、歩夢は隣を歩く菜生に話しかけると当人は先程コンビニで買ったスティック状のチョコレートの塗られたお菓子を啜えたまんま返事をする。

「本当にいいの?菜生ちゃんの夢って本当は……」

「宇宙に行く事だよ?でもそれは高校を卒業した後の事、今はスクールアイドルとしてステージに立つみんなを応援したいんだ。欲張りかな?」

啜えていたお菓子を呑み込むと、菜生は歩夢の方を向いてそう笑って答えるがすぐに笑みは消え、俯いてしまう。

「歩夢だから言うね…?本当はさ、解んなくなってたんだ。宇宙に行く事が、本当に私の夢なのかって…:中学の時から少しさ……」

『あの事故』のせい……?」

その問いに菜生はこくりと頷く。菜生にとって、その事故は菜生の夢に暗い影を落とした。

居住型宇宙ステーションの開発中に起こった事故、それによって死亡者を出してしまった事で建設が中断となったのが3年前。

それが菜生の夢に迷いが生まれた瞬間―そして、なぜ菜生が宇宙に行きたいと思うよ

うになったかという、今は亡き父が宇宙飛行士だったからという事が大きかった。

幼少期の菜生は今より男勝りで、空手の有段者でもあった父のようになりたいと空手もやっていた。そんな菜生を父はいつも笑顔で応援してくれた。でも、宇宙に行きたがる時の菜生にだけは困った顔を浮かべていた気がする。

—ボクもおとーさんと一緒に行く！

—これは、新しいロケットのテストだからすぐ戻ってくるよ。だからお母さんと待ってな？

仕事に出かける父に、また宇宙に行くんじゃないかについて行こうとする菜生の頭をポンポンと叩くと父はそう言って笑いかける。

—わかった！じゃあボクが大人になったら、そのロケットで一緒に宇宙行こうね！

—わかった、約束だ！

だが、それが父と交わした最後の言葉だった。

開発中だった大型宇宙探査ロケット『コスモ・ノア』の事故により帰らぬ人となった。

—おとーさんどこにいったの？

—お父さんはね、宇宙に行ったのよ

—うそつき！一緒に行ってくれてるって言ったのに！

父の葬儀の際、状況が理解できなかった菜生はそう母に叫ぶ。

—ううん、きつとお父さんは宇宙で菜生の事を待ってるわよ

—ほんと？

幼い菜生は、母の父は宇宙で菜生がいつか宇宙に来るのを待っている。その言葉を信じた。

だから菜生はずっと宇宙に行くのが夢だと言い続けてきた。

だがしかし、少しづつ大人に近づいて行くにつれて、死とはどういう意味か？父親がどうなったのか、菜生は母からはつきりと告げられることなく理解していた。そして中学の時に起きた宇宙ステーションの事故で、菜生は宇宙での命の危険を認識して怖くなってしまったのだ。

母親が、夫だけでなく一人娘までも失ってしまう可能性があることが。

「そりゃ今でも宇宙にはいきたいよ？でも、それがお母さんを悲しませる結果になるかもしれない…それが怖いんだ」

「菜生ちゃん…」

「でも、この夢から逃げるためにスクールアイドルを応援するわけじゃない。なんか、みんなを応援してたら私も自分の答えを見つけられる気がするんだ」

だからみんなを応援することが今の自分のやりたいこと。そう菜生は胸を張ってそ

う告げるのだった。

「だから、歩夢の事一番近くで応援するね？」

「ありがとう。菜生ちゃん」

この数年間、幼馴染に勘付かれてはいても面と向かつてはつきり口にする事ができなかつたことを、ここで菜生は初めて口にした。

そして歩夢もまた、そんな菜生の言葉を受け止めた。きつと誰にも言えずにずっと燻ってきた感情を、目の前の幼なじみは明かしてくれたからと。

菜生にとって歩夢は、一番長い時を一緒に過ごしてきた相手でもあった。お互い両親が多忙で家を空けることが多かったことと住んでいるマンションが隣部屋だったこともあり、必然的に親より共に過ごす時間が多かったから。菜生にとっては家族と言っても良い存在だった。

そんな歩夢にだから見せることが出来る『弱い自分』まだ知り合って間もない同好会のメンバーには、決して見せられない自分の。

だがそんなやり取りを、突如として街中に響き渡った地響きが遮ってしまった。

「□□□□ーッーッ!!」

そして地底から、『襟巻怪獣スピットル』が出現した。本来夜行性で大人しい性格のスピットルは、カオスヘッダーの影響で目覚めてしまい地上に現れたのだ。

そして自身が嫌うジェット音を消し、東京を静かにするために真っ直ぐ空港へと歩み始める。

そして不運にも近くを飛行中のジャンボジェット機に狙いを着け、フード状の襟巻を開きその中から現れた目は真っ直ぐジェット機を見据えていた。

「飛行機が！」

「菜生ちゃん!？」

歩夢の声を置き去りにして菜生は走り出した。

(このまま怪獣が飛行機を攻撃したら……それにこのままじゃ、あの怪獣も殺されちゃう! そんなの……そんなの嫌だ!)

スピットルがジャンボジェットを攻撃すれば沢山の人の命が奪われる。それだけでなく、スピットル自身も防衛軍によって排除されてしまう。

菜生は怪獣が元々大人しい存在だと、人間が何もしなければ向こうも何もしてこない存在だと信じている。

それに何より、自分の前で命が奪われるのが嫌なのだ。怪獣も人間も、同じ命だから。自分のように、大切な人に二度と会えない悲しみを味わって欲しくないから。

そして今の菜生には、その気持ちに代えてくれる存在もいる。

『菜生、救うのだ。その力で、その心で……!』

コスモスは、そんな菜生に変身するように促す。コスモスの力なら、スピットルも、ジャンボジェット機も救えるはずだと。

そして菜生はコスモプラックを掲げ、光を解き放つと辺りは眩い光に包まれて何も見えなくなる。

「シュワ!!」

その光が収まると、天からウルトラマンコスモスが飛来し、土砂を巻き上げて着地した。

「コスモス……」

菜生を追いかけようとしていた歩夢は、視線の先に現れた青い巨人の背を見つめ、その巨人の名を静かに呟いた。

「□□□□ーッ!!」

コスモスとスピットルは同時に駆け出すと、コスモスはスピットルの巨体を躲して背後に回り込む。

「フッ！ハアッ！トリヤア!!」

スピットルの両腕を振り回すようにして繰り出された引つ掻き攻撃を、コスモスは捌き切ると腹部へ掌で突きを繰り出し、スピットルの巨体を後退させる。

そしてその隙に、ジャンボジェット機はコスモスの背後を通るようにしてその場を飛

び去って行く。ひとまず乗客を巻き込むという事態は防ぐことが出来た。

コスモスは、スピットルが暴れはじめたのはカオスヘッダーの影響であろうと推測こそすれど、カオスヘッダーに憑りつかれている訳ではないことを理解した上で、スピットルを引き付けていたのだ。

「ハアアアア……イヤアッ!!」

両腕を広げた後、平手のまま右腕を突き出すようにして構えるコスモスに対してスピットルは悔し気に地団太を踏む。

そのまま勢いよくコスモスへと体当たりを敢行するも、コスモスに上手く受け流されその勢いはそのままに転ばされてしまう。

すると起き上がったスピットルは、コスモス目掛けて真っ黒い溶解液を口から吐き出して攻撃する。するとコスモスは金色のバリアを壁状に展開すると、そのバリアを押し飛ばしスピットルを包む。

コスモスの多彩なバリアのバリエーションの一つ、ムーンリバースパイク。

攻撃を無力化されたスピットルは戦意を喪失し、外敵だと思っていたジャンボジェット機も居なくなつたことで再び頭部を襟巻で覆い隠すと地底へと帰って行つた。

それを見送つたコスモスもまた、飛び立つとそのまま光に包まれて見えなくなつてしまつた。

その直後、空から銀色の光が降り注ぎその中から菜生が現れる。

「ありがとう、ウルトラマン」

そうコスモプラックに菜生は語り掛ける。街を守るだけなら、スピットルをそのまま倒してしまうのが一番手っ取り早い方法だ。

それでもコスモスは、菜生の想いに答えてくれた。スピットルの戦意を削ぎ、元居た場所に帰すという方法で。

「菜生ちゃん？菜生ちゃん!!」

歩夢が自分を探す声が聞こえる。そう言えば思わず飛び出しちやつたなど苦笑いを浮かべながら、懐にコスモプラックをしまおうとその声の方に駆け出した。

「おーい！歩夢く!!」

「もう、心配したんだから…」

「ごめんごめん、なんか気がついてたら走ってた」

「もう」と頬を膨らませる歩夢に、菜生は自分がコスモスと一緒に戦っていることを隠していることに罪悪感を感じつつも、知れば彼女は絶対に菜生とコスモスとともにいるこ

とにいい顔をしないのかもしれない。

「そういえばお腹すいた、クレープ食べ行かない？」

「さっきお菓子食べてたじゃん、晩御飯食べれなくてお母さんに怒られても知らないよ？」

「うぐっ…それはまずい……」

誤魔化すように提案した結果、手痛い反論を受けて菜生は余計に青ざめるのだった。

9話 空からのプレゼント

10人となって初めてのライブを来週に控えた土曜日、虹ヶ咲学園スクールアイドル同好会のメンバーは一層練習に励んでいた。

「菜生ちゃん、本当に良かったの？」

「えっと…何が？」

部室で歩夢のライブの演出の最終決定をしながらキーボードを叩く菜生に歩夢がそう心配そうに問いかけると、菜生はそう首を傾げる。

「作曲、私たち9人分全部やるって話だよ」

「みんな自分がどんな曲をやりたいか決めてもらって、それに合う曲を一緒に考えてるだけだし、そんな特別大変って訳でもなかったよ？それに音楽科の子も手伝ってくれてるし……はむっ……」

そう言っただけでもなかったかのように答えながら菜生は、彼方から差し入れに貰ったクッキーを頬張る。

「おいひい……ごくん……歩夢、おいしいよ。あとで彼方先輩にお礼言わなきゃー」

「でも無理しちゃだめだよ？みんな菜生ちゃんには感謝してるけど、それで菜生ちゃん

が倒れたら意味ないんだから」

無邪気に笑いながらクツキーを勧める菜生に、歩夢はそう真剣な表情で告げる。彼女の言い分はもつともだ。9人分の曲をどうするか？それは一番最初にぶつかった難関だ。

だが菜生は、自分が多少楽器を扱えるからとある程度の曲の案を作ることを申し出たのだ。それぞれがやりたいものはつきりと提示することを条件に、音楽科の生徒の協力も得て菜生は9人分の曲を用意して見せた。

「ありがとーでもこれでみんなが自分のやりたい曲をステージで歌えるなら、それが一番嬉しいんだー！」

そう言つて菜生は笑いかける。

「だから…今度のライブ頑張つてよ！私、すつごく楽しみにしてるから!!」

「うんーがんばるね」

そう告げる菜生に、歩夢も笑つてそう答える。「じゃあみんなの所行つてくるね」そう言つて外で練習している他のメンバーのところへ向かう彼女を見送ると、菜生はインターネットを開く。

「ふーん…隕石ねえ……」

その後、ネットニュースを開いた菜生の視線に映っていたのは、昨晚隕石が三つ落ち

てきたというものだった。

そしてそのうちの一つはSRCが回収し、解析を行っているという内容だった。

最近のカオスヘッダーといい、活発化している怪獣たちといい、今回も何か起きるのではないか？そんな胸騒ぎがした。

「最近構って上げれなくてごめんね……？来週ライブがあるんだ。リドリアスにも見せたいよ」

翌日、一人鎗矢島に向かった菜生は久しぶりにリドリアスの顔を見に行っていた。

同好会を復活させてからというもの、街に怪獣が現れることもカオスヘッダーの影響で増えた。だからみんなの曲を作る傍ら、菜生とコスモスはそんな怪獣達を救い。時にはSRCが鎗矢島で保護するのを手助けしていた。

その結果以前のように鎗矢諸島に訪れることが出来なかった菜生に、リドリアスは甘えるように鳴く。

そんなリドリアスにはほほ笑む菜生は、普段学校に行く時と違い、長い黒髪を一つに纏

めポニーテールにしていた。普段より大人っぽく見える格好の菜生だったが、その表情は年相応以上に子供のようで純粹だった。

「最近仲間も増えてここもにぎやかになってきたね。今度来るときは、同好会のみんなも誘うよ」

そう告げる菜生の言葉が伝わってか、リドリアスは嬉しそうに鳴く。スクールアイドルというものが理解できるかは解らないし、同好会のみんなが怪獣に肯定的とも限らない。

それでも菜生は、自分の大事な友達をみんなに知ってほしいと思ったのだ。

みんなが怪獣と共存できることを理解してくれば、リドリアスもバリアで閉じ込められた狭い空間でなく、もっと大きな空を自由に飛べる。そう信じている。

「さて……と」

そう言つて菜生は尻についた砂を払いのけながら立ち上がる。

「またねリドリアス。ライブ終わったら、また報告しに来るよ」

そう言つて菜生は笑いかけると、そのまま名残惜しそうに鳴くリドリアスに背を向けて帰って行く。

都内への連絡船が多くない関係で、菜生は基本箇矢諸島を訪れるときは朝一の連絡船に乗つて来て、昼過ぎには帰るようにしている。

ひとまず都内に戻ってきた菜生は、今日は歩夢も家族と出かけているし一人であらうだろうかと考えていると。

「あれ？菜生さん……ですよね？」

「あつせつ菜ちゃん。偶然だね〜」

不意にその声をかけられた方へと振り向くと、そこにはせつ菜がいた。

「髪型がいつもと違うから違ったら最初人違いかと思いましたがよ」

「あはは……ちよつと結ぶのが面倒でさ？」

人違いでなくて良かったと告げるせつ菜に、菜生はそう言つて苦笑いを浮かべる。

「普段と違つて大人っぽいというか……とにかく、似合つてますよ」

「そ、そう？ありがと」

「菜生さんは買い物ですか？」

「え？ああ違うよ？ちよつと会いたい相手がいたからあつてきたの」

せつ菜に問われて、あまり怪獣だと答えるのもなと思つて菜生はそうばかりして答えた。

「菜生さんまさか……彼氏がいるんですか？」

「かっかか……彼氏イ!？」

想定外の質問に菜生は思わず顔を真っ赤にして動揺する。

「ちっ違う違う！ 鎗矢諸島に怪獣に会いにさ」

「怪獣…ですか？」

「うん、好きなんだ」

会いたい相手が怪獣と告げられ、一瞬せつ菜も驚いたような表情を浮かべる。

「そういえば情報処理科に怪獣好きの生徒が居るって噂を聞いた気が…菜生さんだったんですね」

「そうかも…？ まだまだ怪獣保護って認知されてないし、よく思わない人もいるからあんまり表には出さないんだけどね？」

「でも、怪獣たちが好きって気持ちには、大事にするべきだと思います」

そう言えば鎗矢諸島に行きたいからとクラスメイトの誘いを断ったりしたこともあったしそれで噂としてすぐ広まったのか？なんて思いつつもそう答えると、せつ菜はそう菜生に笑いかける。

「そう…：そうだよね、ありがと！ でもいつか、怪獣も人間と共存できる世界になってほしいなって」

「素敵な夢です！ 菜生さんは優しいですね」

「そうかな？ 私は別に優しくなんてないよ」

そう言つて菜生は視線を逸らす。

「菜生さん……？」

「ああいや……そ、そうだ。せつ菜ちゃんつて、学校と家以外だと生徒会長モードじゃないんだね？」

そんな菜生の様子を心配そうに見つめるせつ菜に、菜生はそう言つて無理やり話題を逸らす。

「私は家が厳しくて、アニメやマンガは勿論、スクールアイドルも禁止なんです」

「まあ……それはなんとなく気づいてたけど………」

なんで彼女がわざわざ『中川菜々』でなく『優木せつ菜』と名乗つてスクールアイドル活動をしているのか、直接聞きはしなかったが菜生もおおよその予想はついていた。

「でも最近はそれだけじゃなくて、変身ヒーローみたいでいいかもつて」

「ヒーロー………」

「はい！そうですね、菜生さんも知つてそうなのは……『ウルトラマンコスモス』とか？」「ブツ!？」

ばれたのかと思つて思わず顔を引きつらせる菜生だったが「あれだけ大きいんですから普段はきつと私達くらいの大きさで社会に溶け込んでるんですよきつと」と恐らくそういうヒーローでは作品のお約束？に則つての推論を述べていたので胸を撫で下ろす。

流石に目の前にウルトラマンコスモスがいるとは言えないので「ソ…ソウダネ…」とカタコトになりながらも菜生は再びハラハラしながら誤魔化す羽目になった。

「そうだ、今から行く予定のお店にスクールアイドルのグッズも置いてあるんです。一緒に行きませんか？」

「そうだね。私まだあんまり詳しくないし、色々教えてもらっちゃおっかな」
「任せてくださいい！」

そう自信たっぷりに告げるせつ菜の後のについて、菜生はあまり自身に馴染みのないスクールアイドルだったりアニメだったりのグッズの並ぶ店内に入って行った。

「うわあゝすごいねこれ」

「?」 s や A q u o u r s は勿論の事、他にもラブライブに出場経験のあるグループなど様々なスクールアイドルのグッズが置かれてあるのをみて菜生は思わず感嘆の声を漏らす。

「ここにみんなのも並ぶように私も頑張らなきゃ！」

「そうですね、この人たちと肩を並べられるスクールアイドルに!!」

「みんなならなれるよ！」

そんな言葉を交わして、テンションの上があったせつ菜のスクール談義を聞きながら帰路につこうとした時。小学生の集団が押していたカートと激突してしまう。

「……つたあゝい」

「菜生さん大丈夫ですか!？」

まるで何かから逃げているかのように後方から走ってきたカートに跳ね飛ばされた菜生に、せつ菜はびっくりして駆け寄る。

「いてて……大丈夫大丈夫」

「ごっ……ごめんなさい!」

「私は大丈夫……でも気を付けなよ?危ないから」

慌てて頭を下げる小学校中学年くらいの少年に菜生はそう笑って告げると、その少年たちが押していたカートの方に視線を逸らす。

「つていうか、それ……何?」

カートの中身は白い布で覆われていたのだが、なにやらもぞもぞ蠢いている。

「何でもない!なんでも!!」

「まったく……こんなところでこんな事してふぎけてたら危ないぞ〜」

そう言つて布をはぐつたところで菜生は固まって動かなくなる。

「菜生さん?どうしたんですか……つて、うそ……」

そんな菜生をおかしいと思いつつ、その菜生の視線の先にあるものを見るとみるみる顔が青ざめる。

「キュ〜キュキュツ?」

「キヤーーツ!!」

カートの中にいたのは赤い身体をした腰くらいまでの背丈で首がなく腕も短い代わりに指が長く関節の多い独特な格好をしたの怪獣?だった。

「か……………かわいい!」

「菜生さん!」

そんな怪獣に驚いて悲鳴をあげるせつ菜とは対照的に菜生はそう言って目を輝かせる。

「ねえねえ、この子なんていうの?どこから来たの?」

「ミーニンって言うんだ、この前拾った隕石から生まれたんだよ」

『『ミーニン』…?』

「何だよちつさいからミーニンだろ」

一緒にいた少女にそう突っ込まれると、今決めた少年は告げる。

「へえ〜…………あれ?でも隕石ってまだあと一つあるんじゃない?」

ならまだ見つかってない隕石も怪獣なのでは?そう菜生が思った時だった。

突如として、工場地帯からミーニンを敵つくしたようなさらに刺々しい焦げ茶色の『巨大』な怪獣が出現したのだった。

「何だあれ……?」

「ミーニンに似てるね」

「キュ〜!キュキュツ!!」

それを見た瞬間、ミーニンは興奮し大声をあげだす。

「もしかしたらミーニンさんのお父さん何でしょうか……?」

そんな推測をせつ菜がする中、視線の先の怪獣は街を破壊し始める。額についている黒いヒトデのような金属質の物体の中央についている赤い結晶から電撃を放ちながら進む姿は、宇宙からの侵略者のようだった。

「お前の父ちゃん迫力ありすぎ……」

「危ないし逃げようよ……」

そう言つて少年少女はミーニンの後ろに隠れるようにするが、ミーニンはカートから降りると前方の怪獣目掛けて進んでいく。

「ミーニンダメだよ!」

「君達何やってるんだ、早く逃げなさい!」

ミーニンに駆け寄ろうとした時、駆け付けたSRCの戦闘を受け持っている部隊の隊員に止められる。そしてミーニン目掛けて銃を構えるのだった。

「やめてください!ミーニンは大人しい怪獣なんです!!」

「そいつはそんな怪獣じゃない、こいつは宇宙から地球を滅ぼすために送り込まれた『ガモラン』って怪獣だ！」

最初に回収された隕石に入っていた金属製の箱には、『この箱を開けることのできる文明を持つ者、ガモランによって滅ぼされるべし』と記されていたらしく。その解析が終わるのと時を同じくして、卵からガモランとミーニンがそれぞれ出現した様だった。

「そんなことありません。ミーニンはお父さんを止めようとしています！」

そう必死にミーニンを撃たせまいと訴えかけるみんなの前で、ミーニンは身体から青い光の輪のようなものを連続でガモラン目掛けて放つ。

恐らくその攻撃によってガモランを止めたかったのだろうが、生憎びくともせず。逆にガモランは足元の岩をミーニン目掛けて蹴り飛ばす。

「キュ〜……」

「ミーニンー！」

「危ない!!」

目の前で地面とぶつかり砕け散った岩の破片が頭に当たったミーニンは倒れ込む。そんなミーニンに駆け寄る少年を連れ戻そうと菜生も咄嗟に駆け出した。

そしてふたりがかりでミーニンをガモランの死角まで引きずって隠れる。

「グルルルル……」

そんなミーニンを探すように唸るガモランに対して、見つかつて踏みつぶされるとい
う最悪な予想が思わず菜生の脳内に走る。

「そこは危ない！戻ってくるんだ!!」

せつ菜や他の子どもたちを庇うように立つ隊員がそう叫ぶが、菜生はその言葉には耳
を貸さない。

「君はここにいて、ここでミーニンを守るんだ」

「うんー」

そう少年が頷くと、菜生は「こつちだよー」とガモランを挑発すると誰もいない方へ
と走り出す。

ガモランが放つ雷撃から逃れるように全力で走る菜生だったが、やがてその身は爆炎
に包まれてしまう。

「菜生さん!!」

思わず菜生の名前を叫ぶせつ菜だったが、その場が一瞬だけ輝いた。

「シューワー！」

まるで菜生を守る為にともとれるタイミングで、その輝きの中からウルトラマンコス
モスが現れたのだった。

「ウルトラマンコスモス、お願いします。菜生さんを助けてくださいー！」

そうせつ菜が叫ぶと、コスモスは一度こちらを振り向いてゆっくりと頷くとすぐさまガモランに視線を戻し構えを取る。

「イヤアツ!!」

コスモスを倒すべき敵とみなしたガモランは、見かけからは想像もできないようなジャンプ力で一瞬で間合いを詰める。

だがコスモスもそんなガモランの体当たりを避け、相手の指先を尖らせた突きにも対処して少しずつ何もなない場所へとガモランを誘導していく。

両腕をがむしやらに振り回すガモランに対して、コスモスは冷静にその攻撃を捌き足を払い飛ばそうとするがガモランは驚異のジャンプ力でそれを避ける。

むやみに戦って被害を拡大させることの内容に回避に専念したコスモスは、なんとか周りへの被害を最小限に抑えられる場所まで誘導することに成功すると反撃に出る。

ガモランの手を弾くと腹へ掌で突きを放ち、

『ミーニンはお父さんを止めようとしている』

『アイツは地球を滅ぼすために送り込まれたガモランっていう怪物だ』

そのふたつの言葉が菜生の中でこだましていた。このまま目の前の怪物を倒してしまつていいものか？はたまた大人しくさせるべきなのか。

(いや、やっぱりこのまま倒すなんてできないよね…)

この怪物も、地球を滅ぼすためだけに生きている訳では無いはず。そう思った菜生にまるで合わせるかのように、コスモスはガモランの大振りの攻撃を躲し、最後に回るとそのまま突き飛ばし、フルムーンレクトを放つ。

「あの光は確か……」

興奮状態を抑制する効果のある光を浴びたガモランは落ち着き、大人しくなるかに思われた。

「グルル……」

だが実際そんなことは無く、完全に油断したコスモスにとびかかると、コスモスの腹に肩から突っ込みその巨体を宙に放り投げる。

（嘘っ!?!効かないの?）

フルムーンレクトはあくまで『興奮状態を抑制する』効果しかない。つまり、一時的な感情で暴れている相手には効果があるが、最初からそうするつもりで暴れている相手には効果がないのだ。

地面に背中から落下したコスモスは、すぐに身体をうつ伏せにして腕の力で起き上がろうとする。しかし、ガモランは飛び上がるとそんなコスモスの背中を踏みつける。

「コスモスが……」

周囲が見守る中、ガモランは執拗にコスモスの背中を踏み付け、コスモスの腹部を蹴

り上げコスモスが起き上がれないまま一方的に攻め立てる。

だがガモランの追撃が来るまでの一瞬の隙にコスモスは振りかぶったガモランの足を両腕で掴み、放り投げる事でガモランを転倒させる。

「ウオオツ!!」

そして起き上がったコスモスは右拳を突き上げ、太陽の如き赤き光を見に纏う。

10話 太陽の輝き

コスモスを踏み付けるガモランは、コスモスの横に回り込むと今度は起き上がろうとするコスモスの腹を蹴り飛ばす。

だがコスモスはただやられている訳では無く、一瞬の隙についてガモランの足にしがみ付くと放り投げガモランの巨体が地を転がる。

「ウオオオッ！」

その隙の立ち上がったコスモスは態勢を整えると、右拳を突き上げ太陽の如き赤き光を見に纏いコロナモードへとチェンジした。

「ダアッ！」

拳を突き出して勇ましくファイティングポーズを取ると、立ち上がってこちらを睨みつけるガモランに駆け出す。

ガモランの攻撃を回避しつつ腹部に裏拳を叩き込み、怯んだところをさらに両拳を同時に打ち込み、さらに顔面に回し蹴りを打ちこみ確実にダメージを与えていく。

コロナモードにチェンジしたコスモスの圧倒的な力に、ガモランは先程の優勢が嘘のように追い込まれる。

反撃すべく腕を振りかぶってコスモスに肉迫するも、コスモスはそれを受け流しつつガモランを後方に放り投げる。

「ハアツ!!」

地を転がるガモランに対してコスモスは両腕を広げると高熱のエネルギーを身に纏うと、両腕を突き出し球状に収束させていく。ブレージングウエーブを放ち、決着を付けるつもりなのだ。

だがその時、当たりどころが良かったのか気を失っていたミーニンが目を覚ますが、ガモランを倒すべくエネルギーを収束させるコスモスを見ると、コスモスに大声で何かを訴えかける。

「やめてー！そいつミーニンの父さんなんだ!!」

「…ツ!?!」

そんなミーニンの仕草に気がついた少年は、コスモスにそう叫ぶ。するとコスモスはエネルギーの収束をやめてしまい、ブレージングウエーブとなるはずだったエネルギーは周囲に霧散してしまう。

だがその隙をガモランは見逃さなかった。コスモスに体当たりを行い、よろけたコスモスへ一気に畳みかける。

「グアツ…グウー!」

だがコスモスもすぐさま体制を立て直し、ガモランを押し返そうとするが思うようにいかずその巨体を後退させる。更にガモランの攻撃を拳で弾いて反撃を入れようとすると「やめて！」という声が入り思うように戦うことが出来ないでいた。

(どうすればいい……どうすれば……)

子供たちの声を聴き、なるべく反撃をしないようにしているコスモスの中で菜生は悩む。だがその悩みはコスモスも同じなのが、彼の動きから伺えた。

「ウルトラマン……」

ミーニンや少年がガモランを倒さないでくれと懇願している結果、コスモスの動きが鈍くなったのはせつ菜にもわかり切っていた。

だからといって倒してくれと叫ぶわけにもいかない。それに、このままだと間違いなくコスモスのエネルギーが先に尽きるだろう。

何かいい解決策はないか？そう思っているとせつ菜はあることに気がつく。

「見てください！ミーニンさんにはあんなヒトデみたいなのはないですよね」

「恐らくあれはバイオコントロールなんだ。大人しい怪獣を、あれで操っている。だから、コスモスの光で大人しくならなかった……」

せつ菜が指さしたのは、ガモランの額についている黒い金属質の物体。それを見たSRCの隊員は、フルムーンレクトが効かなかった事と併せてそう推論をたてる。

だがその間もコスモスはガモランの猛攻をひたすら耐え続けていた。

しかし、ガモランの攻撃で態勢が少し崩れたところに蹴りを貰い。コスモスの身体は大きくよろめく。そしてそこへ額の赤い結晶から雷撃が放たれるが、なんとか腕で弾き飛ばし、距離を詰めるべく駆け出そうと踏み込んだタイミングでもう一発雷撃が放たれる。

「グワアア!!」

防御が間に合わずモロに雷撃を受けたコスモスは後方へ吹き飛ばされ倒れこんでしまう。そしてガモランはそんなコスモスに止めを刺そうと歩み寄っていく。

「ウルトラマン！額です！額についてるのがコントローラーなんです!!」

「ッー」

このままではコスモスが危ない。そう思ったせつ菜は思わず飛び出すとそう叫ぶ。すると一瞬コスモスはせつ菜の方を見るが、すぐさま正面のガモランに視線を戻すと若干ふらつきながらも立ち上がる。

「ウオオオッーダアアッ!!」

そして両手を強く握りしめて胸の前に掲げるとその間に緑色の光が集まる。それを右腕に移すと素早く手刀を振り下ろし、鍔状の緑色の光弾——ハンドドラフト——を素早く3発ガモラン目掛けて放った。

寸分の狂いもなく、ガモランにしているバイオコントローラーに直撃させることによってコントローラーは破壊され、ガモランの額から外れる。

するとガモランは大人しくなり、光に包まれると縮むようにしてその巨体を消してしまった。そしてその光が消えた場所ではミーニンと瓜二つの怪物が気を失っていた。

恐らく少年たちと一緒にいたミーニンも、バイオコントローラーを装着されてしまっていたら二体目のガモランとして街を破壊していたのかもしれない。

「シューワッ！」

だがコスモスやせつ菜の機転によって、ガモランによる脅威は去った。それを確認するとコスモスは天高く飛び去って行ったのであった。

一方でガモランの蹴った岩が直撃したミーニンはその頃ようやく目が覚めた。

ミーニンを心配した子供たちが安堵の声を漏らす中、物陰から自分の髪を気にしながら現れた菜生にせつ菜はすぐに駆け寄った。

「菜生さん大丈夫ですか!？」

「へ? ああうん…ちよつと毛先が焦げちゃったかなあ…つてくらい?」

そう言って微妙な笑みを浮かべる菜生に、せつ菜はやれやれといった様子で笑う。

「この際だしバツサリ切っちゃおうかな？」

「ええ!?! 勿体無いですよ、折角綺麗な髪をしてるんですから」

「そうかなあ…ここだけの話あたしや短い方が好きなんだけどね」

自身の髪が少し焦げたのを見て、うっとうしそうにぼやく菜生だったがせつ菜に止められるも、少しおちやらけた様子でそう答える。

「でもよかった。ミーニンが無事で」

「そうですね…」

「つてか、お父さんじゃなかったんだね。幼馴染とかかな？」

「案外恋人かもしれないよ？」

「それも素敵かもね？」

二頭ともけがを負っているので、SRCの施設で治療を受けた後、鎗矢諸島にて保護されることが決まった。ミーニン達には、菜生やせつ菜もライブが終わったら会いにいらおうという話をしてその日は解散となるのだった。

そして遂に訪れたライブ本番。

「まーだ緊張してんの?」

「ひゃわ!」

緊張で座り込んでいる幼馴染の頬にあつたかい麦茶の入ったコップを押し当てると、狙い通り驚いた声を上げてくれた。

「もー菜生ちゃんつたら…」

「ごめんごめん、しずくちゃんがあつたかいものお腹に入れると落ち着くつてさ。飲みなよ」

やはり演劇等で大勢の人の前で何かをするという機会が多かったであろうしずくは、他のメンバーと比較すると離れている感じがしたなあと思いつつ菜生はそう告げる。

「うん、ありがとう」

そう言つて歩夢は菜生に手渡されたコップを受け取ると、中身を一口飲むと「ふう…」と息を吐く。

「どう?落ち着いた?」

「うん…でもやっぱり怖いのかも、さつき客席の方を見たら沢山の人がいて、これからその人たちの前で歌うつて考えたらちよつとね…」

「大丈夫だよ」

そう不安を吐露する幼馴染に、菜生はそう笑って告げると、幼馴染の手を取る。

「私がついてる。絶対に……!」

「ありがとう。私、頑張るね?」

「うん、応援してる。ほら、みんなのときいこ? ステージは別だけど、私たちは仲間なんだから」

そう言つて菜生は立ち上がると、他のみんなのいる控室に歩夢と共に移動する。

「センパイたちどこ行つてたんですか? もうすぐかすみんたちの出番だつていうのに」

「ごめんごめん、ちよつと話しててさ?」

控室に戻ると、そう頬を膨らませるかすみの姿が見えると菜生はそう笑って誤魔化す。

「さてと……みんないるね」

そう改まって菜生は9人の同好会の全員を見渡すと円陣を作り、こう切り出す。

「同好会が再始動して初めてのステージ! みんな、精一杯楽しもう!!」

「お———!」

こうして、イベントは始まり。9人の少女たちの、それぞれ『自分らしさ』を前面に押し出したステージが幕を開けた。

「どうしたの？菜生ちゃん」

「へ？ああえつと…」

その日の帰りの電車の中で、ぼうつと窓を眺めていた菜生に歩夢がそう声をかけると、そんな素つ頓狂な声を上げる。

「今日のライブ、みんなすごかったな〜って思ってたただけだよ？だってほら、せつ菜ちゃんとしずくちゃんなんて入賞だよ？上位8人に食い込んだんだよ？すごいよね〜」

「…正直に言っつて、どうだった？」

「私はすごく感動したよ！歩夢の初めてのステージが見られたんだよ」

「そうじゃなくて」

そう言つて笑う菜生に、歩夢は真剣な眼差しでそう告げると、菜生も表情を真剣なものに変える。

「まあ…みんな緊張してるのかな？とか思つたりはしたよ？」

「それは…緊張するよ。みんな私と同じかは解らないけど、ソロつて一人でしょ？あのステージに1人つてやっぱりちよつと不安になることもあるよ……」

「そう…だよね……やっぱりその点だと、グループは心強いのかもね。すぐ隣に、心強い仲間が居る訳だし」

「初めて見た？」sとA q o u r sの合同ライブもそんな感じだったよね」

あの日、菜生と歩夢が初めてスクールアイドルのライブを目撃した日を思い出して、ようやく2人に笑みが戻る。

「だよね？でさ、歩夢はグループ活動ってどう思う？」

「私はまだまだ経験が少ないし……その辺はまだわかんないや」

「今日が初めてだったしね、ごめん変なこと聞いて」

「グループにこだわる必要はないって判断したけど、グループであることのメリットは考えてなかった……」

グループで活動する事にこだわれば、以前のように意見が割れ再び解散になってしまうかもしれない。だからみんなの長所を活かすためにも、ソロでの活動にすればと判断した事が正解だったのか疑問に感じ始めていた。

—? sやA q o u r sにあつて、私たちに無いもの……

「菜生ちゃん？」

「へ？ な、なに？」

「またぼーつとしてたけど、大丈夫？」

「何でもない！ なんでも！ そうだ、もうすぐ夏休みじゃない？ どつか行こうよ？」

まるで誤魔化すように、菜生はそう告げる。

「そうだね……やっぱり海とか？」

「いいねえ、海！ 折角だしさ、バイクで行こうよ？ もう二人乗りできるし」

去年の誕生日にすぐ二輪免許を取った菜生は、そう明るい表情で告げるが歩夢は苦笑いを浮かべる。

「いきなりは怖いかも……近場からにしない？」

「そう……そうだね……じゃあ電車使つてさ、同好会のみんなでとかどう？」

「それいいかも」

そんなたわいもない会話が、家の最寄り駅に辿り着くまで繰り広げられるのであつ

た。

某所のトンネル内。

「なんだこれ？ 蛍か？」

トンネルを軽トラで通行しようとした初老の男性は、トンネル内に入ると周囲が光の粒子で覆われるのを不審に思い車から降りると、それが蛍であろうと判断した。

「そうかそうか……この辺だと何年振りだ？」

感慨深そうにそう呟く男性を余所に、蛍は集団となり男性へと殺到。

「な、何だ!？」

― するかに思われたが、狙いはその背後でアイドリングを続ける軽トラだった。蛍の群れは軽トラに組み付くと、軽トラを跡形もなく消してしまった。

「うわあああああー！」

そしてトンネル内には、一人取り残された男性の叫び声が木霊するのだった。

11話 無いものを探して

「ふう……やつと着いた……」

道の駅の駐輪場でヘルメットを脱いで背中を伸ばしながら菜生はそう呟く。

夏休みが始まってすぐ、母は仕事で数日家を空けるし歩夢や同好会もみんなも家の都合などがあつて練習を休みにしたので、菜生は自分達とAqoursの何が違うのか？それを本人たちに会つて感じてみたいと思ひ、沼津の地を一人で訪れていた。

「まあ勢いで来ちゃったけど……どうすつかなあ？」

見切り発車で一人で思い立つてすぐ家を飛び出したのはいいが、これからどうすればいいか頭を悩ませる。普段Aqoursがどこで練習しているとかそういう情報を仕入れるより早く移動してしまつたからだ。

「ま、まあ学校行けば流石に誰かいるでしょう？えつと確か……」

ひとまずAqoursが在籍している『浦の星女学院』を目指す事にした菜生はヘルメットを被りなすと、バイクのエンジンをかける。

バイクの免許自体は、16歳の誕生日にすぐとつたものでバイクも当時アルバイトで買った。父が昔乗っていたバイクと同じ車種……の排気量の小さいフルカウルのレー

シーな見た目のバイクだ。

買った当時は2人乗りでできるようになったら歩夢を後ろに乗せてあげようと思っていたし、歩夢も乗り気だったのだがいざ現物を見ると、そのタンDEMシートの小ささに微妙な表情をされたものだ。

「こつからなら近そう……にしてもあつついなあ、やっぱ電車とかバス使うのが正解だったかも……腰痛いし」

菜生の家から静岡県沼津市まで高速道路を使っても二時間以上かかる。それをこの真夏にバイクで移動しようものならかなりの暑さだ。来て早速後悔だらけの旅になってしまったが、当初の目的を果たすべく菜生は移動を開始した。

「お祭りでもやるのかなあ？」

道中、道端に提灯が飾り付けられているのを見て、恐らく催し物があるであろうことは推測できる。もしかしたらそこでA q o u r sのステージが見られるかも？なんて考えると少し楽しくなる。

だが偶然とはいえ、菜生が訪れたこの地にもカオスヘッターの魔の手が迫っていると、この時は思ってもみなかった。

「ここが学校…と」

海沿いの道から坂を上った先にある浦の星女学院に到着したが、やはりそれっぽい人を見つけたことは出来ない。かといって部外者である菜生は中に入るわけにもいかない。

「すいませーん」

学校の制服に身を包んだ三人の生徒と目が合ったので、菜生は声をかける。

「はい、何ですか？」

「えつと…A q o u r s のみなさんにお会いしたくて来たんですけど…今日来てますか？」

「今日はまだ見てないなあ…ここ何日かはお祭りの準備で来てたんですけど」

そう答えたのは友達だろうか？3人組の少女の一人が教えてくれた。

「あーそういうばここに来るまでに、提灯を見かけましたよ」

「はい、沼津サマーフェスティバルっていうんです。A q o u r s のライブもあります

よー」

「なるほど」

そう別の子にもそう教えてもらいそう相槌を打ちながら、地元イベントにも積極的に参加しているのかと感心していた。

—みんな海が好きだから、海に行けば誰かいるかもしれないよ

折角来たのだから A q o u r s とも話してみたかったなと残念がついていた菜生を見かねてそう教えてもらった菜生は、海沿いの道をひたすら移動していた。

(にしてもホントきれいだなくこんなきれいな海、東京じゃ見れないよ)

「つてあれ…嘘でしょ!？」

海を眺めながら移動していると、船着き場の先の方に立ち何やら思い詰めた表情で海を見つめている少女が目に入ると思わずバイクを止めてヘルメットをとると駆け寄っていく。

「ちよつ…ちよつと待ったー!」

「きやあつ!え?何!？」

「早まつちやダメ!私で良かったら話でも何でも聞きますから!」

そう言つて菜生は駆け寄っていくと後ろから抱き着くものだから少女は驚いて状況

が読めていない様子だった。

「あの…何か勘違いしてませんか？私はただ海を眺めてただけなんですけど……」

「へ？あ…ええつと……ごめんなさい！」

そうこちらを振り返った少女に告げられ、菜生は引き攣った笑みを浮かべながらあつずさると、そう言つて勢いよく頭を下げる。

「いや…私も何か勘違いさせちゃつたみたいでごめんなさい……」

「そんなことないですつて、完全に私の早とちりだから……」

そんな菜生に、目の前の少女も気まずそうにそう告げるが菜生はそう言つてもう一度頭を下げようとした時、少女の顔を初めて直視してあることに気がつく。

「もしかして…A q o u r s の桜内梨子さん…？」

「…？そうですけど……」

「ほんとに!? やつた本物だ！ファンなんです、私今日A q o u r s に会いたくて東京から来たんですよ」

目の前の少女がA q o u r s のメンバーである事を知った途端、菜生は目を輝かせると手を取つて上下にブンブン振つて喜んだ。

「そ、そうなんです？ありがとうございます」

「あ…ごめんなさい馴れ馴れしくて…えつと私高田菜生つて言います、虹ヶ咲学園の二

年生でスクールアイドル部の部長やっています」

無意識に梨子の手を掴んでいたことを自覚すると慌てて菜生はその手を放し、そう自己紹介をする。

「じゃああなたもスクールアイドルなの？」

「いや私は違うんだけどさ？ただみんなの活動のサポートをしてるんです」

「なるほど…：というか同じ年なんだし、もつと砕けた感じでいいよ？」

「そ、そう？まあ私もその方が話しやすいかも。それでね、スクールアイドルの先輩でもあるA q o u r sのみんなに色々聞いて勉強させてもらえればなあって思ってる…」

正直図々しいお願いだとは思ったが、折角こうして会えたのだから色々吸収して帰りたい。それが菜生の素直な気持ちだった。

「なら個人個人に聞くより、集まってる時の方が良いかもしれないわね」

「まあそれは確かに…：でも何だっけ、サマーフェスティバル？の準備中なんでしょ？」

先程学校へ行った時に教えてもらった情報を思い出しながらそう菜生は聞き返すと、梨子は頷いてから言葉紡ぐ。

「うん。最近はずっと遅くまで作業してたから、今日は休養日ってことになってるの」

「じゃあ今日は無理そうだね、みんな家だったりで休んでるだろうし」

そう菜生が肩を落とすと、梨子は苦笑いを浮かべる。

「どうかなあ……みんなお休みだからって大人しくしてるとは限らないと思うわ。特に今の状況だとね……」

「それって……」

「あつそうだ。千歌ちゃんになら今日会えるかも。千歌ちゃんの家、私の家の隣なの。今から行ってみる」

何か好ましくない状況にいるのか、梨子のその言い回しに違和感を感じた菜生だったが、その違和感も直後に彼女から提案された内容に吹き飛んでしまう。

「本当!? 行く行く!!」

「じゃあ、行こっか」

その提案に乗った菜生は、梨子と共にA q o u r sのリーダーである高海千歌の家へと2人で向かう。

「そういえばさつき、何か思い詰めてたみたいだったけど、何かあったの?」

「へ?」

「いや、今日初めて会ったのにこんなこと聞くのもアレなんだけどさ? 最初見かけた時から気になってて、もしかして今、あんまりいい状況じゃなかったりするのかなって」

菜生が最初に駆け寄って行ったのは、梨子の表情が何やら思い詰めているように見えただからだ。だから菜生は、余計なお世話かもしれないが、もし力になれるならと

思つてそう問いかける。

「…私つて、そんなにわかりやすい表情してた？」

「うーん…私が見感じでは？」

「ふふつごめんささい。でも、大したことじゃないの」

「そお？私の方こそごめんね？いきなり抱き着くわこんなこと聞くわで」

「ううん、ありがとう心配してくれて」

大した距離は移動していないのだが、乗ってきたバイクを押している関係でどうしても普段ほどの速度で歩くことが出来ない。たどり着いたころには菜生は肩で息をしていた。

「あつづく次来るときは電車とバスにしよう…そうしよう…」

「ついたわよ」

「ついたつてここ旅館でしょ？」

梨子に案内されてたどり着いたのは『十千万』という旅館だった。

「そつよつ」

「へ？うそ…」

旅館の何がおかしいの？とでも言いたげな梨子の顔を見て、菜生はなんとか状況を呑み込もうとする。

「梨子ちゃんーん！」

「ひゃっ!？」

「あつ千歌ちゃん」

旅館の周囲を見渡していると、不意旅館の中からみかん色の髪色の少女が飛び出してきた。梨子に千歌と呼ばれたこの少女が、高海千歌なのだろう。

「梨子ちゃんに話したいことがあつたんだよ」

そう言つて梨子に近寄つていく千歌だったが、そこでようやく千歌は菜生の存在に気がつく。

「ええつと、こちらの方は…?」

「えつと、私は——」

「もしかして…お客様!?失礼しました」

「いやいや違くて…」

私服の菜生を見て、千歌は宿泊客と勘違いしたらしく、そうかしこまって業務に入ろうとする。

「千歌ちゃん、この子。東京から私たちに会いに来てくれたみたいなの」

「初めまして、Aqoursの皆さんに色々お話聞けたらなって思つて」

「そうなの?嬉しいくらいっぱい話そう!入つて入つて!」

「いいの？えへへ、お邪魔しまゝす」

梨子にそう紹介されて、千歌は嬉しそうに菜生を自身の部屋へと案内する。最初は旅館と言う事もあつて緊張していた菜生だったが、千歌にそう告げられると後に付いて中へと入っていく。

「ここがわたしの部屋ね。ただいま」

千歌の後に付いていくと、千歌の部屋の中には既に先客がいたらしくその少女と目が合う。

「良かった、ちゃんと梨子ちゃんと会えたんだ。——その子は？」

「初めまして、高田菜生って言います。東京から来ました」

「東京から私たちに会いに来てくれたんだよ」

灰色の髪の少女に、菜生はそう挨拶すると千歌は嬉しそうに彼女に菜生を紹介する。

「わたしは渡辺曜。よろしくね！つていういかいいよ、そんなかしこまらなくても」

「そうだよ、歳もわたしたちとそんな変わらないでしょ？」

「高2だから一応タメかな？初対面でいきなり会いに来たよ、じやまずいかなって思っ

て」

そう言つて菜生ははにかむが、「そんなの気にしなくていいのに」と千歌と曜が笑うと「ありがと」と一言返すのだった。

「菜生ちゃんを通つてる虹ヶ咲学園のスクールアイドルつて、この前のイベントで1位になつた人がいる学校だよな?」

「え?そんなことも知つてるの?」

「そりやあ知つてるよ〜みんな魅力的でわたし、最後まで目が離せなかつたもん」

「出てた子みんな面白かつたよね、歌もダンスもレベル高かつたし」

「そうこの間のイベントのことを千歌と曜に褒められて菜生は「それほどでも〜」なんて照れ臭そうにする。

「こーういつたら気を悪くするかもだけど…今までほとんど聞いたことない学校だったから、まさに彗星の如く現れたつて感じだったわ」

「まあうち、最近活動開始したばかりだから仕方ないよ。それにイベントもこの前が初めてつて子ばかりだし」

元々スクールアイドル活動をしていたメンバーより、この前のイベントがスクールアイドルとしてのデビュー戦を飾った部員の方が多いのだ。

「でもAqoursのメンバーにそこまで言われると嬉しいよ、きつとみんなに教えた

ら喜ぶと思う！」

みんなの事を褒めてもらえるのは、菜生としては自分の事のように喜ぶと、ここへ来た目的を切り出す。

「…それで、教えて欲しいんだ。どうしてあんなに魅力的なパフォーマンスができるの？」

「それはね…」

「それは…?」

そう千歌がもったいぶるように切り出すと、菜生は息を呑みその後によく言葉に備える。

「…何だろ?」

「ずこつ…」

「でも言われてみると解らないもんだよね」

わからない。そう告げる千歌に思わずこけそうになる菜生だったが、曜がそうフオローを入れる。

「私たちも、スクールアイドルに憧れて始めたんだよね。キラキラ輝いてて、わたしもあななりたいてって思った」

そう千歌は微笑みながら話し始めると、菜生は真剣な眼差しでその言葉に意識を集中

する。

「でも、他のグループの真似をするのじゃダメだつて気がついて、わたし達らしく輝くにはどうしたらいいんだろうっていつも考えてる」

「私達……らしく……」

「サマーフェスティバルへの参加も、それが理由なのよね」

そう反芻する菜生に、梨子もそう告げる。

「地域を盛り上げたい気持ちはもちろんだけど、他の誰とも違う、わたし達だけの輝きを見つけるヒントになるかもしれないって」

「自分達だけの輝き……そっか、そうだよね」

曜にもそう告げられ、菜生はなんとなくピースがはまっていくのを感じた。他の誰でもない、自分達の個性。

「そうだ。明日は練習あるから、よかつたら見に来ない？」

「行く行く！来てよかつた」

千歌からそう提案されて、菜生はそう無邪気に喜ぶ。

「生きててよかつた」

「それは大げさじゃない？」

……内浦での出会いの先に待っているもの、そしてこの町に住む少女たちに待ち受け

る困難も、この時はまだ知らずにいたのだった。

12話 サマーフェスティバル

「ここがわたし達の学校だよ……って昨日も来たんだっけ？」

千歌と梨子、そして曜と共にバスで浦の星女学院へと向かった菜生に、千歌はそう告げる。

「まあ校門の前から見たただけだけどね。これから他のメンバーにも会えると思うとワクワクするよ」

自分達は何を目指していけばいいのか？解散の危機に陥っていた事を考えてのソロ活動という方針を提案した事が、果たして正解だったのか？それはまだわからない。

それでも、千歌達の言う『輝き』それがきつとヒントになる。そう思っていた。

「でも本当に入って大丈夫かな？」

「大丈夫でしょ、生徒の私たちと一緒だし」

「そうそう。そんじゃいこっか？全速前進ヨーソロ」

そう言う千歌と曜、そして梨子の後ろについて学校の中へと入って行った菜生は、二ジガクとは違った雰囲気こそわわしつつも置いて行かれない程度にだがずつとキョロキョロしていた。

「そ、そう言えばさ。虹ヶ咲学園ってソロだから人数分曲が必要だと思っただけど、それぞれで曲を作ってるの？」

「んとね、それぞれでどんな曲が良いかを決めてもらって。それを元に私が一緒に作曲してるよ？まあ私も素人に毛が生えた程度だから、音楽科の友達に手伝ってもらってるけど…Aqoursは？」

「千歌ちゃんが作詞して、私が作曲してるわ」

「梨子ちゃんとってもピアノ上手なんだよ」

「すごいー！」

不意にそう梨子に聞かれた菜生は、現状の作曲事情を教えると曜からそう告げられて目を輝かせる。

「菜生ちゃんの方が凄いわ。9曲だもの」

「まあ一人じゃないからね。よかつたら色々教えてくれない？」

「もちろん」

「やったあー！」

そんなやり取りをしていると、部室の前に辿り着く。

「ここが部室ね。おはよう〜」

そう言って扉を開いて入っていく千歌たちの後ろについて菜生も入っていく。

「初めまして〜高田菜生っていいいます。虹ヶ咲学園からA q o u r sの皆さんに会いたくて来ました」

昨日のうちに、菜生がここへ来ることは連絡済みだったらしく。みんなそう言っ入ってきた菜生を迎え入れてくれた。

「ナイストウミートゥー♪あなたが例のレインボーガールね？私は小原鞠莉。気軽にマリーって呼んでね」

「れ…レインボー？ああ虹ヶ咲だから……？」

最初にその声をかけてきたのはこの中では一番背の高い金髪の少女だった。差し出された手を握りながら、菜生はおずおずとそう尋ねる。

「ごめんね、鞠莉っていつもこんな感じだから。私は松浦果南、よろしくね」

そう言っ助っ船を出してくれたのは長い青い髪をポニーテールにした少女だった。

「ふっつそっか虹だから……」

「菜生ちゃん？」

「へ？あ、いや別に？」

急に笑い始めた菜生に、千歌が少し引き気味に声をかけると菜生はすぐに表情を戻す。

「初めまして、黒様ダイヤと申します。わざわざ私達に会いに着てくださり、嬉しく思いま

すわ」

「いえいえ、ファンなんで！」

3人とも3年生で年上なのは知っていたので、菜生は普段先輩と話す感覚で接しよう
と昨日の時点で決めていたので、昨日初めて千歌達に出会った時ほど緊張はしていな
かった。

「墮天使のヨハネよ。私のリトルデーモンにならない？」

「墮天使……？、墮天使って初めて見たよ。」

黒い髪をシニヨンに纏めている少女は、自らを墮天使と称したのだが。菜生は墮天使
を初めて見たと目を輝かせるのだが、周囲は何と言って良いのか困ったような表情を浮
かべる。

「まあ……リトルデーモンはちよつとよくわからないんですけど……」

「要するに、仲良くしましょうってことずら」

「勝手に訳すな〜！」

ふわりとしたくせつけのある栗色の髪をした少女がそう助け船を出す、それを墮天
使と称した少女は不服そうに叫ぶ。

「ふふつ、そつかそつか、よろしくヨハネちゃん」

「本当は津島善子ちゃんって名前ずら」

「バラすなー!!」

「オラ、国木田花丸っていいいます」

「よろしく花丸ちゃん」

ヨハネと呼ばれて嬉しそうだった彼女の本名を菜生に教えた少女に対してやはり不服そうにしていた。

「えつと…く、黒澤ルビイです…」

「ルビイちゃんね、よろしく!」

ダイヤの後ろに隠れていた赤い髪をツーサイドアップにした少女がおずおずとそう告げると、菜生もにこやかな笑みで答える。

「ところで、私達に聞きたいことは?」

「えつと…本当は色々聞いてみたかったんですけど、やっぱり自分達で見つけないとダメなのかなって。聞いちゃったら、その人のまねでしなくなる気がしちゃって…」

そう本題に入るようにダイヤに促された菜生だったが、気まずそうにそう切り出す。

「だから…もしよかったら練習してることか、今度のライブ見学してもいいですか?」
「えつと…」

昨日の千歌とのやり取りでヒントは得た。だからここからは自分で見つけたい。そう思つて菜生は、サマーフェスティバルまで練習の見学をさせて欲しいと。だがそう告

げると、周囲には微妙な空気が漂い始める。

「気を悪くしないでください、サマーフェスティバルは今年……開催できるか解らない状況なのです」

「え……？」

サマーフェスティバルが開催されるか解らない。その一言で菜生は頭の中が真っ白になってしまった。

「菜生さんは昨日来たばかりだったから知らなくても仕方ありませんわ」

そう言ってダイヤが切り出した話の内容で、最初は信じられなかった。

「最近この近くで、蛍のような生き物に自動車を襲われたという通報が相次ぎましてね。現在専門の機関の方が調査中なのですが、どうやら好ましくないようです……」

「そう……ですか……」

知らなかった。この街にそんな異変が起こっているなんて――

「ステージもできてただけどね……」

「何とかならないんですか？ だってお祭りまでまだ日は……」

残念そうに告げる曜に、菜生はそうすがるように告げるも全員黙って首を横に振る。

「こればかりはね……実際何が起こってるか解らない以上、無茶はできないよ」

「ですね……」

そう告げられて、菜生も事態の深刻さを理解して頷く。だがそんな菜生を放っておけない人物がいた。

「そうだ、菜生ちゃんの為にライブやろう！」

「千歌ちゃん：：そうね、折角来てくれたんだし」

「やろっか！」

そう提案した千歌に、梨子と曜はそうすぐさま賛成すると残りの皆も「やろう！」と言ってくれた。

「みんな…」

「その変わり、菜生ちゃんが見つけたもの教えてよね」

「そうね、ギブアンドテイクじゃないと」

そう言っただけでほほ笑む千歌と鞠莉を見て、思わず泣きそうになる菜生だった。

「みんなありがとう：：！私、スクールアイドルに会えてよかった！ここにきて本当によかった！」

心から菜生はそう思った。

だがそんな少女たちを嘲笑うかのように『ソレ』は現れた。

突如として街中に現れた緑色の光の粒子は、やがて一点に集まると怪獣となった。

昆虫を思わせる作りの真っ赤な頭に赤く光る眼、そして後頭部は髑髏のようになって

おり、さらに蝨を思わせる尻尾。

左右非対称の腕、さらにゴツゴツとした不揃いに飛び出した金属のような部位を持ったその怪獣は、突然現れ内浦の街並みを蹂躪すべく歩き出す。

「怪獣……？」

「なんて禍々しい……」

突如現れた怪獣は、生物と呼ぶには無機質な見た目をしていた。いや、緑色の粒子が集合して現れたり地球の生物にしては不可解だ。そんな事を考えていると、怪獣は触角からビームを放ち街を破壊し始める。

「ダメ！ あっちはサマーフェスティバルのステージが!!」

「千歌ちゃんダメ！」

避難警報がけたたましく鳴り響く中、そう叫んで怪獣の方へと駆け出そうとする千歌を菜生は慌てて止める。

「だってこのままじゃ、折角みんなで準備したステージが壊されちゃうんだよ？ そんなの……そんなの嫌だよ！」

「千歌ちゃん落ち着こう？ 私達が行ってもできる事なんて……」

そう悔しそうに告げる千歌に、梨子もそう悲し気に告げる。今現在、少女たちにステージを守る手段は無かった。強いてあげれば、このまま防衛軍が被害の広がる前に怪

獣を倒してくれることを祈るくらいしかない。

だが現実は無情だった。防衛軍の戦闘機が現れて、怪獣へと攻撃を開始するも歯が立たないどころかむしろエネルギーを吸収されてしまう始末だった。

「このままじゃ…」

「ダメ…」

よりによってステージの場所を目指して進んでいく怪獣の方を見て、弱々しく呟く少女たち。自分達に出来る事のない無力感に苛まれていた。

そんな彼女達を見て、菜生は自身と一体化しているコスモスに語り掛ける。

（コスモス、私はA r o u r sのみんなのステージを守りたい。お願い、力を貸して）

『菜生、私も君の守りたいものの為に戦う』

（ありがとう）

菜生の気持ちを汲み取ってくれたコスモスに、菜生はそう返すとそつとその場を離れ、そのまま校舎裏に隠れるように移動すると誰も居ないのを確認するとコスモプラックをとり出す。

「コスモス、行くよ…!」

そうコスモプラックに告げると、それを天に掲げて光の蕾を開き花を咲かせる。

「コスモース!!」

そしてその光に包まれた菜生の身体は、ウルトラマンコスモスへと変化する。
「シユワ!!」

空中に光を纏いながら姿を現したコスモスは、怪獣へとそのまま飛び蹴りを繰り出し、ステージのある方向からこちらへと注意を逸らす。

「あれがウルトラマンコスモス?」

「お願い、街を守って!」

初めて見るコスモスの姿に、A q o u r s は全員驚くがすぐにその声を飛ばすと。コスモスはそれに気づきこちらを振り向くと頷いた。

(絶対…絶対に守って見せる!!)

「イヤアッ!」

「□□□□ーッ!!」

立ち上がりこちらを威嚇するようにうめき声をあげる怪獣へ、コスモスも構えを取る。

だが怪獣はそんなコスモスへと連続でビームを飛ばす。コスモスは側転やバク天を駆使し、素早い身のこなしでそれを回避していく。

「テリヤアア!」

そして怪獣が溜め動作を見せた隙に高く跳躍。そのまま怪獣の頭上を飛び越えその

背後に静かに着地した。

そしてこちらを見失っている怪獣へと、目から透視光線『ルナスルーアイ』を投射する。

すると怪獣の身体は、無数のカオスヘッダーと恐らくこれが蛍騒動の犯人であろう車のパーツやらゴミやらが大量に見て取れる。

ようやくコスモスが背後に回った事に気がついた怪獣―カオスバグ―は、コスモスへと突進を繰り返す。だがそんな攻撃ではコスモスは動じない。

ギリギリで身体を左に逸らして回避すると、相手の脇に右腕を通してそのまま自身の背に乗せるようにして投げ飛ばす。

『戦わない』ことが目的であるルナモードにしては乱暴かもしれないが、様子見をしつつ相手の重量やパワーを測るのには有効な手段ではあった。

ルナのパワーでは大したダメージを与える事はできなかつたらしく、すぐさまカオスバグは起き上がる。だがもう遅かった。

「ハアアアア……」

両手を胸の前で掬うように動かすと、そこへと光が収束していく。

「ムウウツ!!」

そして、右腕をそつと突き出すことで右手のひらから光線を放つ。

かつてリドリアスからカオスヘッダーを切り離れた技、ルナエキストラクトだ。

これでゴミからカオスヘッダーを切り離せばこの騒動も解決する。

そう菜生は、そしてコスモスも確信していた。

(…なツ!?)

だがしかし、カオスバグはルナエキストラクトのエネルギーを吸収し、尻尾で自身のエネルギーに変換してしまった。そしてその様は、皮肉にも蛍が光っているようだった。

「効いてないすら…」

「ていうか吸われてたわよね…」

その光景を見て、花丸と善子は不安そうに呟く。

(切り離せないの…?)

9人の少女が見守る中、想定外の事態に菜生はコスモスの中で動揺していた。

「□□□□ーッ!」

カオスバグが吠えると、その目が赤から青に変わる。そしてその目から先程までとは比較にならない威力で光線が放たれた。

「ハアッ!」

だがコスモスも咄嗟に『攻撃を跳ね返す』能力を持った技、リバースパイクバリアを

展開する。

—がしかし

「イヤッ!?!」

バリアごとコスモスは後方に押し出され、そのままバリアを突き破られてしまう。胸部にまともにも当たった光線の威力によって、コスモスの身体は宙を舞い内浦の街中に叩き付けられる。

「ウルトラマンさん…」

「これはまずいわね……」

ダメージによって起き上がれないコスモスを見て、ルビイと鞠莉がそう呟く。

「お願いウルトラマン、頑張つて!」

再び目が赤に戻ったカオスバグは、勝ち誇るかのように吠ええるとコスモスへとにじり寄っていく。それを見てコスモスへと千歌がそう激を飛ばす。

(千歌ちゃん…そうだ、私は負けない!絶対に…絶対に守るんだ!!)

「ウウウツ……」

その声を聴き、コスモスは拳を握りしめると立ち上がる。

「デリアアア!!」

そしてコスモスはその身に深紅の光を見に纏い、太陽の如く赤き戦いの戦士へと姿を

変えた。

13話 虫強襲!

被害を最小限に抑える為に、ルナエキストラクトでカオスヘッダーをゴミから分離させようとしたコスモスだったが、その光線は吸収され思わぬ反撃を受けてしまう。

だがここでカオスバグを倒さねば、折角のA q o u r sのステージを破壊されてしまう。だからこそ、コスモスはここで負ける訳にはいかない。そう自信を鼓舞してなんとか立ち上がった。

「デリアア!!」

拳を突き上げ、赤い光を見に纏ったコスモスは、基本形態のルナモードから戦闘形態であるコロナモードへと姿を変えた。

(もう容赦しない!)

「ダアツ!!」

拳を突き出すようにしてファイティングポーズを取ったコスモスは、そのまま突撃してくるカオスバグを待ち構えていた。

「ウルトラマンが……」

「変わりましたわ……」

初めて見たコスモス、そしてさらに彼のモードチェンジに思わず圧倒されてしまう。見た目も声も穏やかなルナモードとは打って変わって低く勇ましい声で戦う姿には威圧感すら覚える。

「フッ！ハッ！デリャッ!!」

カオスバグが左右の腕を突き出して攻撃してくるのを、拳を振り落として払いのけるとその腹に拳を撃ち込む。

その拳の重さに思わず後退するカオスバグだったが、すぐさまコスモスへと肉迫する。だがコスモスはそれを避けると背後に回り込み、相手が振り返ったのに合わせて両拳を同時に相手の腹に撃ち込む。

「フッ！」

両腕を広げた後、どっしりと構えをとる。

なおも突進し、コスモスへと両腕を振り下ろすカオスバグだったがその攻撃は歯の根蹴られ、再び振りかぶった左腕も側転でその横を通り抜けられ虚しく空を切る。

「ダアアッ！」

そして側転から体勢を整える勢いのままに相手を蹴り飛ばす。

「凄い……」

ルナモードも虚を突かれただけで苦戦していたわけでは無かったが、コロナモードへ

とチェンジしたコスモスの攻撃には一切の容赦はなかった。

「□□ーッ!!」

「ウオオッ!!」

尚もコスモスへと体当たりしようとする突っ込んで来るカオスバグに対して、コスモスは真っ向からぶつかると。両者密着したまま膠着状態となる。

ーピコンピコン

だが、その時コスモスのカラータイマーが点滅を始めた。ウルトラマンコスモスは、地球上ではおよそ3分間しか活動することが出来ない。

カラータイマーの点滅が、コスモスに残された時間が残り少ない事を教えていた。

「オオオッーデリヤッ!!」

取っ組み合いが続いていたが、コスモスはカオスバグの身体を弾き飛ばすと連続蹴りを食らわせ相手を寄せ付けない。

そして相手の両腕を掴むとそのまま相手を投げ飛ばしてしまった。地を転がる相手の次の出方を待つかのようにコスモスは構えを取ったまま追撃には出なかった。

するとようやく立ち上がったカオスバグは、接近戦ではどう足掻いても勝てないと察し。再び目を青く光らせる。

ルナモードのリバースパイクバリアを貫いた、高威力の光線を再び放つつもりなの

だ。

それを見たコスモスは両腕を水平に広げると、掌にエネルギーが収束していく。そして腕を円を描くように動かすと、コスモスの周りにはエネルギーの余波による軌跡が生じる。

カオスバグの攻撃を、真つ向から打ち破ろうというのだ。

「次でフィニッシュね…」

「大丈夫、ウルトラマンが勝つよ」

「え…?」

そう千歌が眩くと、梨子をはじめとして全員の視線が千歌へと向く。

「なんかね、上手く言葉に出来ないけど。ウルトラマンは大丈夫だって感じるの」

「そう…そうよね、きつと」

9人の少女が見守る中、両者は必殺の一撃を放とうとしてた。

「又ウウウ…」

(これで…終わりッ！)

菜生の何としてもAquoursのみんなが作ったステージを守りたい。その思いがコスモスの身体を突き動かし、全エネルギーを集中させる。

「デリアアアアッ!!」

コスモスは収束させたエネルギーを、右掌の下に左掌が来るようにして解き放った。カオスバグもそれと全く同じタイミングで目から光線を放つ。

ウルトラマンコスモス最強の破壊光線―ネイバスター光線―とエネルギーを吸収する能力を持つカオスバグの光線は激突するが、次の瞬間には完全に押し返しカオスバグの頭を貫いていた。

最大の力で放たれたネイバスター光線の威力は凄まじく、カオスバグの身体はその凄まじいエネルギー量に耐えきれず粉微塵に吹き飛ばされてしまった。

「やったー!」

手を取り合って喜ぶAqoursの少女たちの方へ一度視線を向け無事を確認したコスモスは、すぐに飛び立ち青い空の中へと消えていった。

校舎の裏で変身を解除した菜生は、疲労で思わず膝を付いていた。

「はあ…はあ…良かった、なんとか守れた。ありがとうコスモス」

そうコスモブラックに語り掛ける菜生だったが、それでも疑問に思う事があった。

(今回カオスヘッダーは、この前と違ってゴミに憑りついた…何が狙いなのか…?)

だがその答えを知るものは居ない。解っているのは、カオスヘッターによつて滅ぼされた星が存在するという事実だけだ。

「あつ菜生ちゃんいたいた！どこ行つてたの？気がついたら居なくなつてて心配したんだから」

「千歌ちゃん…ごめんごめん、逃げてる人見かけて追いかけたら迷つちやつてさ」

「まったく、菜生ちゃんまだこの辺に慣れてないんだからそういう時はちゃんとわたし達に言つてくれないと」

「ごめんごめん、気をつけるよ」

咄嗟に思いついた言い訳を後頭部を右手で抑えながら告げる菜生だったが、なんとかまかせたようだった。

「でも凄かったよね、ウルトラマン」

「思わず背筋がゾツとしたわ…強すぎて」

そんな会話をする1年生を横目に、思わず『それほどでも』なんて言いそうになる菜生だったが、そこはなんとか我慢する。

「でもこれでサマーフェスティバル開催できるんじゃない？」

「確かに、先ほどの怪獣がああ騒動の原因であつたとすれば、ウルトラマンさんのお蔭で解決したと言えますわね」

「そっか!じゃあ私達ライブ出来るんだ!!」

そう菜生が告げると、ダイヤはそう言って納得し千歌はそう言って喜ぶのだった。

「きつとできるよ!」

「菜生ちゃんかびつくりするライブにするよ」

「だからちゃんと答えを見つけてね」

曜と梨子もそう言ってライブへの意気込みを菜生に告げるのだった。

「でもお祭りって言ってもまだ日にちはあるし、菜生ちゃんそれまでどこかに泊まるの?」

「もしよかったらホテルオハラに特別価格で招待するわよ」

当日までどうするかを果南に問われると、鞠莉がそう口を挟む。すると「ふっふっふ……」と千歌が得意気な表情をして割って入ってきた。

「なんと菜生ちゃん……十千万のお客様なのです!!」

「ワオ!?!」

「ま……まあ千歌ちゃんとそのご家族のご厚意で……」

さすがに定価で宿泊するだけの財力は無いので最初はどうしたものかと悩んでいたのだが、差塩は千歌の部屋に泊めてくれると言い出したのだが、さすがに旅館でそれはまずいと言った菜生に、かなり破格な値段で泊めてもらえることとなったのだ。

「なら仕方ないわね、また来る時があったら是非ウチに来てね」

「あの淡島のおつきいホテルだよね……？」

「そだよ？」

「ぜ……ぜひお願いします……」

鞠莉の家がホテルを経営しているのは初耳だったが、ホテルの名前に聞き覚えがあった菜生は隣の千歌にそう聞くとなんでもないかのように頷かれてしまった。

またアルバイトしようかな？そんな考えも脳裏をよぎりつつ菜生はその申し出に答えるのだった。

カオスバグとの戦闘の後、その残骸をS R Cが調査した結果。やはり最近の蛍に自動車を襲われただのの騒動の原因はカオスヘッドーにあったこと。ウルトラマンコスモスがカオスバグを倒したことによって、今後同様の事件が起きる可能性はほぼないであろうということが明らかになった。

なので、当初の予定通りにはいかなかったが、サマーフェスティバルは3日後に開催されることが発表された。

なので開催までの3日間、菜生はAqoursの練習のサポートをしながら当日を楽しみにしつつ、彼女たちと交流を続けたのだった。

「そういえば、菜生ちゃんの学校ってどんなところなの?」

「お台場にある学校で、科がいっぱいあるんだよね。私に通ってるのは情報処理学科だけど、普通科だったり音楽科だったり国際交流科とかさ?」

「すごい!」

「未来ずら!」

練習中、不意にそう千歌に聞かれて答えると、逆に聞いた側が言葉を失っていた。

「あつでも、浦の星みたいに海が近いんだけどね、海は断然こっちのほうがきれいだよ」
「本当?」

「うん、それにこっちのほうが星がよく見えて私は好きだなあ」

「菜生ちゃんって星が好きなの?」

「うん。星を見てるとき、落ち着くんだ。でも東京の空ってあんまり星が見えないんだよね」

実は夜な夜な外に出て星を眺めていた菜生は、そう言って笑っていた。

「こっちに來て私の悩みが晴れたみたい、星空もきれいに見れて本当にここに來てよかったって思ってる。みんなAqoursのお蔭だよ、ありがとう」

「まだ気が早いですよ」

「そうそう、ちゃんとサマーフェスティバルでのヨハネ達のパフォーマンスを観て貰わないと」

「そうだったそうだった、気が早かったね」

この場所での出会いは、きつと永遠に忘れる事のない思い出になった。

そしてライブ当日――

「ほえくすっごい人数……本当に街の人たちが総出でやってるお祭りなんだね」

会場に集まっている人々を見て、菜生は思わずそう声を漏らした。

「菜生、はいコレ。練習と準備を手伝ってくれたお礼」

「ヨハネちゃんありがとう。……何これ？」

「堕天使の涙よ」

「あータコ焼きてきな？ いただきまーす」

不意に善子からそう言つて手渡された、タコ焼きによく似た食べ物を口に含んだのだが、その顔は一気に赤くなる。

「辛い！ 辛い！！ 辛い！！ 私辛いのだメなんだよ……」

墮天使の涙と称されたそれは、タコでは無くタバスコが大量に入っており辛いものが苦手な菜生にとつては味覚より先に痛覚が働く代物だった。曰く、他のメンバーにも指摘されてかなり辛さを控えたらしいのだが、それでも菜生が異常に辛いものに弱いため耐えられなかったのだ。

「ゴ、ゴめんなさい……まさかそんなに苦手とは思わなくて……」

そう言つて菜生に水を手渡しながら善子は申し訳なさそうに告げる。

「……んぐんぐ……ふうう……いや大丈夫だよ。私辛いものメチャクチャダメでさ?」

水を飲んでようやく落ち着いた菜生は、そう言つて笑う。

「善子ちゃんだから墮天使の涙はやめておこうつて言つたずら……」

「気にしなくていいよ。私が特別苦手なだけだから……」

先の菜生の叫び声が聞こえたのか、様子を見に来た花丸がそう告げる。

「最初にルビイが食べた時よりは辛くないけど、やっぱり辛いものは辛いよ」

ルビイがそう告げるのを聞いて、これでマシになってのか……と菜生は少し最初のを食べていたらタダでは済まなかったなど怖くなってしまふ。

(……コスモス、私が辛いのを食べて泣き出したら治してくれる?)

『残念だが、それは出来ない……』

(だよね……)

「…?どうしました?」

「へ?なんでもない何でも!」

食べ物好き嫌いをウルトラマンに助けてもらえるとは思ってはいなかったが、想像通りの返しに思わず肩を落とすと不審がられたので慌てて誤魔化したのだった。

「それよりさ、ライブ頑張つてね!私ちよつとライブまで他のお店見てくるね?」

そう言つてその場を菜生は離れたのだった。

そして、遂にA q o u r s の9人の少女たちによるライブが始まった。

「凄い熱気…そっか、これがスクールアイドルの輝きなんだ」

街中の全員が、このライブを心待ちにしていたことが解る人の数とその人々による歓声。

初めて生で見たA q o u r s のライブ。ステージにいる彼女達は、以前モニター越しに見たライブとは比べ物にならないくらい、ステージ上にいる彼女達は輝いて見えた。

以前初めて彼女達と出会った時に千歌が行っていた、『自分達だけの輝き』それは誰か

の真似では決してなく、自分達で自分達の道を探す事なのだろう。

きつと彼女達は、自分達が進む道が見えているからこそこの輝きを生み出せるのかもしれない。

「そっか…：A q o u r s のみんなも、始めた時はきつと目標にしてたスクールアイドルもこんな風に見えてたんだ」

彼女達と会った事でぼんやりと見えたものが、今はより鮮明に見えるようになった気がした。

「もう帰っちゃうんだ?」

「まあね、そろそろ帰らないとニジガクのみんななども練習しなきゃだし」

サマーフェスティバルの翌朝、東京へ帰る菜生をA q o u r s は総出で見送ってくれた。

「それでわかった? 菜生ちゃんが知リたかった事」

「うん! 私も見つけるよ、私達だけの輝きをさ」

そう言つて菜生は笑いかけた。

「うん！きつと見つかるよ。そうだ、スクールアイドルフェスティバルには出るの？」
「すくーるあいどるふえすていばる？」

千歌から告げられた単語に思わず首を傾げる菜生だったが、それには梨子が説明を入れる。

「簡単に言えば、スクールアイドルのお祭りね。参加資格は学校所属のスクールアイドルであることだけだから、もしよかつたら虹ヶ咲学園のみんなも出てくれたら嬉しいわ」

「そう言う事なら私がみんなに声かけてみるよ」

「ありがとう。また詳しい話はその時にね」

「オッケー！じゃあ、またね」

「またね」

そう言つて菜生はヘルメットのシールドを閉めると走り出した。

だが今回初めて怪獣以外に憑りついたカオスヘッダーだったが、これはまだまだこの先待ち受けている困難のほんの序章にしか過ぎないことを菜生はまだ知らない。

14話 熱い夏、来る!

沼津から戻ってきた菜生は、夏休みに入って初めて同好会のメンバーと顔を合わせていた。

「え〜!? 菜生せんぱい A q o u r s と会ってたんですか!？」

「うん、予定より長くなっちゃったけどね」

今現在、スクールアイドルの中でもトップクラスの実力を持つ A q o u r s と会っていたなんて言われて、羨ましいと思わないはずもなくかすみを筆頭に皆にどうだったかだの質問攻めにあっていた。

「それでさ、スクールアイドルフェスティバルって言うのに誘われたんだけど…みんなどうする? 出てみない?」

「スクールアイドルにとつては夢のイベントですよ? もちろん出たいです!」

「そうよね、トップクラスのスクールアイドルと同じ舞台に立つ機会なんて見逃せないわ」

「じゃあ参加するって方針でいいよね。参加の手続きは私やつとくよ」

折角できた繋がりを大事にしたい。そんな想いもあり、参加するという意志をみんな

が示してくれたので、菜生が代表して運営にその旨を伝える事となった。

「でも、スクールアイドルフェスティバルって参加資格は学校に所属しているスクールアイドルってことだけだけど、メインのステージに立てるのは大会で実績のあるスクールアイドルだけ…」

「その辺はもうリサーチ済みだよ。その為にソロ部門のあるライブイベントも調べてるから、まずはメインステージに立つためにもライブに慣れるのが良いと思うんだ」

まだ活動を始めたばかりの同好会では、参加は出来てもメインステージには立てないのではないか？そんな不安に菜生はそう答える。

「やっぱり出るからにはいろんな人に観てもらいたいじゃん？少なくとも、私はみんなのライブを沢山のの人に観てもらいたいって思ってる」

あくまで菜生がそう思っているだけで、当人はそうは思っていないかもしれない。でもそうならメインステージに立てるかを心配はしないはず。そう思っ、出来るなら全員が立てるようにサポートをしたい、それが今の菜生の気持ちだった。

「そこを目指すのなら、やることは一つですね……」

「せつ菜ちゃん？」

「合宿です！スクールアイドルフェスティバルを目指して、合宿をやりませんか？」

「それいいかも」

数日後、こうして虹ヶ咲学園スクールアイドル同好会の夏合宿を行うことが決まった。

その日の練習後、菜生は音楽室で水色の髪肩のあたりで切り揃えた身長もあまり変わらない少女と話をしていた。

「へー沼津のスクールアイドルの曲って桜内梨子がつってんだ?」

「美月ちゃん知ってるの?」

「知ってるも何も、あたしコンクールで見かけたことあるもん。凄い上手なんだって」

菜生に美月と呼ばれた少女はそう告げる。『遠山美月』何を隠そうこの少女こそが、菜生が同好会のみんなの曲を作るのを手伝っている少女なのだ。

「どうりで上手くなってる訳だ。菜生才能あるしこのまま音楽科に編入しない?」

「それはしないかなあ、だって私の夢知ってるでしょ?」

「ははっそりやそーか」

そう言つて笑う少女に「もうやめてよ」と言いつつ菜生も笑みを浮かべる。

「そもそも美月先生の教え方が上手だからだよ」

「褒めたつてなんも出ないぞ? 本当にそう思ってるなら今度ご飯おごりな?」

「はいはい。美月ちゃんもスクールアイドルやらない? 美月ちゃんかわいいし」

「それはマジで勘弁。知ってるでしょ？アタシ音痴なんだよ。そもそも好きな音楽のジャンルの的に合わないし」

知り合いに手当たり次第に勧誘する菜生に美月はそう苦笑いを浮かべる。

「音痴にアイドルなんて勤まるかよ。それにあたしやまだ空手現役だかね？」

「それもそつか、ごめんね」

「まあいいよ。菜生の気持ちも解るし」

そう言ってお互い微妙な空気が流れてしまった。

小学生の頃、菜生と美月は空手で一緒だった時期があったのだ。菜生がある事情でやめてしまい、音楽に興味を持った時は二足の草鞋だった美月がピアノ教室を紹介したり。なんだかんだ歩夢を覗けば一番付き合いの長い腐れ縁だったりする。

「まつ精々頑張んな？」

「ありがとね」

彼女なりのエールを受け取って、菜生はその日の練習を終えるのだった。

「そうだ、菜生こんな噂知ってる？」

「噂？」

「なんかオーロラを見ると永遠に眠っちゃうんだってさ」

「何それ？美月ちゃんそんなの信じてるの？」

「なわけ、妹が言つてたんだよ」

「ははっ彩月ちゃんそういうの好きそうだもんね」

知つてるかと聞かれた噂の突拍子の無い内容に思わず笑つてしまふ菜生だったが、月の妹からの情報と聞いて、噂好きだからなんて笑つて納得する。

「そういえば彩月ちゃん元気?」

「おかげさまで、本当にありがとう」

「大したこととしてないよ、早く退院できるといいね」

「もうすぐ秋には退院だつてさ」

「退院したらお祝いしなきゃね」

「そうだね」

美月の妹は今現在入院しているのだが、その話はまたの機会に。

そしてありえないと笑つた噂が、近いうちに菜生にとつて最悪の形で降りかかることをこのときはまだ知らない。

そして迎えた合宿当日。

ただし合宿といっても、海辺の別荘だったり大きな旅館に泊まつたりすることは無く

学園の敷地内にある研修室を借りることになった。

「この広さでちゃんと人数分の布団もあるし、泊まる場所場所としては申し分ないね」

和室風の造りとなつている研修室に全員で移動して荷物を置くと、まずはと菜生は布団など人数分あるのかを確認する。

「まずは晩御飯にしよっか？」

「調理室の使用許可も取つてるし、みんなで作ろ」

その日は夕方集合だったのもあり、初日は一緒に晩御飯を作ったりして交流を深めるのを第一にしたのだったが。

「やっぱこういう時はカレーっしょー！」

「めっちゃ甘くしてね？」

「菜生ちゃん辛いのだメだもんね」

そんなやり取りを横目に泡だて器を使っていた璃奈はある事に気がつく。

「何か独創的な匂い……」

「できましたー！」

その匂いの方に視線を向けるとそう自信ありげな様子のせつ菜がいたのだが、彼女の目の前にある鍋の中身は紫色の液体がぐつぐつと沸騰していた。

「お味見いかがですか？」

「…!?!」

そう言われてしまえば断るわけにもいかない。意を決して一口食べると、味も大変独創的だった。

「どうですか?」

咄嗟に涙目のボードをとり出して、直接言及することを璃奈は避けようとした。

「涙が出るほどおいしいんですね!?!」

「はわわわわ……」

はつきり言った方が良かったのかもしれない。そう思ったが、嬉しそうな彼女の表情を見るとその言葉は喉の奥に引っ込んでしまった。

だが、彼方がこっそり味を調整してくれたおかげで、夕飯の時には「見た目よりおいしい」と好評だったので、璃奈は密かにほっとしたのだった。

「おいしかったね」

「そうだね」

菜生と歩夢、ふたりならんで食器やらを洗いながらそんなたわいのない会話をしてい

た。

「ねえ覚えてる？小学校の宿泊研修の時も、こうやってふたりで並んで洗い物したよね」
「あくあつたあつた！あの時もカレーだったっけ？」

「違うよ菜生ちゃん、あの時はハヤシライスだよ」

「一緒じゃん？」

「違うよ」

そんななんでもない会話をしていたのに、どこか違和感を覚えていた。

「ねえ菜生ちゃん」

「ん？」

「沼津に行った時も、怪獣が出たんだよね？」

「出たよ？でもコスモスがすぐやつつけてくれたから何ともなかったよ」

不意に心配そうに問いかけてくる歩夢に、菜生は何の事でもないかのように笑って答える。でも歩夢はそれが納得いかなかった。以前ガモランが現れた際も、子供を庇って囿になって注意を引こうとしたり最近何かと無茶な事をしているから。

「でも……」

「大丈夫だよ、私はA q o u r sのみんなと逃げてただけだし。歩夢は心配症だなあ」

「心配するよ、菜生ちゃん優しいからすぐ無茶しようとするんだもん」

「歩夢…ありがとね、心配してくれて。でもやつぱり困ってる人がいれば助けたいって思うし、私はずっとこんな人なんだと思う」

作業していた手を止めて、菜生がそう話すのを歩夢も手を止め菜生の方を見つめていた。

「でも自分の命を危険に晒すようなことは私もしたくない。お母さんも…：ましてやお父さんも、そんなこと望んでないって解ってるつもりだから」

「菜生ちゃん…」

「だから心配かけちゃったのはホントゴメン！でも内浦に行つてた時は本当に逃げただけだから、ね？」

本当は逃げていた訳では無く、自分は戦っていた。なんて言える訳もなく、そう言つて自分を本気で心配してくれている幼馴染をだますのは気が引けるが、それでも菜生は歩夢に本当の事を言うことは出来なかった。

「それにきつと、私達おばあさんになつてもこんな感じで一緒にいる気がする。色んなことを経験して、色んなものを見てき」

「うん、そうだよね」

今までも、これからも2人一緒にいるんだろうな。そう菜生も歩夢も思っていた。

—翌日

「あと3周いくよ〜」

グラウンドをランニング中、先頭を走る菜生はそう後ろを振り向きながらそう声をかける。

「菜生先輩とても涼しい顔して走ってる…」

「すごい…」

「私も負けてられません!」

「愛さんも!」

空手を辞めた後も好きだからと身体を動かすことの多かった菜生は、同好会の中でもかなり体力に自信のある部類の人間だ。

そんな菜生が一層張り切って走るものだから元々どちらかというインドア派だった人間は辛かったかもしれない。

「ふう…おつかれーじゃあ20分休憩ね」

「つかれた〜」

そう言っつてへたり込む仲間を横目に菜生は水道まで歩いて行くと水で顔を洗う。

「先輩」

「しずくちゃん?」

「ちよつとお話があるんですけどー」

そう真剣な眼差しを向けるしずくの話は「まだ誰にも言わないでほしいのですがー」といつて切り出されるのだった。

「わかった。じゃあそのつもりで私もイベントのエントリーだったり練習時間だったり調整するね」

「ありがとうございます」

そう菜生に頭を下げるとしずくはかすみと璃奈の元に戻っていく。

「あーゆむつ、大丈夫?」

「ちよつと疲れちゃったかも」

「ごめんごめん、ジヨギングなのに張り切りすぎちゃった」

対して菜生は歩夢の方に寄って行くと、そう言っつて歩夢の隣に座る。

「菜生ちゃんやつぱり体力あるよね」

「そうかも？ 体動かすのはなんだかんだずっと続けてたからね」

「ふふっそうだったね」

それにしても自分はダンスだったりりの練習ではあまり引つ張っていけないからと言つて頑張りすぎたなど自嘲的に笑つてしまふ。

「さてと、そろそろ戻ろっか」

「そうだね」

先に立ち上がった歩夢の後に続いて、菜生もみんなに合流すべく立ち上がった。

「結構汗かいたね」

「それなら次はアレしかないんじゃない？」

合流すると、果林がそんな含みのある言い方をしていて菜生はなんのことやらと首を傾げる。

「菜生ちゃん、水着持ってきてる？」

「なるほど！」

その質問で合点が言った。

この後は全員で校内のプールを使用して全身の筋力や肺活量を強化する練習——ではなく普通に遊んでいた。

「結局遊んでしまっんですね…」

「そんなこと言つてせつ菜ちゃんも可愛い水着持つてきてるじゃん」

「それは…」

もつとしっかり練習しなければいけないのにと項垂れていたせつ菜を、菜生がそう言つて茶化すと吹っ切れたのかせつ菜もみんなとバレエをしたりなんだかんだ楽しそうにしているのだった。

「菜生ちゃんつて意外と筋肉あるのね」

「ほえ? ああまあ…前は色々運動してたから……」

「なになに? なつちなにやつてたの?」

そんなみんなの様子をぼうつと眺めていると、不意に果林にそう聞かれてしどろもどろになりながら答えると愛もその話題に食いついてきた。

「えつと…空手とか……かな?」

「へく凄いやん!」

「意外です…てつきりピアノとか文科系の習い事をしていたのだとばかり…」

正直に言うか迷つたが、こういう時に嘘をついてもどうせすぐバレると思ひ菜生は正直に答えると気づけばしどろもほかの面々も周囲に集まつてきていた。

「まあ小学校でやめちゃつたし、中学はピアノ習つてたから間違ひじゃないよ」

「でも、どうして空手はやめちゃったんですか？」

「……」

一切の悪気は無いのだろう。でも菜生は、その問いにすぐに答えることが出来なかった。

「ごめんなさい。触れられたくないですよね……」

「ああいやゴメンそんなことないよ？相手を泣かせちゃってさ、なんか後味悪くて嫌になったのかもね」

「やっぱり先輩は優しいんですね」

「そんなことない。あの時の私は、多分過剰に人を傷つける事を怖がってただけだよ」

そう答える菜生の目は、どこか冷たかった。

その日の夜、お風呂を済ませてそろそろ寝ようかという話をしていた際。歩夢は菜生の姿が見えないことに気がついた。先の事もあり不安になってしまう。

「菜生ちゃんどこいったんだろ？」

「そういえばさつきから姿を見ませんね」

不意にそう呟くとせつ菜もそういえばと周囲を見渡す。まあスマホがあるし電話をかければすぐわかるだろう。そう思つて電話をかけてみると、菜生のカバンに近くで菜生のスマホが着信音を奏でる。

「もう菜生ちゃんつたら……」

「夜の校内は流石に心配ですし、探してきますね」

「あつ私も行く」

「じゃあもし行き違いになつたら連絡するよ」

せつ菜と歩夢が手分けして探しに行くのに対し、愛は行き違いになつて混乱すると悪いかからと室内に残る事を選んだ。

「もく、菜生ちゃんどこに行つちやっただらう……」

夜の校内は、予備灯の明かりと周辺のビル明かりなどで仄かに明るいがやはり不気味な気配がする。こんな中菜生は一体一人で何をしているのか? そう思いながら校内を歩夢は一人歩き回っていた。

「もしかして星を見てるのかな?」

菜生の事だ。きつと屋上かどこかで星を見ているのかもしれない。そう思い立つて歩夢は屋上へと駆け出した。

(違うな…きつと今も怖いんだ…)

「菜生ちゃん！」

「歩夢…」

屋上で星空を見上げていた菜生をみつけた歩夢は、思わず彼女の名前を大声で呼んで駆け寄る。

「もう何にも持たないで居なくなつて…心配したんだから…」

「へっ？うわホントだ！スマホ忘れてる…」

完全に気がついていなかった菜生は歩夢に指摘されて、ズボンのポケットに手を突っ込んでようやく気がついたらしい。

「菜生ちゃん良かったの？空手やってたこと話して」

「別に嘘ついたってバレるだけだし、実は武術もちよつとできますつてかつこいいじゃん？」

「でもやめた本当の理由は—」

「歩夢！—」

なんのこともないかのように笑う菜生に、そう思わず問い詰めるような勢いの歩夢を菜生は遮った。

「ごめん歩夢、その話はまだしたくない…」

そう言つて菜生は先に校内へと戻つてしまう。

「菜生ちゃん……」

そんな菜生を追うことは、歩夢には出来なかつた。

そしてそんな彼女の頭上には、不自然にもオーロラが発生していた。

15話 乙女の眠り

そのまま昨晩は、歩夢より先に戻ってきた菜生はそのまま寝てしまい歩夢の方を気にかける余裕も無かった。

「歩夢！歩夢……！」

「うそ……これだけやって起きないなんて……」

翌朝、起床時間を過ぎても歩夢が起きなかつたのを最初は寝坊なんて珍しい程度に考えていたのだが、昼を過ぎても一向に起きる気配がないので全員が不安に駆られていた。

「そつ……そうだ、お母さんに……！」

『もしもし？菜生どうしたの？』

「お母さん、歩夢が……歩夢が！」

『ちよつと菜生!?落ち着きなさい、歩夢ちゃんがどうしたの？』

なんとか落ち着きを取り戻した菜生は、母に事情を告げると歩夢はSRCの医療センターに搬送された。

「……は……？」

歩夢は気付けばどこか見覚えのある風景の中に立っていた。

「そうだ、……って幼稚園の……」

そう、幼稚園のお遊戯会をした体育館の中だ。どうして自分がこんな所に？そう思っているときさらに信じられない光景を見ることになった。

『カエルの騎士、オレは悪魔に魂を売ったのだ！』

『そんなこと絶対許さない！』

目の前のステージで、魔法使い風の杖をもって狐の面を被っているのは同じ幼稚園だった男子だった。そしてその男子と向かい合うようにして立っている騎士風の衣装を着て、カエルの面を被っていたのは菜生によく似た少女だった。

『カエルの騎士、どうか狐さんの中の悪い悪魔をやっつけてください』

その菜生に似た少女の背後に立っていたのは、なんと幼き日の自分だった。歩夢は今、幼稚園の時の自分や菜生を見ていたのだ。

「あれは……私？」

このステージにも、そこに立っている園児にも見覚えがある。これは自分の過去の光景を客観的に見ているのだと歩夢は直感的に理解した。

そうしていると、演劇はどんどん進んでいきカエルの騎士が狐を倒してしまった。

『ありがとう、これでこのくみにも平和が……』

『歩夢ちゃん、くみじゃなくて国ね』

『あつ……』

『また歩夢のとちりかよ』

やんわりと間違いを指摘した菜生とは対照的に、男子は冷ややかな声を歩夢に飛ばす。

『そんな言い方無いだろ！またやり直せばいいじゃないか』

菜生はそれを庇うように男子と歩夢の間に立つと、男子はその視線を今度は菜生に向けてる。

『なんだよ王子様気取りか？かっこつけんなよ』

『王子さまって……ボク女の子なんだけど?』

『うっせえこのオトコオンナ』

『何だ?!』

その光景を見て歩夢は思い出し出していた。小学校低学年まで菜生の一人称が『ボク』だったこと、そしてボーイッシュな格好をしていたためこうやって冷やかされていた事があつたと。

だが幼い歩夢は、自身に向いていた矛先が菜生に変わったことで菜生が目の前の男子と一触即発の雰囲気になったのを見て泣き出してしまう。

「もうやめて!」

そんな歩夢の叫びは虚しく、ただ菜生と少年が喧嘩を始めるのを眺める事しかできなかった。

夢の中の出来事に、干渉できなかつたのだ。

一方でその頃、医療センターに運びこまれた歩夢は菜生の母によって検査を受けていた。

「母さん、歩夢は?」

待合室で、同好会のみんなとそれを待つていた菜生は、『高田しのぶ』と書かれた女性――菜生の母が室内に入ってきた途端そう詰め寄るようにして立ち上がった。

「残念だけど、まだ目は覚めてないわ」

「そう……」

首を横に振る母を見て、菜生はそう肩を落とすと座り込んでしまう。

「でも、そのうち目覚めるって可能性もあるんじゃない？」

「歩夢ちゃんの場合、異常な点がいくつもあるの」

「異常……？」

そう彼方が希望的観測を述べるも、それはバツサリと切り捨てられる。

「彼女、ずっとレム睡眠のままなの。つまりずっと夢を見ている状態、ここに運び込まれてからずっとね……」

そう告げると、さらに周囲の空気が暗くなるが母は話を続ける。

「昨日の夜、歩夢ちゃんの様子に変なところは無かった？」

「そう言えば昨日、屋上から戻ってきたらそのまま布団に入っすぐ寝息を立ててたよ
うな……」

「やっぱりね……」

「どういふこと？お母さん」

母にそう聞かれて、せつ菜が代わりにそう答えると納得したように頷いた母に菜生はそう問いかけると、

母は事の詳細を説明してくれた。

「実はね、今歩夢ちゃんと似たような症状の人が病院に搬送されているの。それで、連絡してくれた人の証言には、倒れる直前にオーロラのようなものを見たって証言があるの」

「でも昨日はなつちも屋上にいたんだよね？なんで歩夢だけなの？」

その母と愛の言葉に、菜生はサーツと血の気が引いて行くのを感じた。あの時一緒に戻っていけば、歩夢がこんな目に遭う事は無かったのにと。

「私のせいだ……」

「菜生？」

「私がスマホを忘れて屋上に行かなきゃ歩夢は屋上には来なかった！私が先に戻ったりしないで、一緒に戻っていけば……私の……私のせい……」

そう頭を抱えて菜生はうわごとのように繰り返し始める。空手を辞めた本当の理由、その原因となった出来事を思い出していたあの時、歩夢にきつく当たったりせず一緒に戻るべきだったんだと。

「菜生。大丈夫、あなたは悪くないわ。それにお母さんたちを信じて、必ず助けるから」

「……うん……」

そう菜生の肩をもってそう告げる母に、菜生はそう静かに頷くのだった。

「今日は遅いし、あなた達も泊まって行きなさい。全員が泊まれる部屋を確保してくるわ。親御さんに連絡はしておくから」

そう言つて室内から出ていく母親を見送ると、時計に目をやると既に午後の九時を回つていた。

「お母さんはああ言つてたけど、みんなはどうする？送つてもらえるように頼んでこようか？」

そう菜生が問いかけるとみんな首を横に振る。

「もともと合宿の予定でしたし、大丈夫ですよ」

「そうですよ、それにこの状況で帰れません」

菜生はそんな気遣いを見せたが、やはりみんな歩夢が心配なのだ。今日のところは、みんな歩夢の傍についていたいというのが総意だった。

「でもその前に一回歩夢ちゃんのところに行きたいよね」

「確かに、面会禁止にはなつてなかつたし。行けば入れてくれると思う」

そんな会話をエマと璃奈がしていると「賛成」といった声上がるが、菜生はコスモスに語り掛けていた。

(コスモスの力で、歩夢を目覚めさせられないかな?)

『可能かもしれないが、歩夢一人を救ってもこの問題は解決しない』

(そうだよね……)

「菜生ちゃん？」

「へ？ ああごめんぼーつとしてました……」

一人だけぼんやりしていた菜生の顔を覗き込む彼方に、菜生は慌ててそう答える。

「大丈夫？ 先に寝ちゃっても大丈夫だよ？」

「ううん、大丈夫です。歩夢のとこ行くんですよね？ 私も行きます」

そう言って立ち上がると、歩夢がいる病室に全員で移動を開始した。

病室に入った菜生たちが見たのは、機械的な椅子に腰かけて眠る歩夢の姿だった。

「えっと……この装置は……」

「これは『ドリームシアター』といって、端的に言うとも夢の中を見るための装置だよ」

そう装置をセッティングしていた男性に菜生が問いかけるとそんな返事が返ってきた。

「そんなことできるんですか？」

「できる。既に彼女と同じ症状の人8人に使用している」
「それで何が解るんですか？」

夢の中を見る。そんなまさに夢物語のような装置、それをみてかすみをはじめみんな訝しむような表情になるが、目の前の職員に既に使用していると言われると信じるしかなくなる。

そうこうしていると、装置が起動する。

「これ…わかります…？」

「愛さんにはノイズにしか…」

「見て！」

だがノイズが晴れると、ピンク色の毛の羊のような生き物が浮かび上がる。

「ひつじ…？」

「やはり…今まで調査した人全員、この羊の夢を見ているんです」

だがモニターに映った羊を見て男性はそう確信を持ったかのように告げる。

「つまり、羊によって眠らされている確率が高いんです」

「じゃあその羊は、歩夢の頭の中にいるんですか？」

「いいや、この場合別次元から夢を見させていると考えるのが妥当だ」

そう問いかける菜生に、男性はそう首を横に振ってそう告げると。更に深刻な事実を

告げる。

「このまま眠り続けた場合、彼女の命にも危険が及ぶかもしれません……。でも安心してください、我々科学技術部が総力を挙げて原因を突き止め、彼女を救って見せます」

しまったと思ったのか、慌てて絶対に助けるからと告げるがやはり心配なのは皆同じだった。

「……」

別次元に犯人がいる、それさえわかってしまえば菜生は自分に出来ることは見えた。別にSRCを信用していない訳では無い。だがしかし、それで歩夢が確実に救えるのか？それに手段は多い方が良い。菜生は誰にも気づかれないように、こっそりと部屋を抜け出した。

病院の屋上に出た菜生は、コスモプラックを通じて自分の中にもう一人の存在に語り掛ける。

「コスモス、歩夢の夢の中に入る事ってできないかな？」

『可能だが、危険だ』

「……危険？」

『そうだ。私にとっても、未体験の空間に入るわけだから』

コスモスの能力をもってすれば、歩夢の夢の中に突入することは可能。だがしかし、そこで何が起きるかまでは現時点では解らない。

コスモスにとつても未知の領域への突入は、コスモスだけでなく菜生自身も危険に晒される可能性が跳ね上がる事を示していた。

「そういうことなら私の気持ちは決まってるよ」

だが菜生の脳裏によみがえるのは、眠ったまま装置に繋がれた歩夢の顔だった。彼女の為ならば、菜生の答えは初めから決まっていた。

「コスモス、行こう！」

『菜生……』

菜生の精神世界で向き合うコスモスは、菜生の顔を見てそれ以上は何も言わずにただ頷くのだった。

「必ず……必ず助けて見せる……！」

決意を胸に、菜生はコスモプラックを掲げその光を解き放つ。

闇夜に現れたコスモスは、ルナポジションという本来対象を瞬間移動させるための光線を身に纏い、歩夢の夢の世界へと姿を消した。

コスモスの能力で歩夢の夢の中へと移動した菜生だったが、コスモスのエネルギー消費が激しかったのか変身が解けて気を失ってしまっていた。

『お姉さん大丈夫?』

「うん、私は大丈夫、ありがとね。……君は?」

菜生は気がつくと、自分を心配そうに見下ろす青い浴衣を着た幼い少女にそう問いかける。

『ボクは高田菜生。お姉さんもお祭りにきたの?早くしないとほじまっちゃうよ?』
「え……?」

自分と同じ名前を告げた少女に驚く菜生だったが、確かに幼い時の自分にそっくりだった。そして目の前の少女は菜生が大丈夫そうなのを確認するとそのまま先に進んでしまった。

「あの子、小さい時の私だった……そっか、夢の中ならこんなこともあるんだ……」

きつと少女が進んでいった先に歩夢はいる。そう直感した菜生は、幼い日の自分の後を追って動き始める。

その結果、過去の傷を抉られることになるとも知らずに――

16話 消せない傷跡

歩夢を救う為、コスモスの力で歩夢の夢の中へと向かった菜生。そこで彼女は、幼き日の自分と出会った。

「歩夢は今、私達が幼稚園くらしいの頃の夢を見てるのかな？」

恐らくこれは夏祭りに一緒に行った時の記憶なのだろう。なら確か自分達が当時いった場所に行けばいい。そう思って行動を開始する。

「きつとこの先にいるはずなんだけど……」

そう呟きながら周囲を見渡すが、お祭り会場のはずなのに人っ子一人いない。恐らく、夢の中だから道行く人を全員再現されている訳でもないのだ。

歩夢を見つけることが解決の糸口になるわけではないと、頭ではわかっけていてもやはり幼馴染の身の安全を真っ先に確保しておきたい。そんな思いで菜生は歩夢を探して彷徨った。

だが、菜生が歩夢を見つけるより早くまるでページが捲られるかの如く。唐突に周りの風景が切り替わる。

「今度は小学校……？」

もう最後に入ってから5年は経過している校内の景色にどこか懐かしさすら感じる。そして自分の立っている廊下の先では、自分のよく知る。現在の姿の歩夢が立ち尽くしていた。

「おーい！」

歩夢に駆け寄って、声をかけるが歩夢は反応を示さない。

「歩夢？ ねえ歩夢ってば……」

視線の前で手を振っても反応を示さない彼女の肩を掴もうとする、しかしその手はすり抜けてしまう。

「夢の中だから、夢の中だから干渉できないんだよね……？」

そうでなければ悲しすぎる。こんなに近くにいるのに、心配していたのに――触れることも言葉を交わす事も出来ないなんて。

だがそんな感傷に浸る時間すら、現実は与えてくれなかった。

『やめなよ！』

そんな大声が聞こえて振り返ると、小さい時の自分が同じく当時の姿の歩夢に庇うようにして立っているのが見えた。

『うるせえな、お前には関係ないだろ!』

『菜生ちゃんも面白いから…』

『よくない!だからって女の子の髪をあんな力いっぱい引っ張るなんて最低だよ!』

「これ…あの時だ…」

忘れたくてもきつと一生忘れられない出来事、今まであまり思い出さないようにしていたもの。それが今、菜生の目の前で再現されようとしていたのだ。

あれは小学六年の時だ。歩夢とクラスの男子がもめているのを見て、菜生が止めに入った時に起きた出来事だった。

『引っ込んでろよ高田には関係ねえよ!』

『だからって暴力で解決なんてダメだよ』

そう言い返されても菜生は譲らなかつた。強めに肩を突き飛ばされても、暴力で解決することを拒む菜生に男子もだんだん菜生に対しても苛立ち始めていた。

『お前いつつもつかかかってきやがって、調子乗ってんなよ』

『ちよつと力が強いからって威張ってるのはそっちじゃん』

相手の男子はクラスでも体格のいい方だった。だがそんな相手にも菜生は全く臆することなく食って掛かった。

—菜生。強くあるということは、決して喧嘩が強いとかそういうことじゃないんだよ

それを見ていた菜生は、ふと空手を始めた頃の父の言葉を思い出した。だが、あの時の菜生はそれを解っていたはずだったのに――

『いちいちうぜえなこのツ!!』

『…?!』

『菜生ちゃん!』

唐突に菜生目掛けて振りかぶられた拳。それは菜生の顔を捉えていた、その勢いのまま菜生は後ろに倒れ込む。

『お前ツ!!』

だが菜生は赤く腫れあがった頬が何でもないかのように相手を睨みつけると立ち上がり、そのまま自分を心配して駆け寄る歩夢には目もくれず思いっきり殴り返したのだった。

こちらにも完全に相手の不意を突いた結果だったが、相手の顔面に突き刺すような勢いで撃ち込まれた拳に相手は前歯を折り鼻血も出るわけで辺りは騒然となった。

『はあ……はあ……』

菜生は目の前で今さっき自分が殴り飛ばした相手を心配して、人だかりができるのをただ肩で息をしながら見下ろしていた。

彼に殴られた瞬間、菜生の中に産まれたドス黒い感情はそうしているうちにどんどん

熱を失っていく。すると今になって段々殴られた頬に痛みを感じ始めるのと同時に、菜生は相手から向けられる視線が怒りから怯えに変わっているのに気づいた。

いや、彼だけでは無かった。今この場にいる全員が、菜生に対して怯えに近い感情を覚えているのを感じた。

『菜生ちゃん大丈夫……?』

『違う……そうじゃないの……私は……こんなの……』

望んでいなかった。でも殴られた時、考えるより先に体が動いたのも事実だ。自分を心配してくれている歩夢の言葉もこの時は頭に入ってこなかった。

——大切な人を守る為に、父のような強い人になりたい

——本当に勇気のある人間になるというコスモスとの約束

そんななりたい自分に対して、今の自分は真反対にいるのではないか? そんな自己嫌悪に陥った菜生はそのまま教室を飛び出していった。今となっては、あの後自分が何をしていたかはあまり覚えていない。それにこれは歩夢の夢の中、ここでその先の自分が映る事は無いだろう。

「菜生ちゃんは、何も悪くないのに……」

そんな歩夢の声が聞こえたが、菜生にとって善悪はどうでもよかった。しかも殴った

相手も悪かったのだ、親が教育委員会の人間だった結果、菜生は激しく糾弾された。

母は『菜生は絶対意味もなく人を殴ったりしない』と反論してくれたが、菜生にとつてはそれすら何とも感じていなかった。

ただただ、相手を殴った事によって周囲を怯えさせたことの後味の悪さだけが残り、菜生は空手を辞めてしまう。

全国大会を目指して競い合っていた遠山美月をはじめとした仲間にも、気にすることは無いと慰められたがやめるという意志は揺らぐことなかった。

それ以降菜生は、特に人に対して拳を握る事を怖がるようになった。

ずっと思い出さないようにしていた記憶を、目の前で再現させられたことで、思わず下唇を血が出そうになるほど噛みしめる菜生だったが、ここに来る前にモニターで見た羊が自分の背後にいるのにすぐ気づけなかった。

「メエ〜」

「……いつが犯人なわけだよね？」

向こうの目的は解らないが、やはり菜生の存在は目障りなのだろう。かわいらしい顔が一転して、肉食獣を思わせる険しい顔に豹変すると「ガルルル…」と唸り声をあげ菜生へと突っ込んで来る。

「…ッ!？」

思わず顔を覆うが、何も起きなかった。恐る恐る目を開けると、周囲の景色は外へと変わっていた。

「()は…()」

まるでおとぎ話の森の中だ。周囲を見渡すと、これまたお姫様でも住んでいそうなお城が目に入る。だが、その城の塔の一番高い場所にあるのはお姫様の部屋なんてメルヘンなものでは無かった。

コスモスの力を借りて、離れた場所にあるそこを見るとそこは檻になっていた。

「あれは…」

その檻の中にいたのは、歩夢をはじめとした老若男女様々な人。恐らく、歩夢同様に眠らされている人々だろう。恐らく、ここはもう歩夢の夢の世界ではなくこの事態を作り出した羊たちの世界なのだろう。

どういう原理で何の目的かは解らないが、人々を眠らせて夢の世界と自分達の世界を繋いで人々を捕らえるつもりだったのだろう。

だが気がつけば、菜生の周囲には先程の羊が群れになって集まってきていた。身構える菜生の前で、目の前の羊たちは密集していくと菜生を排除するための姿へと変わる。

かわいらしいピンク色は白に変わり。7つの真つ黒な眼、人型に近いシルエツト、背

中の黒い翼。まさしく夢魔といった姿へと変貌した。

—夢幻魔獣インキュラス

それがこの事態を引き起こした羊の正体だったのだ。

そして菜生も相対すべく、コスモプラックを掲げその身をウルトラマンコスモスへと変える。

「シエア!」

「オオオオ——」

不気味な声を上げ、腕を降ろしたままのインキュラスに対しコスモスは構えを取る。

人を眠らせて自分の世界に引き込むような相手で、ここは相手の土俵だ。何が起きてもおかしくはない、まずは相手の出方を伺う。そう思った時だった——

インキュラスが一瞬のうちに姿を消した。思わずこれには動揺するコスモスだったが、すぐに周囲に意識を戻しどこから攻撃が来るのか警戒する。

「ウワアツ!?!」

だが次の瞬間目の前に現れた相手の掌底に突き上げられコスモスの身体は宙に舞う。すぐさま立ち上がろうとするコスモスだったが、インキュラスはすぐさまコスモスにとびかかった。

体勢を立て直す暇もなく蹴り上げられてしまうが、なんとか次の攻撃を防ぎ立ち上が

ると今度は逆に相手の腕を振り払い、無防備な腹部に両腕で勢いよく掌底を打ち込むとバックステップで距離をとる。

そんな光景を、他にも見ている者たちがいた。

「菜生先輩どこに行っちゃったんでしょ？」

「今はそつとしてあげよう？ なつちも多分、気持ちの整理がつかないんだよ……」

そう、ドリームシアター越しに歩夢の夢の中を見ようとしていた同好会の面々だ。羊が見えなくなったと思えば、いきなり悪魔のような姿の怪獣とウルトラマンが戦っている光景に切り替わるのだから彼女らも混乱していた。

「まさか、コスモスが……？」

そうボソつとせつ菜は呟いたが、その声に反応したものは居なかった。

「ウオオツ！ セヤツ！」

相手の腕を弾き掌による鋭い突きを見舞う。相手が蹴りを放てば両腕で防ぎそのまますれ違いざまに手刀を叩き込む。

だがそこで、コスモスのカラータイマーが音をたてて赤く明滅を始める。この空間に

来るのに消費したエネルギーが回復しきる前の変身だったため、いつもより早くタイムリミットが迫っていることを知らせていた。

だがそれでも、相手が高速移動を使わなければ、ルナモードのままでも優勢のまま戦闘を進めていくコスモスだったが、インキュラスもただ負けてくれるバズもなく。瞬間移動を使われたことで、駆け寄って行って放ったコスモスの手刀は空を切る。

再び相手を見失ったコスモスを今度は背後から蹴り飛ばすと、インキュラスは背後からオーロラのようなものを放ち、それを筒状に展開することでコスモスを閉じ込める。力技で脱出を図るコスモスだったが、触れれば電撃が走りダメージを受けてしまう。

「コスモスが……」

囚われた檻の中で、コスモスが窮地に陥っているのを見て歩夢はそう呟く事しかできなかった。周りにいる人たちも、コスモスが圧倒的に不利な状況になっているのを不安そうに見つめている。

気付けば檻に閉じ込められていた事も気になるが、このままコスモスが敗北すればここにいる全員どうなるか解らない。そう思うと、不安に駆られるがそれでもコスモスの勝利を信じるほかなかった。

「お願いコスモス、頑張つて！ここにいる他の人たちを助けてっ！」

気付けばそう歩夢は叫んでいた。そしてコスモスはその声に気がつき一度振り返る

とゆつくりと頷いた。

自分達をでは無く、周りの人間の心配をすることで彼女らしいなと思う反面。絶対に負けられないという闘志により強く火が灯った。

「ウワアアアアッ!!」

コスモスは右腕を突き上げ、赤き太陽の如き光を放出し無理やりオーロラを打ち破る。

「ハアアアアア………」

そしてその光を身に纏う事で、戦闘モードであるコロナモードへとその姿を変える。

「ウオオッ!」

力強く構えを取るコスモスに対してインキュラスが先に駆け出すと、コスモスはインキュラスにとびかかっていく。

「ダアアッ!!」

赤い光を身に纏いインキュラスの目の前で空中に静止したコスモスは、両脚を使った蹴りの連打を見舞うと最後に相手を蹴り飛ばしてから静かに着地する。

無理なモードチェンジをしたこともあつてもうエネルギーにあまり余裕のないコスモスは、短期決戦を狙ってコロナサスペンドキックを使用。この連続蹴りをまともに着けたインキュラスは、先のルナモードの時にスタミナを消耗させられていたのもあつて

グロツキー状態になっていた。

「ハアアアアア……」

両腕を一度腹の前に添えてから気を集め、腕を大きく上へ回して全面に巨大な高熱のエネルギーボールを創り上げる。

「ハアアッ!!」

そしてそれを勢いよく押し出す事で、必殺の超破壊弾をインキュラスにぶつけるのだった。

その一撃—プロミネンスボール—は、インキュラスの身体を呑み込むとそのまま相手を焼き尽くしインキュラスを消し飛ばしてしまった。

そしてインキュラスという主を失ったこの空間は、光に包まれて消えていくのだった。

こっそり病室に戻った菜生だったが、「どこに行ってたんですか?」とかすみにはやはり色々聞かれてしまう。

「レム睡眠が終了した!」

だがその近くで、歩夢の状態を見ていた医師がそう告げたのをみて歩夢へと菜生は近寄っていく。

「歩夢?…歩夢!」

「うう…菜生ちゃん…?」

声をかけながら肩を揺さぶると、歩夢はまだ寝ぼけ気味にそう答えるも周囲を見渡してすぐにパニックになる。

「え?…どこどこ…?…もしかして寝起きドツキリ!」

そんなことを口走る歩夢を見て周囲に笑みが戻る。

「本当に良かった…」

「菜生ちゃん」

「ん?」

「ありがとう」

不意にそう歩夢に告げられて菜生は正体がばれてしまったのかと背筋に冷たいもの

が走った。

「えつと……どしたの？急に」

「ううん……ただ、小さい時から菜生ちゃんには支えてもらってたなって」

「何それ？歩夢だって、私を支えてくれてたじゃん」

「そうだっけ？」

小さい時の記憶を夢に見たからなんだと気づくと、菜生もそう軽口を叩く余裕が戻ってきた。

「かすみんだって、先輩を支えてあげれるんですからね？」

「はいはい、ありがと」

「むくっ……」

こうして、街の人々が突然眠ったまま目を覚まさなくなるといふ事態は収束した。だがしかし、一体何のためにそのようなことをあの羊はしたのか？その答えはでないままだった。

17話 動け!怪獣

一波乱あつた夏合宿もなんとか怪我等なく終え、同好会は普段通りの練習を行つていた。

「あづいゝてか歩夢、課題やつてる?」

「まあちよつとずつね?」

「いいなあゝ写させて?」

「菜生ちゃん科が違うし、写せるの無いと思うよ?」

「そうだったゝ…」

部室で休憩中に、菜生は暑さでへばつていいのかそんな間の抜けた事を口走るので歩夢も思わず苦笑いを浮かべていた。

「てか暑すぎない? 8月入つた途端に一気に気温上がつちやつてさ、こりや来週から練習は夕方からとかにしないと熱中症で倒れちゃうよ」

「じゃあじゃあ、みんなで海行きませんか? 海!」

「合宿の時にプールで遊んだじゃないですか」

そこで思考を切り替えてこの異常なまでの夏の猛暑をどうするか考えていると、かす

みが入ってきてそう提案するがせつ菜がすぐに却下する。

「え〜いいじゃないですかあせつ菜先輩のケチ〜」

「ケチ〜」

「何ですか菜生さんまで!?!」

「いやあなんとなく乗ってみただけ?」

「なんとなくって…」

そんな軽口を叩きながらもきちんとその日の練習をこなす。夏休みの昼下がりのことだった。

「はあ〜…」

「彼方先輩どうしたんですか?ため息なんてついて」

「それがね…」

いつもの練習と比べて特にハードなことをしたわけでもないが。どこかいつも以上に疲れた様子の彼方を見て、心配そうに菜生が声をかけると彼方は深刻そうな表情のまま。自身の悩みを打ち明けてくれた。

「遙ちゃんは今スクールアイドル部の合宿に行ってるんだけど…」

「あれ?でも昨日帰ってくるって喜んでませんでした?」

「そうなんだけどね、その合宿場から帰る道の途中のトンネルで事故が起こってるらし

くて帰れないみたいなんだよね…」

学校内の施設を借りて合宿を行った虹ヶ先とは違って、彼方の妹―近江遥の通っている東雲学院はそれなりに遠方の施設まで向かっていているそうなのだが。それが仇となつて帰る日の前日に起きたトンネル事故のせいで帰れないでいるらしい。

「それは心配ですよね…」

「そうなんだよね、しかもその事故つてというのが怪獣がトンネルの中に陣取つてて動かないみたいなんだよね」

「怪獣!?!」

さらつと出てきた怪獣というワードに、一同騒然となるのは怪獣保護という概念が一般に浸透してきている現代でもやはり危険な生き物という見方のほうが強いのだ。

「でもその場にいるだけで何にもしないから、どうするか判断に困つてるみたい。何しても外に出てこないんだつて」

そこにいるだけでも、やはり怪獣ともなると熊やイノシシとは分けが違う。トンネルに居座つていることを除けば、特に被害は出ていないのであるべく保護という形で話を進めたいようだった。

「やつつけちゃえばいいんじゃないですか?」

「そうはいつでも、攻撃すれば抵抗して暴れて余計に被害を広げるかもしれないし難し

い問題だと思うよ」

倒せばすぐに解決するのではないか？そう告げるかすみに、菜生はそう諭すように告げる。だが彼女の言う通り難しい問題なのだ。菜生個人としても、保護で済ませてほしいがこれ以上立往生する状況が続けば倒されるのも時間の問題だろう。

それに万一暴れば、むしろ遙が危険な目に合うかもしれない。仲間の身内が近くにいるからこそ、どちらがいいのにともここでは言い切れない雰囲気は漂っていた。

「連絡はとれてるし、合宿延長みたいな感じで普通に過ごしてるみたいなんだけど。やっぱり心配……」

「そうですね……」

トンネルに居座る怪獣。一体何が目的でそうしているのかわからないが、できれば何事もなく保護という形で収まってほしい。そう思うよりなかった。

その日の夜、ちょうど母が休みだったので親子二人で食卓を囲んでいた。

「お母さんは何か知ってる?あのトンネルで居座っているっていう怪獣のこと」

菜生がおもむろに切り出すと、しのぶは「ああ…」と何やら困ったような顔をする。

「あの怪獣は、元々あの近くで発見されたムラノクラフドンっていう怪獣の化石だったの」

「化石?」

「ええ、カオスヘッダーの残留エネルギーの影響だろうっていうのが研究班の出した結論みたいんだけど…どうしてあの場所から動こうとしないのかわからないのよね……」

原因がわかれば、それを逆手にとつて興味を引いてトンネルの外へと誘導できそうなものなのにと困っているようだった。

「もともとは草食恐竜だし、人を襲うことは現状観察してる感じではなさそうだけど。ふさいでるトンネルが問題なのよね…」

「だよね…彼方先輩の妹さん。そのせいで合宿から帰ってこれなくなってるし」

「それは心配よね…」

「ねえ、せめて近くまで行くこととかできないかな?やっぱり合わせてあげたいし…」

「気持ちわかるけど、それは無理ね。あなたは私の娘だけど、SRCからしたらただの一般人。近づかせるわけないでしょ？」

「まあ当たり前だよね……」

せめて会わせてあげたい。そう思ったが、当然母はそんなことを許してくれるわけもなかった。

「大丈夫だから、すぐに解決するから。心配させてしまっているのは申し訳ないけど信じて待っててちょうだい」

「うん……」

菜生の手の上に自身の手を置いてそう諭すように告げる母に、菜生はただ頷くよりなかった。

そして翌日。明確に事態は動き始めていった――

怪獣の正体がわかったのだ。

『ムードン』そう命名された怪獣の正体は、近年そのトンネル付近で発掘されたムラノク

ラフドンという新種の恐竜の化石が、カオスヘッダーの残留エネルギーによって実体化したものだということだった。

「菜生さん、ムラノクラフドンについて調べてみた」

「ありがとく璃奈ちゃん! やっぱネットとかパソコンに強い璃奈ちゃんが一番だよ」

その情報を得た菜生は、すぐさま璃奈に協力を仰ぎムラノクラフドンについて調べることにしたのだ。

「ムラノクラフドンは草食恐竜で、発掘された時は複数の個体の化石がいつもまとまってみたみたい」

「ってことは群れ…もしくは家族単位で生活してたのかもね」

「その可能性は高いと思う。それに……」

「それに?」

「あのトンネル、その時に大きくする工事があったみたいなんだけどその時は小さい化石が一体分だけだったみたい」

その結果を踏まえて、今トンネルをふさいでいる怪獣は。前に発掘された化石の親の個体だろうというのが菜生の出した結論だった。

「でもこれがわかってても私たちがじゃどけない。菜生さんはどうするの?」

「お母さんはSRCで働いてるからね、この情報をもとにどうにか解決できないか頼んでみるよ」

協力したのはいいが、菜生の思惑が読めない問った様子の璃奈に菜生はそう告げた。「それより夕方から練習なのにお昼から付き合ってくれてありがと！やっぱ璃奈ちゃんに頼んで正解だったよ」

「どういたしまして。璃奈ちゃんボード『エツヘン』」

「ほんとうに助かったよ！よしよし：」

そう言っ得意げな顔が書かれたボードを顔に当てる璃奈の頭を思わず菜生はなでる。一年生はみんな可愛げがあつて、菜生のことを信頼してくれるのでまるで妹ができたような気持になるのだ。

「菜生さん？」

「アツごめん：嫌だった？なんかこうしていると妹ができたみたいでつい：」

「そんなことないけど、菜生さんって基本一人で全部やってくれてたから。こうやって頼ってもらえるのはうれしい」

完全に無意識だったのでしたっと思ひ手を放す菜生だったが、璃奈は首を横に振ってそう告げるのだった。

「そうだったっけ？」

「うん。曲を作る時も、イベントの時も基本菜生さんが一人で何かから何まで準備してくれるのうれしいけど、やっぱりみんな申し訳ないって思ってると思う」

「それは私が好きでやっただけだし…」

「それでも、やっぱりみんなも菜生さんに頼ってほしいって思ってると思う」

「そう…かな? 気を付けるよ」

みんなのためと自分は一人で突っ走りすぎたのかもしれない。そう思った菜生は、もつとみんなを頼るようにしよう。そう思うのだった。

「さて、そろそろみんな来てるだろうし。私らも練習行こっか」

そう言つて璃奈と共に借りていたパソコン室を後にして部室へと向かうのだった。

だがその日の練習は先日以上に、彼方は身が入っていない様子だった。

「…今日はやめときましようか?」

「どうして? 彼方ちゃんはいつも通りだよ?」

「妹さんが心配な気持ちはわかります。私も似たような経験があるから…」

そう言つて菜生は目を一度伏せるが、再び彼方の目をみて告げる。

「明日、会いに行きませんか？近くまでなら普通にバスも動いてるみたいですし、うまくいけば入り込めるかもです」

危険かもしれないが、相手が人を襲う危険が今のところない以上行ってみる価値はありと菜生は直感していた。

「本当にいいの？お母さんSRC関係の人でしょ？もし見つかったら…」

「大丈夫ですよ、お母さんは医療チームなんで怪獣保護チームの人に顔見られるくらい。それに考えがあるんです」

「考え？」

そう彼方に聞き返されて菜生は得意げに頷く。

「あの怪獣が何であの場所に居座ってるか、考えてみたんです。私、怪獣にも人間と一緒で心があると思うんです。きっとあの怪獣、ムードンはあそこで待ってるんですよ」

「菜生ちゃん、待つてるっていったい…?」

そこで話を近くで聞いていた歩夢がそう口を挟むと、「そこがポイントなんだよ」と菜生は一層得意げになった。

「ムードンの正体は、家族単位で生活するムラノクラフドンです。そしてあのトンネルの近くでは小さい化石が発掘されてる。ってことは—」

「ムードンは、その発掘された子供のムラノクラフドンが帰ってくるのを待つてる…?」

「そう!だから外に子供がいるって思わせることができれば外へ誘導できると思うんだよね」

「それを私たちでやるんですかあ?」

「うーん:それは厳しいだろうから、そこはSRCの人に頑張ってもらいたいけど:うまくいけば自体は解決するし、妹さんにも会える。一件落着じやん」

そう菜生は告げるのだった。

「でもそんなにうまくいくかな?」

「当たって砕けろさ。大丈夫大丈夫いざとなったらわた:…」

「わた:…」

「何でもない!なんでもないよ!!」

歩夢に思わず『私とコスモスで何とかする』そう言いそうになってしまふのをなんとか飲み込むと、今度は慌ててごまかす羽目になってしまった。

そして翌日、SRCによってムードンをトンネル外に誘い出すための作戦を行うべく準備が推し進められていた。

「お姉ちゃん…」

予定より4日も変えるのが伸びてしまい、家に帰れないこと。何より姉に会えないことが辛かった。

いくら危険性は無いと考えられているとはいえ、ずっと自分たちの近くに怪獣がいる生活を強いられているのだ。身の危険も感じないはずがない。

そんな彼女の不安は、一緒に今ここにいる全員が抱えているものだ。誰も口にするとはなかったし、万一口にしたとしても誰かに聞かれることはないようにしていた。

だけどそんな不安を一刻も早くなくそうと尽力する人々の手で、事態は最悪の方向へと進むとはこの時は誰もコスモスだって、予想してなかったんだ。

18話 逢いたい

「さーって、とりあえず最寄りのバス停まで来ましたよ〜っと」

都内からバスで数時間かけて、件のトンネルの最寄りのバス停でバスから降りると菜生は凝り固まった身体をほぐそうと伸びをする。

その隣で同様に体をほぐす彼方の姿もあるのだが、彼女はいつもなら移動中の車内で寝るのは普通なのだが今日は全く寝ている様子はなかった。それだけ、妹が心配なのだろう。

もうすぐお盆がこようという8月の昼下がり、バスから降りるとむわつと一気に暑さが襲ってきた。

SRCが元々民間組織だったこともあり、菜生のような一般人でも意外と簡単に連絡を取ることができると利用できる。それを利用してムードンをトンネルの外に誘い出す作戦を提案した結果。

それを受けての作戦展開をしてきてくれた。

「ほんとに大丈夫かな…?」

「大丈夫ですよ！妹さんと一緒に帰りましょう!!」

不安げに菜生を後をついてくる彼方に、菜生はそう告げる。

「きつとムードンは出てきてくれます。だって…独りぼっちは、寂しいですから……」

トンネル内を巣穴だと思っていたとしても、一人きりでずっとそこに居続けるのは寂しいはず。だから外に仲間がいると思えば出てきてくれる。そんな菜生の咄嗟の発想ではあったが、的を射た発想だと納得してもらえたので今回この作戦が採用されたのだ。

「菜生ちゃん……」

「まっ私の思い違いかもしれないですけどね？でも私、独りぼっちでいるの嫌でお母さんが仕事で帰って来れない時よく歩夢の家でご飯食べてるんですよ……」

そう苦笑いを浮かべながら告げる菜生だったが、彼方は「寂しいもんね……」としか言わなかった。

そして現場近くまで歩み寄ったとき、事件が起こった――

物凄い爆音と地響きとともに、トンネルから真っ黒な煙が噴き出したのだ。

「な……なに!?!」

「トンネルが……爆発した?」

この時、菜生達には知る由もなかったがトンネルが使えないことで経済的な被害を受けていた近隣住民や運送業、インフラ整備の人間の怪物を排除してくれという声が大きくなりすぎた結果。防衛軍がトンネルを爆破、中のムードンを排除しようとしたのだ。だが、ダイナマイト程度ではムードンにダメージを負わせることすらできなかった。巢を破壊され、帰る場所を失ったムードンは怒り、暴れ始めるのだった。

よりによって、一番最悪な場所を目指して――

「あつちは……」

「ダメ……遙ちゃん!!」

「待つて!?!」

遥たちが危ないと駆け出した彼方を、咄嗟に追いかけてしようとした菜生だったが、ムードンが動いたことで発生した地響きに足を取られてた間に倒れた木によって見失ってしまった。

「急がなくちゃ……急がないと遙ちゃんが……!」

その一心で森を駆ける彼方には、ほかのことを気に掛ける余裕はなかった。

気が付けば、ムードンの進行方向の先に、自分が立っていたことも。

「え……?」

頭上が真っ暗になったことでようやく彼方は気づいたがもう遅い、自分めがけてムー

ドンの足は踏み下ろされる直前だったのだから。

もうどうやっても避けられない。そう思い目を伏せる彼方だったが、いつまでたつてもその時は来ない。

恐る恐る目を開けると、後方へと倒れこむムードンと。そんなムードンの踏み込もうとした足を掬い上げた光が天へと昇っていくのが見えた。

「トリヤア!!」

そして急降下してきた光は、ウルトラマンコスモスへと姿を変えた。土煙を巻き上げ、豪快に着地したコスモスは同じく立ち上がったムードンへと駆け出した。

そして振り下ろされたムードンの腕を振り払い、両腕を腹部へと突き立てるとそのままムードンの体を無人地帯へと思いっきり放り投げる。

ひとまず注意を自身へと引き付けるため、コスモスはその場から飛び上がると地を転がるムードンを飛び越え「お前の相手は私だ」と言わんばかりに構えをとる。

「ウルトラマン…助けに来てくれたの…?」

あつという間に自身から遠く離れた場所で激突する巨人と怪獣を見て、そう彼方はつぶやいたが当然コスモスに聞こえているわけもなく。両者戦闘へと突入していった。

ムードンがガムシヤラに振るう腕をコスモスは的確に払いのけ、鋭く掌底で突き体力を奪っていく。

(ムードンが怒る気持ちも分かる…それでもッ！)

コスモスの中で、菜生は歯噛みしながら目の前のムードンの動きに集中する。戦うのは基本的にコスモスだとしても、同化している菜生が集中を切らしたり、戦うことを拒めばそれだけコスモスの戦闘能力は低下してしまう。

だからこそ、一度変身したからには菜生はムードンと戦うしかないのだ。もしそれが、望まぬ結果を招いたとしても。

ムードンが右腕でコスモスの顔面を殴打しようとするが、コスモスはそれを両腕をクロスさせて防ぎそのまま腕を跳ね飛ばして無防備な腹部に掌底打ちを叩きこむ。

「ハアッ・イヤアッ!!」

反撃だといわんばかりに頭を振り回して角でコスモスを攻撃するムードンに対して、コスモスは連続でバク転をして距離を取ってからスキができたのを確認するや否やかけよると再び掌底打ちで相手の態勢を崩す。

なんとかムードンを大人しくさせようとルナモードで戦闘を続けるコスモスと菜生だったが、防衛軍はムードンを排除するために戦闘機を投入してきた。

戦闘機の機銃掃射によって、周囲に爆炎が巻き起こるとコスモスとムードンは一度距離をとる。そしてコスモスは、戦闘機の機銃がムードンに向いているのをのを見るとすかさ

ず飛び出した。

(だめッ!!)

「テリヤアアアッ!!」

咄嗟に飛び出したコスモスは、ムードンの前に立ちはだかるとその背で戦闘機の機銃の掃射を受けた。だがムードンはそんなコスモスにお構いなく、頭部の角を突き出して突進してきた。

(…かはっ……)

「ブシュッ」というトマトを握りつぶしたような音とともに菜生は腹部に強い不快感と激痛が走るのを感じた。視線を落とせば、ムードンの角がコスモスの腹に突き刺さっているのが見えた。

深々と突き刺さった腹部からは、光が漏れ出しまるでコスモスが血を流しているようだった。

「ウルトラマンが……」

人間なら間違いなく致命傷となりうるダメージを受けたコスモスを初めてみたその目は、不安に染まっていた。

「アアアッ……」

そのままムードンは首を振り上げ、そのままコスモスの巨体を空中に放り投げる。コ

スモスはそのままムードンの後方の地面に叩きつけられると、ダメージですぐには立ち上がれないでいた。

—ピコン—ピコン—

そしてさらにコスモスのエネルギーが残り少ないことを知らせるカラータイマーが明滅を始めてしまう。コスモスに残された時間も、もう少ないのだ。

そしてムードンはゆっくりと向き直ると、コスモスへと突進を開始する。

(来る……うぐ……けえッ!)

「セヤアアアッ!」

実際に菜生の腹に穴が空いたわけではないが、それに匹敵する痛みに思考が鈍化してしまうも次の攻撃を食らうわけにはいかないとなんとか立ち上がると寸でのところで突進を回避すると、そのまますれ違いざまに回し蹴りを見舞う。

だが態勢が崩れたまま放った蹴りに大した威力はなく、何事もなかったかのように振り返ったムードンによりわき腹に頭突きを受け、態勢の崩れたところを逆に蹴り飛ばされてしまう。

「グオオオオオオ!!」

今度こそトドメを刺さんとムードンは再びその鋭い角を突き出して突進してくる、だがコスモスは先ほど貫かれた腹部を抑えたまま立ち上がれないままだった。

このままではコスモスが負ける。誰もがそう思った時だった――

『キャオオオン！』

ムードンに似た。それでいて高い鳴き声が周囲に響くと、コスモスめがけて一直線に走っていたムードンは立ち止まり鳴き声のする方を向いた。

そこにいたのは、ベニヤ板を何枚をつなげて作ったプレートに描かれた。子供のムラノクラフドンをイメージしたイラストだった。

菜生の考えていたムードンの気を引くための作戦は、子供が外にいとムードンに思わせることだったのだ。

当初の予定とは違う使い方になってしまったが、効果はあった。ムードンは、自分の子供がそこにいると思えばコスモスにはもう目もくれず、一直線にそちらに歩み寄っていった。

そして、その絵を自分の子供と認識したムードンは嬉しそうに雄たけびを上げる。何千万年も待ち続けて、ようやくムードンは自分の子供に出会うことができたのだ。

(ムードンが、泣いてる……)

思わずその様子を見て、菜生は呆然とする。家族に会えてうれしいのは、きつとどん

な生き物にも共通の感情なんだとそう感じたのだ。

だがこのままその様子を眺めていて、もしムードンが目の前にあるものが偽物だと勘付けばまた暴れるかもしれない。

そうなつてしまえば、今のコスモスのエネルギーではもうムードンを大人しくさせることも防衛軍から守ることもできないだろう。

するとコスモスは、先のダメージでよろけながらもエネルギーを胸の前で球状に収束させると絵をめがけてその光をフルムーンレクトや、ルナエキストラクトに近い構えで解き放つ。

—コスモ・リアライズ—そう呼ばれる物質の元素固定をさせる効果のある光線は、ムードンの子供の絵を三次元の物質として組成を仮定したうえで元素固定することで実体を与え、生きていくかのように動き始めたのだ。

「オオオオオン！」

『キャオオオ！』

ムードンは、子供の前に立つとお互いに嬉しそうな鳴き声を上げる。そしてムードンは泣きながら、その子供へと手を伸ばす。

そしてその手を子供がつかんだ時、ムードンの体は光に包まれ砂に返ってしまった。そしてコスモ・リアライズの効力も切れたことで、子供もまた砂へと返る。

寄り添うようにできた二つの大小の砂の山が残るのみで、そこにはもう怪獣の姿は無かった。

「……………」

そしてそれを最後まで見届けたコスモスは、そのまま静かに夕日に向かって飛び去ると周囲には沈黙だけが残されたのであった。

「遥ちゃん！」

「お姉ちゃん!? どうして……………」

「よかった…本当によかったよ〜」

そのあと、無事に遥と再会できた彼方は嬉しそうに最愛の妹へと抱き着いた。

「よかったですね、彼方先輩」

「菜生ちゃん…うん、今日はありがとうだね〜」

「いえ、私は何もできませんでした。それに結局、ウルトラマンのおかげですし」

「そんなことないよ、菜生ちゃんが動いたから私はこうして遙ちゃんと会えたわけだし。ウルトラマンにも助けてもらったお礼、ちゃんと言わないとね」

「そうですね」

変身を解いて、おそらく彼方は妹の方へと向かったのだらうと思つた菜生は無事に彼方と合流するとそう笑みを浮かべた。

「でも、あの怪獣はなんで消えたんだろう?」

「きつと、家族に会いたいつていう願いがかなつたから…自分の世界に帰っちゃつたんじゃないかな?」

妹の疑問に、彼方はそう静かに答えた。

「やっぱり、いいですね。家族つて…姉妹つて」

「うん、彼方ちゃんは遙ちゃんつていう妹がいてとつても幸せだよ」

そう告げた菜生に、彼方は笑みを浮かべたままそう告げるのだった。

(私…寂しいのかな?)

それを受けて、菜生は表情こそ笑みを浮かべたままだったが内心そう思つた。自分にも、家に帰ればいつも顔を合わせる家族や、兄弟が欲しかったのかもしれない。

「じゃあ終バスも近いし、さすがに他校のバスに乗つてもらおうわけにもいかないし私たちは先に帰りましょうか」

「そっか残念〜。じゃあ彼方ちゃん、またあとでね〜」

「うん、菜生さんもありがとうございました！」

そう頭を下げる遙に手を振ると、菜生はバス停へと歩み始める。

（ううん、寂しくなんかないよね？ だって私には、こんなに素敵な仲間がいるんだから…！）

隣を歩く彼方を見て、菜生はそう感じたのだった。それにまだ、スクールアイドル同好会のみんなをはじめとした色んな人との関りを、菜生は持っているのだから。

19話 時の娘

「ハアツ！イヤアツ!!」

コスモスは目の前にいる青い体に大きな耳が特徴的な地底怪獣——ガルバスと対峙していた。

工事の音で目覚めてしまったのか、興奮状態でむやみやたらと腕を振り回すガルバスはコスモスにとって脅威とはなり得なかった。

ルナモードの耐久力と防御力を駆使し、攻撃を捌きながら無人地帯へと誘導するとそのままフルムーンレクトを浴びせる。

すると落ち着きを取り戻したのか、ガルバスはまるで逃げるように地底へと返っていった。

(…ごめんね。こうしないと、街を守るためにつて防衛軍が攻撃しに来ちゃうから…まだ私たちは、一緒には暮らしていけないんだ……)

人間の都合で追い出してしまった形になってしまったことに、菜生は罪悪感を覚えたが。本来大人しい気質のガルバスには、無理やり保護させるよりこうして地底へと戻ってもらった方がいいのだと思ひ込むよりなかった。

そしてそれから数日後に、私にとってはきつと今までで一番辛くて―そして忘れることのできない出来事が起きたんだ。

「歩夢、帰ろ〜?」

「うん、帰ろう」

午後からの練習に切り替えたので、練習終わりに歩夢と二人並んで帰ると既に日は沈み道を街灯が照らしている中を歩く。

「そういえば菜生ちゃん、ニユース見た?」

「見た見た! やつと出来たんだジェルミナ3…事故で開発中止になったときはもう駄目だと思ったんだけど…とにかくこれでまた宇宙進出へ一歩前進ってとこだらうね」

歩夢に話題を振られた菜生は、そう嬉しそうに答える。

居住型宇宙ステーション『ジェルミナ3』3年前、建設中の事故で死亡者を出してしまい一次計画中断となつちたのだが、先日ついに完成したというニユースが巷では現在持ちきりだったのだ。

「宇宙かあ…どんなどころなんだろうね?」

「う〜ん…行ったことないし……やつぱり行った人にしかわかんないんじゃない? ス

ステージからの眺めだって、実際に立ってみないとわかんないっしょ？」

歩夢の問いかけに、菜生は暫し考える仕草を見せるがすぐにそう笑って答えた。

「じゃあ菜生ちゃんも立ってみる？」

「私はいいよ、客席からみんなを応援するのが私のやりたいことなんだから」

「似合うと思うんだけどな…」

自分はスクールアイドルとしてステージに立つつもりのない菜生に、歩夢は残念そうな表情を浮かべるがおそらくどういっても菜生の気持ちは変わらないと思い、話題を切り替えるのだった。

「でも菜生ちゃんはずっと、宇宙に憧れてるんだもんね」

「まあね。いろいろ悩んだけど、やっぱり諦めたくない。叶えたいんだ」

「ふふっ、絶対叶うよ」

「ありがとー！」

そんな会話をしながら、学園から家に帰るための最寄りの駅へともう少しでたどり着く。そんな時――

「な、なに!?!」

突然の爆音が大地を揺るがし、炎が夜空を彩った。

「宇宙人…?」

その方向を見て、歩夢がそう震える声で呟いた。そしてその視線に映ったのは巨大な黒い人型のシルエットだった。

頭部の目と思わしき赤い発行部に真つ黒な無機質な身体、そして両腕には先端の尖った籠手のようなものを装着しており、そこから破壊光球を放ち街を破壊していた。

「……ッ!? 菜生ちゃん見て、あそこに人が!」

視線を宇宙人の足元に下した歩夢が、菜生の制服の裾を引つ張つてそう叫ぶと菜生も歩夢の指さした方を見ると、宇宙人の破壊光球から逃げるように走る人影が見えた。

「歩夢、とりあえず学校の方に逃げよう! 私は近くに同好会のみんながいないか見てから行くから!」

「でも菜生ちゃん……」

「いいからッ!!」

そう言つて菜生は駅から学校の方へと続く通路へと階段を駆け下りると、歩夢を突き放すようにした反対方向へと駆け出した。

「菜生ちゃん……」

鬼気迫る表情で菜生に言われた歩夢は、彼女の後を追うこともできず。しぶしぶ言われたように学園の方へと歩を進めるのだった。

(ごめん歩夢……まだ、本当のことは言えないんだ……)

「コスモース!!」

駆け出した菜生も、歩夢に対してそんな罪悪感を覚えつつも目の前の相手に意識を集中すると懐からコスモプラックを天に掲げた。

「ハアアアアアア……」

コスモプラックから光を解放した菜生は、光となって天へと上る。そして謎の宇宙人に立ちはだかるように光が降り注ぐとその中からウルトラマンコスモスが現れた!

「――」

正面に現れたコスモスに静かに右腕を向けた宇宙人が、その籠手の先から破壊光球を放った。

「ハアツッ!」

するとコスモスも、咄嗟に右手の先からルナストラックというルナモードでは珍しい攻撃用の光弾を発射してそれを相殺する。

一人の間人をピンポイントで狙う意図は分からないが、現れたコスモスにもすぐに攻撃という判断をしたところを見るにどうやら友好的な宇宙人ではなさそうだ。

ひとまず相手から攻撃の意思を削ごうとコスモスは駆けだし、裏拳の要領で手刀を打ち込むが相手は屈んでそれを回避した。

だが宇宙人はそれ以上は何もせず、怪しい光に包まれると光球へと姿を変えそのま

ま飛び去って行ってしまったのだった。

その様子を見送ったコスモスは、先ほど追われていた人が倒れていたのを見つけるとそのまま変身を解くのだった。

「大丈夫ですか!？」

菜生は慌ててその人物へと駆け寄っていくと、肩を揺さぶってそう何度も話かけた。青年は、黒いライダージャケットに身を包み、赤毛にまだあどけなさの残るものの端正な顔立ちだった。

どうやら相手は気を失っているようだったが、呼吸も規則正しく外傷も見受けられなかったのでひとまずほっとした。

「……うっ……」

「気が付きました?」

「……君は……?そっか君が助けてくれたのか」

「いえ……たまたま見かけただけです。私は高田菜生つて言います。あなたは?」

「オレは……」

名前を聞いた菜生に対して、青年は普通に受け答えをしようとしたが。そこまで言い

かけて表情を曇らせたままそれ以上何も告げることはなかった。

「菜生ちゃん!」

そんな青年の様子に、菜生はどうすればいいか頭を悩ませていると。歩夢や同好会のメンバーがこちらへと駆けてきた。

「みんな…」

「とにかく救急車を呼びましょう!この人ケガしてます」

「そつそうだね…」

そう生徒会長モードのせつ菜—もとい菜々の言葉で、菜生はスマホを取り出すとまたあの宇宙人に狙われるかもしれない事を考慮して、SRCの医療施設へと搬送するように通報するのだった。

そして翌日、菜生は昨日の青年が気になって午後の練習前に医療施設を訪ねた。

「あら菜生ちゃん、お見舞い?」

「はい、昨日の人どうでした?」

「外傷はかすり傷程度だったんだけど、脳に強いショックを受けたのか記憶を失っているの」

母であるしのぶが働いていることもあり、他の職員ともある程度顔なじみである菜生はに廊下で出会った看護師に聞いてみると、そう顔を曇らせて告げた。

「そうだ、部屋はこの先突き当りの929号室よ」

「ありがとうございます」

「その髪、似合ってるわよ」

「えへへ…」

今日は菜生は髪を三つ編みに結っていたのだがそれを見た看護師にそういわれるとまんざらでもないように笑みを浮かべるのだった。

「失礼しまー…あつ、ごめんなさい検査中だとは思わなくて……」

病室に入ると、しのぶが青年の頭部から何やら装置を外しているとところだった。

「もう終わりだから大丈夫よ。でも部活に遅れないようにね、部長なんだから」

「はあ〜い」

しのぶは菜生の顔を見るとそう言って「じゃあお母さんは他の仕事があるから」といって病室を出て行った。

「頑張ってるね！」

「そつ…そんなんじゃないかって私はただお見舞いに…行ってっちゃった…」

するとしのぶの補助をしていた看護師がそうニヤニヤしながら菜生を揶揄ってから外へと出て行った。

「昨日はありがとう…えつと菜生ちゃんだっけ？」

「はい、もう体は大丈夫ですか？」

「うん、おかげさまでね」

「よかったです」

ベッドの上にいる彼がそう答えると、菜生も笑みを浮かべる。

「ねえ、菜生ちゃんは何か部活やってるの？」

「はい…といってもスクールアイドル同好会って言って、同好会なんですけどね」

「スクールアイドル？学生がアイドルやってるってこと？」

「えつと…まあそんな感じですかね？私たちの学校では、グループじゃなくてソロでの活動をメインでやっています」

そう説明すると、青年はさらに驚いたような表情を浮かべるのだった。

「じゃあ菜生ちゃん一人で観客の前で歌ったり踊ったりするんだ？かわいいもんね」

「いや私は部長とはいっても、歌ったり踊ったりはしなくて…マネージャーみたいな感じですよ」

「そうなの？ 菜生ちゃん似合うと思うけど」

「…じゃあまあ、やってみようかな……」

「そしたら見に行かないとなく。俺もちゃんと全部思い出さないと」

そうスクールアイドルとしてステージに立つことに、菜生がそう興味を持つと彼もそう嬉しそうに告げる。

「それは？」

「ああこれ？ 思い出したものなんでもいいから書いてって、先生がね。まあ俺が思い出せるのはこの言葉だけなんだけど……」

彼が手に持ったメモ帳に、菜生が興味を示すと彼は一言だけ書かれたページを差し出した。

『時の娘』何か思い出そうとすると、必ずこの言葉が頭に浮かぶんだよね。菜生ちゃん
は聞き覚えある？」

「いや、私にはまったく……」

『時の娘』それが彼の記憶の鍵となるキーワードなのだろうが、菜生にも全く聞き覚えはなかった。

「俺にとつては、何かきつと大切な言葉なんだと思うんだよね…早く思い出さないとね、俺は誰で何をしていたのか……」

「早く、思い出せるといいですね」

「うん、菜生ちゃんも部活頑張ってるね」

「はいっ！じゃあまた来ますね」

気づけばそろそろここを出ないと部活に間に合わない。そう言っただけで菜生は病室を後にした。

「やつほー歩夢」

「あつ菜生ちゃん、昨日の人どうだった？」

「んん元氣そうだったけど、やつぱり記憶喪失なんだって…」

「そっか、やつぱり昨日の宇宙生命体のせいなのかな？あの人のこと狙ってるみたいだったし…」

学園の近くまで来ると、歩夢と出会ったので一緒に部室へと向かうふたりだったが、自然と会話は記憶喪失の青年の話になる。

「でも不可解だよな。それならどうして、コスモスが来たらずぐに逃げちゃったんだろう？コスモスには勝てないって思ってるのかな？」

「どーだろ？でも言われてみれば歩夢の言う通りおかしいかも…」

「なにか、私嫌な予感がする…」

「大丈夫、何が起きてても私が守ったげるって」

そう不安そうにする歩夢に、菜生はそう笑って応じると。歩夢は少し意地の悪そうな顔をする。

「急に髪の毛編んじやってかわいくして、そんなかつこいいセリフいてもなあ〜」

「にやんだと〜？そういうのは最初に言うもんだよ〜」

そう言って歩夢にじやれつく菜生だったが、歩夢もまんざらでもない様子だった。

「ねえ歩夢、もし…もしもだよ？」

ふいに離れた菜生は、歩夢の目を見て真剣な表情を浮かべると。一度息を深く吸ってから切り出した。

「昨日はああ言っちゃったけど…私も、ステージに立ってみたいって言ったら。歩夢はどう思う？」

「え……？」

今まで頑なに拒んできた菜生にそう告げられて、歩夢はすぐに答えることができなかった。

20話 初恋

菜生がスクールアイドルとしてステージに立つことに興味を持った時、みんな驚きこそすれど。それを否定する意見を述べる人は居なかった。

「これはライブ出演ですね！」

「かすみの方がかわいいんですからね！」

「はいはい、まだ本当にやるって決めたわけじゃないし……」

菜生が本当にステージに立つのならライブ出演だと張り切るせつ菜とかすみに菜生はそう苦笑いを浮かべる。

だがそんな菜生たちの気持ちと裏腹に、水面下で恐ろしい計画は着実に進められていた。

—そしてそれは同時に、菜生から新しい夢を確実に奪ってしまうだろう。

「ねえ菜生ちゃん」

「何ですか？」

その次の日、再びお見舞いにと施設を訪れた菜生に看護師が駆け寄ってきた。

「彼にね、昨日見た夢の絵を描いてもらったんだけど……菜生ちゃんこれわかる？」

そう言つて看護師が、見せてきた絵は巻貝か何かを横から見たような。それでいて機械のような無機質さを感じさせる絵だった。

「……いや、ちよつと私にもわからないですね……ちよつとこの絵写メつてもいいですか？友達にも聞いてみます」

「ええ、もちろん構わないわ。何かわかったら教えてね」

「それはもちろん！」

そう菜生が答えると、看護師は「お願いね」と言つてその場を去る。

「これって……？」

この絵に、菜生はなぜかどこかで見たとある気がしてならなかった。

「こんにちわ〜」

「こんにちわ。今日も来てくれたんだ、ありがとう」

「いえ、ここにきて殺風景ですから。退屈かなって」

そう言つてはにかみながら入ってきた菜生を、彼は笑つて迎え入れる。

「いつもありがとうね、実際検査とか以外でここの人とも話すことないから実際ヒマしてんだよね。だからこうして来てくれるの、本当にうれしいよ」

「ならよかったです。もし迷惑ならもうやめておこうかなって考えてたので…」

「迷惑なわけではないよ。実際こうして話してる方が気がまぎれるし、俺の過去のこととかちゃんと思い出して菜生ちゃんに教えてあげないと思って思えるから」

彼がそう呟きながら、思い出せることを書くようにと手渡されたメモ帳を手でなぞる。そのページの上にはやはり『時の娘』という言葉があった。

「俺がだれで、何してたか。ちゃんと思い出さないとってさ」

「無理に思い出せなくてもいいんじゃない？」

「え？」

不意に菜生がそうぼりつつぶやくと、彼は菜生の方を見るべく視線を上げる。

「思い出そうって悩んで思い詰めても、きつとよくないと思う。そうだ！けがが治ったらうちにきませんか？記憶が戻ったら、本来の日常に戻れば…」

咄嗟にそう口に出したが、半分は嘘だなと菜生は自分で内心苦笑した。

彼が全てを思い出せば、もう菜生は彼と話す機会はなくなる。それが嫌だったのだ。

「それも悪くないかもね」

だがそんな菜生の気持ちを知ってか知らずか、彼はそう短く答えた。

「なんかさ、菜生ちゃんは初めて会った気がしないんだよね。だから、こうして話したりしてたら自然と思ひ出すかなって」

「私も、あなたとどこかで会ったことがある気がする」

「じゃあそうなのかもね」

そう言つて笑うと、菜生も自然と釣られて笑みを浮かべるのだった。

彼と出会つたあの日以来、2日が経過したがあの宇宙生命体も怪獣も現れない平和な日常を過ごしていた。

そして菜生は、無意識のうちにあの青年に恋い焦がれるようになっていった。

その証拠に、菜生は髪形を変え。彼に提案されると今までが嘘のように、自分もスクールアイドルとしてステージに立つてみようかななどと考えるようになった。

「おっやっぱ一緒に練習やってただけあつてうまいうまい」

「菜生ちゃんもともと身体能力高そうだし、本当に強力なライバル登場だね」

「へへっそうかな…?」

ダンスの練習そのものは、菜生は見学といろいろ調べて得た知識を元にアドバイスをするだけだったのだが。今日初めて練習そのものを実施してみても、愛と彼方はそう感嘆の声を漏らす。

「でも、どうして急にステージにたってみようと思ったの？」

「みんなを見てて、私もやっぱり立つてみたいのかなって思ってたんです。きつとそれで見えてくるものもあるし」

果林にそう問われた菜生は、そう答えた。それも本心ではあるのだろう。立つてみなければ、そこからの景色などわかるわけもない。それを理解することで、菜生はよりみんなへの理解を深めたい。

みんなには、そう伝えた。

「菜生ちゃんはさ」

「ん」

「やっぱりあの人のことが好きなの？」

「へっ？ なつなななななんてこと聞くのさ!？」

練習帰りに、唐突に歩夢に指摘された菜生は顔を真っ赤に染めて動揺する。

「ステージに立ってみたいっていったのも、あの人に言われたからじゃない？」

「…無いって言ったたら、嘘になっちゃうかな……」

歩夢にそう言われ、菜生は観念したように答える。

「でもわかんない。『好き』って感情が…だから、私は彼に恋してるのか自分でもわかんない。でも、私がステージに立ってるところを見て、彼が頑張ろうって思ってくれんならそれでもいいのになって」

「菜生ちゃんらしいね。誰かのためにとって思うところが」

「そうかな？結局それって、そうなってほしいっていう私の為なんだよ」

そう微笑む歩夢に、菜生はそう告げる。

「だからさ、歩夢にお願いがあるんだ…」

「お願い？」

「これからはさ、ライバルとして一緒に頑張ってくれない？」

「もちろんだよ！私も、菜生ちゃんと一緒にスクールアイドルができてうれしいよ」

「ありがとう！」

歩夢も、菜生がスクールアイドルをやることに對してそう嬉しそうに反応してくれたことが菜生にとってはとてもうれしかった。

だがそんな幸せな時間は、長くは続かなかった。

「これって…」

帰り着いた菜生は、今日医療施設で看護師に聞かれた。青年が描いた夢の絵を思い出していた。そして、その絵に対して感じた既視感の正体に気が付いたので。

その夜、母は仕事の関係で帰ってこないのが今日も歩夢の家で夕食を一緒に食べて部屋に戻るとパソコンであることを調べていた。

そして、菜生は衝撃の事実にたどり着くのだった。

「やっぱりの絵って…」

菜生はパソコンの画面に映っている画像と、絵を見比べると確信した。

彼が夢で見た物体の正体、それは―ジェルミナⅢだと―

「じゃあ彼はまさか……」

そう思い、ジェルミナⅢの開発メンバーについて調べてみたが彼に似た容姿のクルーの姿を見つけることはできなかった。

ならどうして彼は、記憶を失っているのに夢にジェルミナⅢの姿が出てきたのか。頭を悩ませているとスマホが着信音を奏でた。こんな時間に誰だろう？ そう思いながら

手に取ると、母の名前が画面に映っていた。

「もしもしお母さん？」

『菜生、あなたにどうしても伝えておかないことがあるの』

そう告げる母の声は、いつになく真剣なものだった。

本来、SRCとは関係のない菜生にこのことを教えるのはと母も悩んだそうなのが、あの青年を最初に見つけて頻繁に会って会話をしていた菜生には知る権利があるとして母はとても言いにくそうに言葉を紡ぎ始めた。

『彼の名前はへ黒崎レイへ三年前まで、ジェルミナⅢの建設クルーだったの……』

「前『まで』……?」

彼の名前を聞いて、菜生は背中に冷たいものが走るのを感じたがそのまま続きを母に尋ねた。

『3年前、建設中の事故で死亡者が出たのは覚えてるわね?』

「うん……あの事故のニュースはとつてもシヨックだったから……」

そこまで聞いて、菜生の心はそれ以上聞くなと警鐘を鳴らしていた。だがそれでも菜生には、その続きの言葉を聞くのを拒むことができなかった。

『結論から言わせてもらおうわ。レイはもう、生きてはいないの……』

「え……」

『彼は、あの時現れた宇宙生命体によって前頭葉にバイオチップを埋め込まれて疑似的に生命活動を再開した。操り人形なのよ』

その事実は、菜生にとってはとても耐えられたものではなかった。

「嘘だよ……お母さん、私怒るよ……？私が毎日会いに行つてたのがそんなにいけないことだったの？」

『残念だけど本当よ……レイの処置はコールドスリープ。このまま彼を放つておけば、ベースに何が仕掛けられるか判らない。理解して、菜生？』

「わかんない！わかるわけないよッ!!このまま永久にレイを眠らせるつもりなの!?!そんなこと……そうだ、そのチップを外せば——」

『チップを外すのは、かなり難しいわ。それに、うまく外したとしても彼はもともとの人間としての正しい状態に戻るだけ』

菜生の言いかけた言葉を、しのぶは遮った。そして、人間としての本来の姿というものが、死人に戻るといふことも菜生にはすぐ理解できた。

『彼には、明日の正午記憶回復の処置を行うと伝えてあるわ。あなたの気持ちはわかる。だからこそ、最後にもう一度彼に会つてあげて……』

そう言つて電話が切れた。いや、菜生はどうしたらいいかわからず切つてしまったのだ。だが母もそんな菜生の心情を理解してか、もう一度電話をかけてくることはなかつ

た。

「どうすればいいの…?」

仮に明日会ったとして、菜生は何かできるだろうか？治療頑張つてねと言つて笑つて送り出すことがきつと正解なんだと思う。でも、そんなことができるほど彼女の心は強くなかつた。

窓を開けて夜空を見上げても、答えなんて教えてくれなかつた。

「菜生ちゃん…?何があつたの?」

「あつごめん…こんな時間に大声出して迷惑だつたよね…」

隣の部屋の窓が開いて、歩夢が心配そうに顔をのぞかせると、菜生はそうバツが悪そうに笑みを浮かべた。

「ううん、そんなことないよ?それに、菜生ちゃんのことを心配なの…菜生ちゃん、泣いてるから…」

「あ…」

歩夢にそう言われて、頬に手を添えると流れている涙の雫が指先に触れた。そこで初めて、菜生は自分が涙を流していることに気が付いた。

そしてそれを自覚すると、余計に涙が止まらなくなつてしまった。

「もしよかつたら教えて?今からそちに行つてもいい?」

一人でいたら、辛い現実に押し潰されてしまいそうだった菜生はこくこくと無言で頷いたのだった。

「そっか…そんなことが…」

「ねえ歩夢、私どうしたらいいの…?」

部屋に歩夢を招き入れて、ベッドに二人並んで座ったまま事情を知って表情を曇らせる歩夢に菜生はそう震える声で問いかける。

「私は…明日会いに行つた方がいいと思う」

「なんで…?会つても苦しいだけだよ…」

「でも、明日会わないと菜生ちゃんは今もう二度とレイさんに会えないかもしれないんだよ? そうなつたら絶対菜生ちゃん後悔する。その方がもつと…辛いんじゃないかな?」
そう告げる歩夢の心の中には、かつて父を喪つた時の菜生が今の菜生に被つて見えていた。

もう会えなくなるとわかつているなら、絶対に会つた方がいい。もうあんな風に悲しむ菜生を見たくない、悲しんでほしくない。純粹に幼馴染として、歩夢は菜生のことを想っていた。

「うん…わかった。私、明日行ってくるね…?」

「うん、頑張つてね。そして午後一緒に練習行こ?」

「わかった。ありがとう、歩夢」

「ううん、いつも菜生ちゃんには支えてもらつてきたから。これくらいのことしかしてあげられないけど…」

「そんなことない。本当にありがとう」

ただ菜生にとつて、歩夢という幼馴染の存在がこの時はいつも以上に心強かった。

翌日、菜生はレイが生前通つていた大学を訪れていた。

「君ですか、ジェルミナIIIの事故の話が聞きたいというのは」

そう言つて、菜生を出迎えてくれたのは中年の男性教授だった。急であつたのにも関わらず、菜生の願いを聞いてくれたこの男性は当時レイに教鞭をとつていたのだという。

「宇宙での死は一瞬にして訪れます。ぐずぐずしない、あつという間です」

そう切り出してから、教授はレイの死因について話してくれた。

点検中だった機密バルブの圧力に不具合が発生し、ちようどレイが作業をしていたブ

ロックが崩壊。宇宙空間での装備をしていなかったレイは生身で宇宙空間に放り出されそのまま行方不明になったという。

そして、人間が生身で宇宙空間で生命活動を行うのは不可能。レイはそのまま地球に帰ることなく死亡してしまったのだ。

「宇宙空間での作業は死と隣り合わせの危険なものです。それでもレイは、宇宙に時の娘を造りたいと言って建設クルーに志願したんです」

「時の娘……?」

「当時の建設クルーは、ジェルミナⅢのことを時の娘と呼んでいたんです。人類が地球に生まれて、長い長い時を経て初めて宇宙に生み出したもの。建設クルーには、自分がちが造り出そうとしているものにそう言った誇りや愛情があつたんです」

レイが唯一覚えていた言葉は、命を懸けて宇宙に造り出そうとしていたステーションの名前だったのだ。

「レイが建設クルーになったときに撮った写真です。もしよかつたら持つて行ってください。私は、一人でも多くの人に、宇宙に時の娘を造り上げようと命を懸けた彼のことを覚えてもらいたい」

そう言って教授が差し出した写真には、仲間たちと笑いあうレイの姿が写っていた。

「私、絶対忘れません。宇宙への夢を、繋いでいくのはきつと私たちだから……」

そう返す菜生に、教授は嬉しそうに笑みを浮かべた。

「もしそのために、このキャンパスを訪れる日が来ればその時は歓迎します」

「今日は、本当にありがとうございます！」

そう言つて菜生は一礼すると、大学を後にした。どうしても最後に会う前に、彼のことをちゃんと知つておきたかった。そして菜生は、それを知つたうえで自分がどうすべきかを考えていた。

菜生は、事実を知つたうえでも。レイが医療施設の奥にあるコールドスリープ処置を行う部屋へ行く前になんとしても会おうとバイクで施設へと急いだ。

施設へ駆け込むと、そこにはスタッフに囲まれて歩くレイの姿があった。

菜生が駆け寄つてきたのに気がついた彼は、肩で息をする菜生に笑いかける。

「まるで菜生ちゃんが今から治療受けるみたいじゃん。大丈夫だつて、心配しなくても全部思い出すよ。そしたら『時の娘』の意味、真つ先に菜生ちゃんに教えるから」

そう告げるレイの首には『REI KUROSAKI』と記されたドッグタグがかけられていた。きつと認識票か何かだと思つているのだろう。深刻そうな表情の菜生と

は対照的に、なんとも思っていないであろう彼は菜生に対して笑っていた。

「…うん」

「じゃあ後でね」

そう言つてレイは踵を返すと、スタツフと共に施設の奥へと進んでいく。エスカレーターに乗つて登つていくレイの背がどんどん遠くなつていくのを見てどうしてもある感情が抑えられなくなつていった。

「レイー！」

気が付けば菜生は駆けだして、本来立ち入り禁止の標識も無視してレイへとまっすぐ走っていく。

「私ときてー！」

そう言つて菜生は、レイの手を引くと今度はエスカレーターを逆走して駆け下りる。一目散に施設の外を目指して突っ走った。

21話 忍び寄る陰謀

レイの手を引いて走る菜生を、SRCの関係者は止めるために追いかける。

「なんで逃げないといけないんだ？」

「話はあとで！」

急に自分を引っ張って走る菜生が、なぜこうも必死に逃げようとするのかレイにはわからなかった。だが菜生に、その説明をしているヒマは無かった。

「ほらこれ被って！」

駐車場に飛び出した菜生は、自分がバイクに乗るときに使っている黒のヘルメットを放って渡すと。自分は歩夢とタンデムするために買ったピンクのメットを被る。

「いたぞー！」

そうこうしていると、菜生達を探していた職員がこちらを指さして駆け寄ってきた。

「乗って！……はやくッ！」

そしてレイをタンデムシートに乗せると、菜生はスロットルを全開にして走り出す。

そしてそのまま、止めようと飛び出してきた職員たちを引き倒す勢いで突っ切るとそのまま施設外へと飛び出した。

「無茶するなあ……」

「私はあなたに、このまま生きていて欲しいから……」

呆れたようにつぶやくレイに、菜生はそう小さく漏らす。

どこまで逃げればいいのか？そんなことは考えずに飛び出してしまった菜生だったが。ひとまず学校の研修室で匿えないかと考えた結果、虹ヶ咲学園を目指してバイクを走らせた。

だがそんな時、街に以前撃退した怪獣ガルバスが出現した。

ひとまず菜生は街外れにバイクを止めると、ヘルメットを脱いだ。

「ガルバスだ……様子がおかしい……」

「菜生ちゃん、どうした？」

「ここにいて、すぐ戻るから」

「あっ……おい！」

駆けだしていった菜生に、レイは手を伸ばしたがすぐにその手を下ろした。そして、菜生がバイクから降りた時に落とした写真に気が付きそれを手を取る。

「これ……」

それは先ほど教授からもらった、レイがジェルミナⅢの開発クルーになったときの写真だった。

「…そうか、俺はあの事故で……」

ジェルミナIII建設中の事故で宇宙空間に放り出されたレイは、そのまま命を落とした。そして、あの謎の宇宙生命体『ワログ』によって埋め込まれたバイオチップによって、疑似的に生き返らされたうえでこの地球に戻されたのだ。

そしてレイが記憶を取り戻したところ、SRCもガルバスを保護すべく出動した。

だがしかし、レイに埋め込まれているバイオチップを解析した際。逆にコンピューターを汚染され、出撃した航空機はまともに飛行することすらままならなくなり、ガルバスの進行を止めることができずにいた。

「コスモース！」

だがそんな事態になっているとは知らないまま、菜生はコスモプラックを突き上げ光を解き放つ。

「ハアッ！」

「ギャオオオ!!」

コスモスはガルバスの前に立ちただかると、これ以上は進ませないとばかりに腕を広げて進路を塞ごうとするも、ガルバスはお構いなく突っ込んできてしまい敢え無く戦闘

へと突入した。

(大丈夫、この前だってできた。ガルバスの動きは分かる、いけるッ！)

コスモスの中で菜生はそう自分に言い聞かせて、一刻も早く事態を解決させてレイのところに戻らないと焦っていた。

だが、ガルバスの動きを止めようとするも以前とは比較にならない力で振りほどかれ。腹部に頭突きを食らい態勢を崩されてしまう。

だがコスモスもすぐに態勢を立て直すと、ガルバスの腹部に鋭い掌底を突き出す。

そのガルバスの様子は、だれが見ても異常だった。本来大人しいはずのガルバスが自分から街に向かって進行していること。そして、異常なまでにコスモスに対して好戦的なこと。

「ぐう……」

ガムシヤラに振るわれるガルバスの腕が当たるたびに、前回とは比較にならない衝撃がコスモスを襲った。だがそれでもコスモスは、制御を失った航空機が真っ逆さまに地面目掛けて墜落していくのが見えるとガルバスを突き飛ばし、墜落していく航空機をキヤツチ。そのまま地上を滑らせるようにして、不時着させた。

だがそれに息をつく間もなく、ガルバスはコスモスめがけて火球を放った。

「イヤアアッ!?!」

全開は一度も見なかった攻撃に、完全に反応が遅れたコスモスはこれを胸部にまともに食らい。その巨体は宙を舞った。

そのままコスモスは地に伏し、立ち上がることなくその体は背景に溶け込むようにして消えてしまう。そしてそれを上空から、例の宇宙生命体はただ眺めていた。

「……くうっ……」

菜生は、胸部に痛みを感じて目が覚める。

「気が付いた？」

「お母さん……？……ここは……」

「あなたはガルバスが出現した現場近くに倒れてたのよ。よかった、大丈夫そうで……」

目が覚めると、そこは見慣れない天井だったが。白衣を着た母の姿を見て、ここがS

RCの医療施設であることを認識した。

「ごめんなさい…」

「まあいいわ。でも歩夢ちゃんにはちゃんと心配かけてごめんって謝つとくのよ？練習に出来ないって私に連絡してきて、昨日からあなたに付きつきりだったんだから」

そこで菜生はようやく自分の右手が握られているのに気が付いた。視線をそちらへとむけると、歩夢が菜生の手を握ったまま眠ってしまったのが視界に入った。

「ガルバスは？」

「防衛軍の攻撃を受けて、地底に逃げ込んだわ。でも変電所を破壊されたから、街の一部では電気が止まって復旧まで大騒動。SRCも出動停止…レイに仕込まれたバイオチップで施設もダウン。状況はかなり悪いわ…」

そのため息交じりに告げる母の顔は、明らかに疲れ果てていた。

「ガルバスは防衛軍が討伐することになった…」

「そんな…！このくらいで保護をあきらめるなんて…」

「こんなこと？ライフラインが止まれば、それだけで命に係わる人が出てくる。例えば重症患者とかね。怪獣の保護っていうのは、そんなリスクを背負って行われているの。菜生も覚えておきなさい」

ガルバスの排除に否定的な菜生だったが、母にそう諭されると口を噤んだ。

「それにレイの行方も判らなくなっただけど、捜索は行われているわ…一応それは教えておくけど、あなたは絶対安静。私がいいというまでこの施設からは出ないように」

「わかりました……」

「よろしい。じゃあ、お母さんは仕事に戻るから。また何かあったら呼びなさい？」

そう言つて母が出ていくと、思わずため息が出た。

そして空いた手で隣の机の上に置かれていたスマホを手に取ると、昨日のガルバスとの戦闘についての記事を見ていた。

—わざわざ街に被害を出してまで、怪獣と共存することに何のメリットがあるのか理解できない

—地球は人間が暮らすためにある

—昨日のように広範囲の停電のような被害が出る前に、怪獣を殲滅するべき

「勝手なことばかり…同じ地球に生まれた命を大事にして、何が悪いの…？」

そんな書き込みばかりで、菜生は一層表情を曇らせた。この書き込みのように、怪獣との共存は無理なのかと。

「ごめんね…心配させちゃったよね……」

寝ている歩夢に、菜生はスマホを膝の上に置いてから左手を伸ばしてそう呟く。

「ごめん…私、もうちよっと無茶するね」

それでも業生は、一度レイを連れ出したことへの責任。そして、このままレイを放つてはおけないそんな気持ちばかり強くなっていた。

一方、防衛軍に追われる身となったレイは自身の母校である大学の敷地内を訪れていた。

当時の恩師である教授が、今の学生と歩いているのを見てやはり自分は記憶にある通り。既に死んでしばらく経っている事を実感させられる。

そう思いに耽り立ち尽くしていると、足元に丸まった新聞が転がってきた。レイはそれを手に取って広げると、その記事に目を通す。

「そっか…：ジェルミナⅢ、完成したんだ……」

その見出しには『ジェルミナⅢ遂に完成!!』と大きく書かれていた。

そして思い出すのは、自分がジェルミナⅢから外に放り出された後の記憶。あの宇宙

生命体によって無理やり生き返させられ、あの夜菜生の前に現れることになった自分。それが偶然ではなく、仕組まれたものだった事も――

「全部思い出したのに、なんで俺を生かしておく……？まだ、俺にさせたいこともあるのか？」

そう恐らく自分の行動を監視しているであろう、あの宇宙生命体に問いかけても答えは返ってくるはずもなく。もう一方の追跡者を撒くために、首にかけられたドッグタグを引きちぎる。

「ターゲット発見」

不意にそんな声が聞こえ、周囲を見渡すと。スーツにサングラスといたいかにもこの場に似つかわしくない人間がこちらに向かってくるのが見えた。

やはりドッグタグに発信機の役割を果たすものが仕込まれていたのだろう。

周囲の学生を押しつけて近寄ってくる諜報員に対して、レイは背を向けて走り出す。

一方そのころ、昨日練習にこなかつた菜生が入院していると聞いて同好会の他のメン

バーもお見舞いに施設を訪れていた。

「おはよう歩夢……つてあれ？ なつちは？」

一番最初に病室に入った愛が、ドアの開いた音で目が覚めた歩夢にそう声をかける。

「このベッドで寝てるはず……あれ？ いない……」

菜生が寝ていたはずのベッドは、空で布団の上には畳まれた患者着があるのみだった。

「菜生ちゃんまさか抜け出して……」

「まってください、先輩怪我してるんですよね？ どうしてそんな……」

そうこうしていると、看護師が検査のために入って来たのだが菜生がいないのに気が付くと顔を青ざめさせて病室を飛び出すと、しのぶを連れて戻ってきた。

「歩夢ちゃん、菜生は？」

「おばさんごめんなさい……起きたらもう菜生ちゃんいなくなつて……」

「まずいわね……今のあの子は何をしでかすかわからないわ」

歩夢がそう申し訳ないとしのぶに告げると、しのぶは困った表情でそう呟いた。

「どうしてせんぱいはそこまで……」

「そうね、これだけ心配かけちゃつてるし。みんなには教えないわけにはいかないわね」
そうかすみに問われたしのぶは、そう前置きをしたうえで事の顛末を話はじめた。

「菜生がこの前助けた青年、レイを何としても助けようとしているの。あの子…そういう無謀なところばっかり死んだお父さんにそっくりだから……」

「私たちも探しに行きましよう！」

「ダメよ！」

事情を知って、せつ菜は探しに行こうと提案するが。それはしのぶによつて却下された。

「どうしてですか？ 菜生ちゃんを探すなら、人手が多い方が絶対……」

「危険すぎる。それに防衛軍が動いてる、娘を心配してくれるのはうれしいけど。あなた達は民間人、危険に晒すわけにはいかないの。あの子は必ず私が連れ戻すから、安心して待ってて？」

「菜生ちゃんを、お願いします……！」

そう言つて、菜生やレイのいそうな場所へのヒントも出さずに。しのぶは病室を後にしようとする、その背に歩夢はそう告げるのだった。

「そんなことになつてたなんてね……」

「菜生ちゃん、そのレイさんつて人が気になつて仕方がない様子だったしね」

「恋は盲目…なんて言うしね。何事もなければいいんだけれど……」

9人残された病室で、三年生が3人がそんな風に言葉を交わす。最長学年として、あ

まりみんなが取り乱さないようには思いつつも心配せずにはいられない。

「やっぱり探しに行こうよ、じつと待ってるなんて性に合わないし」

「ですね、やはり行くべきです」

そう提案する愛とせつ菜に、歩夢は「ううん」と首を横に振った。

「私は信じてる。菜生ちゃんは大丈夫だよ、きつといつもみたいに笑って帰ってくるから」

そう静かに告げる歩夢だったがm後ろに隠した手は震えていた。

(菜生ちゃん…私待ってるから……)

一番付き合いが長い私が信じて待っていないと。そう自分に言い聞かせて、飛び出したい気持ちを歩夢は抑え込んでいた。

きつと自分が信じていないと、ここにいる他の8人に不安を余計煽ることになるであろうから。

一方で菜生は、バイクに置き去りにしていたカバンの中にあつたはずのレイの写真がなくなっていることから。もしかしたら写真の場所である大学へと向かつたのではと予想していた。

「おねがい……ここにいて……」

母が着替えとして用意してくれていた私服に身を包んだ菜生の姿は、幸いなことに大学の敷地内でも目立つことはなかった。

そして菜生は、レイが付けていたトッグタグを拾つたことで。ここにレイがいると確信した。

しばらく敷地内を彷徨っていると、噴水の向こうにレイらしき人物が見えた。その人物は、スーツにサングラスといったいかにもな風貌の男数名に追われていて菜生は確信に至つた。

すると、レイも菜生に気が付いたのかお互い立ち止まつて視線を交わす。

レイがその時何かを言っていたようだったが、距離の離れていた菜生には聞こえない。二人はすぐに走り出すと合流し、共に大学の敷地外を目指して走つた。

「ウルトラマンコスモス……」

「何か言つた？」

「いや、何でもない。走るよ！」

レイがもう一度小声で何かを呟いたが、菜生には聞き取ることができず。聞き返すもそうごまかされてしまった。

だが、そんな二人を遮るように前の道路にセダン車が急停止し。中から後ろから迫ってきている男性と同じ格好の男性が降りてこちらへ駆け寄ってくる。

「止まれ！」

「邪魔しないです！！」

菜生は逆にその男性に突っ込んでいくと、腕を掴んでそのまま投げ飛ばした。相手は、完全に虚を突かれた形になりそのままアスファルトに叩きつけられて呻いていた。

「ごめんなさい」

「菜生ちゃん乗って！」

投げ飛ばした男性に一言謝ってから走り出した菜生に、レイは前の車の運転席に乗り込みながら声をかける。

すると助手席に菜生が乗ったのを確認するや否やアクセルを踏み込み、車を走らせてその場から逃げるのであった。

「まったく無茶をする……」

「菜生ちゃんがそれ言っちゃう？あれ防衛軍の特務機関、そんな人を投げるなんて無茶苦茶だよ」

「こういう女の子は嫌い？」

「嫌いなら一緒に逃げたりしないさ」

「ありがと」

投げ飛ばした相手への罪悪感をごまかそうと、そう告げた菜生にレイは視線は前を向いたまま返事をした。

そしてそれと時を同じくして、宇宙生命体はガルバスを再び暴れさせようとしていた。

2 2 話 サヨナラ

防衛軍の諜報員を出し抜き、街から外れた場所にある廃屋まで逃げてきたレイと菜生は車から降りて座り込んでいた。

「もう何も思い出さなくていい…なんの治療も受けなくていいから……」

そう言つて菜生は、レイのドックタグを投げ捨てた。そこで菜生はレイに、SRCが
という措置を下そうとしていたかをすべて話した。

「私は誰にも死んでほしくない…人間だつて、怪獣だつて…それなのに……」

「菜生ちゃんはさ、本当に優しくんだね……」

俯く菜生に、レイはそう優しく声をかけた。

「そんなことない…私が求めてることは、夢物語なのかな……？」

怪獣と人間が共存できる世の中。菜生は、スクールアイドルを応援することと同じくらいそんな世界を夢見ていたのだ。

「菜生ちゃん、どんなこともさ。最初に誰かが実現させるまでは、夢物語なんだよ？」

「え……？」

そんな論すように告げるレイの言葉に。菜生は視線をを上げる。

「初めて人類が海に出た時も、初めて飛行機であの空を飛んだ時も。実現する前までは、誰もがそんなことできるわけではない。夢物語だつて言われてたんだよ？」

その言葉を、菜生は黙って聞き続けていた。するとレイは、空を見上げて続く言葉を並べた。

「だから俺はさ、あの空に時の娘を造りたかつたんだ…。これ、俺だよな？」

その言葉に、菜生は顔を強張らせた。その写真をレイが持っていることは想像できていたが、記憶も戻っているとは思わなかった。

「それは…」

「後悔はしてないよ。俺は自分の夢を叶えるためにやつたんだから」

「自分の夢を叶える…」

「そう。夢物語を、現実にするためのさ。あの宇宙そらに居住型宇宙ステーションを造るっていうね。菜生ちゃんは違うの？」

自分が既に死んでいる人間であることを自覚したうえで、レイは菜生に語り続ける。「いままで沢山の人が、夢を追いかけてきた。実現させようとき。俺たちジェルミナの建設クルーもそうだった。だから、自分たちが夢を継ぐものだつて言う誇りを持つていたから。『時の娘』つて名前を付けたんだ」

宇宙ステーションの建設など夢物語だ。そう言われても、その夢を諦めなかった先人

たちの夢を継ぎ。現実にする。その誇りが、レイにはあつたのだ。

「菜生ちゃんは違うの？ スクールアイドルだけじゃない。人間と怪獣と、地球に産まれた命と一緒に生きていく。それが実現するって信じてるんじゃないの？ 君の夢は、君が信じないで実現するのか？」

あえて厳しめに問いかけるレイだったが、菜生は消えそうになつていた光が再び輝きを取り戻そうとしているのを感じた。

「そうだよね…私が信じないと、私が目指すのをやめたら。永遠に夢物語で終わっちゃうもんね」

そう言つて立ち上がると、菜生はその胸に強く決意した。

「今の私にできることなんて少ないと思う。でも、私の夢は…私が叶えて見せる！」

「その意気だ」

「ありがとうね」

そう言つてほほ笑むが、宇宙生命体の陰謀は次の段階へと入っていた。それは、菜生にとつて更なる試練となる。

日が沈み始めたころ。地底からガルバスが再び出現し、学園のある近くのエリアに存

在しているエネルギープラントへと進行を開始したのだ。

万が一、稼働中のエネルギープラントが破壊されれば。街には甚大な被害が出る。それに、そこまでガルバスが進行するだけで、防衛軍との戦闘の余波で街は壊滅的な被害を負ってしまうだろう。

菜生は、避難を呼びかけるべく鳴り響く警報の音ですつと電源を意図的に落としていたスマホを立ち上げて情報を得ようとしていた。

すると、歩夢からの着信が入る。

「…もしもしっ？」

『よかった、やっと繋がった……』

恐る恐る出ると、幼馴染がそうほつとした声が聞こえてくる。

「ごめん歩夢、私……」

『その話は後にしよ？今どこにいるの？菜生ちゃんも逃げよう？』

「えつと……」

その言葉に、菜生はどう答えるべきか言葉を詰まらせていると。近くにしのぶもいたのか『ごめん歩夢ちゃんちよつといい？』という声が聞こえた後、しのぶに電話の相手が変わった。

『菜生、今わかってることを全部教える。そのうえで、あなたを心配しているみんなの所

に戻ってきてほしい』

「お母さん……」

『今ガルバスがエネルギープラントに向かっているの、このままだと甚大な被害が出る。それに、ガルバスの頭には変調器が撃ち込まれているの。全部、あの夜に現れた宇宙生命体に仕組まれていたのよ』

そう、レイを送り込んでSRCの機能をマヒさせ。大人しいはずのガルバスを暴れさせているのも、全て偶然ではなく仕組まれていたのだ。

もしこのままガルバスが街で暴れまわれば、多くの人間は怪獣を排除するべきと考えるだろう。

そうして、自分たちにとっての快適さのみを追い続ければいつか人類は勝手に滅びる。ただでさえ環境破壊だの言われているご時世だ。そんな未来が来ることも想像に難しくない。

「じゃあプラントのタービンを止めないと……」

『あなたに何ができるっていうの？ いいから戻ってきてきなさい！』

「俺なら止められる！」

「レイ!?!」

そのやり取りを聞いていたレイがそう叫ぶと車へと乗り込んでいった。そして菜生

もそれに付いていくようにして電話を切ってレイを追うのだった。

「あの子はほんと……歩夢ちゃんたちはここにいて？私は娘を説教してくるから」

そう苛立った様子でしのぶも菜生を捕まえるべく飛び出すのだった。

(菜生ちゃん、無事でいて……)

歩夢にはもう、言葉の届かない幼馴染にそう祈るしかなかった。

一方で、防衛軍の戦車部隊が出動し。夜の街は普段の様子からは想像もつかない程に、人の気配がなかった。

そんな街を車で駆け抜けてプラントへと侵入した菜生とレイは、問題のタービンの前にたどり着いていた。

「ダメだ、ロックかかっている……」

扉を掴んで強引に開けようとする菜生だったが、女子高生の筋力でロックのかかった鉄の扉が開くわけもない。

「菜生ッ！」

「なっ……お母さん!?!」

そうしていると、菜生達を追ってきたしのぶが追い付いてくると菜生は驚愕の表情を浮かべた。しのぶの服装は、医療施設で働いているときの白衣ではなく。SRCの怪獣保護などの活動を主に行っている特捜チームの制服だったからだ。

そしてそれだけでなく、しのぶは一切の迷いもなく、腰に下げていた銃をレイに突き付けたことで、菜生は一層訳が分からないといった様子だった。

「あなたが悪くないのはわかっている。でも、その先へ行かせることはできない」「やめて！レイを撃たないで!!」

そう告げ、トリガーへと指をかけると。レイを庇うように菜生が立ちはだかった。

「…どきなさい」

「嫌だ！私は誰にも死んでほしくなんかない、誰も殺してほしくもないの!!」

「彼はあの宇宙生命体を送り込んできたのよ？それに本来なら、彼は死んでいる。私は親子喧嘩をしに来たわけじゃないの」

だが、お互い譲るつもりはなかった。菜生の言っていることは、子供のわがままのようにも聞こえていたのかもしれない。だがそれ以上に、見過ごした場合の被害のことを考えればしのぶには絶対にレイを通すわけにはいかなかったのだ。

「撃ってください」

「レイ!?!だめだよそんな…」

「けどその代わりに、菜生ちゃんはこの町に住む人たちの安全を約束してください」

菜生としのぶの間に流れる静寂を打ち破って、レイはしのぶの前に自ら出るのだった。

「わかったわ。元々、私の仕事はそれだしね…」

そう短く返すと、再び引き金に人差し指をかけ。引き金を引くべく指に力を入れる。

「いたぞー!」

さらに後方から、そんな男性の声と共に防衛軍の特務部隊がなだれ込んできた。その方を振り返ったしのぶはすぐにレイに視線を戻すと、引き金を引いたのだった。

しのぶが引き金を引いたのを見て、菜生は目を閉じた。だが聞こえたのは、何か金属が爆ぜた音だけ。恐る恐る目を開くと、レイではなくタービンへ続く扉が破壊されていた。

「早く行きなさい」

そうレイと菜生に告げると、レイと菜生は扉の奥へと向かう。

「何のつもりだ!？」

「気が変わったのよ」

そして自身に銃口を向けた特務兵に、しのぶも銃を向けると不敵にそう返すのだった。

そして菜生とレイはタービン室に入り込むと、レイの手によってタービンの停止を指していた。

「ジェルミナのシステムとやっぱり同じだ。マザーにログインせずにタービンを停止して見せる」

そう言って、パネルを外すと中のコンソールをいじり始める。

だがそうしているうちにも、ガルバスは防衛軍の戦車部隊に攻撃を押し切り。着々と都市に入り込もうとしていた。

「菜生ちゃん、そのレバーを下ろして。それで終わるから…」

「わかった」

作業を始めて十数分が経過したのち、レイは肩で息をしながら菜生にそう指示をする。意外と堅かったレバーだったが、なんとか菜生はそのスイッチを切ったことでター

ピンは停止した。

そして、そのターピンを指すように操られていたガルバスは。対象が活動停止したことで変調機も止まってしまい正気に戻るのであった。

正気に戻ったガルバスは、大量の戦車を目前にして。先ほどまでの凶暴性は鳴りを潜め、怯えた様子で後ずさりを始めた。

だが、それを攻め時と判断した防衛軍は一気にガルバスへ対して攻勢に出るのだった。

そして逃げようとするガルバスに、宇宙生命体は背後に光球の姿で現れ。ガルバスを攻撃し始めた。

「……止まったか……」

「レイ大丈夫？」

「ハア……ハア……ごめん肩貸して？……ここでようか」

「わかった、すぐに病院へ」

「ちよつと休めば平気だよ。それに病院はまずいっしょ」

疲れた様子の子のレイに、菜生はそう慌てるが。その申し出を聞き入れ、とにかく外に出て公園の街灯下まで運んだ。

すると、ガルバスが防衛軍と宇宙生命体の両方から攻撃しているのが見えた。

そちらに注意が逸れレイの腕を掴んでいた力が弱まると、レイに埋め込まれていたバ
イオチップが止まりかけているのか、先ほどまでより余計に顔色を悪くして崩れるよう
にして座り込んでしまった。

「レイ大丈夫!？」

「俺の心配はいい…ガルバスを救うには、ワロガを倒すしかない」

心配する菜生に、レイは顔を伏せたままそう告げた。

「そう言われても…」

「キミは優しいから、俺が生きていたら。ヤツを倒すのをためらう」

「何言ってるの？私があんなのと戦えるわけ…」

菜生がその気になれば、宇宙生命体『ワロガ』を倒せるという風な口ぶりに菜生はそ
う否定しようとした。

「あいつを倒して、俺を眠らせて…ウルトラマンコスモス…」

その言葉に、菜生は息を呑んだ。

「初めて会った時から、キミを知ってる気がした。でもそれは、あいつに埋め込まれた偽
の記憶だった。…全部仕組まれた、罠だったんだ」

レイを菜生が助けたことすらも、仕組まれた罠だったと。菜生がレイに惹かれれば、
レイを死なせないために。菜生はワロガと戦うのを拒む。全て敵の思う壺だったのだ。

「それでも俺は、キミと出会えてよかった。だから、キミの手で俺を人間に戻してほしい。あの宇宙そらに、時の娘を造ろうとしていたレイに戻してほしいんだ」

「できないよ……だって……だって私はッ！」

レイのことが好きだから。レイに生きていて欲しいから。そう言おうとした菜生の言葉を、レイは遮った。

「その先を言ったら、君はもう戦えない。でも、アイツを倒せるのはキミしかないんだ。キミの夢と、俺の夢の為に。ヤツを倒して」

そう告げるレイに、菜生は何も言わないまま。目に涙を浮かべつつもコスモプラックを取り出し、胸の前でコスモプラックを握った右腕と左腕の間に光の球を作ると。その光に包まれながら右腕を天に突き上げ、光の花を咲かせた。

防衛軍とガルバスの間光が立ち上ると、月明かりに照らされながら現れたコスモスは、レイの方に視線を一度向けると両拳を握りしめた。

そして駆け出したコスモスは、ガルバスの前へでると。ワロガから放たれた雷撃を手刀で払いのける。

「セリヤアー！」

そしてそのまま、後ずさりその場から逃げるガルバスには目もくれず。コスモスはワロガ目掛けてルナストラックを放った。

すると、ワロガは光球状の姿から。人型へと姿を変え、コスモスを倒すべく戦闘態勢に入った。それを見たコスモスも、その身を青いルナモードからコロナモードへとすぐさま姿を変えた。

「ダアツ!!」

優しさから強さへとモードチェンジしたコスモスはワロガへと果敢にも駆け寄っていく。

だがワロガはそんなコスモスに対して腕を水平に振るい、それを回避するために屈んだコスモスの胸から肩にかけてを蹴り上げる。

そして態勢を整えようとしたコスモスを今度はラリアットでなぎ倒す。コスモスは、普段と打って変わって直線的な動きが多いせいでもあった。

それもそのはず、今現在コスモスは菜生の意思のみで戦っている状態であり。コスモスは、菜生諸共敗北するリスクを承知で菜生にこの戦闘の全てを委ねたのだ。

それに加えて更に、先日のガルバスの戦闘で菜生にもダメージが残ってしまった左肩から胸のあたりを重点的にワロガは攻撃していた。

『オオオオオオオ』

悠然とコスモスへと振り返るワロガに少しでも食い下がろうと菜生は起き上がるが、ワロガはその様子を見てすぐさまコスモスへと駆け寄り殴りかかる。

「グアッ…」

それを前転で回避しても、振り返ったワロガに起き上がる際の隙を突かれて殴り飛ばされてしまう。

それでもコスモスは、後転から素早く両腕を付いて跳ね起きると距離を取る。

レイは、そんなコスモス―否、菜生の戦う姿を息を呑んで見守っていた。

その視線の先で、先の尖っている籠手でコスモスを貫かんと放たれたワロガの腕をコスモスは掴んで受け止めた。

そしてそのままワロガの腕を抱えると、一本背負いのように豪快に投げ飛ばして見せた。

このまま一気に攻勢に出よう。そう考えていた菜生の目の前で、ワロガは突然姿を消した。

(どこだ…う？どこにいる？)

だが菜生は五感でワロガからの殺気は感じ取っていた。だからこそ、周囲を警戒していたのだが。ワロガはコスモスの背後に現れると、組み付いて首を絞めてきた。

「うぐっ…」

―ピコンピコン

そして、前回の戦闘のダメージが残っていたことも災いしてエネルギーが既に危険域

であることを知らせるカラータイマーが音を立てて赤く点滅を始めた。

しかしコスモスは慌てることなく、ワロガの腕を掴むと再び勢いよく投げ飛ばす。しかし今度はワロガも地面に手をつけて、側転をすることで地面に叩きつけられることなく態勢を整える。

そしてコスモスが一度仕切りなおそうと距離を取ると、ワロガは再びその姿を消す。

だが、レイにはワロガの姿が見えていた。ワロガは、自身にとつて都合のいいようにレイを泳がせるために。レイとシンクロしていたのだ。テレポート能力を駆使してコスモスの視界から消えたワロガを、レイは目で追うことができていたことでそのことに気が付いた。

「許さねえ……」

ワロガがレイに仕込んだバイオチップから情報を得て、SRCの活動をマヒさせたように。レイにもワロガを邪魔することができるといふ致命的な弱点を、この局面でレイに気づかれてしまったのだ。

レイがワロガに抵抗したことで、まずは戦闘個所の近くの水面にワロガの姿が映り込み。ワロガの実態が現れる。

突然自身の能力を無効化されたことに驚くワロガだったが、無防備に姿を現した相手をコスモスは決して見逃さなかった。

「ウオオオオッ！デヤッ！！」

突き出した両腕の間に虹色の光を作り出し、それを右拳に収束して前方に突き出すようにして放たれた楔形の破壊光弾―シャイニングフィスト―を連続発射しワロガの顔面を強襲した。

テレポート能力を司る目の付近を攻撃されたことで、ワロガは大きくよろけた。

そしてその隙にコスモスは駆けだすと、近寄らせまいとして振るわれたワロガの腕を躲すと無防備な腹に両腕の拳を同時に打ち込み。さらに追い打ちとばかりに顔面を蹴り飛ばした。

「ウオオッ！」

コスモスの猛攻に、ついに膝をついたワロガに対してコスモスはまるで威嚇するかの如く両腕を頭上に上げる。

そしてコスモスは一度だけレイの方へと視線を落とす。

(…本当にいいんだね?)

そう菜生が問いかけているような視線に、レイはゆつくりと頷くとコスモスはようやく立ち上がったワロガへと視線を戻す。

「デヤッ！ハアアアア……」

するとコスモスは両腕を前方に突き出し、回転させることでエネルギーを収束させて

いく。高温を秘めたエネルギーの塊を胸の前に作り上げると、それを一度体の方へと引き寄せる。

「デリアアアアアアアッ!!」

そして再び両腕を付きだすことで放たれた超^ブ高熱^レの圧殺^グ波動^ウが、ワロガの身体を跡形もなく消し飛ばした。

これにて、邪悪な宇宙生命体の陰謀も完全に打ち碎かれたのであった。

全てが終わったのを確信し、肩の力を抜いたコスモスがレイのいた場所へと再び視線を戻すと――

そこにはもう、誰もいなかった――

変身を解いた菜生は、呆然と公園に一人立ち尽くしていた。

「菜生ちゃん!」

「歩夢……つてうわあっ!」

すると、不意に背後から歩夢の声が聞こえて振り向くと。彼女に抱き着かれる。

「よかった…菜生ちゃんが無事で……」

「ごめん歩夢…また私、約束破って無茶しちゃった」

震える声でそう漏らす幼馴染に、菜生はそう返した。

「菜生ちゃんのバカ…みんな心配してたんだから…」

「うん、わかつてる……」

「もう帰ろ？おばさんが送ってくれるって」

「どうやら、しのぶがすぐそこまで来ているらしい。他のメンバーは時間も時間なので他の職員の手によってそれぞれ自宅まで送ってもらったということだった。

「そだね、帰ろっか」

そう返事をする、歩夢は菜生から離れた。

「あの人はどうなったの？」

「レイは、全部思い出して自分の居場所に帰っちゃった」

嘘は言っていないが、真実をそのまま話すことは菜生には耐えられなかった。

「菜生ちゃん、泣いてる…」

「えっ…？これはえつと…」

耐えられないからばかして返事をしたのに、レイの顔が頭から離れなくなり。歩夢に指摘されて初めて菜生は自分が涙を流していることに気が付いた。

「ぐすつ……うう……私……私……ボクはッ……」

ダムが決壊したかのようにとめどなく流れる涙と、嗚咽が止まらなくなった菜生はその場に崩れ落ちる。

「もつと一緒にいたかった……一緒に生きていたかった……なのに……なのに……」

本当はもう死んでいる人間で、菜生が―ウルトラマンコスモスがワロガと戦うのを躊躇わせるために傀儡として送り込まれてきたこと。ワロガを倒したことで、本来の人間としての正しい状態へと戻ってしまったこと。全部吐き出したかった。

でもできなかった。ただただ、菜生は泣いた。

「大丈夫だよ」

そんな菜生に、歩夢は寄り添ってくれた。

「菜生ちゃんの気持ちは、レイさんにきつと届いてるから」

「うん……うん……」

そのまましばらく、幼馴染の胸で泣き続けるのだった。

―レイ、私は夢を継いでいく。この星の命を守る夢を、私はあなたに貰ったから

そして泣いた後に菜生は、
星空にそう誓った。

23話 新しい出会い

ワロガとの戦闘があつた翌日、菜生は何もする気が起きず布団の中で過ごしていた。母にも聞きたいことは山ほどあるが、そんな母も今回の事件の後処理に追われて菜生と歩夢を送り届けた後そのまま基地の方へと戻ってしまった。

いくらなんでもいつまでも寝たままではまずい。そう思つて布団から起き上がつてスマホの画面を見ると、時刻はもうすぐ正午を示そうとしていた。

「……ッ!?……つう〜」

起き上がろうと腕に力を入れると、左肩から胸にかけて一瞬痛みが走り思わず顔をしかめる。昨夜の戦闘で執拗に狙われたガルバスの火球を受けた箇所ダメージがまだ少し残っていた。

だが、ガルバスに敗れた時のダメージも菜生は痛みを感じる程度で済んでいるのは。コスモスが菜生が眠っている間も、まだ戦闘で使ったエネルギーが回復していないので少しずつで菜生の傷を癒していたものが完治していなかった為だ。

「えつと今日の練習は……」

歩夢以外のみんなにも無事な姿を見せたいし、練習には参加しよう。そう思つて練習

の予定表を確認しようとする、歩夢からメッセージアプリで『もう起きてる?』とメッセージが飛んできた。

—おはよ、さつきやつと起きたとこ

—おはよう。体は大丈夫?

—大丈夫大丈夫、練習もちゃんといくよ♪

心配そうな歩夢の表情を容易に想像できてしまうので、少しでも安心してほしいと思いつつ返事をうっていく。

—おばさんまだ帰ってないでしょ?もしかしたらお昼一緒に食べない?持っていくよ

—ありがと、玄関カギあけとく

—わかった。あとでね

そのメッセージのあとに付けられたかわいらしいスタンプをみると思わず笑みが零れた。

「おじやましまーす」

「はーい」

それから10分もせず歩夢は菜生の家に来た。結局鍵を開けた後も、ベットに座ってぼーっとしていた菜生は歩夢が来たのに気づいてからリビングへと移動した。

「ありがとくさつき冷蔵庫見ても食べ物無くてさ、助かったよ〜」

「どういたしまして…って菜生ちゃん髪ボサボサ!」

「ん?あ〜…昨日シャワーだけ一応浴びただけど、そのまま寝ちやつたみたい…アハハ……」

「もお〜風邪ひいちやうよ?こつちきて、なおしてあげるから」

そう呆れたように告げる歩夢に引つ張られて化粧台の椅子に腰かけると、歩夢が後ろから櫛で髪を梳いてくれた。

「今日も三つ編みにする?」

「んやいいや、普段どーりの髪でアレ結構めんどくさかったし」

「そっか…」

それ以上、歩夢は何も言わずに。手慣れた手付きで菜生の長髪をツイントールにしていく。

「…これでよしっ!」

「ありがとくさつき歩夢にやつてもらおうと早いな〜自分でやつたら倍はかかるよ」

「ふふっどういたしまして」

嬉しそうに自分の髪を撫でながら告げる菜生に、歩夢もそう笑って返すと。もつてきた昼食を一緒にとった。そして、ふたりで学校へと向かうのだった。

「ねえ菜生ちゃん」

「ん〜?」

「スクールアイドルは…どうするの?」

道中、ずっと歩夢の中で昨晩から気になっていたことだった。だが、なかなか言い出せず。もう学校が目の前というタイミングでようやく切り出せたのだ。

「ステージに立つ…って言うのはさ、やっぱり私がやりたいことじゃなかったんだ。でも、みんなを一番近くで応援したい。それは変わらないよ?」

だが菜生は、あくまでいつも通りの優しい表情でそう返した。ステージへ立つことへの興味を一切失ったわけではないが、それでも自分の動機がみんなと比べれば不純なものだったと思っており、まだやりたいとは言い出せなかった。

「そっか…」

歩夢もそんな菜生に、それ以上は聞かなかつた。今回の出来事は、菜生の中で整理する時間が必要だと思つたから。

そして部室へとたどり着くと、そこにはもう全員が揃っていた。

「菜生さん大丈夫ですか!？」

部室に入って挨拶をしようと菜生が口を開くより早く、せつ菜がそうかけより問いかけてきた。

「うん、もう大丈夫! ケガもちよつとぶつけたくらいだし」

そう右腕を振りながら答えるが、周りにはあまり安心したような様子ではなかった。

「…心配かけちゃってごめんなさい。この通り私は大丈夫だから、これからも精いっぱいみんなのサポートをさせてください」

そんな雰囲気を感じてか菜生はそう頭を下げる。

「当り前じゃない。菜生ちゃんはお私達の仲間よ」

「そうだよ、元気だつてわかつて安心したよ」

そんな中、最初にそう口を開いたのは果林とエマだった。

「みんな事情はある程度聞いてるし、心配はしたけど誰も怒ったりはしてないよ」

そう言つて、誰も菜生を責めることはしなかった。事情は菜生の母から聞いたことである程度理解していた。尤も、最後にレイとの別れを選んでワロガを倒したのが他でもない菜生自身であることは知る由もないが。

「でも、本当に心配かけてごめん…でももう大丈夫だから! 私は今まで通りの私だから」

もう気持ちは切り替えた。だから今まで通りの自分で、今まで通りみんなをサポートしていききたい。そう菜生は自分の中で気持ちの切り替えを行った。

いや、実際にはそうしたつもりでいるのだ。

だがそのことを、菜生自身が自覚できているかは別の問題だった。

「本当によかったの？」

「ああ、やつぱステージには立たないっていったこと？」

「うん…だって菜生ちゃん、立ちたいって言った時の目キラキラしてたのに」

「わかんない」

そう、結局菜生は練習で自分はステージに立つことが目標ではなく、あくまでサポートに徹するということを伝えたのだった。そしてそのことについて帰りに歩夢に問われた菜生は、そうあっさりと答える。

「わかんないって…」

「本当はさ、ステージに立ちたいって思った理由は……これ、歩夢だから言うよ?」
「うん……」

そう前置きをする菜生に、歩夢は頷くと息を呑んで菜生の続く言葉を待った。

「レイに見てほしかったんだ。きつと、歩夢やみんなみたいにステージ上で歌ってる私を」でも、レイはもういない。それに、その為に一番最初に思ったみんなを一番近くでサポートしたいって気持ちをおざなりにしていいものか?と悩んでたんだ」

そう、ずっと誘われていたスクールアイドルとしてステージに立つことを拒んでいたのに。急にそうしたいと言い出したのは、レイの存在が大きかった。

だがそれによって、当初の目的だった。『一番近くでみんなをサポートする』それがおざなりになってしまうことも、ずっと危惧していた。

「だから今はまだ……さ?それに、やっぱり私の夢はみんなを一番近くで応援すること!それは譲れないし」

そう口にするだけで、菜生はそれ以上は考えないようにした。昨日のことは辛かったけど。それでも自分は前を向いて生きていくしかないのだから。

そんな時、菜生のスマホが着信音を奏でた。

「あれ?メールだ、なんだろう……?」

そう言つてメールを開くと、菜生はその場に立ち尽くしてしまった。

「あれ?どうしたの?」

「やっぱ…忘れてた!」 sに一日密着取材できるっていうのが、スクールアイドルのファンサイトで企画されてて応募してたんだって…」

この数日間のドタバタで完全に忘れてしまっていたのだが、以前Aqoursと出会った時に思い付きで応募していたのだ。

「そ、それで結果はどうだったの…?」

「えっと…当選…しちゃった…」

「菜生ちゃん本当に運がいいもんね。小学校の時も雑誌の懸賞当たってたもんね」
「そうだっけ?そっういやそんなこともあった気がする」

一体どれくらい応募者が居たのかはわからないが、菜生の引きの良さは元々持ち合わせたものだったよねと笑いあっていた。

こうして、菜生は今現在有名であるスクールアイドルAqoursに続いてμ'sとも関わる機会を得たのだった。

だがそれが、本当に幸運だったのか?それは菜生にも歩夢にもわからない。

だが菜生にとってこの出会いもまた、かけがえのないものになることは間違い。

そしてついにやってきた週末、菜生は普段通りに虹ヶ咲学園の制服にツインテールに纏めた髪で音乃木坂を訪れた。

「実際のところ、ライブしてるところしか知らないからどんな人たちなんだろ？ 楽しみだな」

元々、他のスクールアイドルがどのような練習を行っているかとか。そういったことを勉強させても対つもりで応募したはずだったのだが、菜生の脳内では楽しむことしかすでになかった。

『菜生、止まれ』

「…コスモス？」

『その先は危険だ』

だがそんな菜生の足は、コスモスから突如発された警告によって止まってしまった。

『目には見えないが、特殊なバリアのようなものがあの場所を包んでいる。迂闊に近寄れば吹き飛んでしまう』

「音乃木坂ってそんな嚴重なんだ…すごいな……」

『いや、これは地球人によるものではない。不用意に入り込むとするのは危険だ』
「…わかった」

コスモスの警告を聞いて、菜生の表情が固くなる。また宇宙人が何かよからぬことをしているのか？ そんな考えばかりが頭に浮かんでしまう。

菜生は路地裏に駆け込むと、周囲に誰もいないことを確認してコスモプラックを取り出す。そしてそれから放たれた光に包まれると、そのままコスモスの能力であるテレポートを使用して音乃木坂の敷地内へと入り込むのだった。

「さて…と。まずは、sの人達が心配だよね…」

そう言つて菜生は事前に連絡で聞いていた、音乃木坂のスクールアイドル部の部室を目指して校内を進んでいく。

だが、校舎の中に入ってから。それまでは全く感じていなかった違和感がどんどん強くなつていくのを感じた。

コスモスに言われなければ、敷地内を囲っていたバリアに跳ね飛ばされてけがをしていたかもしれない。そう思うとゾツとするが、今はそれ以上にこの学校の生徒たちが心配だった。

初めて入る校舎だったのもあり、メールの文面で書かれただけですぐに部室にたどり着くことは難しい。少々時間はかかったが、スクールアイドル研究部と書かれたプレー

トがかかっている部屋を見つけた。

「ええつと……多分ここなんだけど……」

そう呟き、ドアへと手を伸ばすが中に人の気配がするのを感じ。一瞬躊躇うが、息を呑むと一気に扉を開く。

「…ツ!？」

そうすると、中にいた3人の人影が一斉にこちらへと振り向いたのをみて一瞬たじろいでしまうが。実際に会うのは初めてとはいえ知っている顔だったので安心した。

「あつ、あなたが取材の人？」

「はい！虹が先学園から来ました、高田菜生っていいいます」

「はじめまして。私、高坂穂乃果です！」

そう菜生に最初に声をかけてきたのは、オレンジの髪をサイドテールにした活発そうな少女だった。映像でしか見たことのない、sのリーダーが目の前にいる。

「取材ってどんなこと話すのかな？もしかして菜生ちゃんも緊張してる？」

「えつと……まあ……」

(あれ…？平気そうにしてるけど外の事知らないのかな…?)

目の前でしゃべり続ける穂乃果を見て、菜生ははつきりしない返事をしどろもどろになりながらも返すが、そう疑問に思った。

「私も緊張してるんだ。だから一緒だね」

(なんか…おかしい気がする。なんで？私は何に違和感を感じてるの？)

穂乃果の後ろにいる二人は、同じμsの園田海未と南ことりで間違いないはずなのだがふたりは表情を変えることもなく会話にも入ってこない。

それに加えて、この場には菜生と同じ年の3人のメンバーのみで他の学年の6人は全く見当たらない。一度この場を離れるべきではないかという考えが脳裏をよぎる。

『菜生、ここは危険だ』

「どうしたの？顔色悪いよ？」

「へ？いやそんなことはないんだけど…ちよ、ちよつとトイレ行ってくるー！」

そう言つて菜生は部室を飛び出した。

こんどばかりはコスモスが何を言いたいのか聞く必要はなかった。さっきの一言だけでどうすればいいのか、菜生にはすぐにわかったから。

部室を飛び出した菜生は、校内を走っていたがその足はすぐに止まることとなった。

「ギギ…」

「…ッ！」

階段の踊り場の壁の中から、まるで壁などなかったかのように黒と銀の身体をしたX

字の青い目をした異形が目の前に現れたからだ。

すぐに引き返そうと踵を返した菜生だったが、背後には丸い黄色目と逆三角の赤目のおそらく同族の異形が立っていて既に囲まれてしまった状態だった。

「クソツ……！」

珍しく毒づきながら懐のコスモブラックへと手を伸ばした菜生だったが異常はそれより早く持っていた銃から光線を菜生目掛けて放った。

そして、その光をまともに浴びた菜生の姿はどこにもなく。「ギギ……」と不気味に囁く異形のみがその場に残ったのだった。

24話 異次元の罨

μ s の穂乃果、海未やことりに化けた謎の存在に突如襲われた菜生は、異形から放たれた光線に吞まれて姿を消してしまった。

果たして、菜生やμ s の運命は!?

一方虹ヶ咲学園では、μ s からいろんなものを学ぶために音乃木坂に行っている菜生に負けまいと今日は朝から一日通しで練習を行っていた。

「菜生先輩がうらやましいです、μ s の人たちに一日密着できるなんて」

「気持ちにはわかるけど、菜生ちゃんだつて遊びに行つたわけじゃないからね?」

そう口をすぼめてぼやくかすみに歩夢はそう告げる。

「それはわかつてますけど…でもあのμ s ですよ!?羨ましいですよ」

「でもおんなじステージに立てたらアタシらも同じくらい凄いつてことにならない? 頑張ろーよかすかす」

「かすかすじゃありません！かすみんです!!」

自分の愛称に強いこだわりをもつ彼女が一番嫌がる呼び方をする愛に、かすみはそう声を大にして言い返す。

「でも私も気になりますね。どんな練習をこなしているのかとか、どのようにして振り付けを決めているのかとか」

せつ菜がそう会話に入ってくると、だんだん菜生に何を聞いてきてほしいか談議が始まりました。

「じゃあ今から菜生ちゃんに連絡して聞いてきてもらおう?」

やがて練習そっちのけで話がどんどん進んでいくので、このままでは練習にならないと思った歩夢がそう切り出す。

そうして電話をかけようとするのだが、歩夢のスマホから菜生の声が聞こえることはなく。

『おかけになった電話は、現在電源が入っていないか電波の届かない場所にいます』
という音声のみだった。

「あれ…?電源切れちゃってるのかな?」

「音乃木坂は同じ都内だし、電波が届かないってことはないと思う。菜生さん、携帯の充電忘れたのかな?」

「でも珍しいですよね。菜生さんってそういうところしつかりしてそうないイメージがあります」

そう璃奈としずくが告げるが、確かに菜生に連絡が付かなくなったことは先日菜生が助けたという青年を連れてSRCの施設から逃げ出していた時くらいのものだった。

「まあでもそんな日もあるんじゃない？」

「連絡が付かなければ仕方ありません。練習に戻りましょうか？」

そう愛とせつ菜が告げたことで、本来の予定通り練習へと戻っていく。

菜生がまさか音乃木坂で侵略者に襲撃されたとは夢にも思わなかった。

「う……(´▽`)は……」

菜生は目が覚めると、周囲を白い壁に覆われた廊下で横たわっていた。どうやらあの異形から放たれた光線は、菜生の命を奪うためのものではなかったらしい。

ともかく、本物のμ sもこの中で菜生と同じようにして捕まっているかもしれない。それに脱出方法も模索する必要があると思ひ、菜生は周囲を探索し始めるのだっ

た。

だが、まるで迷宮のようになってこの場所は曲がり角を曲がればすぐ行き止まりだったりとなかなか思うように進めない。それに加えて、またすぐ死角からあの異形が現れるかわからないのだから、一切気の抜けない状況が続いていた。

「やだなあ…迷路とかこういう場所嫌いなんだよ……」

段々心細くなってくる菜生だったが、コスモスはずっと菜生の周囲を警戒していた。

『菜生、この先に人の気配がする』

「もしかして、さっきの宇宙人？」

『いや、この気配は地球人のものだ』

「じゃあきつと、sの人が——」

もう何度目かわからない曲がり角に差し掛かった時に、コスモスがそう菜生にテレパシーを飛ばすと菜生がそう嬉しそうに声を上げる。

「ですからそんな闇雲に歩いても……」

「今度こそ間違いはないって」

コスモスとの会話で、思わず声を出していた菜生はそんな話声が聞こえたことで慌てて口を閉じる。そしてそのタイミングで、相手の人物の顔が見えた。

恐らく、今度こそ本物の高坂穂乃果に園田海未、南ことりと出会うことができた菜生

は、思わず駆け寄る。

「よかった、無事だったみたいで」

「あなたは？」

「私は高田菜生、本当はμsの皆さんへの取材で来たんだけど。銀色の宇宙人に襲われちゃって……」

「あなたがそうだったのですね。それにしても災難でしたね……」

そう菜生にとっては本日二度目の自己紹介の後、海未がそう告げると菜生は苦笑いを浮かべるしかなかった。

「あいつらって何者なんですか？どうして音乃木坂に……」

「それがわからないんだよね、今朝学校に来たらあの3人？組に囲まれて気づいたらここにいたの」

「私と概ね一緒か……他の皆さんは？」

「連絡付かないんだよね、スマホもずっと圏外だし……」

そう言われて菜生も自分のスマホに目を落とすと、やはり電波を受信しておらず。画面端に『圏外』の文字がむなしく踊る。

「……私もダメみたい。助けを呼ぶっていうのは厳しいかもね……それにまずここがどこかも判らないし……」

そう菜生が告げると、4人の中で暗い雰囲気は漂い始める。

(コスモス、あなたの力でなんとかならない?)

『可能かもしれない。だが、敵の目的がわからない今むやみに動けばかえって3人を危険に晒す可能性もある。それに、ここで変身すれば私達の秘密を知られてしまう』

(そうだよね…でも3人に命の危険が迫ったら、その時はもう秘密とか関係ないよね) 『判った』

そうテレパシーでコスモスと会話をした菜生は、懐にあるコスモブラックの存在を確認しつつ。再び周囲に注意を向ける。

菜生がウルトラマンコスモスであることは、可能な限り誰にも知られたくない。それは菜生も同じだが、正体を知られることを嫌がったせいで誰かが傷つくのなら、菜生は正体を晒してもその誰かを守りたい。

だからこそ、コスモスに3人の安全を優先したいと伝えたのだった。

「菜生ちゃんなんか落ち着いてるね」

「そんなことないよ。本当は怖いけど、でも怖がっても状況は良くならない。だから、何とかしたいんだ」

そう穂乃果に言われた菜生は、できるだけ落ち着いた声でそう返した。すると―「ギギギギ」という不気味な声と共に、菜生を襲撃した異形の存在が頭上に現れた。

「ひっ……！」

まるで山のように大きな3体の異形の出現に、思わず後退ることりたちを庇うように菜生は立つと。懐へと手を伸ばそうとする。

自分たちを見下ろす巨大な3体の異形のうち、リーダー格と思われる青目が何やらデバイスを操作してこちらへと何やら話し始めた。

『我々の言語が、理解できるか？』

「うん、わかるよ……」

『我々は量子学を応用し、次元を移動するシステムを完成させた。我々の次元は今、崩壊の危機に瀕している。急いでこの次元に移動する必要がある』

「それはわかったけど、なんで私たちを襲う必要があったの？」

菜生は巨大な相手に臆することなく、そう聞き返した。

『2000億人いる我々が生活するために、人間には百分の一に縮小した状態で暮らしてもらおう。今回の実験でそれが可能だということが分かった』

「私たちが襲ったのは実験なの……？」

『このようなモデルタウンを量産して、地球人にはその中で暮らしてもらおう』

この異形——異次元人が菜生達を襲ったのは、人間を縮小させて生活圏を乗っ取るための実験に過ぎなかったのだ。そのことに憤りを感じるが、相手はそんなことは気にせず

言葉をつづけた。

「そんな一方的です！」

「そうだよ。いきなり来て押しつけるみたいなこと……」

そう海未や穂乃果も言い返すが、相手は首をかしげるだけだった。

だがその直後、突然地響きが鳴り響いた。すると3体の異次元人は何やら言葉を交わすと、再びリーダー格が翻訳装置を使って語り掛けてくる。

『君たちの仲間が、我々の領土へと侵略を開始した』

「絵里ちゃんたちがきつと気づいてくれたんだよ」

そう穂乃果が嬉しそうにつぶやく。おそらく、ここにいないメンバーが学校に近づけないことと穂乃果たちがいないことを通報してくれたのだろう。

もはや音乃木坂は、異次元人たちのものだと言わんばかりの反応を見せる中助けが来ているということで、一抹の希望が見えた。

『我々の解決方法は、論理的で完璧だというのに。侵略を開始するとは残念だ』

「完璧？そつちが私たちにやったことも、侵略となら変わらないうちはありませんか」

そう強気に言い返した海未をみて、菜生は小さく頷くとあとずさり。迷路のような廊下の角を曲がると、誰からも自分の姿が見えないことを確認し、懐から取り出したコスモプラックを頭上に突き上げると光を解放した。

「ウルトラマン…」

神秘の光を身に纏い3体の異次元人の前に現れたコスモスを警戒し、3体は密集するようにして距離を取った。

『完璧な解決方法を捨て、武力での解決を選ぶとは残念だ』

そう吐き捨てると、3体の異次元人は合体しそのまま巨大化した。

一つの頭の3方向にそれぞれの顔が付いた不気味さすら感じる巨大な異星人の出現に街は騒然となるが、コスモスは異次元人をすぐには追おうとはせず。穂乃果たちが捕らわれたままのミニチュアの間立つと、それ目掛けて光を放ち3人を元の姿に戻した。

「ありがとう!」

「…菜生はどこに行っただのです?」

『高田菜生は、先に救出した。キミたちも早く外へ』

「わかった!」

3人はそれぞれコスモスに言葉をかけると、コスモスは菜生のことは先に助け出していると伝え。そのまま3人に脱出を促すと。異次元人と戦うべく、自身も光をまとい巨人へと変わる。

「ハアアッ!」

「ギギギ…」

再び立ちはだかったコスモスに、異次元人は不気味に肩を揺らしながら笑うと。青い目がコスモスを捉えるとその顔が正面に来るように体をこちらに向ける。

コスモスもそんな相手に対して警戒を強めて構えるが、先に沈黙を破って仕掛けたのはコスモスだった。

駆けだして手刀を振り下ろすコスモスだったが、相手は高速移動で一瞬にしてコスモスの背後に回り込む。コスモスもなんとか反応してすぐさま攻撃に移るが、相手は相変わらず噛みながらコスモスの背後へと回り続けた。

そして、コスモスの周囲を高速で旋回し始めるとコスモス打って変わって、今度はいつどこから攻撃を仕掛けてくるかわからない状況へと陥ってしまう。

「ギギー!!」

「ウワアッ!?!」

そしてコスモスも真後ろで急停止し、青い目から青い光弾を放つ。コスモスは反応することはできなかったが、既に手遅れで振り返った直後に胸元にその光弾を受けて大きく吹き飛ばされる。

だがコスモスはそのまま地を転がるが、その勢いを殺さずに側転に移行しすぐさま立ち上がった。

そして何とか格闘戦の間合いにまで接近したいと考えるも、異次元人は3つの顔を回転させ赤、青、黄それぞれの目から同じ色の光弾を乱発してくる。

『だったら正面突破でしょ！』

菜生のその発想に応えるかのように、コスモスは両腕を付きだしリバースパイクバリアを展開。光弾を全てバリアで反射させて一気に距離を詰めにかかった。

だが光弾を3発ほど弾いた後、リバースパイクバリアは消失してしまい。残る攻撃をまともに受けコスモスは大きく弾き飛ばされ今度は受け身もままならないまま地面に叩きつけられる。

そしてこのタイミングでカラータイマーも点滅をはじめ、いよいよコスモスは後がなくなってしまう。

そして目の前の異次元人は、コスモスにとどめを刺そうとゆっくりと近づいてくるのだった

25話 灼熱の太陽

三面異次元人ギギの放った光弾を受け、地に伏したコスモス。だがこのままコスモスが敗北した場合、2000億人にも及ぶ異次元人がこの地球に流れ込んでくることになる。

「このままじゃウルトラマンが…」

先ほどコスモスに促されて校舎の外に出た穂乃果たちが見たのは、ちょうどコスモスが地に伏すところだった。

そしてコスモスにとどめを刺すべく、ゆつくりと近づいていくギギへ防衛軍は攻撃を開始した。

だがギギはそれらの攻撃を軽くあしらうと、背後に接近した戦闘機も全て叩き落してしまった。

正面からのミサイルは全て腕で叩き落とし、背後からの攻撃は避けそのまま目から光弾を放って撃ち落とす。一方的に蹂躪していく様を見せつけられた。

「あの宇宙人、あの顔が付いてる方向全部見えてるのかな…？」

「だとしたら死角がありません…どこか隙は…」

その様子を見て、ことりと海未がそう呟きながら戦闘の様子を見ていると。穂乃果がハツとしたように目を見開くと、コスモスに大声で叫ぶ。

「ウルトラマン、真上！真上は見えてないよ!!」

(そっか、ヤツの頭上はガラ空きなんだ。ありがとう穂乃果ちゃん)

菜生は心の中でそう穂乃果に礼を言くと、何とか跳ね起きてギギの放った光弾を回避。そのまま飛び上がって頭上をすれ違う形で通り過ぎる刹那。

「セリヤア!!」

そのまま真下のギギの頭頂部目掛けてルナストラックを放ったのだ!

「——ッ!?!」

突然のコスモスの攻撃を、唯一の死角である頭上から浴びせられたギギは悶え苦しみ始める。

「トリヤア!!」

その隙に静かに着地したコスモスは、そのまま右拳を突き上げ。赤き太陽の巨人へと姿を変える。

対するギギは、先の攻撃が余程想定外だったのか。冷静さを失いコスモスへと駆け寄っていく。だが、コロナモードのコスモスにとっては向こうから肉弾戦を仕掛けに来てくれた方が戦いやすい。

コスモスも駆け出すと、相手の放った拳を左手で払いのけるとそのままの勢いで回転し、左の裏拳を叩きこむ。

腹部に渾身の力で放たれた裏拳を食らいのけざるギギだったが、すぐさまコスモスへと掴みかかろうとするも、コスモスはその腕を払いのけ逆に相手の胸元を両腕で突き飛ばし、さらに両の拳を打ち込む。

だが、それでも耐えて反撃しようとするギギへ、さらにコスモスは回し蹴りを見舞う。最初のように、距離を保ったまま高速移動を駆使して戦っていればまだ勝機はあったのかもしれないが。コロナモードになったことで、ルナモード時よりスピードもパワーも強化されたコスモスと殴り合うのは得策とは言えなかった。

完全に下に見ていた相手に想定外の反撃を受けたことで、ギギは完全に余裕を失っていた。

「穂乃果!」

「絵里ちゃん、みんな!」

コスモスとギギが戦闘を繰り広げる最中、ギギに偶然襲われずに済んでいた6人が穂乃果たちを見つけ合流してくる。

「まったく心配したじゃない!」

「まーまー無事やったんやし、よかったやん?」

最初に穂乃果たちを見つけたのが絢瀬絵里で、それを追って現れた矢澤にこに東條希ら3年生が現れた後に、残りの1年生も現れる。

「そうだみんな、菜生ちゃんていう。虹ヶ咲学園から取材で来てくれた女の子見てない？真つ黒い髪をツインテールにした女の子なんだけど…」

「いや、ここにくるまで誰も見かけなかったわ」

「そんな…でもウルトラマンは私たちを助けてくれた時に『先に救出した』って言ってました」

穂乃果にそう問われて、髪を触りながら残念そうに首を横に振ったのは、一年の西木野真姫だった。そして海未はそれが納得できないという様子だった。

「でも凜たちもあの宇宙人が現れるまで学校に近寄れなかったし、多分敷地の外には出てないと思う」

「もしかしたら学校の中で迷っちゃってるのかも…」

そう告げるのは活発そうな印象を受ける少女、星空凜と。逆にオドオドした印象を受けるのは小泉花陽だった。ここへくるまでは、一切人影を見ることもなく。ならばまだ校舎の可能性があり、ならば戻るべきか？

「じゃあ探さないと、私たちの事探してるかも…」

「この中で？危険すぎるわ！それにもし行き違いになったら…」

「でも放っておけないよー」

校舎内へと戻ろうとする穂乃果を絵里たちは止めようとするが、それでも穂乃果は行くべきだと譲らなかつた。

だがしかし、校舎の方へと戻るにはコスモスとギギの戦闘している場所に近づいてしまうことに他ならない。今戻るべきではないのは火を見るより明らかだった。

「でもウルトラマンもわざわざ危険な場所に置き去り、なんて真似はしないでしょーし…今は信じて待つしか」

なんとか海未の言葉で穂乃果も思いとどまったようだったが、それでも納得はできないといった様子だった。

一方でコスモスとギギの戦闘も苛烈を極めていた。

ギギの攻撃に的確にカウンターを入れていくコスモスだったが、ルナモードの時とは違い。カウンターで拳を思いきりぶつける。

コスモスはギギを完全に力で捻じ伏せにかかっていた。

「ウオオッ！ダアッ!!」

掴みかかろうと伸ばした腕を右足で弾くと、左足で腹部を蹴りつけ。のけぞったギギの後頭部に今度は右足の踵を思いきり叩きつける。

武術経験のある菜生と、戦闘形態であるコロナモードの相性は良く。ルナモードで相

手の手の内を探っておいたのも相俟ってコスモスが圧倒している形となった。

だがギギも、彼らの世界から送り出された軍人であり。このまま一方的にコスモスにやられるわけにはいかなかった。

後頭部に強烈な踵落としを受けはしたものの、咄嗟に転がってコスモスから距離を取ると立ち上がり再び目から光弾を放つ。

「ッ!？」

虚を突かれる形になってしまいはしたものの、回避行動自体は遅れても攻撃を受けることはなかった。だが、ギギはコスモスに命中するまで頭部を回転させながら光弾を乱射し始める。

このままでは音乃木坂の校舎だけならまだしも、μ'sのメンバーやまだ校内にいるかもしれない生徒や学校関係者にも危険が及んでしまう。

そう判断したコスモスは、その身でギギの光弾を受け始めた。

「ぐっ……うおっ……」

「どうして避けないの……?」

自身が吹き飛ばされたほどの威力の光弾を受け止め続けるコスモスを見て、穂乃果はそう呟くが。コスモスは自身の気を集中させ、そこに光弾を受け止め続けていたのだ。

「ウオオオオッ! デリヤア!!」

そして光弾の連射の感覚が開いた一瞬の隙に、胸元に収束させていたエネルギーを増幅させてギギ目掛けて投げ返した。

ルナモードのリバースパイクの強化版であるリバースパイクハイパーによって、再び予想外の反撃を受けることになったギギだったが。怯んでいるうちに、コスモスは必殺の一撃を放つ態勢に入っていた。

両腕を広げ、手の先に宇宙エネルギーを貯めた後に、両腕を右肩上あたりで重ねて集めた宇宙エネルギーを終結させた。

「ハアアーツ!!」

そして、腕をL字に組むようにして最強の破壊光線であるネイバスター光線を放った。

ネイバスター光線をまともに食らったギギの身体は耐えられず、粉微塵に吹き飛ばされてしまった。

爆風が晴れ、対象を殲滅したことを確認すると。コスモスは空高く飛び去り、人知れず菜生の姿へと戻る。

こうして、異次元人の陰謀はウルトラマンコスモスによって完全に打ち砕かれたのであった。

「まさか宇宙人に襲われるとはね…」

「一時はどうなることかと思いました」

そんな会話をしている穂乃果たちを見つけて、菜生は駆け寄っていいこうとした。

「それにしても菜生ちゃんどこ行ったんだろ?」

「もしかしてその娘がウルトラマンかもしれんね」

「…ツ!?!」

だが、希のその一言で足が止まってしまった。

(え? バレたの? なんぞなんで!?! そもそもあの人はまだあつたことないし…いやここは落ち着こう。取り乱したらその通りですよって言うてるようなもんだし)

「お〜い!!」

そう自分に言い聞かせてから、改まって菜生はそう大声でみんなに駆け寄っていく。

「菜生ちゃん! よかった〜心配したんだよ?」

「ごめんごめん。コスモスが助けてくれたまでは良かったんだけど迷っちゃって…」

「でもケガもなさそうので安心しました」

その後頭部をかきながらごまかした菜生だったが、海未はそうほつとしたように返してくれたのでなんとかごまかせたようで菜生は内心ほつとしていた。

「あなたが取材の？」

「はい、高田菜生といます」

そうして、気を取り直して自己紹介を交わし。本来の目的であつた取材に取り掛かうとした時だった。

「君たち、まだ異次元人がいるかもしれない。これから調査に入るから今日は帰りなさい」

「ええく!? せっかく来たのに……」

「さすがに大騒ぎになつたし、今日の所は大人しく解散するしかないわね……」

あからさまに不服そうなりアクションをする菜生に、そう絵里が諭すように告げる。

「まあまあ今日は無理でもまた他の日にすればいいし、ウチもいろいろ菜生ちゃんに聞いてみたいことあるし」

「まあこういうわれたら仕方ないですよね……気づけばそろそろ夕方だし……」

気づけばそろそろ日も傾き始めているし、どのみち取材というほどの取材は望めないだろう。だつたら日を改めた方が確かにいいのかもしれない。

結局異次元人の実験に巻き込まれたせいで楽しみにしていた、sへの密着取材は結局行えず一日つぶされてしまったのは残念だったが、それでも彼女たちと出会えたこと。言葉を交わせたことは無駄ではなかったと信じた。

「でも実際困ったわよね。学校が使えないと次のステージに備えてまだまだやる必要があるのに」

「皆さんも大変でしょうし、せっかくお会いできたのにこんな風になっちゃって残念だけど。また日を改めて取材やらせてもらってもいいですか？」

「もちろんだよー」

そんなやり取りを交わした後、名残惜しいがこれ以上いけば調査の邪魔になるし下手をすればつまみ出されるかもしれないので大人しくその日は解散することとなった。

「じゃあまた日にちの打ち合わせはメールで、さようならー」

「ちよつとまって！」

後ろ髪を引かれる思いで音乃木坂を後にしようとした菜生だったが、不意に穂乃果に呼び止められた。

「どうしたの、穂乃果ちゃん」

「菜生ちゃんってさ、ウルトラマンコスモスなの？」

「…へ？」

一瞬ギクリとなるが、さつき合流する前に他のメンバーがそんなことを言っているのを聞いた気がする。だがここで首を縦に振るわけにもいかないので、脳回路をフル回転させてごまかし方を考えていた。

「いや、ウルトラマンも宇宙人みたいなものだし…人間に変身できる宇宙人だっているじゃない？」

まさに今日遭遇したギギが人間に化ける能力も持った存在ではあったが、もしかして彼女は菜生はコスモスが人間に擬態した姿だと思っているのだろうか？

「ええつと…穂乃果ちゃん？」

「なーんて、そんなわけないもんね。たまたま別々に助けちゃったからはぐれただけだよ。ごめんね変なこと聞いた」

「そ、それはいいけど…」

恐らくそれを最初に言い出した希は、適当ではなく。その可能性があると思つて菜生のことを見ているだろう。

幸い今まで一度も疑われなかったことだったが、これからはもつと気を付けるべきなのかもしれないと菜生は思った。

「じゃあまたね、バイバイ！」

「うん、また！」

そう言葉を交わして、今度こそ菜生は帰路につくのだった。

『あいつがウルトラマンコスモスか…復讐の相手…』

だがそれを、陰で見ているものがいた。

結局密着取材どころではなくなってしまうことは残念だったが、菜生にはそれ以上に心掛かりなことがあった。

（ワロガの時も今回も、コスモスが居たからなんとかあったけど…）

地球で産まれた怪獣とは、いつか分かり合えるかもしれない。でも宇宙から―地球の外から来る命が、必ず地球に対して友好的とは限らないことはこの数日で痛感させられた。

（私がつと強ければ、みんなを守れる…？歩夢や、同好会のみんなに危険が及ばないよ
うにできる？）

そう自問しても、答えなど出るわけもなかった。

「菜生ちゃん?」

「歩夢、練習帰り?」

「うん、音乃木坂のあたりで宇宙人とコスモスが戦ってたって聞いたけど大丈夫だった?」

家の近くで歩夢と出会った菜生に、歩夢はそう心配そうに問いかけた。

「私もμ sのみんなも大丈夫だったよ。でも結局取材どころじゃなくなっちゃってまた日を改めて取材させてもらうことになったんだ」

「そうなっちゃったんだ…でも菜生ちゃんがなんともなくてよかった」

「うん。歩夢はどう?次にやりたいステージのイメージ見えてきた?」

「もうちよつとかな?でも、私もスクールアイドルフェスティバルに出たいから頑張るよ」

そんな幼馴染同士のたわいもない会話。こうして歩夢と話しているときに、菜生にとつて一番安心するのもかもしれない。

「じゃあ今度こそ、μ sの凄いとこ吸収してみんなの練習に役立てないとね!」

「まっかせといてよ!なんとって私が部長なんだから!!」

そう胸を張る菜生。だが現実は無情にも、そんな彼女たちに早くも次なる脅威を密かに迫らせていた。

26話 飛ぶクジラ

ギギの襲撃から数日後、もう夏休みも残すところ僅かといったある日。ようやくμ sへの密着取材が行えることになった。

「じゃあお母さん、行つてきます」

「気を付けてね。今日はお母さん休みだから、晩御飯一緒に食べましょ。何がいい？」

「んく…じゃあハンバーグで！」

「わかった。じゃああんまり買い食いしないで帰るのよ？」

「はい行つてきます」

ギギとの戦闘から一週間ほどが経過した今日、ようやくμ sへの取材が行えることになったのだ。

といつても、急がなければ夏休みが終わつてしまい。二学期に入つてから執り行うのは困難であろうという判断からくるものだった。

ようやくちゃんとスクールアイドルの話ができるという事実胸を躍らせながら、菜生は電車に乗り音乃木坂を目指すのだった。

「そっういえば」

その道中で、菜生はふと思い出した。

「お母さんがSRCで何してるのか聞いてないや。そっちも帰ったら聞かないとな〜」

そう、結局ワロガにギギと立て続けに侵略者と思われる地球外の知的生命体からの襲撃を受けたこともあり。母は医療の仕事で忙しかったのか、それともSRCの特捜チームとしての仕事で忙しかったのか定かではないがずっと家には不在だったのだ。

「まあどつちにしろ、詳しいことは教えてくれないだろうけどさ。でもやっぱ一人娘の私としては気になっちゃうよね〜、おとーさんだったら知ってたのかな…?」

不意にそう漏らすと空を見上げる。幼稚園の時に亡くなった父なら、もしかしたら本当の母の仕事を知っているかもしれない。

でもそれを聞く機会は菜生にはない。ひとまず今は今日の取材に集中しようとしてここまで考えてから思考を切り替えたのであった。

そうして再び訪れた音乃木坂で、菜生は再びμsと再会することとなった。

「こんにちは。今日はよろしくお願ひします」

そう言つて今度は迷わずにアイドル研究部と記された部室へと、そう挨拶しながら入つていく。

「こんにちは。じゃあ早速はじめよつか」

そう言つて、密着取材が始まつていくのだったが。取材とえば普段の練習光景だったりといった活動の光景を見学させてもらうところから始まつた。

そして、暫くの間菜生は無言で、sの練習を見学するのだった。

（やつぱりトップレベルのスクールアイドルつて言われてるだけあつて、やつぱり練習の動きの時点ですごいや…）

虹ヶ咲のみんなも、この短期間でかなり動きのキレも増したし。正直、sにも負けていない。そう言い張りたかつたが、これがいくつものステージに立つて人々を魅了してきたスクールアイドルの姿なのかと圧倒されるのだった。

だが、もうすぐ虹ヶ咲のみんなも最初のステージがすぐ近くに迫っている。ここでステージに立たないといえ部長の菜生が怖気付くわけにはいかない。

今日の経験で吸収できるものは全て吸収して、引けをとらないステージをみんなで作り上げていくんだ。その一心で見守る菜生の表情は真剣そのものだった。

この人たちと一緒に舞台に立てたのなら…一緒に多くの人々を笑顔にできるのなら

…そう思わないわけがなかった。

「どうだった？」

「すごいよ！本番のステージ観てるみたいだった!!」

練習を一通り終わらせ、菜生にそう問いかけてくる穂乃果に対して菜生は目を輝かせて答える。

「でも同時に負けられないなって思った」

「負けられない？」

「うん。だって私、曲がりなりにも虹ヶ咲のスクールアイドル同好会の部長だからね。やっぱりただすごいなーって感想だけ持って帰るわけにもいかないし」

そう告げる菜生は、少々生意気に映ったかもしれない。だがそれだけ、菜生も真剣に同好会の事を考えているのだ。

「それにさ、私たちも立ちたいんだよ。あなたたち々 sとおんなじステージにさ」

かつて内浦で出会った Angels に誘われた大会ではあるが、自分がスクールアイドルに興味を持つきっかけとなった2つのグループと同じ舞台に立てる。それは菜生にとつてだけでなく、同好会みんなのなかで大きな目標となっているからだ。

「じゃあ虹ヶ咲のみんなも、スクールアイドルフェスティバルに出してくれるの？」

「もちろん！まあまだ始まったばかりだし、まずは実績作りから始めないとただけど

ね」

夏合宿でみんなで話し合って決めた目標。そして菜生自身も、その為に色々なスクールアイドルを調べてどのようなパフォーマンスをしているかを動画サイトを使ってチェックしたりしていた。

最初は菜生が言い始めたことだった。そして自分はそれを一番近くて応援したい、それを同好会の人みんなは受け入れてくれて一緒に上を目指していくことになった。

だからこそ、妥協せずにしつかりと部長としての務めを果たしたい。それが菜生がここにいる理由、決して遊びに来ている訳では無いのだ。

「じゃあなおさら頑張らないとね！」

「もちろん！ なんだって部長だからね!!」

そう自分の胸を叩く菜生。『部長だから』みんなが菜生を信じてくれたからこそ背負ったものが、菜生を突き動かす原動力となっていた。

—その数日前の話

「—はい、ありがとうございます。喜んで引き受けます」

スクールアイドルであり、演劇部にも籍を置いている桜坂しずくは今度行われる演劇での主役の座を勝ち取っていた。

演じることが好きで、誰かの理想のスクールアイドルを演じていたい。そう思っていた彼女、だがその考え方がのちに彼女を大きく悩ませることとなってしまった。

そして、しずくは同好会の練習の傍ら演劇の練習にも熱心に取り組んでいたのだ。た。

ライブも近い状況下で、ハードなスケジュールとなることはわかりきっていた。でも、それでも彼女にとってはどちらも大事なことだからと。それにそのことについて、同好会のメンバーも反対などせず「頑張つて」と背を押してくれたから。

でも——

「降板…ですか……?」

「今回の役は、しずくとはちよつと違う感じだったから」

演目の練習も滞りなく進んでいる。そう思っていた矢先に演劇部の部長から言い渡されたのは、主役の交代だった。

「ダメなところがあるなら直します！だからー」

「この役は、もつと自分を曝け出す感じで演じてほしかったの。歌手の役だし、スクールアイドルのしずくならピッタリかなって思ったんだけど…」

求められた演技ができていなかった。そう言われているようで、とてもショックだった。でも、『自分をさらけ出す』ような演技。

その答えは、見えてこなかった。

なんとか主役の再オーディションを受けさせてもらえるように頼み込むことには成功したが、自分をさらけ出す演技。それができないまま受けても、主役を演じることはできないだろう。

しずくは重い足取りで、帰路についていた。

「あれ？しずくちゃんじゃん、お疲れ様！」

「先輩…」

ふと声のする方を向くと、そこには菜生が居た。

「今日は音乃木坂に行っているはずじゃ…?」

「うん、行ってたよ。ちよつと部室に用事あつてき、帰る前によつてこうかと思つたんだけど。もうみんな帰つちやつた?」

「私は演劇部の方に行つていたので…」

「そつか急なスケジュールだったけど、しずくちゃん頑張つてるもんね」

当然しずくが主役を降りるかもしれないという話は、菜生は知るはずがない。眩しいくらいの笑みでそう告げられ、しずくはなんと返せばいいかわからず顔を逸らす。

「どうしたの? 私でよければ力になるけど…」

「ごめんなさい、疲れちゃつてて…失礼します」

「う、うん。また明日部室でね」

若干逃げるようにして帰つていく彼女を、菜生はそう控えめに手を振つて見送る事しかできないかつた。

「あんまりうまく行つてないのかな、演劇の方は私からつきただけど何か力になれるといいんだけど…」

演劇なんて幼稚園の発表会でしかしたことは無いし、演技の経験があるなんて口が裂けても言えない。そんな菜生に、恐らく演劇で悩んでいるだろうしずくの力になれるこ

となんてあるのだろうか？

「まあ、コスモスの事隠してるのは演技って言えなくもな―」

「せんばい演技してるんですかあ？」

「によああああああ!!」

「ご、ごめんなさいそんなびつくりするなんて思わなくて…」

自分がウルトラマンコスモスと一体化しているから、コスモスとなるためにみんなの前から隠れたりしていることを誤魔化しているのはある意味演技なのか？そんなことを考えていたら不意に背後からかすみに声を掛けられて、思わず大声をあげてしまった。

「び、びつくりしたあ…演技してないけど？もしかして聞こえてた…？」

「演技って言えなくも…つてところから…」

「な、なくんだ…幼稚園の発表会は演技かな？…つて独り言、入らないよね」

「ま、まあ確かにそれは入らないかもですね」

一番聞かれたくない箇所を聞かれなかったのは、ある意味助かったのかもしれないが。かすみは菜生にそう言われて困ったようにそう答える。

「そうだ、しず子みませんでした？」

「しずくちゃんならさつき帰ったよ？私も部室に用事あったんだけど、もう閉まってそ

うだからかえろうかなって」

「一緒に返ろうって約束したのに…」

「やっぱりしずくちゃん、うまく行っていないのかな…?」

それを聞いて、菜生はしずくの様子がおかしかったのは気のせいではないと確信した。

「何か聞いてない? 演劇の事」

「かすみんも気にはなってるんですけどしず子全然話してくれないですよ」

「そっか…あんまり言いすぎてもプレッシャーかけてかえってよくないかもだし、今日は大人しく帰ろ?」

渋々といった様子で、その言葉に従ったかすみと家の最寄り駅まで送り届けると菜生も自分の家へと帰るのだった。

だが、家に帰ると母の姿は無く。今朝菜生がリクエストした、ハンバーグが冷蔵庫の中でラップされた状態で置かれていた。

『ごめんなさい』

ただそう書かれた置手紙をテーブルに残して、母は急遽仕事に行ってしまったらしい。

「…何かあったんだ」

だから出かけたのだろうと自分に言い聞かせるが、何度経験しても寂しさをぬぐい切れることはない。

また怪物が出たのだろうか？ そう思いながらテレビを付けてみると。そこには信じられないものが映り込んでいた。

「…クジラ？」

テレビで大々的に取り上げられていたのは、通常ではありえない。全長100メートルは優に超えるクジラの姿だった。

しかもありえないのはそれだけでなく、そのクジラはなんと空を泳ぐようにして空中に佇んでいた。

「何だこれ…？ 怪物なの？」

テレビが言うには、実体のない蜃気楼のような存在で実体はなく。現在は危険性のなものとして考えていいものだというのが、現在の見解であった。

「こりやお母さん、今夜は帰って来れないかあ…」

テレビを切ると、菜生はそう力なくソファに座り込んだ。

どうすればいいのだろうか？

今のままの演技では通用しない。それは理解している、でも自分を曝け出すということがどういふことかわからない。

いや、わからなくなっているのだ。素の自分というものが、常に演じることが染みついてしまっている彼女には。

小さいころから映画や演劇が好だった。だがしかし、流行りというよりかは古い作品の方が好きだったことが周囲から変な目で見られてしまい。それが嫌だったから『みんなから好かれるいい子』を演じるようになった。

『だったら、無くしてしまおうよ。嫌なものは全部』

「だ、誰ですか……？」

もう少しで家に帰り着く。そんな折に不意にまるで脳に直接語り掛けるかのような声に、しずくは周囲を見渡しながら怯える声で訪ねる。

『ぼくはジラーク、君が望むならどんなことだってしてあげるよ。例えば、学校を破壊するとかさ』

「私はそんなこと望んでません！」

『それはキミが一番よく知っているはずさ、いつまでも待ってるからキミの答えを聞かせてよ』

その言葉を最後にもう声は聞こえなくなった。

だが彼女の頭上では、例のクジラが一瞬だけにやりと笑ったのに気づいた人は一人もいない。

27話 利用される苦悩

突如しづくに迫った謎の声、その言葉が頭から離れず。しづくは部屋から出られなくなってしまうていた。

『君の願いを叶えてあげる。邪魔なものは全部壊しちゃえ』

その言葉が耳から離れない。

「そんなの、望んでない……」

その今にも消えてしまいそうな声を聴いてくれる人はどこにもいなかった。

しづくの家の近くの上空に現れたクジラは、何をするわけでもなく。ただ上空を漂っていた。

一方でSRCは、その空を泳ぐジラの対応に追われていた。もちろん、菜生の母も例外ではなく。

「コスモス、あのクジラって本当にただの幻なのかな…?」

ベランダから夜空を眺めながら、手に持ったコスモプラックにそう語り掛ける。

（今の時点では、そうとしか判断できない。ただ―）

「ただ…?」

（あのクジラが現れる前、一瞬だがカオスヘッダーの気配を感じた）

「カオスヘッダー…」

怪獣を凶暴化させる光のウイルス。まだその目的はわかっていないが、地球に来る前に他の星の生態系を破壊している。そんな相手が今回も関わっている可能性がある。そう考えると、簡単には偶然だと思いうことはできなかった。

「菜生ちゃん、いる?」

「…いついるよ〜」

隣の部屋から聞き親しんだ幼馴染の声聞こえてきて、菜生はなんとか勘付かれる前にコスモプラックをしまう。

「ごめん電話してた?」

「ああいや……独り言だけど？どしたのこんな時間に？」

「おばさんいないんですよ？ご飯食べたかなって」

純粹に、しのぶが不在だから。菜生は夕食をとったのかという心配によるものだったらしい。

「作り置きしてくれただからそれ食べたよ。だから今日はもう大丈夫、ありがとね？」

「でもなんで急にいなくなっちゃいけなかったんだろ？クジラは何にも悪いことしてないんですよ？」

「そうなんだけどね……でも何かあつてからじゃ遅いからつてことなのかも」

歩夢は少し前までの菜生と同じで、SRCの医療センターで働いていることは知っているが、科学特捜チームのメンバーでもあることは知らないのだ。

「そうなんだ。でもそういわれると心配かも……しずくちゃんの家の近くなんだよね。あのクジラが出たの」

「そうだった……！遠いなって思ってたけど、しずくちゃんあつちの方に住んでるんだつた」

しずくは県外の実家から朝早くから家を出て通学していると聞いた気がする。その瞬間、菜生は嫌なものが背筋を伝うのを感じた。

「きつと大丈夫だよ。それに、もしクジラが悪い怪獣だったら。防衛軍もSRCもいる

し、今はコスモスも来てくれてるから」

「そう…：そうだよね！今日まだシャワーも浴びてないし。私そろそろ戻るね？」

「うん、おやすみなさい」

「おやすみ、歩夢」

そう言つて菜生は自室に戻ると窓の鍵をかけると息を吐く。

「そうだよね…：私が不安になっちゃだめだ。何かあつたら、私がみんなを守るんだ…！」
拳を握りしめてそう呟くと、両頬をパンパンと叩いてナイーブになっていた気持ち
を振り払った。

「私、ウルトラマンだもんね」

今はコスモスと一体化しているのだから、コスモスの力を借りればきつと対抗できる。本当はコスモスが居ることを最初からあてにするのは気が引けるが、そうなった場合みんなの安全を守るために。

そして翌日、しずくが来ることはなかった。

ニュースを見る限り、街で怪獣が暴れたなどの話は出ていない。しのぶに聞ければ一番なのかもしれないがあいにく連絡が付かない。

「心配だよね、しずくちゃんからの返事もこないし…」

「しず子…」

演劇部でのこともおおむね察しがついているかすみは、特に深刻そうな表情で下を向いていた。

菜生は、そんなかすみの様子に真っ先に気が付くと、かすみにそつと耳打ちする。

「しずくちゃんのとこ行く？」

「え？」

急な提案に、かすみは目を丸くするが、菜生はそんな彼女の様子に気づいたうえで話

をつづけた。

「この状況で練習したって集中できないでしょ？ならさ、行こうよ」

そうかすみに提案するが、内心では菜生も心配で仕方がないのだ。カオスヘッダーが関わっている可能性が少なからずある以上、やはり現地に向かいたいという気持ちが強いのだ。

「このままでも練習には集中できないだろうし、今日はお休みにしよう。いろいろ、*s*の皆さんから学んだこともあるけど、それは全員そろってから取り入れていこう」
そう全員の前で告げると、誰も反対意見を述べることはなかった。

「ごめん歩夢ちよつと私やりたいことあるから先帰ってて？」

「う、うん。菜生ちゃん晩御飯私の家で食べる？もしそれでもいいならお母さんをお願いしとくけど」

「いや、気にしなくていいよ？多分今日はお母さん帰ってくるよ。そんな気がする」

きつと今日でケリが付く。いや、ケリをつけるといふ覚悟でこれから出向くのだから

う気持ちをもってそう菜生は告げるのだった。

また歩夢に本当のことを教えない自分に嫌気がさすが、それでも歩夢を巻き込みたくない。

その一心で今までごまかし続けてきたのだ。もう菜生は恐らく自分から本当のことを伝えることはできないんだろうなと思いはじめていた。

「わかった。また何かあったら連絡してね」

「おっけ。いつもありがと、じゃあまた明日」

みんなで行ってもかえってしずくは責任を感じてしまうかもしれない。だからこそ、あえてかすみと二人で行くことを選んだ。

それに二人なら、クジラの周辺まで交通機関が使えないとなった場合に最悪バイクが使える。

結局、現状危険性を認められていないこともあり、普通に電車で向かうことができた。

「本当にクジラが空を泳いでる…」

「俄かには信じがたい光景だよね、やっぱし…」

空を漂うクジラの姿を見て、かすみも菜生も同じ感想を抱いた。

「とりあずしずくちゃんの家に行こうか？今日の用事はクジラじゃないし」
「ですね、行きましょう！」

嫌でも目に入るクジラを気にしても仕方がない。そう言つて意識から一度クジラを外すが、かすみも菜生も完全に意識の中からそれを消すことは不可能だった。

あらかじめ教えてもらつていた住所を頼りに、なれない街並みを歩く二人だったが、すんなりと目的地にたどり着くことができた。

なぜなら――

「……でつか……」

理由は簡単、しずくの家が豪邸だったからだ。

東京暮らしで、基本的に友達の家もマンションであることがほとんどな菜生にとつては一軒家というだけですでに目新しいのだが。さらにそれが、一般的な一軒家のイメージと比較して遥に広大な敷地の家となれば驚くのも無理はない。

暫く呆然と家の前に突つ立つていた二人だったが、意を決してインターホンを押す。

『はい』

「こんにちは、私たちしずくちゃんと同じ学校のスクールアイドル同好会のものなんで

すが……」

インターホンから聞こえていた女性の声に、菜生がそう告げると『少し待ってください』という声が聞こえしばらくすると女性が玄関から現れる。

「わざわざ遠いところまでありがとうございます。でもごめんなさい、しずくは今誰にも会いたくないって……」

「そんな……」

「やっぱりしずくちゃん、どこか悪いんですか？」

そう問いかけるが、しずくの母親は首を横に振る。

「それが……体調が悪いってわけじゃなさそうなんだけれど、昨日の夜からずっと部屋から出てこないのよね……今までこういうことなかったから。余程何かあったんじゃないかしら……」

そう告げるしずくの母親の表情は、大変悲しげだった。

(…演劇にライブ。やっぱり両方ってなると大変だろうし、私が無理させちゃったから…)

やはり二足の草鞋を履き続けることは容易ではない。それに加え、今回はライブと並行して演劇の練習もせねばならない。無理やりにも片方に絞ってもらわなければならない。菜生は自分を責めた。

「折角何時間もかけてきてくれたし、上がって頂戴。声だけでも、しずくに聞かせてあげて?。」

「わかりました。ありがとうございます」

部長である自分がと、菜生は母親と話していると。そう提案をしてくれたので、断る理由などあるはずもなく。かすみに微笑みかけると、ふたりで桜坂家の中にお邪魔させてもらうのだった。

まるで校内を歩いているのかと錯覚するような自分たちの家ではありえない長さの廊下を歩いて、3人はしずくの部屋の前にたどり着く。

「しずく、スクールアイドル同好会のお友達が来てくれたわよ」

「こんにちはしずくちゃん、ごめんね急に押しかけて」

「しず子大丈夫?」

扉越しに、しずくへの気持ちをそれぞれ口にする。だがなかなか扉の向こうからしずくの声は聞こえてこない。

「しずくちゃん?」

「ごめんなさい。今日は帰ってください」

「なんで!? 菜生センパイもかすみんもしず子のこと心配で来たのに!」

そう告げるしずくに、思わずかすみは声を荒げるが。菜生は手を伸ばしてそれを制す

る。

「かすみちゃん、今日は帰ろっか？今はそつとしておいてあげた方がいいと思うんだ」

「センパイ……」

「じゃあまた明日、来れたら来てね？無理しなくていいから、いつまでもみんな待ってる」

あくまでしずくに罪悪感を抱かせないように、プレッシャーにならないように言葉を選んだのだがしずくがどう受け取ったかは分からない。

「しず子、私たちにできることがあったらいつで頼ってね？」

かすみもそう告げるが、もうドアの向こうから声が返ってくることはなかった。

母親にも「本当にごめんなさい」と謝罪を受けた二人は、そのまましずくの家から離れていた。

「しず子、本当にどうしちやっただらう……」

「スランプ……とかな？演劇とライブ。両方の準備を同時進行っていうのがかなり負担だったのかも。実は昨日の夜演劇部の部長さんに聞いたんだ。主役を他の子に変えようと思ってるって」

「そんな…」

「どういう人選だったのか。何を基準で演者を決めてるのかわからないけど、やっぱり無理させちやってたんだなって思ったんだ。私もあんまりスクールアイドルの事まだわかってなくて、というのがやりたいかとか任せつきりだったし」

「センパイは部長として、かすみんたちの為に頑張ってるんです！だから、そんなこと言わないでください…」

「ありがと。でもさ、やっぱりまだまだ未熟だなんて思うことはあるんだよね。それに、もう時間もないし…」

そう、初めてのライブまでもう時間は残り少ない。それでも残された期間で菜生は、みんなに何ができるか？それを知りたくて、sに会いに行ったというのに。その結果かえって周りに気を配れていなかったことになってしまったのだから。

「ま、ここで悩んだって仕方ないし。ご飯食べて帰らない？」

「そうですね、せっかくだから学校の近くにないお店行きましょうよ！」

暗くなつた雰囲気緩和しようと話を逸らした菜生だったが、察してくれたのかかすみも話に乗ってくれた。

『邪魔をしないでよ』

「かすみちゃん、何か言った？」

「いや、何も言っていないですけど…」

不意に聞こえた無邪気な声。だが周囲には菜生の他には隣を歩くかすみしかいない。『しずくちゃんは今、苦しんでるんだ。キミたちの思いやりのつもりは行動が、信頼が彼女を苦しめてる』

「なに言ってる…」

『だから僕が壊してあげるんだ。代わりにね』

なぜ菜生にしか聞こえないのかはわからない。声の正体がそうしたのか、はたまたコスモスと一体化していることで常人に聞こえないものまで聞こえているのか。

だがそんなことはどうでもいい。しずくに危険が近づいていることだけは理解できたから。

視線を不意に空のクジラに向ける。クジラの身体から、カオスヘッダーに似た虹色の光の粒子が見えた気がした。

「かすみちゃん…」

「どうしましたセンパイ?」

「ごめん先に帰ってて!」

「センパイ!?!」

そう言い残すと、かすみを置き去りにして菜生は今来た道を引き返して走る。手遅れ

にならないうちにと。

戻ってしずくの家の前では、菜生が息を切らしながら出てきた母親に短く挨拶をする
と今度はしずくの部屋の中に駆け込んだ。

道中で、彼女の家の犬だろうか。しずくの部屋の方を向いて何かを威嚇するように
唸っているのが視界に写映った。

「しずくちゃん！」

「…せんばい？」

しずくの部屋の中には異様な空気が漂っていた。まるで、これから邪悪な存在がこの
場に顕現しようとしているかのような、そんな気配が。

「外に出よう？みんな心配してる。やっぱりこんな風に一人で抱え込んだっていい答え

なんて―」

「邪魔しないでください」

「え?―」

「ジラークだけが私の味方なんです。あの子は言ってくれました。むりに誰かの理想を演じなくていいって、それが私を苦しめるなら壊してくれていいって」

何かに憑かれたように、ちゃんと焦点のあつていない目でそう語る。

「ジラーク?それがあのクジラの名前?でもね、空飛ぶクジラは幻なんだ」

「解ってます…でも、もうあの子は降りてきます。壊す為に―」

カオスヘッダーと思われる光が彼女の身体を覆っていく。

「ダメだ!その光について行ったら戻れなくなる!!しずくちゃんツ!!」

菜生は咄嗟に手を伸ばすが、その手は届くことなく。しずくの体は光に包まれてその場から消えてしまった。

「菜生センパイだったらいきなり走り出して…おいて帰れるわけじゃないじゃないですか」

かすみは菜生を追いかけようと走ったが、元の体力の違いもあって菜生を見失ってしまふ。

頼れる先輩ではあるものの、時々何かを急に思い出したかのようにどこかへと飛び出してしまふのだけは何とかしてほしい。そう思わざるを得ないが追い付かなければ文句も言えない。

たまには何か言い返してもいいだろう。そんなことを考えていると、しずくの家の方から光が飛び出していくのが見えた。「もしかして…」とその光の後を追って駆け出した。嫌な感覚が背筋を伝うのを感じたのだ。

その光はすぐ近くに降り立つと中からしずくが現れた。

「しず子…?」

恐る恐る声をかけるが、その声が聞こえていないのかしずくは何も反応を示さず。ただ真上に漂うクジラを見つめる。そしてクジラはカオスヘッダーの光の粒子の集合体へと変貌すると、しずくの元へと急降下しそのまま彼女を取り込んで実態を得た。

「そんな…」

憤怒の表情をした女性のような顔つきのクジラの化け物―そう表現するしかないかのような巨大な異形、カオスジラクとして顕現したそれは口から破壊光弾を放ちかすみを攻撃した。

「キャアツ!？」

思わず屈みこみ顔を逸らすかすみ。だがいつになってもその光弾がかすみの身体を焼き尽くすことはなかった。

恐る恐る顔を上げると、かすみを覆いかぶさるようにして光弾を受け切ったのだ。そしてその光は次第に巨人の姿へと変わり、その全身を青く色付かせていく。

「ウルトラマンコスモス…」

28話 Touch The Fire

まだ菜生とかすみがしずくの家に着いた頃、一人そのまま帰る気になれなかった歩夢は近くのシヨツピングモールを訪れていた。

「あれ、歩夢じゃん。練習今日休みなんだ？」

「美月ちゃん？ そうなんだよね、ちよつといういろあつてさ」

水色の髪を肩のあたりで切りそろえた少女、遠山美月と出会ったのだ。

「あれ？ 美月ちゃんその腕……」

歩夢が気になったのは、美月の右腕だった。ギプスで胸元につるされていた腕は折れているようだった。

「ん？ ああこれか、インハイでゴリラみてーな女に折られた」

「だ、大丈夫なの？」

「まあソイツには勝ったよ？ でもこれのせいでこの後の試合棄権するハメになったし、ピアノもしばらく弾けないのがしんどいかな？ そもそも利き腕だし」

何の事でもないかのように笑う彼女に、歩夢は少々引き攣った笑みを浮かべる。小学校のころは菜生と競い合ってきた美月の性格は知っているつもりだが相変わらずつぶ

りに困っているのだ。

美月は菜生と空手クラブで一、二位を争っていた相手だが菜生と似て自分が傷つくを恐れない節がある。もっとも、菜生と違ってそれは自分だけでなく相手にも適応される。試合を見たわけではないが、恐らくヒビの入った腕で無理やり倒したのだろう。

「つてなわけで、暫く作曲手伝えないから勘弁ね？まあ菜生ももうかなり弾けるから杞憂だとは思うけど」

「は、早く良くなるといいね。ところで、美月ちゃんは何してたの？」

「妹の誕生日が近いから何か買ってあげようかと思つて。…そうだ、歩夢も見繕うの手伝つてよ！あたしじゃ彩月の好きそうなかわいいの選べないし」

そう言つて手を引いてかわいらしい雑貨の立ち並ぶ店に入つていく二人、菜生よりは付き合いの短い美月だがこうなつてはもう逃げられないと観念した歩夢はそのまま連れられて行くのだった。

そして場面は戻り、コスモスはカオスジラークに背を向け。かすみを庇うようにして

現れた。

(やつぱりカオスヘッダー…：しずくちゃんを取り込まれたら下手に攻撃できない…)

下手に攻撃すれば、しずくにまで危害を及ぼしてしまう。だがこのままではかすみを巻き込んでしまう。そう思いかすみをそっと持ち上げると一度飛び上がり、離れた地点にそっと下ろす。

「お願いです、友達を助けてください！」

そのかすみの声に、コスモスはゆつくりと頷くと立ち上がり背後に迫りくるカオスジラークの気配を背中感じていた。

それでも飛び上がると、カオスジラークの背後に立ち。こちらを敵として認識して振り返ったカオスジラークとの戦闘へと突入していく。

「シャアアアアツ!!」

「イヤアツ!!」

攻撃を回避し、少しでも街に被害の少ない場所へと相手を誘導していくコスモス。いや、菜生自身の希望だった。しずくに街を破壊させないこと、そして彼女を極力傷つけないことを。

だがやはり、体内に取り込まれているしずくへのダメージは最低限にせねばならない。

攻撃を防ぐ、捌くことに長けているルナモードでも一切ダメージを与えずに相手を無力化させることなど不可能だ。

そのうえ体内にしがくがっているのか、しづくの体を変質させたものなのかも判らない。だからこそ、普段以上に相手に攻撃する部位にも気を使う必要がある。

それを理解したうえで、相手の振り下ろした腕にこちらの腕を合わせて弾くと当たらないギリギリの距離で回し蹴りを放ち相手に回避行動をとらせる。

「イヤッ！ソリヤア!!」

そして一度仕切りなおした後の相手の右拳を両腕で弾き、腹部に両腕で掌底を放ちのけぞらせると再び距離をとって両腕を広げた後にゆったりと構えなおす。

相手が怪獣なら、もつと力加減も掴みやすいのだが。今戦っているのは今までの力オスヘッターがとりついた怪獣とはわけが違う。普段よりも弱い攻撃では、相手のスタミナを削ぐことはできていないのは相手の動きを見ても明らかだった。

元々持久力にも自信のあるルナモードだが、このままのペースではコスモスのエネルギーが先に尽きると予想して間違いはないだろう。それに相手がよく知る人間だといいうのもあつて菜生は焦っていた。

(どうする…? あえてコロナになるって手もあるけど…)

(コロナモードの攻撃で短期決戦は狙えても、彼女の身体が攻撃に耐えられる保証はな

(い)

(だよね。…だったらい！)

コロナモードにも、カオスヘッダーを切り離すための技は存在する。だがそれ以前に、コロナモードの強すぎる攻撃力にすぐは耐えられない可能性が高い。

少々苦しくても、このままルナモードで力加減に気を使って戦うよりほかはない。それが菜生とコスモスの出した答えだった。

カオスジラークの攻撃をギリギリで回避し、逆に右足で蹴りを放つと相手は両手で受け止める。その力を利用して左足で地面を蹴って飛び上がると、宙返りをしながら距離をとりつつ着地する。

どこかで隙を作ってしずくの今の状態を知る必要がある。このままでは相手に好きなように攻撃をさせ、こちらはそれを必死に捌くだけの一方的な戦闘が続くことになる。

多少ケガを負わせてしまうかもしれないが、このまま街や人に被害を出してしまえば最悪彼女事怪獣を排除しようとする動きが産まれるリスクも考え。菜生はここでようやくちゃんと反撃をすることを決意した。

今度はこちらの番といわんばかりに蹴りを放つために接近してきた相手の首元に左腕をひっかけて転倒させると、想定外の方法での反撃だったためかカオスジラークは背

中からまともに地面に叩きつけられた。

「しず子っ!？」

先ほどまでと違い、ダメージを与えるための攻撃に思わずしずくを心配する声がかでてしまうが。「やめて」ということはしなかった。

この反撃で、相手の怒りを買ったのか我武者羅に腕を振り回して突っ込んでくるが、こうなつてくれた方がこちらとしては攻撃を読みやすい。

一撃目の右腕を両腕と右足を使って防御すると左腕の二撃目を掴んで組伏し、そのまま顔を蹴り上げる。そして怯んだ相手の右腕を掴み、今度は背負い投げの要領で投げ飛ばした。

先の攻撃への反応から、このくらいまでならやつても問題は無い。そういう判断での攻撃だったが思いもよらず相手は空中で態勢を立て直すと静かに着地した。

だが、着地して立ち上がったからコスモスの方を振り返る。その時間があれば十分だ。コスモスはルナスルーアイを照射、カオスジラークの体内の様子を伺うのだった。

そして見つけた、カオスジラークの左胸のあたりに気を失っているしずくの姿を。

(よかった…しずくちゃんも体内に取り込まれてるだけ、なんとか怪獣の体内から切り離せれば―)

「キシヤアアッ!!」

だが安心したのも束の間、カオスジラークは口から光の矢を連射。思わぬ反撃に、コスモスは反応が一瞬遅れた為。無数の矢がコスモスに殺到、さらに背後には街もあるため下手に回避もできない！

それでもコスモスは落ち着いていた。高速移動で一瞬で後退して距離を取ると、両腕と両脚に気を集中させる。

そうすることで発動する二種類の防衛技、マストアーム・プロテクターとマストフック・プロテクターを併用することで効果的に光の矢を粉碎し、さらに高速移動も織り交ぜることで距離も詰めていく。

「ハアアアアッ!!」

そうして全弾叩き落した後にそのままフルムーンレクトを放つ。怪獣自体を大人しくさせた後に、しずくを助け出そうという判断だった。

しかしー

「邪魔しないでください!!」

それが逆効果となったのかしずくを目覚めさせ、そのまま彼女の感情に同調するようになカオスジラークは攻撃性を増した。

様々な要因で追い詰められてしまった彼女に、「壊してしまえばいい」という言葉はまるで麻薬のようなもだった。

本来そんなことは望まない彼女に、「本当に全部壊して無くしてしまえばいい」と思わせるほどに。

カオスジラークは左腕から光の鞭を形成、そのまま振り下ろした。

フルムーンレクトが通用しないという想定外の事態に一瞬反応がおくれてしまい、右手首に巻き付かれてしまう。

そのまま引つ張られるようにしてコスモスの身体が宙を舞い、地面にしたたかに背中を打ち付ける。

「グッ…」

先ほどまでと打って変わり、コスモスは一気に追い詰められてしまった。

（このままじゃ…）

右腕の自由を奪われた状態では、先ほどのように攻撃を防ぐことができない。それに加えて、鞭から電撃を流されコスモスのカラータイマーは点滅を始めていた。

「このままじゃコスモスが…」

一気に窮地に立たされてしまったコスモスを見て、かすみはそう呟いた。

今までコスモスが戦っているところは何度も見てきた。あのコスモスがここまで苦戦することなどなかったはず。きっとしずくを助けるために全力で戦えていない。それは見ていてなんとなく理解できた。

そして、コスモスが倒されればもう誰もしずくを助けられないことも。

それは、実際戦っているコスモスと菜生もわかっている。

だがこのままではしずくがどうなってしまうかわからない。ここで負けるなどありえない、なんとしてでもこの状況を脱し彼女を救わなければ。

一瞬コスモスの視界にかすみの顔が見えた気がした。本当は逃げてしまいたいけど、大切な友達のを案じて離れることができない彼女の顔が。

(怖いよ…)

『しずくちゃん?』

(素の自分って何…? みんなから嫌われるのが嫌で…だから演技を始めた私に、そんなことわからないよ!)

きつとそれがしずくの本心だったのだろう。みんなの輪から外れるのが怖くて、みんなに好かれる自分を演じたことが演劇を始めたきっかけだったのかもしれない。

そして、その感情が爆発し。それをカオスヘッダーに利用され曲解した方法で解決するとい寄ったのだろう。

『ふぎけるな!!』

(先輩?)

だが、菜生叫んだ。しずくに届くほど大きな声で。

『だから壊すの？しずくちゃんはずくちやんで、それ以外のなにでもないんだ！嫌われるかもしれない？私は絶対、どんなしずくちやんでも受け入れる。だから君が本当はどうしたいか教えてよ!!』

(本当はこんなことしたくない…先輩、助けて…)

『わかったよ、しずくちゃん』

その時、「絶対に負けられない」という感情が炎のように燃え上がった。そしてコスモスはその菜生の炎に触れ、電撃に耐えつつ無理やり鞭を掴みそのまま引き寄せようとする。

(絶対に…負けるもんかあッ!!)

「ヤアアアアアアッ!!」

菜生の感情とシンクロし、ルナモードでは本来出せないレベルでの力を発揮。そのままカオスジラークの身体を引き寄せると、その腹部に左手で掌底を打ち込み。その時のショックでカオスジラークは技を解いてしまう。

そのまま追撃に出たかったが、コスモスは先の電撃のダメージで思わず膝を付く。

これ以上の戦闘は、コスモスの限界も近い。地球上ではただでさえエネルギーの消耗の激しいコスモスは、しずくを救うために無理を続けてきた。もうエネルギーの底が見え始めていたのだ。

だが先に態勢を整えたカオスジラークは、口にエネルギーを集中させそのまま破壊光弾として撃ち出そうとしていた。

「危ない！」

かすみの叫ぶ声に反応するように、コスモスは右腕を突き出すと。捕縛用光線ネットトラック・ボックスを発射、今度は逆に光の網でカオスジラークを捕縛。攻撃を中断させる。

そして両腕で胸の前にエネルギーを収束させ、そのまま七色の光線・ルナレインボーを照射する。

するとカオスジラークの体内に取り込まれていたしずくは解放され、実体化するため核を失ったカオスジラークは実体を失って消滅した。

「しず子……！」

切り離されたしずくは光に包まれ、地上へとゆっくりと戻された。それを見てその場へとすぐさま駆け付けたかすみは、しずくが気を失っているだけに気が付くとほとほと息を吐く。

「ありがとうございます、ウルトラマン」

その言葉に、コスモスはゆっくりと頷くと夜空へと飛び去って行った。

そして数日後、カオスヘッダーの影響から解放されたしずくは無事に復帰。とくにケガもなく、スクールアイドルと演劇の二足の草鞋の生活に戻っていた。

「先日はありがとうございました」

「私は何もしてないよ？それよりも、あの事なただけど……」

練習の後、話があると行ってしずくに呼び出された菜生は、自分がコスモスであることがバレてしまったと思い。誰かに言いふらされたりしないかとハラハラしながら日々を過ごしていたのだ。

「ごめんなさい、実はあの日の事は覚えてないんです……どうやって助かったのかも、私がどうしていたのかも……」

「そ、そうなんだ……でもよかったよ。主役、しずくちゃんが決まったんでしょ？」

「実は、そのことでお願ひがあるんです」

「お願ひ？」

しずくの真剣な表情に、菜生はまっすぐと目を見据えて続きを待ったが。この後にそれを後悔することとなった。

そしてしずくが主役を務める演劇の当日。

「そろそろ始まりますよ！」

「そういえば菜生ちゃんは？」

客席で座っていたせつ菜がそう興奮気味に話していると、菜生の姿が見えないことに気が付いた。

「あり？菜生来てないんだ？」

「み…美月ちゃん!？」

「なんだよ人を幽霊みたいにびっくりしたなあ…」

いきなりさも当然のように歩夢の隣に腰かけた美月に、歩夢が驚くと「心外だなあ」といたずらが成功した子供のように笑う。

「そういえば、今日は用があるから現地集合って言っではいたけど…」

「もしかして道に迷ってるのかしら？」

「どうなんだろう…？」

そうこう話していると、菜生が合流しないまま演劇が開始された。

そして最後まで滞りなく舞台は進み、拍手喝采で幕を閉じた。

そして菜生はというと――

「つ…：疲れたあ…：…」

実はしずくと体格が近いからという理由でとある役で出ていたのだ。

「お疲れ様です。先輩、またお願いしてもいいですか？」

「私も見る側が良かった〜！しずくちゃんが演技してるとこ客席で見たいからヤダ〜
!!」

この先、菜生が演劇部に入ったのか。はたまた次回以降は客席から見る側になったのか。それはまた別のお話。

29話 アタシにだけ見えるあの子

初ライブをもう三日後に控えた日の事だった。

東京では謎の電波障害により大混乱となっていた。

その結果、普段チャットアプリで済ませられるはずの連絡すらも部室で直接会って済ませる必要があった。

「じゃあまた明日ね〜」

そう言つて解散した後の事だった。

「怪獣だよ、怪獣がいるんだ!」

愛は街のど真ん中でそう訴え続ける少年を見かけた。流石に冗談にしては笑えない
と思ひ、その少年の方へと歩み寄る。

「こーら!ダメだぞそんなウソ言っちゃ」

「アンタ…俺が見えるのか?」

愛に気が付いた少年は、愛の方へ振り向くとそう問いかける。

「見えるって…やめてよそんな!」

「愛さん、どうしたの?」

そうしていると、天王寺璃奈に背後から声を掛けられ一度少年から視線を外す。

「聞いてよりなりーこの子つたら…あれ？」

「誰もいなかったと思うけど…」

少年の方を指差したつもりだったが、そこに人の姿は無く。まるで最初から誰もいなかったかのようだった。

「そんな…」

あの少年は璃奈のほうを見ている間にどこかへ行ってしまったのか？だが璃奈の様子を見ると璃奈にはあの少年は見えていなかったようだ。

果たして気のせいだったのだろうか、愛は首を傾げることしかできなかった。

一方で誰も気が付いていないが、黒い悪魔のような姿をした異形がこの街一帯の電磁波を吸収。それによって街全体に電波障害が発生してしまっていたのだ。

「愛ちゃんの様子がおかしい？」

「うん、昨日から。まるでみんなと違うものが見えてるみたいな…」

翌日、練習中もどこか上の空だった愛の様子が気になった菜生だったが。それを聞く前に璃奈からそう伝えられた。

「まさか…幽霊？」

「なっ…ゆゆゆ幽霊!？」

菜生の言葉に取り乱したのは、以外にも美月だった。腕のケガで空手の練習にも参加できないからと、作曲の協力者である彼女も練習に参加してくれていたのだ。

「あれ？美月ちゃんこういうのダメだったっけ？」

「こ、怖くなんてねーよ。そもそもこれだけ科学の進んだ時代に住んでてなんでそんなオカルトなんて信じてないし」

明らかに無理をして強がる美月に「ごめんごめん」と謝りつてから本題に戻る。

「じゃあ愛ちゃんが話してた相手、璃奈ちゃんは見えなかったんだ？」

「うん。あの時愛さんが話しかけてた方向、誰もいないように見えた」

「やめろよそんな怖いこと言うの!!」

璃奈が昨日の様子をそう表現すると、美月が思わず大声を出す。

「美月さん、やっぱり怖いんだ…」

「ふくん…美月ちゃん。相変わらずそういうところは乙女なんだから」

「うっさいバカ菜生！」

呆れたように呟く璃奈のとなりで、相変わらずニヤニヤしている菜生に美月はそう囁みついた。

「じよ…冗談だつて……」

「でもさ、璃奈ちゃんの勘違いの線もあるんでしょ？ゆ、幽霊じゃないならあたしも力になれるかも」

菜生を一度睨んでから、璃奈にそう語る美月に「でも、それでもやっぱり不自然」と返す璃奈を見て美月の顔色はやはり優れない。

「でもそれが原因なら、なんとか解決したげないと…本当かどうかも含めて、私がそれとなく探ってみようか」

そう言つて菜生は、練習終了後に愛に「ちよつと寄り道して帰ろうよ」と声をかけたのだった。

「珍しいね、なつちから誘ってくれるの」

「そうだっけ？まあ私はさ、あんまり愛ちゃんとかういう風にして遊んだことないなって思っただけ」

そう言つて菜生は笑つと「どこ行く？」という会話になり、二人は街の中を歩くのだつた。

「そうだ、この前で来たクレープのお店行こうよ！私大好きでさあ」

「いいねえ！あれ……」

そう菜生が提案したところで、愛も笑顔で応じてくれるがその表情はすぐに消え失せ。ある一点をみつめて立ち止まった。

「ん？どうしたの愛ちゃん？」

「あの子……」

そういつて菜生の背後にあつた建物の方へと駆け寄つていく。菜生もそのあとを追つて振り返ると、そこは写真館だつた。

「あのすいません。あの入り口の写真の子……」

「ああ、高杉純君だよ。知り合いかい？」

写真館の店主は、愛が指差した店前に飾られていた写真に写っている中学生くらいの少年をそう呼んだ。

「高杉…純くん……」

「高杉さん家なら、その公園の向かいだよ」

「ありがとうございます！」

礼を言ってお辞儀をした愛は、そのまま老人が指差した方へと走っていった。

「なにになに？どうしたのさ、愛ちや…ああもう！」

店の外で愛が見ていた幼い男の子が写っていた写真を見ていた菜生が、店から出てきた愛を呼び止めようとするも無視して走り去る彼女に動揺するが、ひとまず写真館の店主に一礼してから「ちよつと待つてよく！」と走り出した。

そして愛に追い付いたのは、『高杉』と記された表札のかかった一軒家だった。そして、もうその時にはインターホンを押しており、家の中から先ほどの写真の少年の母親と思わしき人物が顔をのぞかせた。

「どちら様ですか？」

「アタシ、純くんの知り合いなんですけど…今家にいますか？」

本当のことをいきなり話すのは憚れたのか、そう要件を伝えた愛に対して。母親は申し訳なさそうに首を横に振る。

「ごめんなさい、純は今——」

「うそ……」

母親から告げられた言葉に、愛と菜生は言葉を失った。

だがこうやって今の状況に慣れつつある人々だが、電波障害によって携帯電話等の機器が使用できない生活にもだ。だが、陰ではこの状況を解決すべく活動しているものもいる。

そしてこの電波障害の原因は、謎の電磁波の渦が上空に発生しているということが判明していた。事態の解決までは近い—のかもしれない。

もう日が沈みかけている中、公園のベンチに愛と菜生は座り込んでいた。

「まあ…元気出してよ。きつと元気になるよ」

「そう…だといよいよね…」

話によれば、純は件の電波障害が発生した日に信号機が消えてしまったことよって車と事故にあつてしまい、現在病院で意識が戻らず眠ったままなのだという。

「あの子…もう出てこないのかな…？」

「え…？」

そう呟く愛の真意がわからず、菜生はただそう聞き返すだけだったが。愛はそれどこ

ろではなかったらしく、ひどく落ち込んでいるようだった。

「そ、そういえば純君だっけ？あの子とはどんな関係なの？」

「昨日さ、街中で言ってたんだ『怪物がいる』って」

「昨日？でも…」

昨日この少年が街にいるはずがない。その時は、既に病院で寝たままになっただけ。昨日この少年が街にいるはずがない。その時は、既に病院で寝たままになっただけ。昨日この少年が街にいるはずがない。その時は、既に病院で寝たままになっただけ。昨日この少年が街にいるはずがない。その時は、既に病院で寝たままになっただけ。

「うん…でも、確かに言葉を交わしたんだよ。だから、アタシは…」

恐らく、愛が会ったという少年が先の純なる少年ならやはり生霊のようなものなのだろう。この状況でその事実を疑うことなど菜生にできるはずもなかった。

「あ…」

ある一点をみた愛が突然立ち上がって走りだす。菜生は今日何度目かのそれを呼び留めようとしたが、愛が立ち上がった拍子に彼女のカバンが落下したのに気が付いてそれを拾い上げる。

「今までどこに行ってたの!？」

「うん、ちよつと散歩してた」

愛が見つけたのは純だった。愛に自分の姿が見えるのか？と言ったまま姿の見えなくなっていた少年。彼は本当に高杉純という人間なのか？疑問は尽きない。

「どうしてアタシにしか純君が見えないの？前に、会ったことあったりする？」

その言葉に、少年は愛の顔をまじまじと見た後すぐに顔を逸らしてしまった。

「そうだ。怪獣がいるって言ってたよね？それホントなの？」

一瞬気まずい空気が流れた後、愛ははっと思ひ出したかのようにそう目の前の少年に問いかけた。

「いつ天国にいけるんだろうって思ってた。でも、空にあんなヤツがいたなんて……」

「そんなこと言ったらダメだよ！お母さんも、早く元気になって欲しいって」

その言葉を聞いて、少年は逡巡した後。

「明日、アンタに渡したいものがあるんだ」

「……どこに行けばいい？」

「病室」

そう言って、少年はまたすぐに姿を消してしまった。

その日の夜の事だった。

「もうお母さん、携帯使えないんだからちゃんと朝言ってくれればいいのに……」

まだメールが使えると思っていた歩夢の母は、買い物頼むのを忘れていた。そしてその買い物も、夜帰ってきてから食事の準備をしている間に買ってほしいと頼まれたのだ。

「あれは……菜生ちゃん？」

もう少しでマンションに帰り着くというところで、マンションの中に入っていく菜生を遠目に見つける。

最近は何かに帰ることも多く、遅くまで帰ってこないことも多々あると聞いている彼女が何をやっているのかはわからない。

それに加えて、怪獣や宇宙人が現れるとよく危険を顧みず行動するようにもなり、何かと危なっかしい。そんな菜生の本心がわからなかった。

『久しぶりだね、歩夢』

「あ、あなたは……」

そんな時、不意に背後から声を掛けられ歩夢は振り向く。そこにいたのは、かつて出会ったことのある懐かしい顔だった。

怪獣や宇宙人、そしてカオスヘッダー――

様々な陰謀が絡み合うこの地球で、次なる脅威が蠢いていた。

30話　ぬくもりの記憶

—明日、アンタに渡したいものがあるんだ。

その言葉を受けた愛は、翌日純が入院している病院を訪れていた。

相変わらず寝たきりの純を見て、やはり昨日の夜あったのは別人なのではないかという気すらしてしまう。

「あれ…?」

意識は戻らないままだったが、まるで愛に渡すために動いたかのように純の握られていた手が愛の視線の先で開く。

そしてそこには、真つ白な石が握られていた。

「これが、渡したいもの…」

この石が何を意味するのか分からない。でも純がこれを愛に渡したかったのだということはなんとなく理解できた。

「目、覚めるよね…?」

最後にそう呟いて、愛は病室を後にした。

「やっぱ…もうちょっとだけ、生きてみようかな…」

病院の屋上から、帰っていく愛の姿を見て少年はそう小さく呟いた。

もう、十年程前の夏のある日の事だ――

「キミ、泣いてるの？」

「泣いてないよ」

神社の狛犬の下で座り込んでいる男の子に、少女が声をかけると少年はそう言い張り。持っていた地図を隠そうとして落としてしまった。

「見せて」

だがその地図を少女が拾い上げるも、その地図は濡れてしまっていてよく読み取れないがおそらくこの周辺の地図であろうことは理解できた。

「ここに行きたいの？」

少女がそう地図の中でペンで印を入れてある一点を指差して問いかけると、少年は大人しく頷く。

「ねえ、ここでだれかまつてるの？」

「ママ」

「じゃあ、あたしもいつしよにさがしてあげる！」

そう言つて少女は少年を手を取り、一緒に歩きだしたのだった。

一方、虹ヶ咲学園スクールアイドル同好会では。

「今日愛ちゃんおやすみなんだ」

「うん、昨日の帰りにさ。今日は用意があるからごめんつて」

休憩中に、愛のいないことを歩夢に聞かれて菜生はそう答えた。

「昨日愛ちゃんと遊んでたんだけ？」

「うん、おいしそうなクレープのお店教えてもらったんだよね。色々あつて行けなかったし、帰りも遅くなつてお母さんに今日は真つ直ぐ帰つてこいつて怒られちゃったけど」

そう苦笑いしながら答える菜生だったが、歩夢の顔は笑つてなかった。

「本当はまた何か危ないことやつてるんじゃないの？最近の菜生ちゃんずつとそうだもん、怪獣だとか宇宙人だとか…」

「昨日のは本当に違つて、それに私も好き好んで宇宙人に襲われてるわけじゃないから…」

彼女が本気で自分の事を心配してくれているのは良く解つた。でも、菜生はコスモスの事を明かすことはできずにそう取り繕う。

そんな時、轟音がその場を引き裂いた。

電波障害の原因を特定したSRCは、街の一転に発生していた電波の歪みが発生しており。その歪みが周囲の電波を吸収したために、今回の状況は発生したと判断した。

そこへアモルファス波を照射し、その電波の歪みを取り除こうとした。

そしてそこで、問題が発生した。

照射されたアモルフアス波こそが、その歪みが最も好んでいたものであり。それを大量に吸収したことで、その歪みは急激に肥大化し一体の怪獣へと姿を変えた。

漆黒の巨体に角の生えた頭部、両肩から生えた触手に先端の尖った尻尾―まるで悪魔のような姿をした怪獣、グラガスこそが今回の事件の原因であり純が言っていた怪獣の正体だった。

突如街に出現したグラガスは、触手から電撃を飛ばし街を破壊し始めた。

「なにあれ…怪獣？」

「ここからは遠いし、学校にいた方が安全だとは思うけど…」

「とりあえず校内の様子、あたしが確認してこようか？」

怪獣が頻繁に現れるようになって時間は立ったが、それでもやはり怪獣の出現に緊張が走る。そんな中で、そう美月は立ち上がって提案した。

「いや、私が行くよ。美月ちゃんケガしてるし、代わりにみんななんて？」

「…わかった。ただし10分で戻ってこいよ？絶対ここで待ってるから」

その中で、それを制止したのは菜生だった。そんな菜生の顔と、それを止めようとした歩夢が動くより早く美月はそう条件を出した。

「だから、絶対戻って来いよ。あたしはここのちゃんとした部員じゃないけど、みんなと

一緒に部長であるお前を信じてここで待つ」

「わかった。約束する」

そう言つて菜生は部屋を飛び出すと、そのまま人気がない場所へと移動する。

「10分あれば！すぐ終わらせよう、コスモース!!」

菜生は誰もいないことを確認すると、コスモプラックを天に掲げ自身と一体化している巨人の名を呼んだ。

「シユア!!」

グラガスの目前に着地するコスモスに、驚いたのか後退つて胸を押さえるとおう人間臭い仕草を見せるグラガスに対してコスモスは右拳を天に突き上げる。

すぐさま太陽の如き赤い光を身に纏い、コスモスは青いルナモードから赤い巨人、コロナモードへと姿を変える。

「ジュルル…」

「ダアアツ!!」

グラガスは腕で口元をぬぐう動作を見せる中。コロナモードへと変わったコスモスはファイティングポーズをとる。

両者は同時に駆け出すと、コスモスはグラガスの目前で飛び上がる。そしてそのままの勢いで顎を蹴り上げて一回転して静かに着地する。

蹴り飛ばされたグラガスは起き上がると、忌々しそうにコスモスを睨みつける。

相手がどのような怪獣なのか現時点では判断はできない。だがしかし、現状から判断して目の前の相手を友好的な怪獣と解釈することは難しい。

だから倒さなくとも、コロナモードの力を使って戦意を削ぐという判断をしたのだ。

だが目の前の怪獣は、まるで

お互い同時に駆け出すと、コスモスはグラガスに殴り掛かろうとするが、グラガスは自身の口元を拭った腕をそのままコスモスの顔面に押し付けそのまま顔を掴んだ。

「ウアッ!?!」

(嫌っ…!?!)

自分の手を唾液で汚してから相手の顔につかみかかるといふ、下品な攻撃に対処が遅れてしまっただけでなく、菜生の無意識下での嫌悪感と相手の握力の強さも相俟って、すぐさま脱出することができなかった。

そんなコスモスの様子を好機と見たグラガスは、そのまま空いている方の腕でコスモスの腹を殴りつけ、膝蹴りをして態勢を崩してから顔面をさらに殴り飛ばした。

そしてさつきまで抑えられていた顔を押しさえているコスモスを背後から蹴り、殴りつけてその巨体をもって押し倒した。

(こん…のオツ!!)

「ウオオツ!!」

だがそんなグラガスに対して、調子にのるなど言わんばかりに起き上がりざまに蹴りを入れそのまま上空へと飛び上がった。

だがその判断は間違いだった―

グラガスの背中の二本の触手が伸び、コスモスの胴体に巻き付いた。

そしてそのまま触手を操り、飛び上がったコスモスを地面に叩きつける。そしてそのまま、さらに触手から電流を放ちコスモスへ攻め立てる。

「ぐああああっ?!」

さらにカラータイマーまでコスモスの活動限界が近いことを赤く点滅して知らせ始めた。

そしてその戦闘を、少し離れた場所から見守っている人物がいた。勿論愛だ。

「このままじゃ…」

まさに絶体絶命。だがあの怪獣がこの騒動の正体であり、あの怪獣が倒されなければ純はあのまま彷徨うことになってしまう。なんとなく愛はそう察していた。

でもただの人間である愛に、怪獣と戦う力などないしどうすることもできないのだ。

「あの石を使って」

「え？」

ふいに背後からそう声がした。振り返ると、いつものごとくどこからともなく純が現れた。

「怪獣はあの石が嫌いなんだ。初めて見た時も、額に埋め込まれてたその石を必死に？がしてた」

恐らくこの石には、あの怪獣の力を抑制する力があつたのだろう。だがこの石をどう使つてコスモスを救う？今自分にできることは何か？愛はそれを必死に考えた。

その時、避難誘導をしているSRCの特捜隊員の姿が目に入った。

「あの人なら……」

そう言つて愛はその隊員の元へと駆けだした。

「すいません」

「あなたは確か……」

運のいいことに、それは菜生の母親であるしのぶだった。

「どうしたの？早く逃げなさい！」

「これ！この石を怪獣に使つてください！！」

「なにを言つて……」

はたから見れば、真つ白い小石にしか見えない。それでどうしろというのかと訝しむ

しのぶだった。現状を鑑みて、このまま何もしないよりはマシという考えに落ち着き。愛から石を受け取ると、腰に下げていた銃にアタッチメントを取り付けカプセルに石を装填した。

「愛ちゃん、離れてなさい」

「はいー！」

信じてくれたしのぶに対してそう頷くと愛は後ろに下がる。すると耳元でまた「ありがとう」という純の声が聞こえた気がした。

そして、それから一瞬の間が空いた後しのぶの銃口から怪獣目掛けて弾丸が放たれた。

その弾丸は、怪獣グラガスの顔面目掛けて真っ直ぐ飛んでいきー口の中へと入ってしまった。

「当たったー！」

「……」

当たったことを喜ぶ愛と、その効果を無言で見届けるしのぶ。

その視線の先で、先程までコスモスへの電撃攻撃を行っていたグラガスの様子は一変。もがき苦しみ始めたのだった。

（電撃が止まった？よしー！）

「ウオオオオオッ!!」

それを好機と見たコスモスは、触手を掴むと思いきり引き千切り拘束から脱出した。触手を引き千切られたことで、怪獣は思わず仰け反るが、すぐさま立て直し、コスモスへと攻撃しようと駆け出した。

だがしかしもうコスモスには、グラガスの肉弾戦での戦い方は通用しなかった。

(その手はもう食らわれないよッ!!)

再びコスモスの顔を掴もうと伸ばしてきた腕を振り払い、逆にグラガスを両腕の拳を同時に叩きこむ。

さらに態勢の崩れたところに追い打ちをかけるようにして、飛び上がりざまに回し蹴りを顔面に叩きこんだ。

このままコスモスが一気に押し切るだろう。戦いを見ていた人々はそう思った。

だが実際は、このままではコスモスにやられてしまうと察したグラガスはすぐに拝み倒すような仕事をとり。コスモスに見逃してもらおうとし始めたのだった。

なんとも情けないような格好だったが、コスモスが構えを解くとそのままグラガスは飛び去ってしまった。

(まあもう戻ってこないなら、倒さなくてもいいよね。このまま倒すと苛めてるみたいだし)

コスモス自身も、菜生と同じような考えだったのか特に追撃の意思は示さず街の状況を確認しようとしてグラガスがいた方へ背を向ける形で振り返る。

だが、それがいけなかった―

グラガスは、コスモスの注意が自分から逸れた事に気が付くと、ニイッと笑うと、空中から球体状にした電気の塊を乱射。完全に無警戒になっていたコスモスへの攻撃を回避することはできなかった。

「グアッ!?!」

油断していたとはいえ、電撃の威力もかなりのものでコスモスの姿は爆風に包まれて見えなくなった。

「そんな…」

爆炎の中に消えるコスモスを見て、愛はそう小さく漏らした。グラガスの卑怯な攻撃によって、コスモスがやられてしまったと。

だが、その次の瞬間―

「デリヤアアアアアッ!!」

爆炎を切り裂いて、炎の圧殺波動プレッジョンクウェーブが飛び出し、グラガスの身体を完全に？み込んだ。

コスモスの怒りの反撃は、グラガスを塵一つ残らず完全に消し飛ばしてしまった。

そして煙が晴れると、コロナモードのコスモスが中から現れた。

コスモスは、グラガスの卑怯な戦法に怒り。見逃すことをやめ、そのまま倒したのだった。

「よしっ!」

「じゃあオレ、帰るから」

コスモスの勝利に、小さくガッツポーズをした愛の背後でそう小さくささやく声がした。そして、先程まで背後に感じていた純の気配が消えたのを感じて愛は振り返った。

「純君…?」

そこにはもう、愛には見えていたはずの少年の姿は無かった。

周囲を見渡しても、見えたのは空の向こうへと飛び去って行くコスモスだけだった。

翌日、愛と菜生は純が入院している病院を訪れていた。

「目、覚めてるかな？」

「大丈夫だって、きつと元気になってるよ」

そう愛を励まそうと話す菜生だったが、病院の廊下の向こうから見たことのある女性
が、車いすを押しているのに気が付いた。

そして、その車いすに座っていた少年こそが純であった。

「よかつた〜！目、覚めんだね」

そう言って愛は駆け寄っていくが、純は首を傾げて「この人ダレ？」と母親に尋ねて
いた。

そして、その言葉に当然愛はショックを受けて表情を曇らせる。それを見て菜生もな

んと声をかければいいのかわからずにいた。

「まあ、覚えてるわけ……ないよね……」

「愛ちゃん……」

思い返してみれば、今まで会っていた純が本当に目の前にいる少年と同一人物だという保証はなかったのかもしれない。言ってしまうえば、幽霊のような非科学的な存在だったあの少年は、ただ今日の前にいる『高杉純』という少年の姿を借りていただけなのかもしれない。

そう考えて愛は諦めようと思った。

「でも、純君が元気になってよかったよ!!」

純の手を握ってそう告げると、愛はそのままこの場を離れようと思った。

——つかれた、もう歩けない

——じゃあ、手をつなごう？手をつないだら、いっぱい歩けるんだよ

まだそれほど歩いてはいない。だがしかし、幼い彼らにとつては夏の炎天下の中で歩き続けるのは容易ではない。すると少女はそう言つて手を差し伸べる。

そして、少年はその手を取つて二人はまた歩き始めるのだった。

—純!

—ママ!

すると、正面から女性が駆け寄つてきた。少年の母親だったようで、少年は探していた母親を見つけたことで少女から手を放して母親へと駆け寄つていく。

—もう迷子になつちや、ダメだからね

—わかつた

—もし迷子になつたら、愛さんがきつと見つけてあげる!

その言葉を交わすと、少女は少年と別れた。

その少女こそが、宮下愛で少年が高杉純だったのだ。そのことを思い出した純は、去ろうとしていた愛を呼び止めた。

「もしかして…愛さんですか?」

その一言で、愛の表情に笑顔が戻つた。

そして、幼い日に一緒に歌った歌のフレーズを純が歌いだすと、愛はそれに続いた。

その日の夕方、純が無事に退院していくのを見送った愛と菜生はそれぞれ帰路についた。

「なくおちゃん♪」

もう少しで住んでいるマンションに帰り着く。そんな時に背後から声をかけられて菜生は振り返った。

「あれ？歩夢今日もおつかい？」

「ん〜そんなとこ」

「なんかいいことあったでしょ〜歩夢、めっちゃご機嫌じゃん」

異様にテンションの高い歩夢に、それほど嬉しいことがあったのかと菜生は問いかける。

「知りたい？」

「教えてくれるの!？」

そう聞き返すと、歩夢はにいつと笑うと「それはねー」と言ったところで菜生の意識は途絶えた。

「あ……む……」

「やっと仇が討てるのが嬉しいんだよ『ウルトラマンコスモス』」

復讐者が、そこには立っていた。

31話 哀しき復讐者

「あ……む……」

どさり。と音を立てて倒れる菜生を見下ろす歩夢の顔は、普段からは想像できない程おぞましいものだった。

左手首に付けた銀色の金属質なブレスレットを撫でながら、菜生が気を失うさまを見届けると歩夢は菜生の方へと歩み寄る。

菜生の意識が途切れる直前、菜生は目の前にいるのが歩夢ではないと気づくことができたが、もはや全て手遅れだった。

「さあ、復讐の始まりだ!!」

そう宣言する声は、狂気に満ちていた。

コスモスは、歩夢から放たれている異様な気配に気が付くことはできたが。不幸にもグラガスとの戦闘で力を消耗していた為、菜生が襲われる前に助けることができなかつた。

「まずはお前の大事なものから壊してやるよ」

気を失った菜生の髪を撫でながら、歩夢はそう呟くと。次の瞬間、菜生と歩夢の姿は

消えていた――

「んっ……あれ？ここは……」

「気が付いたか」

菜生は、ひやりとした空気を感じて目が覚めた。意識がはつきりすると、両腕を鎖で縛られた状態で自身が吊るされていることに気がついた。

どうやらここは使われていないビルの一室らしい。周囲を見渡すと、窓の向こうに虹ヶ咲学園が見えるし、恐らくここに自分をつるし上げたであろう歩夢――に似た人物の背中が見えた。

「歩夢じゃない、キミは何者なの？」

目の前の歩夢の姿をした何かに、菜生はそう問いかける。

「身体は間違いなく上原歩夢のものだ。でも今はオレが使ってる」

自分の胸元を触りながらそう告げると、菜生は激昂した。

「歩夢をどうした!?!今すぐ歩夢を解放しろ!!でない」と――

「さもないと？ハッ！今のお前に何ができる？精々オレが今からやることを眺めることぐれーだろ」

そう吠える菜生をあざ笑うだけでなくコスモブラックを振って見せびらかす歩夢に、菜生は悔しそうにギリリと歯を軋ませて悔しがる。

「なにが目的？私が狙いじゃないの？」

「正確には違う。お前と『その中にいるヤツ』にだ」

菜生の問いにそう笑って答えて見せた。菜生の中にいる存在——即ちコスモスの事であらうことはすぐに理解できた。

だが、菜生には目の前の存在の正体がわからなかった。そのことが、歩夢のことに相俟って菜生の心に焦りを産んでいるのだ。

「だつたらなおさら歩夢は関係ないでしょ！彼女を解放して、私はどうなってもいいからー！」

「断る。お前たちは充分に苦しめてから殺す。この女はそれまでオレの駒だ：：そうだな、まずは学校とやらを壊してみようか？」

あくまで狙いは菜生とコスモス。だが、菜生とコスモスを苦しめるための手段として歩夢を乗っ取っているという相手に、菜生は完全に平常心を失った。

「歩夢の声で、歩夢の顔で：：そんなこと言っなッ!!」

鎖できつく縛られている両腕を激しく動かして脱出しようとする菜生だったが、手首の皮膚が裂け血が出るばかりで効果などありはしなかった。

「クソツ…クソツ!!」

「元気なこつて。だがただの人間のお前に、その状態で鎖が解けるわけないだろう」

そんな菜生の様子を見て、尚も目の前の存在は嗤う。そして、それを見るのにも飽きたといわんばかりに指を『パチン』と弾いた。

すると周囲に地響きが轟き、白い装甲を煌めかせた刺々しいシルエットのロボットが現れる。その姿はまるでネオバルタンを彷彿とさせるものだった。

「あれは…?」

『バルタンラッへ』かつて地球での我が父とコスモスとの戦闘データを元に設計した。お前たちにラッへを止めることはできず、大人しく目の前で大事なものが失われていく様を眺めるがいい!」

「そっか…キミはあの時のバルタン星人の子供の一人なんだね? 君の気持ちもわかる。でも、破壊や復讐は何も産み出さない。何も…産まないんだ…」

復讐を行ったところで、新しい悲劇が増えるだけ。なんの解決にもならないはずだと、菜生は冷静さを取り戻してそう告げる。

確かに、あの日菜生がコスモスと呼ばなければ、バルタン星人は死ななかつたかもし

れない。だがそれは同時に、菜生達地球に住む者たちがもつと傷ついていたであろうことも想像できた。

菜生だつて大切な誰かを失う悲しみは良く知っている。だからこそ、新しい悲しみが産まれる前にこの復讐を止めたいと思つた。

先程までの激情が嘘のように、菜生は冷静だつた。

「お前にそう言われて辞める程度の復讐なら、最初からやるわけないだろう？ お前はただ、自分の無力さを呪つていればいいんだ」

だが、バルタン星人も譲るはずもなくラツへを起動。ラツへは無情にも両腕から破壊光線を発射し、街を破壊しつつ虹ヶ咲学園へを進行を始める。

時間は少し遡る。

集合時間を過ぎても部室に現れない菜生と歩夢を、同好会のメンバーたちは心配していた。

「二人とも電話に出ませんね…」

「珍しいですよね。二人そろって遅刻なんて」

スマホを耳から離れたせつ菜がそう告げると、かすみはそう言って同調する。

「菜生先輩と連絡付かない時、大体何か起こってるから心配…」

「璃奈ちゃん鋭いね。正解だよ」

「「えっ!?!」」

菜生と連絡が付かない時は、音乃木坂でギギに襲われていたりワロガとの騒動だったりと何かとトラブルに巻き込まれていることが多い。

だから璃奈はまさか今回もと思ったのだが、そんな彼女の心配が現実になったと今日も練習を手伝いに来ていた美月が告げる。

「菜生のかーさんに電話したけど、昨日から帰ってないって。んで、歩夢も同じなんだと」

「そんな…でもなつち昨日は家の近くまでアタシと一緒に帰ってたんだよ!」

そう、昨日の練習後に菜生と一緒にいた愛は、菜生が家の近くまで帰っていったのを知っている。だからこそ、美月の言葉が信じられなかった。

「でも事実なんだろう?だから昨日の夜から警察やらSRCが必死に二人を探してるって話みたい。それにあの人がそんな面白くない冗談言うなんてありえない」

この中では、一番菜生や歩夢との付き合いの長い美月がそう告げると。周囲には重苦

しい空気が流れる。

「…今はとにかく二人の無事を信じて、あたしたちは練習やろうよ」

「この状況で練習するんですか!？」

「そうは言うけどさ。皆がライブで争うのはここにいる全員だけじゃないでしょ？他の学校のスクールアイドルが相手なんだから、ここにいる人間だけがライブじゃない」
練習の開始を提案した美月に対してかすみがそう言うが、美月は冷静にそう言い返した。他校の生徒と競い合ってきた彼女だからこそ、そういうことがすぐさま言えたのだろう。

少々厳しいかもしれないが、スクールアイドルフェスティバルで、sやA q o u r sと同じステージに立つことを目標に掲げたからにはそれだけの努力が必要なのだ。

そして練習を始めようとした時、地響きを鳴らして白金の鎧が現れたのだった。

「白いロボット…?」

「なんか前に見たバルタン星人に似てる気がするけど…」

唐突に現れたロボットを見て、その存在に首を傾げるエマの隣でそう彼方が呟いた。

エマとせずく以外の全員は、かつてこの街でコスモスとバルタン星人が戦ったのを目撃している。そして、街が破壊されたことも――

「ちよつと、あのロボットこつち見てないかしら…」

「とにかく一度逃げた方がよさそうですね」

じつと学園のほうを見つめているように見えるロボットに、本能的に恐怖を感じた面々はすぐに学校から離れることを決意。

だがその瞬間にはもう、復讐者は、バルタンラッヘ虹ヶ咲学園へ向けて進行を開始した。

一方で菜生は、現在バルタンラッヘが虹ヶ咲学園へ進行するのをただ見ていることしかできないなかった。

「ダメ…やめて！みんなが…みんなは関係ない!!そんなに私が憎いなら、ここで殺せばいいでしょ!!」

何度目かわからない、でも菜生がそう叫ぶ。そしてそうすればするほど、バルタン星人はこれが一番菜生の心にダメージを負わせることができるかと確信させるだけだった。「全部終わったら殺してやるよ。それまでここで見学してな」

悪魔のような笑みで笑う歩夢に、菜生は再び冷静さを失いつつあった。

（SRCや防衛軍がラツへを止められると思えない……どうする？ どうすれば学校のみんなを……歩夢を救えるの？）

コスモブラックも手元のない今、菜生は本当に無力だった。ただ、菜生の腕を鎖を無理に振りほどこうとした際に出た血が腕を伝っていた。

その時だった。暗闇の中から、金色の鏃状の光弾が飛び出してきて。そしてそれは、菜生を縛っていた鎖を粉碎したことで彼女は尻もちをついた。

「ったあ……今のは？」

「誰だ!？」

光弾が飛んできた方へ思わず振り返った歩夢の背後で、菜生は残った鎖を放り捨てた。

「タアツ!」

「うっ……」

疑問に思うことはあるが今が好機と駆け出すと、菜生は歩夢の腹部を殴って気絶させてコスモブラックを取り戻す。

「クソツ!」

すると歩夢の身体に入り込んでいたバルタン星人は分離し、そのままどこかへと去ってしまった。

「ごめん歩夢、痛かったよね…後で絶対助けるから」

今にも泣きそうな顔で幼馴染をその場にそっと寝かした菜生は、立ち上がると学校へ腕のビーム砲を向けんとするラツへを睨みつける。

「絶対に、止めて見せる…！コスモース!!」

ラツへの腕からビームが放たれたと同時に、菜生の身体は光に包まれた。

「やばっ…みんな伏せろ!!」

飛来する一撃の前に、美月が咄嗟に叫ぶがそんなことをしても助からない。目を伏せたまま、大人しくその時を待つがいつまでたつてもその時は来ない。恐る恐る目を開けると、青い巨体が見えた。

ビームを防いだ光の中から、ウルトラマンコスモスがゆっくりとその姿を現したのだった。

「ハアアアツ!!」

ラツへへと振り返ったコスモスは、そのまま赤き光を灯した右腕を突き上げコロナモードへとその姿を変化させた。

「まあいい…コスモスだけでも倒すさ。ラツへにはコスモスの戦闘データが入ってる、

負けるわけねえ」

ラツハを載せてきた宇宙船に戻ったバルタン星人は不敵にそう笑う。そしてその視線の先ではコスモスとラツハの戦いが始まるうとしていた。

参考になったネオバルタンのように、左腕のビーム砲から光の鞭を展開するとその鞭を振り上げてコスモスへと攻撃するラツハに、コスモスは横に飛んで起き上がりざまにハンドドラフトを連射する。

しかし、その攻撃は強固な装甲によって阻まれて有効なダメージを与えることができない。

しかし『コスモスとネオバルタンの戦闘データから、コスモスを倒すために造られた』というラツハが牽制用の技でダメージを与えられるとは最初から思ってたなどいない。

歩夢や同好会のみんなの為に、早く勝負を付ける必要がある。コスモスは駆けだすとラツハへと肉薄し、そのまま右の拳でストレートパンチを放つ。

ラツハはそれを右腕の大剣の腹で受け止めると、返す刀で斬りかかるもコスモスはバク転でそれを回避。装備こそネオバルタンと概ね同じではあるものの、やはりコスモスの動きを研究している事もあり攻めあぐねていた。

(どうする…どうすればコイツを倒せるの?)

一度仕切りなおしてどうするか悩んでいた菜生だったが、そんなことはお構いなしに

ラツへの装甲が展開し夥しい数のミサイルが放たれた。

そしてそのミサイルはコスモスの身体を避け、背後の学校目掛けて飛んでいく。

(やめろっ!!)

コスモスはすぐさま振り返ると、ハンドドラフトを連射。迫りくるミサイルをすべて撃ち落とした。

しかしそれを待っていたと言わんばかりにラツへは左腕から光線を発射、そのままコスモスの背中を焼く。

コスモスの身体はダメージに耐えきれず地に伏すが、ラツへはそこにダメ押しとばかりに肩の装甲を無数の針に変化させバンプスプレーを放つ。

それにギリギリで気が付けば、痛む背中をこらえて転がってなんとか範囲外へと逃れ両手で強く地面をつき跳ね起きる。

(…つつう…)

先程の鎖を無理に解こうとしたせいで負傷した両手首に荷重がかかったことよつて、菜生の両腕に痛みが走った。

「ハアッ!!」

一瞬両手を振って手首を気に掛けるような仕草を見せたが、コスモスはすぐに構えをとった。

そして両者同時に駆け出すと、ラツヘが右腕の大剣を振り下ろす。

それを紙一重で回避したコスモスは、そのまま両腕を掴んで背負い投げの要領で投げ飛ばした。

―はずだった

「んな馬鹿な!？」

「うそでしょ!？」

戦闘の様子を見守っていた同好会の面々もその光景に信じられないといった反応を示した。

そう、確かにコスモスはラツヘを投げた。

だがラツヘの背面の装甲が展開、スラスターを拭かせてそのままホバリングで距離を取り。何事もなかったかのように態勢を整えたのだ。

—ピコン—ピコン—

そしてこのタイミングでコスモスのエネルギーが危険域に入ったことを知らせるカラータイマーが赤く明滅を始めた。

動きや攻撃を読まれてしまっていることで、かなりのハンデを背負っているようなものだ。このまま戦っても、コスモスに勝ち目は無い。

(どうする? どうすれば...)

初めて直面した、コロナモードで歯が立たない相手に菜生の心には段々と恐怖と焦りが見え始めていた。

32話 私知らないあなた

ラツへの猛攻によって窮地に立たされたコスモスと菜生。

それでも自分の守りたいものの為に、何とか立ち上がり再び拳を握るのだった。

「んっ……んっは……っ？」

意識が戻った歩夢は、身に覚えのない場所で自分が倒れていたことを不安に思いつつも立ち上がり、何とか外に出ようとしていた。

そして壁に手を当てて体を支えながら立ち上がった時に、自分の腕に無機質なプレスレットが嵌められていることに気が付いた。

それは、何かと交信しているかのように怪しい光が明滅していた。

「なに……これ？ いや、とっ……取れない!？」

何とかプレスレットを外そうと試みた歩夢だったが、機械仕掛けのロックがかかっているのか。手で掴んでも外れそうな箇所は無かった。

そうこうしていると、外から大きな音がしてその直後に地響きが起る。そしてそこで、歩夢は外の様子に気が付いた。

白いロボットから学校を守ろうとするコスモスのエネルギーが尽きかけていることに。

「コスモス…お願い、みんなを守って」

今まで例え夢の中でさえも助けに来てくれていたコスモスが窮地に陥っているのは、俄かに信じがたい状況だったが目をそらしても現実は変わらない。

とにかく今はこの場を離れて学校のみんなと連絡を取りたい。その一心で歩夢は行動を再開した。

一方で、先程菜生の拘束を解いた何者かがバルタンを追って宇宙船に侵入していた。

「やつぱりお前だったのか…」

バルタン星人は、宇宙船の制御室にその侵入者が近づいてきたのを感じるとそう呟い

た。

『お前は復讐のために、罪のない者を巻き込みすぎた。今すぐ母星へ戻れ』

そう告げる女性の声は、どこか威厳を感じられた。

「オレの復讐は果たされた。そしてオレは、復讐のために故郷を捨てた。今更故郷には戻らん！」

『どうしてその力をバルタン星の為に使えなかった？』

「黙れ！お前には解らねえだろうよ！宇宙の正義を名乗るお前にッ！」

そう叫ぶバルタンに対して、声の主は近寄っていき、ついに暗闇の中からその姿を現した。

赤い体に、胸と額に輝く青いランプ。その姿はまるで――

「オレを倒すか？だがそんなことをしても、この宇宙船を破壊してもラツへは止まらない。ラツへは上原歩夢の生命活動が止まるまで決して活動を止めることはねえ！仮に破壊しても、上原歩夢は腕輪の機能によって死ぬ！どうあがいてもオレの勝ちだ!!」

そう、バルタン星人が歩夢の身体を乗っ取った時に腕に付けた金属製のブレスレットこそがラツへの制御装置であり、ラツへが活動を停止すればブレスレットが放電し歩夢の命を奪うという。菜生とコスモスが仮に勝利しても、心に傷を残すことができるように周到に仕込まれていたのだ。

『血迷ったか!?!』

「じゃあな、宇宙の守護者さん」

そういつてバルタンは背後のコンソールのボタンを押す。すると次の瞬間、宇宙船は大爆発を起こし宇宙の藻屑と果てるのだった。

そのころラツへは宇宙船が無くなったことを察知すると、インプットされている目的を果たすための補給が行われないことを学習し、エネルギーの消費を絞るために一瞬停止した。

そんなことを知るはずもないコスモスは、なんとか立ち上がると再びラツへへを駆けだすとそのまま飛び上がり、マツハ9で撃ちだされる急降下キックソーラーブレイブキックを繰り返した。

「ダアアアアアッ!!!」

足先にエネルギーを集中させたことも相俟って、迎撃で繰り出されたビームを文字通り蹴散らしながら急降下しラツへの装甲を蹴りつける。

ようやくダメージらしいダメージが入り、ラツへの巨体が大きく仰け反った。そしてそのことが、まだ自分は戦えると菜生は自分を鼓舞するきつかけとなった。

(大丈夫!まだいける…戦えるッ!!)

そう菜生は自分を鼓舞すると、コスモスもそれに応じるかのように駆け出し拳の連打を浴びせようやくラツへの身体が倒れた。

ラツへを倒せば何が起こるかなど知る由もなく、菜生は純粹にみんなを守るためにその力を使用する。

ラツへにようやくダメージが入ったこともあり、少しだけ戦況が好転し始めたコスモス。

このまま一切の反撃を許さず撃破してしまおうと両腕を広げ、太陽の如き灼熱のエネルギーを集める。

「ハアアアア…」

そのまま突き出した両腕を円を描くように回し、その手先から溢れるエネルギーはまるで太陽のフレアのようだった。

そのまま、かつてネオバルタンを倒した技―ブレイジンググウェーブを最大の出力で放とうとしていた。

するとラツへは全身をバリアで覆い、防御の態勢に入る。

「ダアアアアアアツ!!」

全力で放たれたブレイジンググウェーブを、ラツへはバリアで真っ向から受け止めた。

ネオバルタンにかつてはなつた時とは違い、完全に破壊するつもりで放つた一撃に対してラツへの巨体は少し後退しただけで以降は両者拮抗したままになった。

(くう…ぶつ 飛べえええええええ!!)

「オオオオオオオツ……デエヤアアアアアア!!」

更に出力を上昇させ、遂にコスモスはバルタンラツへをバリアごと大きく吹き飛ばしてしまった。

だが、バルタンラツへ本体へのダメージは殆ど無く。ただバリアを破壊しただけに等しかった。

だから、今度こそ完全に破壊する為にさらに攻撃を加えようと『ネイバスター光線』の構えをコスモスはとる。

しかし光線を放つためのエネルギーがコスモスにはのこっておらず、僅かにエネルギーを収束させるだけになってしまっただけでなく。そのエネルギーすらも霧散して

しまった。

「もう、エネルギーが…」

その様子を見て、歩夢がそうか細く呟いた。

そしてラツヘがコスモスへと腕の銃口を向け、とどめを刺そうとエネルギーを充填させていく―その時だった。

『お前が上原歩夢だな』

「あなたは…?」

歩夢のもとに現れたのは、先程菜生の拘束を解いた宇宙人だった。歩夢の目の前に来たことで、その姿が明らかになった。

赤い体に銀と黒のライン、胸と額に青く輝くカラータイマーに胸を覆う銀色のプロテクター。

「ウルトラ…マン…?」

『私の事はいい。それよりそのブレスレットをこちらへ』

そう言つて目の前のウルトラマンは歩夢に腕に嵌められているブレスレットを差し出すように要求する。

「これ、外れないんです…」

歩夢はブレスレットを外そうと試みたが外せなかったことを伝えると、ウルトラマン

は歩夢の腕を取り反対の手の指先へ金色のエネルギーを集める。

「……ッ！」

そのエネルギーが自分の手に放たれると思い、咄嗟に後退ろうとする歩夢だったが、ウルトラマンの力は強く、握られた腕は全く動くことはなかった。

『大丈夫だ』

それに気が付いたウルトラマンは、歩夢にそう優しい声音で告げる。

そしてそのエネルギーを歩夢の腕に小さな光弾として発射。歩夢の腕に付いていたブレスレットだけを破壊した。

「あ……ありがとうございます」

『そこから外に出られる。お前はすぐに逃げる』

そういうとウルトラマンはすぐにその場を去ってしまう。しかし歩夢は、あのウルトラマンの中にコスモスと同じ『優しさ』を確かに感じていた。

そして、コントロール装置が破壊されたことで、ラツへはそのままビームを放つことなく静止してしまった。

だが残すエネルギーは僅か。コスモスは最後の力を振り絞ってプロミネンスボールをなんとか生成し、それをラツへにぶつける。

上半身を消し飛ばされたラツへは轟音を立てて爆発し、今度こそバルタン星からきた復讐者は完全に消滅したのだった。

それと同時に、コスモスのカラータイマーから光が消え。コスモスは赤い光に包まれて縮小していくようにして菜生の姿に戻ったのだった。

「はあ…はあ…なんであのロボットは、止まったんだろう？」

変身が解除され、そのままその場に力なく座り込んだ菜生はラツへの動きが急におかしくなったのか不思議に思った。

だが、そんなことをいくら考えても答えがわかるわけもなく。呼吸が落ち着くのを待つのがだった。

なんとか呼吸が落ち着くと立ち上がり、歩夢を迎えに行くためにビルの方へと歩き出した菜生。すると、その道中で同じ虹ヶ咲の制服に身を包んだ。胸元についている片翼をあしらった青い宝石の付いているバッジが印象的な少女とすれ違った。

「上原歩夢さんは無事です、早く迎えに行つてあげてください」

「え…？」

すれ違いざまにそう告げた少女に対して菜生は思わず振り返るが、そこには既に誰もいなかった。

「あの子が、助けてくれたの…？」

疑問に思うことは多々あるが、今は歩夢の無事を確認するべきだと気持ち切り替える。

そして今回の謎のウルトラマンとの出会いが、カオスヘッダー以外の脅威が地球へと迫っていることに繋がっていくとは誰一人として思ってもいなかった。

「歩夢ッ！」

ビルの近くへと戻った菜生は、ビルの中から歩夢が出てくるのに遭遇する。

「菜生ちゃん？」

「歩夢、よかった！」

歩夢に気が付くや否や駆け出すと、菜生は歩夢の方を掴んだ。

「よかった…ほんつとよかった…」

そう息を切らしながらも安心する彼女の両手首から血が出ているのに歩夢は気が付いた。

「菜生ちゃん、これ…」

「へ？ああこれ？さつき転んじやって器用に切っちゃった…アハハ」

「私が…やったんだよね？」

菜生の手を取って、怪我をまじまじと見つめる歩夢に対して菜生はそう笑って誤魔化そうとしたが歩夢は思いつめた表情で絞り出すように呟いた。

「違う！このケガに歩夢は関係ない！」

「そんなことない！うつすらと覚えてるの…菜生ちゃんを私が鎖で…あれは絶対に、私だった…」

菜生はそんなことはないと言い張るが、歩夢は間違いなくこの手でやったことだと告げる。

「歩夢は悪くないんだ。バルタン星人があの時みたいに歩夢に乗り移ってやったんだ…」

「そっか…やっぱりあの子が…」

「あの子？」

「この前ね、前に仲良くなった子と別の子に出会ったの。でも最初それに気づけなくて…気づいたらいなくなってたと思ってただけど。その時に乗っ取られちゃったんだろうね…」

前というのは、恐らくバルタン星人が地球に現れた時の事だろう。あの時、防衛軍からコスモスの輝石を取り返してくれたバルタン星人。

きっとその子のフリをして、ラツへを連れてきた個体は歩夢に近づいたのだろう。菜生とコスモスに復讐するための、尤も効果的な方法として。

「だから歩夢は悪くないよ、ね？ 今日はまだもう帰ろうよ」

そう言つてにこやかに笑いかけ、歩夢に手を差し出す。

「そ、そうだね…」

そう言つて菜生の手を取ると、二人は家に帰ろうと歩み始めるとそこに二人を捜索していたSRCが駆け付け騒ぎになりかけるが「ウルトラマンが助けてくれた」と答えその場を凌ぐのだった。

（あの子は、菜生ちゃんを『ウルトラマンコスモス』って呼んだ。菜生ちゃんは、菜生ちゃんだよね…？）

帰り道、隣を歩く菜生を見て歩夢は自身が乗っ取られていた時のことを臍氣に思い出していた。

（菜生ちゃんは、何を隠しているの？）

目の前の幼馴染に、子供のころ自身と彼女を手に乗せて空を飛んだ巨人の姿が一瞬重なって見える。

そして一瞬歩みが止まった際に少し前に出た彼女の背は、見た目以上に遠くに見えた。

「よかったですか？」

夕暮れの道を歩きながら少女は独り言のように呟く。

もちろん少女の周囲にその言葉を投げかけられているであろう相手の姿は見えない。だが少女はそんなことは関係ないとも言うかのように言葉を続ける。

「あなたがいいのなら私はこれ以上は触れません、でもあなたが加勢すればラツへは簡単に倒せたのでは？」

彼女が話しかけている相手には、コスモスと同等以上の力を持っているらしい。だが、今回コスモスに直接力を貸すような真似はしなかった。そしてその理由は、今は明かされることはなかった。

それと時を同じくして、カオスヘッダーではない、また別の脅威が地球へと迫ってい

ることも。この二人以外に知る者はいないのであったー。

33話 狙われたスクールアイドル

バルタン星人の襲撃から数日が経過し、虹ヶ咲学園スクールアイドル同好会はついに初となるライブイベントを迎えることとなった。

「いよいよだね。…緊張してる?」

「うん…少しね?」

ステージ裏で衣装に着替えて自分の番を待つ歩夢に優しくかけた声に帰ってきた言葉は、少し震えていた。

「だよね。でもさ、歩夢には楽しんできてほしいな」

「え?」

「私はみんなを楽しい気持ちにするのがスクールアイドルだと思ってるから、やっぱりそのステージに立つ人も楽しくなくちゃなって思うんだ。だから歩夢には、いいパフォーマンスをしたとか自分にプレッシャーをかけないで楽しんできてほしいな」

そして歩夢の手を取って、顔を近づけた菜生はさらに続ける。

「大丈夫、私は絶対歩夢を応援してる」

そう言って菜生は「美月ちゃんといっしょに応援してるから!」と言って客席の方へ

と戻っていく。

あの日、バルタンラツへと戦って以来。怪獣が現れることも、カオスヘツダーや宇宙人が現れることもなく平和な日々が続き、こうして同好会はようやく初めてのイベントでのステージを経験することになった。

そして、虹ヶ咲の中では一番最初にステージに立つことになったのが歩夢だったのが、がみんな自分の準備があることも関係し、出番を直前に控えた歩夢を元氣付けに菜生が来ていたのだった。

離れていった幼馴染の手の温もりが残る手のひらを見つめる歩夢は、暫くするとにこっと笑って立ち上がるとステージに向かって歩いて行つた。

「おまたせ〜」

「ちゃんとした部長なんだから最後まで向こうにいればよかつたのに」

客席に戻ると、自分が座る分の椅子を確保してくれていた美月の隣に座る菜生だったが彼女にはそう言われる。

「私はみんなを応援したいから、これでいいんだよ。後ろにいたら、応援できないでしょう？」

「ははっ、菜生は相変わらずだな」

「どういう意味？」

「そのまんまだよ〜ん」

ニヤニヤと笑って菜生をからかう美月は楽しそうだった。痛々しく包帯に巻かれていた腕は、ギプスは外れて動かすことはできる程度には回復していた。

流石に治りが早いようにも見えたが、本人曰く「あたしは鍛え方が違う」とのことだった。

「ほら、はじまるぞ」

そう言つて二人はステージの方へと視線を向ける。ついに踏み出した、夢の舞台へと続く第一歩。それをたつた今踏み出したのであつた。

結果から言うと、みんな練習の時以上のパフォーマンスをすることができた。観客の投票によつて、参加した個人のスクールアイドルに順位が付くのだが。上位三位内に入つた人こそいなかつたが、全員かなりの票数を得ることができていた。

そしてそれを踏まえれば、スクールアイドルフェスティバルのメインステージに一步近づくことができたと手ごたえを感じていた。

「…はふうくすつごいよかつたあ」

「菜生はちよつと落ち着こうな？ずつとはしゃいでるから恥ずかしかつたわ…」

客席でそう満足そうに呟く菜生の隣で美月がそう告げる。無理もない、虹ヶ咲のメンバーだけでなく。他校の生徒のライブにもずつと興奮しつぱなしだつたのだから。

「ご…ごめんつて。でもすごかつたでしょ？それに美月ちゃんが曲を作ってくれたおかげだよ。本当にありがとう!!」

「はいはい、それも何回も聞いた。そろそろみんなのどこ行くよ、もう客席もほとんど人いないじゃん」

虹ヶ咲のメンバーのライブが終わるたびに飛んできていた感謝の言葉も10回を超えて正直鬱陶しくなってきた美月は、手を振りながらそう言っただけで菜生に退出を促す。

みんなの所に行つて、なんて声を掛けようか？ そう思いながら、ホールの外に出た時だった。

『菜生、止まれ！』

「へ？—キヤアツ!？」

突然脳内に響いたコスモスの声、それに反応して外への一步を踏み出すのが遅れたことが菜生の命運を分けた。

「ちよっ?!いきなり止まるな…:よ?」

前を歩いていた菜生がいきなり立ち止まったことに抗議の声を上げようとするが、視線の先を黒い影が人間離れた速度で駆け抜けていった。

「…美月ちゃん、今の見た？」

「…見た」

そしてその影は、スクールアイドルの控室の会った方からだった。一瞬遅れてそのことに気が付いた二人は、控室の方に駆け出して行った。

「歩夢、みんな!!」

ノックも何もせず、控室の扉を壊すのではないかという勢いで開け放した二人だった。そこは既にもぬけの殻。誰一人として部屋の中には居なかった。

「…どうなってるんだ?」

控室の中に入り、周囲を見渡しながらそう美月が小さく漏らす。

菜生も周りを見渡すが、やはり人の気配はない。何か手がかりはないかと必死に周囲に意識を配るが、ロッカーから他の学校の生徒のモノだろうか? 制服の袖がはみ出しているのが見える。

「ちよつとアタシ、イベント運営の人探してくるわ」

そう言っ出て行った美月を見送ると、菜生はコスモスに語り掛ける。

(コスモス、さっきのは宇宙人…だよね?)

『そう考えるのが妥当だろう。会場にいるときは察知することができなかったが、さっきの影からは地球人とは異なるエネルギーを感じた』

(そっか…)

以前、ギギによって占領されていた音乃木坂に行った時のことを菜生は思い出していた。

あの時と同じようなことが、今度は歩夢やニジガクのみんなに起こっていて、近くにいたはずの自分が何もできなかったことが腹立たしくなり無意識に拳を握りしめると爪先が手のひらに血が出るのではないかというほど突き刺さっていた。

(急がなきゃ……じゃないとまたみんなが)

みんなを危険な目にあわせるわけにはいかない。せめてみんなが無事なのかを確認しなければと菜生は焦っていた。

だが、焦ったところで何も事態は好転しない。少しでも手掛かりを手に入れようと控室の中を手当たり次第に漁り始める。

「誰か……誰かいないの!？」

誰か一人でもいてくれれば、もしくはこの事態を引き起こした何者かの痕跡があればと思つての行動だったものの、なにも掴めなければどうしようもない。

何かあるとすれば、美月が探しに行ったこのイベントの運営側の人間が何か知っているのを祈るしかない。

そんな時だった。ロッカーの影からガタツという物音が聞こえた。

すぐさま音の方へと駆け寄ると、そこにいたのは璃奈だった。

「…璃奈ちゃん？無事でよかった」

「菜生さん？」

ロッカーの影に隠れて震えていた彼女を見つけて、ひとまず安堵した菜生だったが、すぐに他のメンバーがどうなったのかを彼女に聞いた。

「ねえ、他のみんなは？」

「それは……」

菜生に見つかって安堵するも、その話題になったとたん再び表情を曇らせた。

「真っ黒な鳥みたいな怪物が、みんなを……」

「まさか、宇宙人!？」

璃奈の話が本当であるならば、その怪物が今回のイベントに出場したスクールアイドル達を攫ってしまったということになる。

（じゃあさつきすれ違った影はやっぱり……）

『恐らく、彼女の言っている宇宙人だろう』

（じゃあ決まりだね。さつきのやつを探す）

連れ去られたスクールアイドルの中には、もちろん虹ヶ咲の璃奈を除いた全員が含まれており、つまり歩夢が含まれている。その為か、自然と菜生の語彙も強いものになってしまっていた。

「私が一番入口から離れた場所にいたから、愛さんが咄嗟に隠れるようになって言ってくれたから…でも怖くてみんなが連れてかれるとこ、見てない」

「でも、璃奈ちゃんが無事だったから。こうして対応が取れてるんだから気にしないで」
暫くして役員を探しに行っていた美月とも合流し、SRCの隊員たちによる現場検証が始まったのだが、相手の目的は解らないものの。狙いがスクールアイドルであるときと間違いない。

周囲をSRCの隊員たちに囲まれている状態で、歩夢たちを探そうにも動けない状態だった。

「でもさ、なんでスクールアイドルなんだろうな？好きなのか?！」

「好きが高じてやるのが誘拐だなんて…」

「引くわくって感じだよね」

一緒に保護された美月が不意に気にした宇宙人の目的。

確かに、以前音乃木坂に現れたギギやバルタン星人もそれぞれ移住や復讐といった明確な目的をもって活動していた。

ならば今回はどうなのか……それがわかれば、相手の次の動きが見えてくるはずだが。このまま歩夢たちを連れて帰ってしまう可能性もある。

そうなってしまうえば、もう手の出しようがない。目の前の友達は菜生が『ウルトラマンコスモス』であることなど知らない。今はただ、大人たちに頼る事しかできなかった。だが――

(助けにいかなくちゃ……でも、どうやって? コスモスでも相手の気配をたどる事ができない。)

そういくら焦っても事態がいい方へと動くわけもなく。それどころか、しのぶの取り計らいによって今日は璃奈の家に両親がいないらしく、安全のために菜生の家に泊まることとなっている。

余計に菜生は勝手に動くことができなくなってしまっており、そのことがさらに菜生に追い打ちをかけていた。

「菜生さん、今怖い顔してる」

「え……?」

歯をギリリ……と音が出そうなくらいに食いしばって眉間に皺を寄せていた。そのことを璃奈に指摘されてようやくそのことに気づいた。

「いや……えと……」

「やっぱり、心配？」

「……」

その問いに、すぐに菜生は答えることができなかった。

次の瞬間だった。彼女たちを乗せた車が急ブレーキをかけて停止したのは。

「つう…璃奈ちゃん大丈夫？」

「うん、私は平気」

「みんな、早く逃げなさい！」

急停止した車によって、前に激しく揺さぶられた菜生はすぐさま璃奈の無事を確認するが、それをすぐさましのぶが逃げるように遮った。

そして、車の前方に立っていたのは。黒いスーツに身を包んだ人――

ではなく、その顔はまるでカラスのようで袖から出ている腕もおよそ人間とは思えないものだった。

そしてその異形は1体でなく、視界に入っただけでも5体はいる。しのぶはすぐさま懐から銃を取り出し応戦しようとするが、圧倒的に不利なのは火を見るより明らかだった。

「菜生！二人を連れて逃げなさい!!」

「お母さん――」

「早く!!」

母をおいて逃げることができないと聞いたかったが、菜生は黙って頷くと車から降りて璃奈の手を引き。そのまま美月と三人で走り出したのだった。

「□□□□ツ!!」

「ここから先は——」

そしてそれを追おうとする異星人だったが、すぐさましのぶが引き金を引き。明確な殺意を持つて弾丸が放たれた。

「通さないわよ」

数の不利を感じさせず、しのぶは不敵にほほ笑んだ。

「なんなんだよアレ!？」

「あの宇宙人が、みんなを連れて行ったの」

「じゃあ狙いは璃奈ちゃんか!」

走りながら初めて見る宇宙人にそう叫ぶ美月に対して、璃奈はそう告げると今度は菜生がそう叫ぶとスピードを上げる。

「でも、菜生さんのお母さんが…」

「お母さんは大丈夫！だって強いんだもん!!」

母しのぶももちろん心配であるが、相手は武器を持っていた。丸腰の女子高中生三人が残ったところでしのぶの邪魔にしなければならない。だからここでやるべきことは二人を守ることだと、菜生は思考を切り替えるしかなかった。

だが、異星人の数は多く。しのぶが5人も異星人を一人で引き受けたものの、菜生達の背後には新たに3体の異星人が迫っていた。

(ダメ…二人の前で変身するわけにはいかない……なんとか逃げ切らなきゃ)

自分たちでは絶対に敵わない。だからと言って、二人の見ている前でコスモスに変身してしまえば。侵略者たちはコスモスを倒すために同好会のみんなを狙うかもしれない。

だからこそ、この局面で菜生は変身という選択を取ることができなかった。

その時だった。新たに2体の異星人が目の前に飛び出してきて。うちの1体が、構えた銃口が璃奈へと向けられたのは。

「―マズッ!」

「璃奈ちゃんツ!!」

気づけば菜生は身体が動いていた。璃奈を美月の方へと突き飛ばすようにして目の

前に躍り出ると、銃から放たれた光線をまともに受けてまった。

「菜生っ！」

突き飛ばされた璃奈をキャッチした美月が菜生の名前を叫ぶ中、菜生は光線と同じ色の光に全身が包まれてしまった。

34話 不穏な宇宙

異星人の放った光線銃をまともに受けた菜生、そしてその光はそのまま銃の中へと戻っていかうとしていた。

「くそっ!」

思わず殴り掛かりたくなる衝動を堪えて、美月は璃奈を連れて横へと走ろうとしたが既に回り込まれており、完全に囲まれてしまっていた。

「美月さん、私を置いて逃げて。このままじゃ美月さんも…」

「できるわけないだろ! 菜生がここまでしたんだ、あたしだって…」

そういきがったのはいいものの、いくら空手が強いからといっても武器を持っている異星人複数を相手にできることはない。

ゆつくりと先ほど菜生を飲み込んだ銃口がこちらへと向けられる――

その刹那

「――ッ!」

異星人が唐突に銃を手放したと思えば、銃は白銀の光に包まれて爆散。そしてその中から、ウルトラマンコスモスが現れたのだった。

コスモスの登場で狼狽える異星人たちだったが、コスモスはそれを意に介すことなく。璃奈と美月に一番近い位置にいた異星人の前に一瞬で移動すると神速で放たれた掌底によつて遠くへ吹き飛ばした。

「な……菜生なの……か……?」

そのまま二人の前に盾になるようにして立つコスモス。その背に恐る恐る声を掛けるが、コスモスはその問いに答えることはしなかった。

異星人たちは、コスモスの後ろに恐らくターゲットであつた璃奈がいるにも関わらず、そのまま光線銃を乱射。コスモスに邪魔をされたので、恐らくまとめ始末してしまつつもりなのだろう。

「シエア!!」

だがコスモスはムーンライトバリアを展開し、全ての攻撃を受けきつた。そしてルナストラックを連続で照射し、異星人を纏めて薙ぎ払う。

するとすぐさま立ち上がった異星人たちは、このままでは敵わないと察したのか踵を返して逃げ出した。

すぐさま後を追おうとするコスモスだったが、璃奈と美月を放つておくこともできずどうしたものかと迷う仕草を見せた。

「追つて!」

『しかし……』

「私たちは大丈夫。だから……だから攫われたみんなを助けてほしい」

だが、すぐに追いかけるように声を掛けたのは璃奈だった。それでもなお追うことを渋ってしまうコスモスだったが続いた璃奈の言葉に静かに頷くと、すぐさまコスモスは異星人たちの後を追った。

あの光線銃の正体は、当たったものを収縮中に吸収してしまうアイテムだった。そして中に吸収された菜生の身を守るために、コスモスは強制的に変身することで菜生を救出することに成功した。

だがそれは同時に、菜生がコスモスであることが露呈してしまう事を示していた。

菜生はその攻撃を受けたことよって気を失ってしまったが、コスモス自身が気を失った菜生や璃奈と美月を守るべく、本来のエネルギーを充分に発揮できなくなることを承知でその姿を現したのだった。

異星人たちの気配を頼りに後を追ったコスモスは、とある廃工場の前に辿り着いた。

そのまま内部へと突入するコスモスだったが、菜生と身体を共有している状況で一方的に変身することは負荷が大きかったのか膝を付いてしまった。

(私、光線を浴びて気を失ってたんだけ…)

『気が付いたか?』

(うん、ありがとうコスモス。一旦任せて)

その時菜生が目を覚ましたことで、一度変身を解き、菜生の姿で廃工場の中へと入っていく。

みんなを救うには、コスモスの力は絶対必要になってしまおう。コスモスを対宇宙人の戦力としか見てないかのような発想の仕方に、菜生は内心苦笑するが。そのために今はコスモスの力を温存することにしたのだ。

(みんな、絶対助けるから)

「小娘がこんなところに何の用ダ?」

すると先ほどの宇宙人とよく似た。赤目の宇宙人が目の前に現れた。恐らくこいつがリーダー格なのだろう。

「あなたたちは何なの? みんなを攫って何がしたいの?」

部下を追うようにして現れた菜生がコスモスであることは、恐らく目の前の宇宙人も理解しているはずだ。それなのに悠々と目の前に現れたからには何かある。

だがそんなことよりも、菜生はみんなの行方を問う。他のセリフは何も思いつかなかった。

「我々はP413星雲からやってきた。我々の惑星にも君たちに似た動物がいてね、奴隷として使えるだけでなく他の星の宇宙人に高く売られていてネ」

『奴隷』『高く売れる』といった命をモノのように見ている相手に菜生は強い怒りを覚えるが、相手はそんなことは知る由もなく言葉が続けた。

「だからそんな生き物たちも最近では絶滅危惧種になってしまっていて、それでこの地球にやってきた訳だ。今回の成果を報告すれば、もつと多くの仲間が人間狩りにこの星を訪れるダロウ」

「そんなことはさせない！」

ここで逃がせばもつと多くの宇宙人が、人間を狙って地球へやってくることとなる。それに、歩夢たちをみすみす連れ去られるわけにはいかないと菜生は声を大にして叫ぶ。

「クツクツク：君にできることなどナイ」

この会話に菜生が夢中になっていた間に、8人の部下の宇宙人たちが菜生を包囲していた。

「サラバダ：ウルトラマン」

菜生に突き付けられた銃口——恐らく先ほどとは違い。菜生の命を奪うための弾丸が込められているものだろう。

迫りくる無数の弾丸、だが菜生は落ち着いていた。

懐からコスモプラックを取り出すと、そのままそのつぼみを花開かせ光の花に包まれていった。

一瞬のうちにコスモスへと姿を変えた菜生は、手のひらを前に突き出しそこから放たれた光が、全ての弾丸をその場で停止させる。

そして次の瞬間、そのまま弾丸は来た道に戻り。銃へと直撃し、全ての銃を粉碎する。ここでこの宇宙人たちを倒さなければ、もつと多くの仲間を連れてくるかもしれない。だからこそ、このまま倒す必要がある。今回ばかりは、はじめから相手を倒すつもりでコスモスは攻撃を繰り返した。

そして、銃を破壊されて怯んでいる間に拳を突き上げ。菜生の怒りと共にコスモスは紅蓮を纏う。

「ダアアッ!!」

コロナモードへと姿を変えたコスモスは、一瞬で間合いを詰めると。8対1という数の不利をもとめせず、一人ずつ拳や蹴りを見舞っていき瞬く間に倒して見せた。

相手は菜生の姿に戻っているのを見ており、コスモスのエネルギーに余裕がないと踏んだうえで数にものを言わせた奇襲策を取ったのだが。

コロナモードの戦闘力の高さの前にはエネルギー残量の心もとなさを一切感じさせ

ないまま、纏めて倒されるといふ結果となった。

「お…おのれ……」

『さあ、みんなを解放して。今すぐに』

悔しがる宇宙人を前に、菜生はそう静かに告げる。その言葉は、まるで「このままお前たちを全滅させることもできる」と言っているようでもあった。

「みんな、大丈夫だよな…」

「今は信じるしかない。それに、きっとSRCやウルトラマンがみんなを守ってくれる」
「だな…信じて待つしかない」

コスモスに助けられた後、宇宙人たちは波を引くようにいなくなってしまった。なんとか人通りの多そうな、商店街まで駆け込んだ璃奈と美月だったが。スマホを含めた荷物はしのぶの車の中に置いてきてしまい、この後どう動くかを考えていた。

「スマホも財布も置いてきちゃったからなく…こっつから歩いて帰るのは危ないしなあ

…」

「あの状態でカバンを持って逃げるなんて無理。どこかで電話を借りて連絡するしかないと思う」

そう告げる璃奈に「そうだよな…」と美月も返すが。二人とも口には出さないが先ほどコスモスに助けられた時の状況。そして菜生は連れ去られたままなことに疑問を抱いていた。

—菜生が、ウルトラマンコスモスなのではないかと

その時だった。

「なあ、あれ…」

美月が空を指差した。その先にあつたものとは—

一方で、自身を取り囲んでいた宇宙を一蹴したコスモスは。このまま捕らえられた

人々を解放するように要求するも。宇宙人はすぐに答えることをしないままであった。

『どうしたの？ はやkー』

急かそうとしたところで、周囲で倒れていた戦闘員の一人が突如コスモスへと発砲。何とか反応してこれを手刀で弾くも、リーダー格から目を逸らしてしまい一瞬の隙が生じた。

その隙を突いてリーダー格は目から光線を放ちコスモスの背を焼く。

「ウワツ…!?!」

思わず地に伏したコスモスだったが、すぐさま立ち上がるもその間に宇宙人は撤退。その直後に起こった地響きによって、廃工場が崩れ始める。

(イヤだ！絶対に逃がさないッ!!)

落ちてくる瓦礫をもとせせず、コスモスは巨大化すると。廃工場から逃げ出した宇宙船を追うべく飛び立つ。

だが、コロナモードのマツハ9を誇る飛行速度をもつてしても。宇宙船へはなかなか追いつくことはできず、両者はそのまま大気圏を突破し、宇宙へと飛び立っていった。

勿論その宇宙船の中には、捕らえられたスクールアイドル達もいるため。コスモスは撃ち落とすといった手段も取れないまま、ただ見失わないように追いかけることしかできなかつた。

宇宙船では、捕まったスクールアイドル達が目を覚まし始めていた。だが、彼女たちは全員例の光線銃で縮小されてまるで標本のように箱の中に縛られた状態でとらえられていた。

「……は……？」

「……ハ我々ノ宇宙船ダ」

周囲の状況がわからない彼女たちに、リーダーがそう告げる。

「君たちハ、この後遊星ジュランで一度宇宙人たちニ、何人か売りつけたアト。残りを我々の母星へと連れ帰ル」

自分たちは訳も分らないうちに宇宙人に攫われ、さらにはこの後別の宇宙人に売られる。そんな話を聞かされてパニックにならないはずはない。

しかし、宇宙人は少女たちの悲鳴を意に介する事もなく。そのまま解いた部屋に

戻ってしまったのだ。

扉の閉まる音と共に、室内は静寂に包まれる。

「私たち…どうなつちやうの…？」

誰が発したかもわからないか細い声。

その言葉に、諦めの言葉を吐くもの。家族に会いたいと嘆くもの。様々なものがあった。

「菜生ちゃん…」

今ここには囚われていないハズの幼馴染の名前を、歩夢は誰にも聞こえない声でそつと呟いた。

大丈夫、きつとまた会える。それに菜生とは、まだやりたいことが—まだ聞かなければならないことが—

だがその想いをあざ笑うかのように、宇宙船は轟音と共に激しく揺れ動いた。

「！！」

甲高い咆哮と共に現れた、甲虫のような特徴を持つ黒い怪獣が飛来し。宇宙船を攻撃し始めた。

その攻撃によって宇宙船の軌道は大きく歪められ、本来太陽系の軌道上には存在しないはずの遊星へと落下していく。

この時宇宙には、まだ誰も知らない他の脅威が潜んでいるのだった――

35話 Another of sun

レイビーク星人によって宇宙へと連れ去られた皆を救うべく、宇宙へ飛び立った菜生とコスモスだったが、宇宙にはまだレイビーク星人の他にもまだ別の脅威が潜んでいた。

【怪獣兵器スコープス】

本来、通常の生物とは違い。自然に産まれた生命体ではなく、何者かが悪意を持って兵器として生み出した怪獣だ。そしてその何者かはレイビーク星人ではなく、レイビーク星人もその『何者か』に対して恐怖を抱いていた。

「ナ…何故こんなトコロにスコープスが…」

「ここは捕らえタ人間を引き渡す手はずだとイウのニ…」

彼らにとっても想定外となった怪獣の出現に、宇宙船は再び浮上を始めようとする。がしかし、怪獣は宇宙船を発見すると一目散に襲い掛かっていった。

「□□□□ッ!!」

怪獣が頭部から放つ光弾が宇宙船をかすめる度に、その個所は少しずつ劣化し崩れ始めていく。

逸れたものも周囲の自然に命中し、緑豊かだった景色が一転し草木は枯れ果て周囲はガスに覆われ始めていく。

当然宇宙船もそんな中で飛行し続けることなど当然できるわけもなく。敢え無く墜落してしまう…。

「キャアツ…!?!」

「な…何?どうなったの?」

だがその衝撃で縮小され、囚われの身になっていたスクールアイドル達は元に戻ったことで解放された。しかし、いきなり宇宙人の宇宙船、それも墜落しその原因を生み出した怪獣が迫ってきているこの状況下では、さらなる混乱を招くだけだ。

「助けて!」

「イヤだ…私まだ死にたくない!」

パニックになる少女たち。中には何とか外へと脱走できないかと試みるものもいたが、この騒ぎの中で気づかれないはずもなく。

「ニンゲンが逃げるゾ!」

「再ビ捕まえろ!」

「スコープスが迫ッテいるんだ。やむをえん言うことヲ効かない奴はコロしても構わん!!」

騒ぎに気が付いたレイビーク星人達は、そのスクールアイドルたちを再び捕えようと動き始めるかと思いきや、沈静化を最優先としたらしくわざわざ捕まえた少女たちに武器を向けようとしたのだ。

だがそんな事をして、目の前の現実から逃げられるはずがない。

スコープスは少しずつ、確実に宇宙船に追い付いてきていた。そして、レイビーク星人もそれらに攫われた少女たちも、スコープスにとつてはただの獲物でしかない。

少女たちに逃げる先など、助かる方法などあるはずがないのだ。

だが少女たちはそのことを認めたくなかった。

仮にここから宇宙船が再起してスコープスから逃げきったとしても、それはレイビーク星人にどこかの星に売り払われることを意味し、スコープスに追い付かれればそのまま死ぬだけだ。

きつと生きて帰れる。そう信じることだけが、今の彼女たちにできる唯一の事なのだから――

だがそれはただ現実から目を逸らしていることにだけでしかなく、目の前の事態は何も変わらないしレイビーク星人を倒す手段など少女達は持たないのだから。

なんとか宇宙船は再浮上し、スコープスから再び逃走を図ろうとしていた。だがレイビーク星人も理解できていなかった。本人達も知らない星に不時着し、さらに怪獣に狙われているという事態が、如何に危険なのかと――

レイビーク星人の目を掻い潜り、格納庫と思わしき開けた場所へと逃げ込んだ虹ヶ咲の面々は置かれていたコンテナ類の影に隠れていた。

「これからどうしようか……」

「このまま外に出ちゃいましょうよー」

なんとかあの宇宙人を撒くことはできたもの。ここは彼らの宇宙船の中、見つかるのは時間の問題だろう。

歩夢の声に、外に出てしまおうと提案するかすみだったがそれをせつ菜が制した。

「でも逃げてる時に窓から見えた景色は私たちの暮していた街並みとは全然違います。もしかしたらもうここは地球じゃないのかも……」

「それでもここよりは安全だと思います」

それでも外の方が安全であるはずだと返すかすみだったが、現在いるこの星は地球と

は全く違う環境。普通の人間が生身で外に出てタダで済むはずがない。

だがそんなことを彼女たちは知るはずがない。

「あと確認シテないのハ格納庫だけダ」

「絶対二、いるハズダ！」

すぐ近くにはスイッチさえ見つけ出せば開けられそうなハッチ。そして船内の方から聞こえてくる宇宙人たちの声と足音。

「……こつちに来てませんか？」

「あそこにスイッチがある！あれを押せばハッチが開くかも」

「このまま捕まったら元も子もないわ」

愛がスイッチを見つけ、果林ももう外に逃げるしか手はないだろうとハッチを開けることを提案する。

「ダメ。ここは地球とは全く別の星、そのまま外に出たら死んでしまうわ」

だがそれを制止する声があった。

「誰……？」

「あなたは……」

声のする方を見ると、イベントに参加していた他校の制服に身を包み青い髪を三つ編みにして背後に垂らした。

「だからできることはこうして隠れていることだけ……この宇宙船がスコープスに破壊されるか、レイブーク星人の星に連れていかれて売られるか。私達に残された道はこの二つ」

「そんな事……」

諦めたような目でそう呟く少女の言葉を否定したい歩夢だったが、続く言葉が出てこなかった。

「どっちも嫌なら、もうそのハッチを開けて即死するくらいね」

「でもあなたも、それが嫌だからここに隠れてたんじゃないの？」

「それは——」

果林にそう言われたのが凶星だったのか、少女は言葉に詰まり目を逸らしてしまつた。

「ち……違うんです！ サラちゃんは私を助けようと——」

「加奈（かな）は黙ってて、いいから隠れてて」

少女の影からもう一人加奈と呼ばれた少女が現れた。制服を見るに、この二人は同じ学校なのだろう。

「中かラ声がすル！ ココダ!!」

「ちっ……！勘付かれたわね」

「ど……どうしましょう」

外からレイビーク星人の声が再びした瞬間、扉をこじ開けようとしているのか打撃音がする。

歩夢たちがここに隠れた時に、手近にあったコンテナで扉を塞いでおいたので暫く時間は稼げるだろうが。先ほどサラと呼ばれた少女の話が正しければ、外に出ようとした瞬間に命を落としてしまうだろう。

だが、格納庫からは外に出るか今レイビーク星人達がこじ開けようとしている扉かどちらかしか出口は無い。

「動くナ！」

扉をすぐに破壊することにしたのか、すぐさま扉は轟音と共にはじけ飛んだ。

「大人しくシロ……さもなくバ……」

煙の中から姿を現したレイビーク星人は5人。それぞれが銃で武装している。

「射殺すル」

レイビーク星人達も捕まえたスクールアイドル達を生きたまま連れ帰れる余裕はなくなりつつあった。

なんとかスコープスから逃げてはいるものの、逃げ回るスクールアイドル達に割く余

力はないのだ。

こうなってしまうては人質より自分たちの安全が最優先だ。

「このままじゃ…」

じりじりと格納庫の端に追い詰められていく歩夢たち、このまま再び捕まるのかそれか最後の抵抗をするかの二択を迫られていた。

だが次の瞬間、スコープスの攻撃が再び宇宙船をかすめ、船が大きく揺れ動いた。

「シッ…」

真ん中に立っていたレイビーク星人を、青い球体が襲った。揺れる船内で態勢を崩していたこともあり、その球体の直撃をまともに喰らうとそのまま後方へと吹き飛んだ。

「こつちー！」

「え？」

「なにが…」

「いいから早く！死にたいのかっ!!」

言うが早いかサラは加奈の手を引くと宇宙船の中へと走り出した。

「私たちも行きましょう！」

そんなサラの様子を見て、せつ菜たちも駆け出した。

「マナー！」

「逃げるナ！」

それを見て残ったレイビーク星人達もすぐさま銃を構え直す、またさつきと同じ球体が4発。宇宙船内の方向から飛んできて最初のレイビーク星人とは『逆』方向に大きく吹き飛んだ。

「今の攻撃は何だったんでしょう?」

「さあね」

良くは見えなかったが、明らかに攻撃された様子だったレイビーク星人達をしり目にそう口にしたしきりだったが、サラはなんでもない様子でそう言い放った。

「…スコーピス」

宇宙船の窓に見えるスコーピスの影がどんどん近づいて来る。それを視界の隅に捕らえたサラはぎりりと奥歯を鳴らした。

そして丁度自分たちが走っている廊下の窓の真正面にスコーピスが写ると、すぐに口から放たれた光球が一直線にこちらへと迫ってくる。

「伏せて！」

誰が叫んだかもわからないその声に合わせて全員が屈む。

だがこのまま直撃したら誰も助からないだろう。

その時だった。

どす黒い赤色の光球とは違う、銀色の光が光球を掻き消すと、今度はスコープスの方へと軌道を変えてスコープスを撃ち落としたことで轟音が鳴り響いた。

「こ…今度はなんなんですか?!」

眩い光がおさまると立ち上がった一同は外を見る。

スコープスを弾き飛ばした光の中から、銀色の巨人が姿を現した。

「あれは…」

「ウルトラマン…コスモス!」

「でも姿が違う…?」

歩夢たちの前に姿を現したのは間違いなくウルトラマンコスモスだった。

(なんとか間に合った!でもこの星、まるで死の星だ…)

スコープスの攻撃によって宇宙船が不時着した時から更に砂漠化が進んでいた星は、菜生とコスモスがたどり着いた頃には砂ばかりの殺風景な場所になっていた。

コロナモードとシルエットこそ同一だが、銀色の身体に左右対称の紫のラインが入ったその姿は。宇宙空間での戦闘に特化した形態であるスペースコロナモードで現れたのだ。

レイビーク星人の宇宙船を追ってきたものの、その宇宙船が怪獣に襲われていたので囚われているスクールアイドル達を守るために、コスモスはスコープスとの戦闘に入る

のだった。

「——!!」

「ゼヤツッ!」

立ち上がりコスモスを威嚇するように吠えるスコープス目掛けてコスモスは走り出す。胴体へと素早く拳を打ち込み、よろけたところにさらに裏拳を叩きこみ一気に攻勢に出た。

だが態勢を戻したスコープスの口からすぐさま光線が放たれる。

放たれた光線をなんとか回避したコスモスだったが、標的を失った光線はそのまま後ろの山に直撃するとその山は砂になって消えてしまった。

「ッ!?!」

(こいつが、この星を砂漠に——!)

最初はこの星の生命体かと思った菜生だったが、今の攻撃でこの怪物がこの星を破壊していることを感じ取ったことで、菜生にとつてもこの怪物は普通ではないことは理解できた。

そして再び同様の光線がコスモスへと放たれると、コスモスはそれを飛び上がった回避。そのまま降下する勢いを利用して蹴りを繰り出しスコープスの右肩部を破壊した。

そしてスコープスの背後に着地すると、再び眼前へと迫る勢いで駆け出した。

スコープスの方も、コスモスへ反撃すべく先端がさす又状になった尻尾を突き出したがそれは片腕で簡単に止められ、もう片方の腕で繰り出したアツパーカットで簡単に尻尾は粉碎された。

(みんなが危ないんだ！邪魔しないでッ!!)

尻尾を破壊した直後、コスモスの身体は高速で移動しスコープスをすれ違いざまに殴りつけ。さらに顔面に目にもとまらぬ速さで連続蹴りを叩きこんだ。

あまりのダメージにスコープスの巨体は地に伏すが、すぐさま立ち上がると今度こそとコスモスめがけて光線を放つ。

コスモスは両腕に青いエネルギーを滾らせると、そのまま両腕を前に突き出しオーラを纏ったそのエネルギーの塊をスコープス目掛けて打ち込んだ。

「ゼアアア!!」

スペースコロナモードの最高威力の技、オーバーラップ光線はそのままスコープスの光線を打ち消しながら直進、そのままスコープスの巨体を貫き大きな爆発が起こる。

だがこの星の空気は現在、スコープスによって砂漠化している。菜生にはそう見えたようだったが、厳密には大気もガス状になっていたのだ。

そのまま誘爆を起こし、想定より大爆発が起こり宇宙船を巻き込む勢いだった。

すぐさまコスモスは飛び上がると宇宙船を掴み、この星からの脱出を図るのだった。

このスコープスとの闘い、そして歩夢たちがサラと加奈と出会ったことが何を意味するのか。

この時はまだ誰も理解できていなかった――